女子文壇
十二月
五巻第十六號
東京
女子文壇社發行

女子文壇
第五年第十六號

【本欄】

(頁ノ二)

目次

『少女』新年號の前觸れ

今に『少女』にもお正月が來ます、生れて初めてのお正月ですから是非美しく飾り、樂しく遊ばなければなりません、お正月の『少女』は何う云ふ風に好くなるでせうか、皆さんお待遠いでせう、餘り詳しいことを申上ると樂みがありませんから、極く大づかみに計畫を言ひますと、第一に**表紙**(岡野栄氏筆)評判の好い『少女』の表紙は、少し目先を變へて又と好い表紙にします、次に口繪です**少女のあそび**(與平氏筆)皆さんお馴染のヨヘイ君の繪です、毎の繪の倍の大きさで、精巧な原色版に刷りますから、額にして取つて置くことが出來ます、其他に石版口繪寫眞版とも皆平素より一層目新しいものが出來ます、記事は澤山あつて一々擧げかねますが成たけ澤山に載せたいと思ひますから、特別に紙數を多くして百十二頁、記事の中で注意すべき一つは**石川理學博士の寄稿**動物界の泰斗理學博士石川千代松氏は『少女』諸嬢の爲に恰好の讀物を寄せられることになりました。

又新年號以後本誌には最も面白いつゞきものを毎號載せます。少女小說**海上の女**(磯萍水作)是は實に不思議なお話で片腕しかない恐ろしい大働きをすると云ふのです、是非第一回から御覽を願いたい、其外讀切の少女小說、繪ばなし、珍しい學藝談、少女對話など見免すことの出來ぬ記事が山のやうにあつて一々宮崎ヨヘイ氏や、竹久夢二氏や、其外の畫工が苦心の繪を挿入しますから、見て面白く、讀んで感心することは受合です、あゝお正月が待遠しい!

天下一品
學校以外
最良讀物
新案繪入
少女雜誌

少女

一月一日發刊
二卷第壹號
定價拾錢 郵稅壹錢

黃薔薇



(大江原色版製版所刷)

四十二年掉尾の大活動

婦人世界

十二月一日發刊 十四號 價一冊 拾五錢 郵稅一錢五厘 一年分郵稅共二圓五錢

▲良人を助けて四丈の窯を築きし奮闘苦心…… 板谷丸子

▲大地震に遇ひて屋外に生活せし實驗…… 澤村つる子

活文字

▽婦人界の流行の中心三越の裁縫部を訪ふ…… 記者

△氣合に習字を教へる先生に令孃と記者と書法を學ぶ

▽花蹊先生の繪畫教授振り

▽苦學の弟を助けて勉強す

▲自分の乳で子供を育てる母親の注意…… 加藤照麿

▲夫婦の情深きか親子の情深きか…… 村井弦齋

▲家憲制定の爲上京せる十夫婦貝島氏の一家…… 一記者

▲大酒家の良人を禁酒させる妻君の妙策…… 安藤太郎

好讀物

▽京都と東京の女學生（鈴木光愛）

▽子供の惡癖を治す法…… 千葉幸十郎

△七十歳以上の老人三百人の大園遊會……

▽雇人口入所の女主人を訪ふて女中の模樣を聞く

▲二十年一日も缺かさずに日記をつけた實驗…… 棚橋絢子

▲結婚のために米國に渡つた婦人の實例…… 島貫兵太夫

東京 實業之日本社（電話新 八七四）（振替口座 三二六）



美術造花材料

最新材料發賣

クリスマスホーリー 何れも葉、果實等有之實物色、

ミッスルトー 金色、銀色等數多取り揃へ有之候

クリスマス裝飾には是非共必要のもの此れを御使なき方は
クリスマスの如何なるものなるかを論ずる資格無之候

面白き有益なる圖解說明表 有之候御申込次第進呈す

ホーア、リーフ、クローバー 實物色、銀色等有之候

葉の内にて一番目出度い一番幸福の葉、此れを御求の方は
幸福の來春を御迎へ遊ばすべく勿論に候

美術造花材料商 **天野卯兵衛商店** 東京橫山町二丁目十六番地 電話浪花一一六四三番

△各商店店前裝飾御相談申べく候

故伊藤公爵の一族



(前列右より)西氏令嬢、博邦氏次男、同夫人及令嬢、公爵夫人梅子、伊藤公爵、博邦氏令嗣、末松子夫人、末松子令嬢、西令夫人(後列右より)伊藤公令息文吉氏、末松子令嗣、西源四郎氏、末松氏、令嗣博邦氏、伊藤公三男

女學校の講演



日本女子美術學校が「日本女子技藝學校」と改稱されし時講堂に於ける尾崎東京市長の演説、向て左の方は校主福島甲子三氏なり

四十年間 **墺國宮内省御用**

グリスリン入石鹸

此グリスリン石鹸は芳香の馥郁たる色を白く皮膚を滑かならしむるの特徴を有す、特に墺國醫學博士イー、イーボール氏の證明を得たり



一千九百〇五年　**墺國タジク會社**

東京市日本橋區橋町二丁目

日本一手販賣 舶來化粧品輸出入商 **竹間商店**

●販賣所市内は信用ある藥店小間物化粧品店に有之候

「タジク」の名なきものは僞物也乞御注意

GOTTLIEB TAUSSIG
Soap Maker and Perfumer to the Imp. and Roy Court.
VIENNA-AUSTRIA.

實用浮石鹸

英國 ボヅソン、エンドシンプソン會社**特製品**

千九百〇八年八月最新輸入品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは
本品の特點なり

價格の低きは
本品の特點なり

實用に適すは
本品の特點なり

上流界に好評を博すは
會社の自慢とする所也



論より證據實地御使用を乞ふ

東洋輸入元　東京　エスシー

賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物店及び化粧品店に有り

（ろノ三）

尾上の雪



夢二筆

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御記入を乞ふ

速に一冊を購求して本誌が如何に面白きかを知られよ

立志成功

少年之友

絶好伴侶

◎十二月一日發行 四巻拾二號 (價)一冊郵税共金九錢 六冊同金五拾一錢

美麗な口繪

●愉快なるクリケット競技郊外の遊び(原色寫眞)▼ヒポ、タマス(英國動物園參觀の四)▼公爵伊藤公一家族▼英國貴族の巻狩 誌友の面影等

◎冒險奇談 印度の猛獸狩……長田令二

●樹の證人 小話……平山篤雄

●無敵の竜太……石井愕堂

●棒ねん會……鈴木紫川

◎探險小說 山賊退治……木村思水

●見越し入道 怪談……雨華山人

●不思議な川……服部春草

●猿の話……猪熊忠次

◎伊藤公の少年時代……一記者

●冒險少年 輕氣球競爭……太田天風

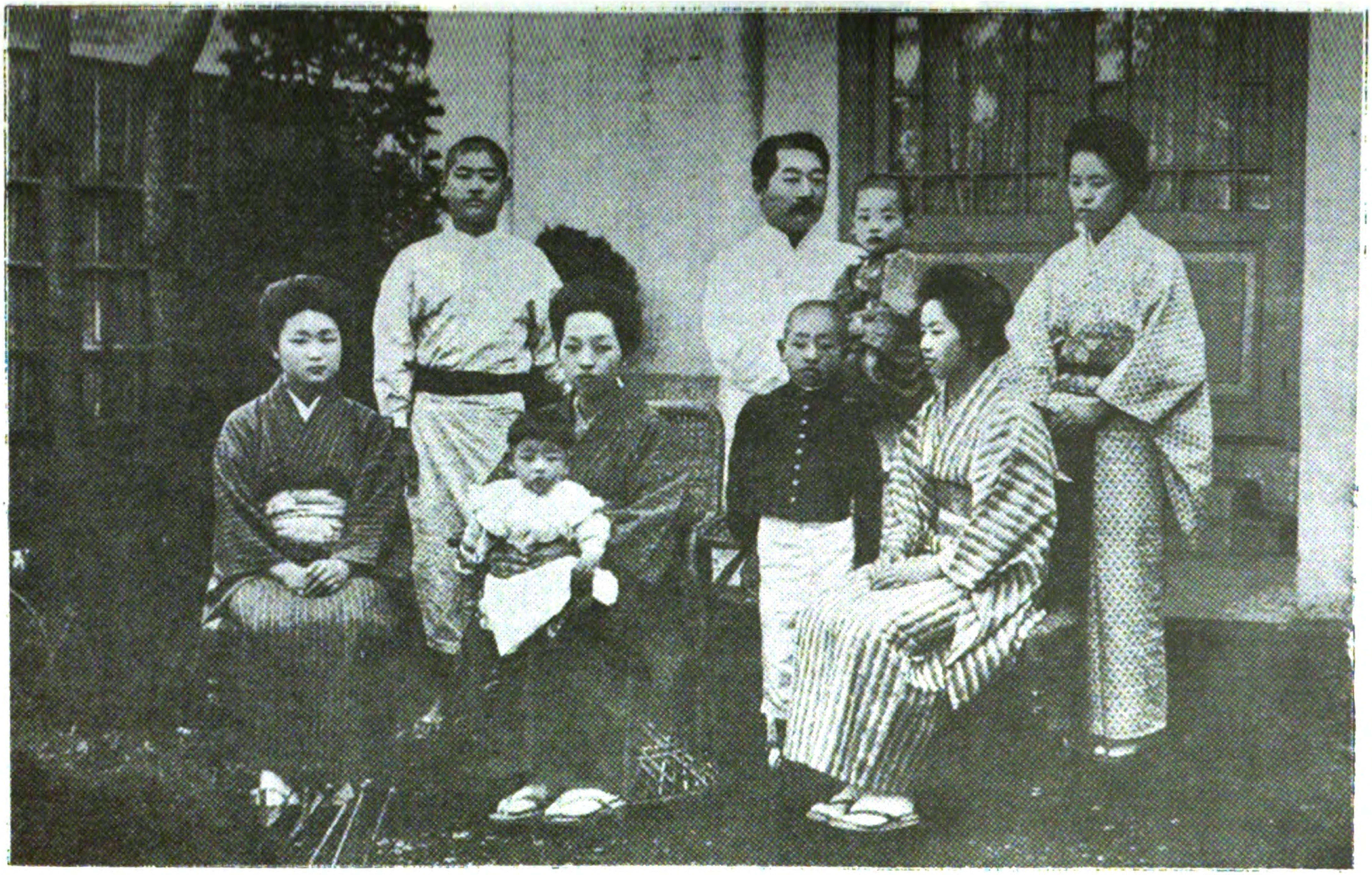
▲動物園の獅子▲冬が來た▲少年筆蹟▲畫さがし

少年文壇 △普通文△はがき文△日記文△短詩△和歌△俳句△少年倶樂部△笑ひばなし△考物等

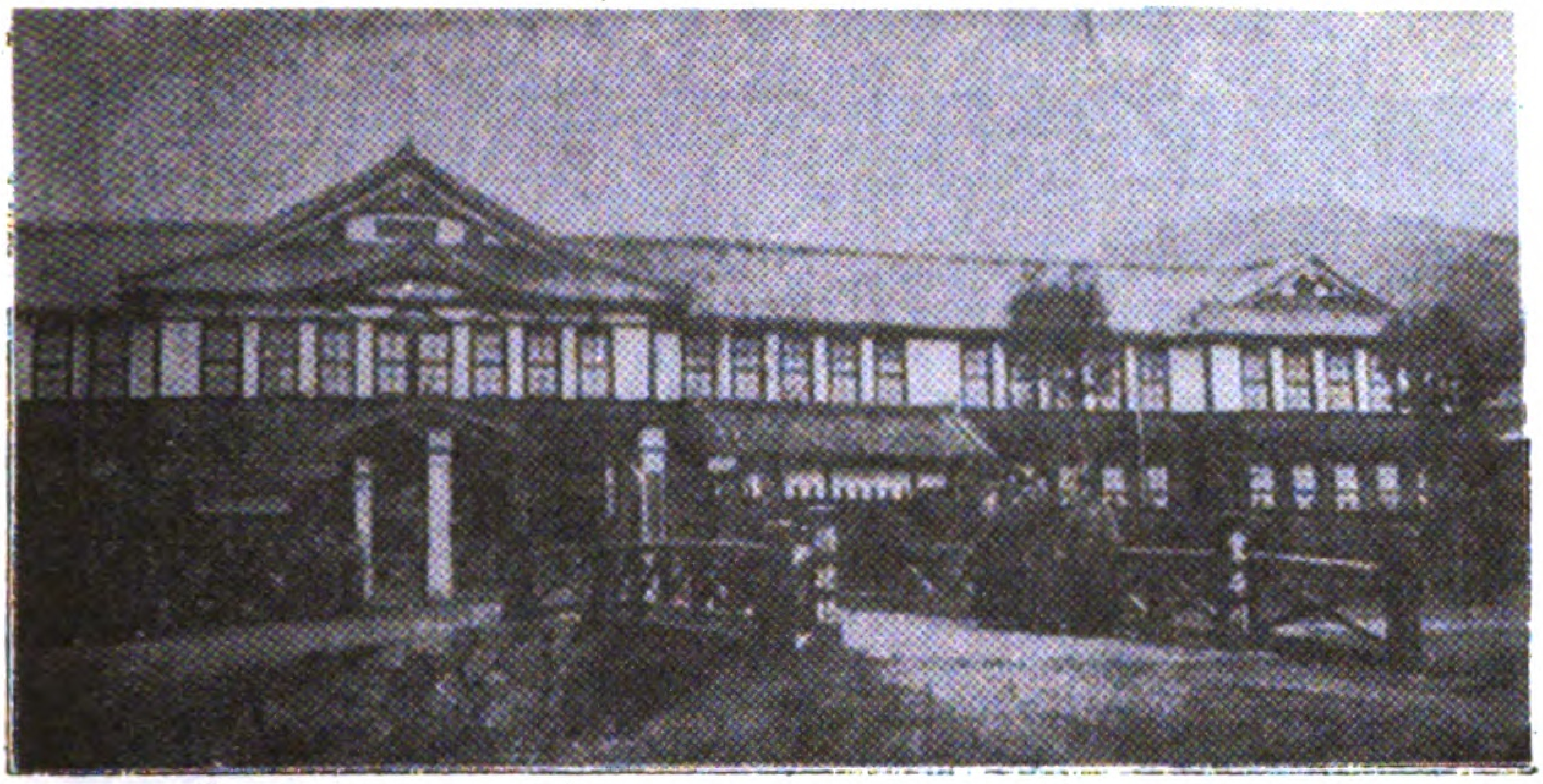
發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂(振替口座一九五五)

賣捌 東京堂 東海堂 ○北隆館 良明堂 ○上田屋 至誠堂

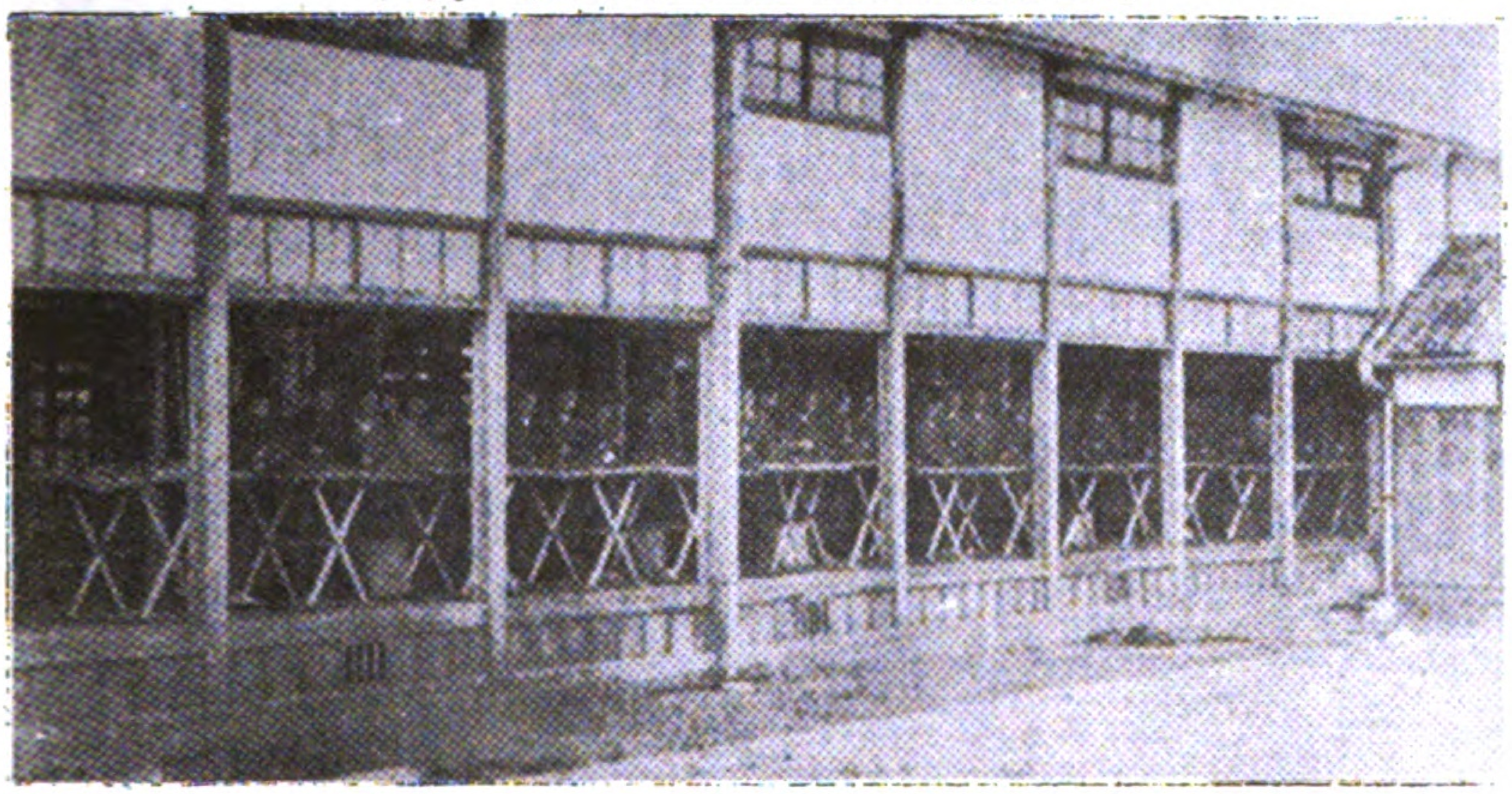
紳商高木正義の家庭



奈良縣立櫻井高等女學校々舍



京都蠶業講習所女子部生徒の實習



（四八頁參照）

肥前鹿島高等女學校生徒の朝顔栽培



[illegible]

(に／一)

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

◎本號を讀まずして新春を迎ふる婦人は不幸なり◎

婦人畫報

十二月卷廿五錢　郵税二錢　六冊税共壹圓五拾錢　十二冊税共二圓八十八錢

畫報

▼▼女子大學第二第三高女各校淑德青山運動會

▼▼菊花爛漫たる酒井伯邸と諸名家栽培の珍菊花

▼▼タフト氏邸に於ける久邇宮同妃兩殿下……

▼▼久邇宮殿下の御歸朝▼▼諸名家令孃……

▼▼小笠原子爵邸に於ける村雲尼公と婦人會……

▼▼伊藤公葬儀▼▼將校婦人會移轉式▼▼平井伯爵の家庭……

▼▼成女高女十年紀念▼▼韓國に於ける岸氏夫妻

▼▼渡米婦人送別會▼▼外國小女の繪書▼▼活花盆石諸流大會▼▼女流名家筆跡▼▼其他滿載

讀物

●●姑として嫁を見たる一年間　鳩山春子

●●女子の手紙　文學士　大町桂月

●●家事經濟と歳の暮　佐治實然

●●都の風に染み行く女學生

●●邪說を退けて正論に就け……　文學博士　井上哲次郎

●●一年間に於ける婦人界の風潮　文學士　三輪田元道

●●明治四十二年の女學界……　成女高等女學校長　宮田修

●●女學生墮落の道筋　櫻井かね子

●●離婚されし若婦人の悔悟

●●模範的の階上臺所

●●世界婦人と家庭

●●井口博士夫人訪問

●●輕便なる御歳暮品の手引……其他

東京飯田町四の四　東京社　電話番町二三三九

わが寫眞帖



（東京）麻生菊子

（府中）岩崎文子

（東京）佐藤いつ子

（岩手）八重樫さく子

（東京）千葉よし子

（東京）玉川むつ子

（東京）山川きよ子

（東京）鳥居登代子

（東京）杉田やす子

（新潟）風間花子

（成田）野々宮清子

（信濃）下枝〓子

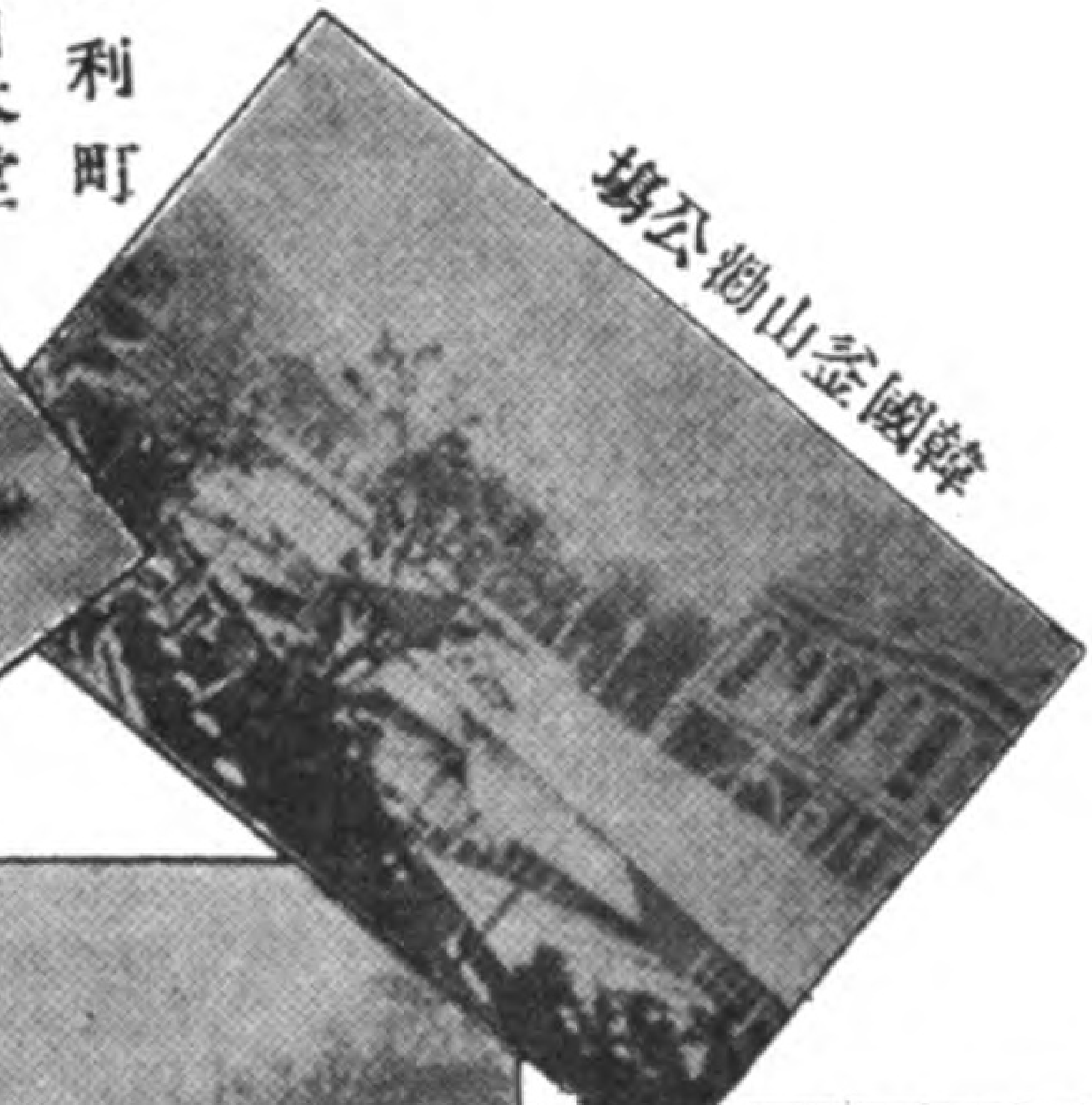
（東京）宮原つね子

（埼玉）新井冬子



周防錦帶橋

足利町
大日本堂



韓國釜山勸公場





韓人三日晝の市

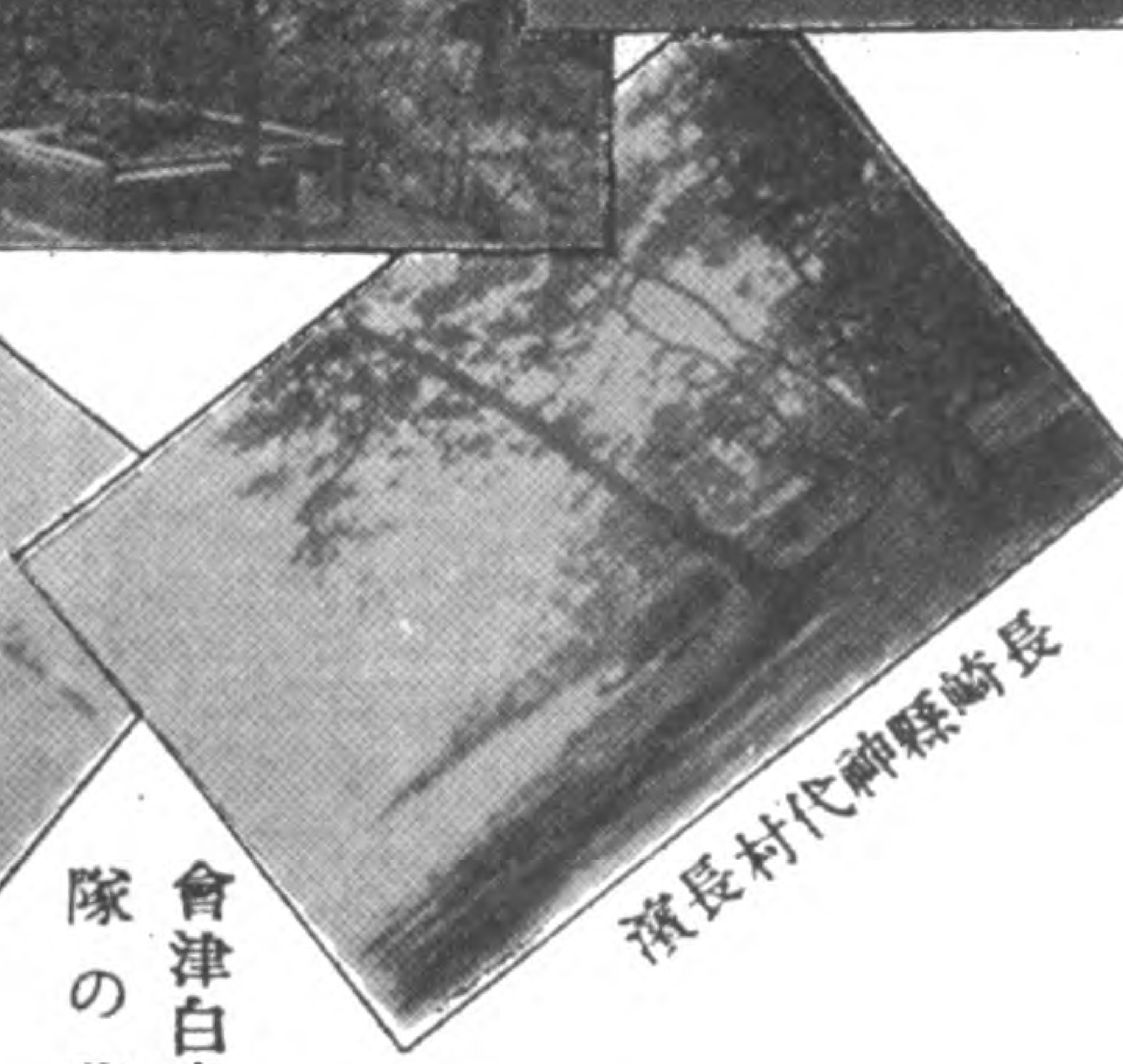


北海道札幌の公園





高知縣浦戸港西孕



長崎縣神代村長濱

會津白虎
隊の墓

（根本喜代子、絹川たて子、細谷銕子、柳田、山內靜子、佐藤伊代子寄贈）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

肥滿病新藥

（米國新輸入劑）

小供の折美愛と稱せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたるため左圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑はバークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり血太り肉太り酒太り水太りにきび顔赤き出物多き人●服滿●ぶつ〳〵逆上腫等輕症は一二劑如何程の惡性も三劑分連服せば艶白となり程よくやせて皙つて色は顔窈窕たる美人となる

美事を保證す

話讓姉の福音



藥價　一劑一圓五拾錢　二劑二圓九十錢　三劑四圓卅錢　送料十錢宛

▲肥藥性に苦む人は他藥に迷はず速に服用あれ

●月やく下し藥

見…病める婦人
よ…月經なき女子

專門博士賞賛指導の新發見良藥

▲功能……藥力最强度……其效極て峻烈……有効無害……保險藥



本劑は婦人月經不順月經閉止月經滯りは一二劑にて必ず流下す二三ヶ月の四五月以上又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す夙に各婦人病院に於て効力卓絶なりと賞賛せられたるは此の女月丸なり滯り又は不順にて苦む人は速に服用あれ

▲藥價一劑六十錢、二劑一圓十錢、特製二圓廿錢、別製分三圓卅錢、送料四錢

發賣本舖　東京々橋區中橋和泉町　振替口座一〇六七七七番　小宮愛生堂

（ほノ一）

☛ 女子文壇來春第一增刊 ☚

報酬確實

若き婦人

原稿募集主意

女子文壇の來年の第一增刊は「若き婦人」と定まりました、材料は凡て清新なる思想を持つて居られる世の婦人諸君に仰ぎ、記者は之を誠實に選拔し、斬新に編輯しやうと思ひます。**募集原稿の範圍は極めて廣い、**廣いから自然投稿の方法に於ても**極く自由**です。出來得る限り所謂若き婦人の代表者とも見るべき雜誌を編輯したいと思ひますから、諸君も亦出來る限り、忌憚なく、自由に、其筆を振つて頂きたい。**創作に得意な人は創作に於て、新らしい思考を抱いて居る人は言說に於て、隱れたる事實を知つてゐる人は記實に於て、**それぞれ思ふ通りの原稿を見せて下さい、記者は必ず**若き婦人界を代表した好雜誌**が出來るであらうと信じます。なほ參考の爲め投稿の現下の概略的分類と、報酬の方法とを左に掲げて置きます。

當選報酬

一等	金貳拾圓	(壹人)
二等	金拾五圓	(貳人)
三等	金七圓	(參人)
四等	金五圓	(四人)
五等	金參圓	(五人)
六等	金貳圓	(拾五人)
七等	金壹圓	(貳拾人)
表紙	金五圓以下	(壹人)
口繪	金參圓以下	(壹人)
スケッチ	金貳圓以下	(拾人)

贈與の方法

▲一等、二等及び▲表紙、口繪の當選者には正金にて呈す▲其他は價格相當の呉服物にて呈す▲贈呈の期日は發表の翌月下旬▲等位は投稿全體を通じ最も優勝なる原稿を一等とし以下之に準ずべし

投稿の概略分類は次頁を御覽下さい

發行所 女子文壇社 東京市京橋區大鋸町

●「若き婦人」募集原稿の種類 （前號參照あれ）

創作
小說。詩。散文。和歌。俳句。其他凡ての文學的作品

告白
今の時代は動搖してゐます、多少の自覺を持つてゐれば持つてゐるだけ今の女性も動搖してゐます、逆境に居ても、順境に居ても、周圍に遮れて始終動搖してゐる筈です、其暗い方面と、明るい方面とを問はず自己內心の動搖を有りのまゝに告白して下さい、偽らざる身の上話をして下さい、文飾をしないで有りの儘に書いても澤山です、最も眞實に、最も自由に現在の境遇に於ける心持を語つて下さい。

觀察
多少自己中心の筆法から遠ざかつて、批評的の態度で、婦人界の現狀を觀察するとか、女子教育家の意見を論ずるとか、世論に反した考を述べるとか、自分の理想を訴へるとか、實驗上から家庭問題を提供するとか、文藝上の評論を試みるとか、凡て感情一方に走らぬ議理風の文章を指すのです、問題は小さくても關ひません、女らしい意見を發表して頂きたいものです。

實驗
通學時代の經驗談、各種の試驗に應じたる實際談、運動會紀念日などに働きたる實話、友人との交情より得たる經驗、男性より受けたる刺戟或は誘惑、盜難水火其他不時の災厄に罹りたる時の實驗談、和洋料理の實地應用、音樂裁縫習字刺繡、編物造花園藝テニス遊戲演藝等一切の家事又は遊藝の實驗談、文學上の修養談、結婚の準備、新婚當座の經驗、髮の結方化粧法衣服の着方寫眞の撮り方など凡て身廻りの實驗談、旅行談、冷水浴海水浴深呼吸等身體健康等に關する各種女子衞生上の經驗、女教師女子事務員其他百般の女子職業從事者の實驗談、其他。

事實
一技一能のある婦人、變つた婦人、名望ある婦人、各種婦人團體の實況、一個人の出來事、各地女學校及び女學生の現況、各地婦人の風俗、迷信、習慣、年中行事、山村漁村僻地の生活狀態、女子讀書界の現狀等、都會及び地方の婦人界の現在の事實を明瞭に書く事。

表紙
本誌に應用すべき表紙、石版着色四五度刷、寸法は縱七寸四分、横四寸九分以內、畫學紙に描くこと、圖案は隨意。

口繪
本誌に挿入する口繪、和洋畫何れにても宜し、人物を表はすこと、着色石版五六度刷、寸法は縱五寸五分、横三寸五分同じく畫學紙を用ゆること。

スケッチ
本文の中に挿入すべきコマ繪、毛筆畫、扉皮或は溜寨の類に認むること、寸法は二寸の三寸以內。

注意
▲原稿は凡て振假名をつけること。
▲長短は隨意なれど、一行二十四字詰にすること（但し二百行以上に渉る原稿は採用せず）。
▲和歌、俳句は一人二十首以內に限る。
▲原稿の封筒の表と原稿の端とには必ず「若き婦人原稿」と書添へること。
▲紙上の雅名は自由なれど、原稿の一端に住所本名を明記すること。

投稿は十二月廿五日最終便本社到着の分を以て締切る

新年號の廣告お申込に就て

●女子文壇満五周年紀念號
一月元旦發刊
（十二月號に詳細あり）
紙數例號二倍

●少女 第二巻第壹號
一月元旦發刊
（十二月號に詳細あり）
原色版
額繪大
附錄添

右原稿〆切……十二月十日勵行す

女子文壇社廣告部
（電話本局六〇七番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇第一第二第三増刊（好評嘖々）

新美文

口繪 入選作家十二人寫眞 及石版彩色樂譜三隅畫 密刷

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百樣の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學ばんとする者には無双の寶典たるべし

全一冊美裝
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

附錄

●小寒日記……薄田泣菫
●裏の家……吉江孤雁
●憧憬……小川未明
●一轉機……高須梅溪
●女床屋……兒玉花外
●捨て犬……岡田八千代
●火葉……澤村胡夷

女子名文 新作家



口繪 原色名畫頗鮮麗 入選作者十七人 寫眞光澤紙密刷

若き女子が大懸賞應募の小説、美文、詩歌俳の文藝を興味ある新式編輯法にて統一せるもの。日課表あり登載各自の住所年齡家庭等作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ。

全一冊美裝
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

附錄

○闇の夜……服部良子
○敗者……加藤菊子
○火事……永代美千代
○氣まぐれ者……太田鶯子
○新粧……尾島菊子
○六月……山田くにえ
○姉……故田中久子

短篇小説

全一冊二百頁美裝 當選作家十一人肖像 原色版

定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

▲奉公人……島崎藤村作
▲水死……森田草平作

懸賞傑作

●破璧……秋葉清子
●女客……加藤貞子
●町の出水……赤崎愛子
●桃代……佐藤増子
●朝顏……吉田駒子

其他美文、書簡文、新躰詩、日記文、和歌、俳句、論文、小説總評等豐富滿載

東京市京橋區大鋸町十二番地
女子文壇社出版
（振替口座東京第壹七貳九番）
賣捌 全國書店



第五年第十六號

明治四十二年十二月一日發行

高い梢が悉く美しい葉をつけて居る、下から仰ぐと目に飾る黄金の雲が豐かなる日光を浴びて、所々鼈甲の樣に輝くからまぼしい位見事である、その雲の塊りが風も無いのにはら／＼と落ちてくる、無論薄い葉の事だから落ちても音はしない、落ちる間も亦頗る長い、枝を離れて地に着く迄の間に、或は日に向ひ或は日に背いて色々な光を放つ、色々に變りはするもの丶、急ぐ景色もなく至つて豐かに至つてしとやかに降つて來る、だから見て居ると落つるのでは無い、空中を揺曳して遊んで居る樣に思はれる、閑靜である——凡てのものの動かぬのが一番閑靜だと思ふのは間違つて居る、動かない大面積の中に一點が動くから一點以外ハ靜さが理解出來る。しかも其一點が動くと云ふ感じを過重ならしめぬ位、否其一點の動く事其れ自らが定寂の姿を帶びてしかも他の部分ハ靜粛な有樣を反思せしむるに足る程に靡いてたなら——其時が一番閑寂の感を與へる者だ、銀杏の葉の一陣の風なきに散る風情は正に是である、限りも無い葉が朝夕を厭はず降つて來るのだから木の下は黒い地の見えぬ程隙間ハ小さい葉で敷きつめられて居る、さすがの寺僧もこヽ迄は手が屆かぬと見えて當座は掃除の煩を避けたものか、又は堆かき落葉を興ある者と眺めて打ち棄てヽ置くのか兎に角美しい。

夏目漱石氏「漾虚集」より

うす雲はしづかに流れ日の光鈍める白晝の海の白さよ

見てあれば一葉先づ落ちまた落ちぬ何思ふとや夕日の大樹

寂寞や月無き夜を滿ちきたりまたひきてゆく大海の潮

若山牧水氏「海の聲」より



主觀の色彩

文壇の新傾向

文學士　樋口龍峽

文壇に於ける、自然主義に關する自分の意見を、嘗て「自然主義論」なる題の下に發表した時に、自然主義には自ら二つあつて、純客觀的の描寫を主とするといふことを說いた人と、之れに加ふるに、我の發動、即ち主觀の色彩を蒙らせると說いた人との、二派あることを陳べて、純客觀の描寫が、到底不可能であること、即ち縱令觀つて行く處は、純客觀であつても、心理作用は必然の結果として、多少の主觀の色を帶びることの、免れえないことを說いて置いた。又同時に、我の發動、即ち主觀的の傾向を餘りに多くすれば、嘗て流行して居た、情緒主義の文學に流れて了ふと云ふことをも陳べて、自然主義の眞髓たる、主觀、客觀の融合とか混和とか云ふ事が、作品上の技巧として、非常に困難であることを指摘したことがあつた。

純客觀の弊は、稍もすると平凡に流れて了ふと云ふことで、已に本年に入つてからの、所謂新派の作家の

作品に此の傾向が見えて居る。之れに反して、主觀に重きを置く行き方の極度に達した弊は、センチメンタリズムに陷つて、自然主義本來の要求とは全然背いて來ることになる。本年の文壇に於ける二つの傾向を、如上の理由の下に認めることが出來ると思ふ。即ち、作品の實際の上にては、所謂平面描寫が平凡陳腐に陷つて來たことであつて、文壇の要求の聲に於いては、一層強い主觀の色彩、情緒の表現を要求する議論となつて現れて來たやうである。それが表立つて議論せぬまでも、新たに發表せられる創作に對する短評に於いて、已に此の傾向が示されて居るのである。論より證據には、永井荷風君の作物、殊に「歡樂」の樣な強い情的色彩を帶びた物が、非常に歡迎を受けたのでも充分に知ることが出來る。勿論自分が見た處でも、「歡樂」は分量こそ餘り多くはないが、近來の文壇に於ける、傑作の一として數へるべきだと思ふ。此の一篇が新小說誌上に發表せられた當時に、國民新聞から「昨今の感想」を求められた際に、私は最先に此の「歡樂」を賞讃して置いたのである。併しながら、實は內心では、昨今の如く平面描寫といふことを、頻りに云ふ世の中で、果して此の強い情的色彩を帶びた作品、技巧の上に於いても、殊に目立つ程に技巧を用ゐられた此の一篇が、果して多くの人々の稱贊を博するか何うかを、氣づかつて居たのであつた。然るに、幸にも各方面から非常に迎へられたことは、永井君の爲めには勿論、幸福であると共に、又自分等の樣な趣味を持つた者が、再び多くなつた事を喜ばしく感じたのである。

然るに、田山花袋君や、正宗白鳥君の如き、新派の花形を以つて目せられる人々の作品は、何うかと云ふと、恐らくは、田山花袋君が從來取つて居た、描寫の仕方と云ふものは、その傑作たる「妻」の一篇に於いて、殆ど圓熟の極に達したのではないかと思はれる。而して、此の頂點に登り詰めたと云ふことは、宛で降り坂につく初めてであつて、縱令、同情の程度で多少續いたとしても、その取材の方面の狹いこと、調子が平

板に過ぎることなどは、總て世間の傾向から遠かる原因であると思ふ。又作家たる田山花袋君自身の方から考へて見ても、此の取材の範圍の狹いといふことは、その作品中に出て來る人物の性格なり、又、此の狹い眼界内の人生と云ふものが、常に同一に流れて、到底多數の讀者を繼ぐことの出來る、新たなる方面を開拓することは困難のことである。若し、狹い範圍の、所謂世相の描寫て、何等かの新らしいものを附加へようとするには、文章上の技巧に於いて、嘗て罵倒して斥けた、技巧主義に立歸つて、之れに由つて作をするか、或は、事象に對する觀察の態度を一變して、主觀の色彩を、際立つて強烈に、濃厚にするとかの外はあるまいと思ふ。然らずんば、粗大な論理に陷つて、文藝と云ふものからは、退却して了ふだらうと思ふ。この證據は近く中央公論に出た「罠」の一篇である。「罠」に現れたる人生觀といふべきものは、實に淺薄な狹い片寄つた、作家自身の感想に過ぎないもので、如何に崇拜する讀者に取つても、此の一篇は決して有難いものではなかつたのである。この感想錄に陷つたと云ふことは、一面から見ると、主觀的であるとも云はれるし、他の一面から見ると、自分の從來の態度、及び主義（若し田山君にありとすれば）を嘲つたものに外ならないので、何れかの一に窮極せねばならぬ。人生が「罠」であるかは保證が出來ないが、此の一篇は、作家たる田山花袋君が引懸つた「罠」に相違ないのだらう。

又、島崎藤村君の「芽生」の如きは、多少趣の異つたものであるから、最近に於ける、同君の作品が、那邊に向つて移り行きしかは知れないが、大體に於いては、田山花袋君に就いて陳べたと同樣に、何れか二つの道を探つて、新たなる感興を惹く方法てなくてはならないと思ふ。此の兩君に就いて、殊に同情に堪えないのは、一部の若い人々の批評である。小杉天外君と佐藤紅綠君の如きは、所謂自然主義の運動の勃興した初期に於いて、已に犧牲に供せられて、葬られて了つたが、殷鑑遠からず、今度は藤村、花袋兩君の身に及

んで來て、すでに老大家として、葬らるべき運命を、片上天弦君等に由つて宣告せられた。随つて、生存競爭するものは、天則の避くべからざることにしても、社會上に於いては、人爲淘汰もあることとなれば、團體競爭といふ様なことがあつて、無慈悲なる天則も、寬假せられるのが普通であるが、此の筆法で祭込むのは、餘り無慈悲の考である。評論壇に於ける長谷川天溪君なども、うつかりすると、狡兎死して老狗煮らる、の例にならつて、こんな若手の人々に必要のない時期が來るだらうと、甚だ心配に堪えない。

借て、正宗白鳥君は何うかと思ふと、未だ祭り込まれる時期は來ないが、巳に取材の方面に於ける貧血症は、充分に現れて、何の作物を讀んでも、皆同型の人物ばかりが出て來るのには、少しく恐れ入る。殊に今度の「落日」の如きは、或は同君の世間からの氣受が「落日」である前兆ではないかと、同君のために非常に心細い感がする。彼の作中の「お露」などを見ても、實に憐れな性格であることを、認めるだけて、世の中の婦人と云ふ様なものが、そのもの特有の眞相が、彼の個性の内に少しも發現してない感がする。

自然主義の議論の一部分を、極端まで論及すると、男性は遂に男性以外は描かれず、女性は遂に女性のみを描く外はないと云ふ様な、議論も出て來るが、何うも新派の人々の描いた女性には、此の議論の結果が見えて居るのは、多少免かれぬと思ふ。即ち、本來極めて情の強い、主觀の色彩の著しかるべき女性の描寫は、例の新派の人々の態度では、寫されないと云ふ恐怖がある。

以上に陳べた、之等の事例と、議論の上の傾向と、その依つて來る根本思想とを、綜合して考へて見ると、將來の文壇に於ける著しい新傾向として、主觀の色彩の一層濃かな、獨特の情緒の勝つた作物が、歡迎される様になつて來るだらうと思ふ。

歌壇の現在

與謝野寛

自分は今年の短歌界は讀者として見て居た、今一々作例を擧げて話すことは出來ないが、全躰として今年の歌壇は、一面口語詩などの影響を受けて、その歌はんとする處を自由に、平易に歌ふやうになつた事である、而して唯作者の主觀、作者の感を表はすと云ふことに重きを置くやうになつた。之れは慥に從來の短歌が少しく作歌上の技巧に囚はれて居た傾向を打破して、歌そのものの本來に立歸つたやうに思ふ。即ち如何にして歌はんか、と云ふことよりは、如何なる事を歌ふと云ふ方に重きを置く樣になつて來たのである。これ一の進步として認むべきものである。然し從つて粗雜だとか、露骨だとかいふ弊の伴ふものであるが、それは何時も進步には避くべからざる事であるから、強ち短歌ばかりに取立てて云ふ程の事ではない。事ろこの弊を顧ずに、行かんとする處まで進むべきである。

今年の歌壇に於いて不斷の努力を續けたのは、前田夕暮氏、若山牧水氏の二人ばかりである。前田氏は一時月刊歌集を出されて居たが、自分は二氏の歌集が出版せられたら面白いと思つて待つて居る。自分が關係して居る雜誌「スバル」の方では、相變らず盛んに發表せられるが、中では吉井勇氏のが面白いと讀んで居る。同氏を初めスバル社同人諸氏は近來短歌以外に脚本とか小說などを書かれて、從つて短歌の方には全力を灌れない樣に思はれる。

それから森鷗外先生の短歌は、慥に從來吾々の感じ得なかつた、新らしい歌境を歌つて居られる。世間では餘り好く云はない樣であるが、將來大に注目すべき現象で、益々此の境地を開拓せられん事を待つて居るのである。

要するに、本年の短歌界は寂しかつた。否之から後と雖も、過去十年間の如く華々しい短歌の時代は來な

いだらう。過去五六年は短歌の全盛時代であつた。全盛は一面流行の意味を含んで居る。流行とか全盛とかは時代の勢であるが、近來の歌壇は、漸く流行とか一時の隆盛な時代を過ぎて、眞面目になつて來た。個人々々が覺醒して短歌本來の面目に歸着して、眞摯に努力すべき時代となつたので、今後の歌壇こそ眞に刮目して待つべきだと思ふ。

女弱からず

福光東衣譯

男と女とは、數千年の昔から壁一重の隔障も置かぬ一所の生活を續けて居りながら、殆んど何も知り合つて居ないのは可笑い。現に、女は一概に男より弱い者だとされて居るのを見てもわかる。斯く云へば、或は奇矯を衒ふ不埒者だと憤怒になる男があるかも知れないが、憤怒になるだけ夫れだけ女が解つて居ないのだ。我輩とて、敢へて變つたことを稱へて見度いが爲めに、大方の嘲罵を犯して迄も女の方が強いと主張るほどの馬鹿ではない。馬鹿で無いからこそ、男が女より強い、と一律一體に云つて終ふことの否なる所以を說くのである。早い話が、朝から晩まで嬰兒を抱へて歩いて居る女である。男に其眞似をしろと云つた所て、恐らく爲し得た限ではなからう。強いことには負を取らない我輩ですら、十分間も抱いて居ると、もう手が拔倦くつて我慢がしきれなくなる。但し、かく云へば、夫れは然ういふ女は子供の時からの練磨の功で、力仕事に慣れて居るからだ、と意氣巻くものがあるかも知れない。成程、然う云へば此處に幾分の眞が無いでもない、が然し、強いといふこととの原因を糾べた所で、強いといふ事實の否定にはならない。由つて來る所を說明して今ある事實を打消とすることが出來るものならば、「男は女より強し」といふことに對して、「男は生來女よりも強いからだ」と云つても結構な駁擊になるわけである。

予は更らに、世の近眼者流に對し、他の例を以て、女必ずしも男より弱からざる所以を述べよう。

予は年來最上の健康情態を持續して居る男である。が然し、二夜續けて宵張てもしようものなら、其後の二日三日は什事を爲るのにどうも心地が勝れないで、稍もすれば遊のにも面白く遊べないことが屢々ある。更らに今一夜を加へて都合三晩も續けて夜を更せば、それこそ翌日は、、ふら〱と、恰も墓場を探し迷つた幽靈の如になつて終ふ。ところが、自分の知つて居る婦人の中には、いや午餐會、それ晩餐會、園遊會、觀劇會、舞踏會、といつたやうに續けさまに毎日〱彼方此方て招待されて、時に依ると一日の中に二ケ所も三箇所も出席して、然ういふ情態を二三週間も續けて、しかも一向平氣な婦人が澤山あるから實に驚く。隙洩る夜風の身に泌む處に、只の二分間も座つて居ると、予は頭の中心まで冷めたくなつて、差當風邪藥の一服も飲んで置かなければならない始末てあるのに、焉ぞ知らん、風にも得堪へまい婦人達は、雪の肌も露な夜會服て、戶を洩る風は愚か、星光霜を置くらむ庭に於てさへ、夜又夜を戯れ盡して、屈強な人足でも時には死に至る病に罹り兼ねない寒さを知らず顔である。而して其翌朝になつても勃々色は昨日に變らず薔薇の花のにほやかに、風邪を引いた氣振とては更らに無い。

下層社會の女に至つては、云ふも、管々しい。彼の各戶に働く家婢の如き、ランカシャイヤーに於ける坑婦の如き、一つとして吾等の驚嘆に値しないものはない、朝の八時から深更に及ぶまで店に立ち盡して居る酒場女、十二時間働き通しの女店員、之等の例を數へ上げたら日も足るまい。

かくても、女は男よりか弱い、と速歎せらるべきであらうか？　女といふ概念に弱いといふ屬性を伴ふことが何處迄も眞實てあるてあらうか？　疑はざるを得ぬ。而して、疑は予をして下の如き推論を牽かしめる、曰く、——女とは、造化が製作せるものゝ中、最も强靭なり傑作の謂なり——　マックスオーレル

渡り鳥

川路柳虹

乳色の雲、
眞珠色の空、
しづかな秋の海。

夕ぐれの浪の響にも、
淋しやかな聲がひそむ、
平らかな海の上、
杳かに過ぎてゆく渡り鳥。

一きわ雲に濡れた
紅い落日の光りが
うすく彩る
しづかさ

鳥はかすかに、また微かに、
華やかな「幸福」を啣へて、
わが眼路をおちてゆく。

荒れ後の海の暮

嵐がしづまり、
雲がおさまり、
うす暗く、平らかに暮れてゆく海。
狂ひも、風もひそめきも……
冷めはてた白い靜かさ　白い沈默！
うす暗く平らかに暮れてゆく海！
何もののない海……。
疲れた暮れの海！
いま魂は愚かに盲ひてゆく……。

柚の實

澤村胡夷

百日紅が咲いてゐた。

其後から服部さんは腹立たしさうな顔を突出してゐた。いつもの通り眉毛の濃い、角張つた顔だが、口髯がちやんと剃落とされてゐた。にたにた此方を向いたまゝ笑つてゐる。聲をかけるのには遠すぎると考へたに相違ない。僕はまづ山上の學寮には適當な舍監だといつも考へてゐた。

學寮の午後は森閑としてゐて、秋小口の風は光つてゐる。うすら寒い光が樹の間から縁側へのぞき込んでゐたが、服部さんは僕をいつもの石壁に面した部屋へ導いて與れた。而してにたにた笑つてゐた。午後には學僧の影が一つも見えぬ。各自その室に閉ぢこもつてゐるのであらう。服部さんはいま學僧の室を一巡して來たところであつた。

石壁の下から嚴丈な柚の樹がつき起つてゐる。それを向上げて出拔けに服部さんは其實を指ざしながら、

「今年も柚が澤山成きましたから、喰へるですよ」

と言つた。而してさも愉快さうに笑つた。山上のすべて秋の味には柚實がつきものである。豆腐を煮ても、茸を燒いても、柚からほど走しる香の高い果汁を注ぎかけると、その上には玉のやうな白い核が漂ふ。

「さうだね」

と僕も言つた。さう言つて寂しい笑を嚙殺した。潤澤のある實が刺の間から無數にぶら下つてゐる。風がその艶やかな葉を搖ると服部さんは急に起つて炊事部屋の方へ行つた。光つた縁側には蠅の弱つたのが匍つてゐた。

五時の時計が鳴る途端に太鼓がてんてん鳴つた。舍監が出てきて風呂がわいたと言ふ。僕は急いで風呂場へ行く事にした。夕がたは格別肌寒を覺える。秋草の間から浴場がのぞかれて、白い湯氣がほかほかと昇つてゐた。松葉を焚くのだとみえて一種の強い香が湯槽

に滲みこんでゐる、婆さんは湯加減をたづねに來た。少しばかり微温いと言つたら、樹葉を盛んにくべて去んだ。

湯から上ると僕は直ぐ撥をふりあげて太鼓を思ひきり強く打いてやつた。風呂場が明いた報知てある。樹の間からだいぶん大勢の聲がする。連中がつめかけて來るのらしい。僕は風呂場を出て、後の山へかけのぼつた。

釣鐘堂の石に腰かけて、すぐ下の阪道を瞰下してゐると、濱畑さんの山高帽が見えた。高帽が樹の下へ隱れてゆくと下の方から來た學僧が丁寧にお辭儀をした。濱畑さんは漢文の老先生である。



石階を幾つと無く降ると阪が漸次平易くなつて、門を過ぎ、また石階を降ると、藤の棚のある茶店の前まで出て來た。葉の病衰へた櫻の樹がたち並んでゐる、茶店の女房さんは京育ちの色白であつた。

右へ折れて小川に沿うて行くと野原へ出た。雜樹林やら、丘やら、重りあつて、その上から遙かに伏見の町の白壁と屋根

瓦とが混雜いて望まれた。孟宗藪のつきあたりまで赤土の路が蜿蜒つてゐて、その上を馬車がのぼつて來る。日は後の山へ隱れて了つて對ひの山の角ばつた頂だけ赤く燃えてゐた。秋の光が山にも森にも此一條の路にも忙しさうに消えてゆくのかと思れるまで自分の心が騷だしたので、急に同じ道を引かへして、農家の戸口とすれすれに山寮へ歸らうと思ふと、鷄か喫驚したらしい。すたすたと暗い家の内へ隱れた。小川には見覺えの小女が中拔菜を洗つてゐる。

石階のところまで來ると服部さんが黑い門の傍から僕に手招きをしてゐた。

僕が首肯くのを見て阪を樹下路へとまた隱れて行つて了つた。誰か來たのだらうと足を早めて、かつかつと石を響かして登ると、大工と石屋とが仕事を仕舞うて降りて來た。裏口の板戸を押すと、ぎい—つと言つてひらいた。濕つた秋の山土を踏みしめて、裏口からふりかへると、森、家、路——古い塚の寂しさうに薄暗がりに沈んで行くのが見えた。うらさびしい思が胸にこみ上て來て、それを隱す譯には行なかつた。

僕は明日この地を去るのである！

百日紅のうしろには服部さんが、また腹立たしさうな顏を突出しゐた。

而して僕をまだ招いてゐて呉れた。

私の若い心

永代靜雄

久しぶりで私の若い心が眼を覺ました。見回して、驚いて、口を歪めた。

あの時分から、僅た一足飛びに時代を飛越したのだらう、今ては、代も變つて、昔、自分が棲んでゐた家の中が、様子を代へて居る。道具の置場も、それを使ふ人達の聲も異つてゐる。私の若い心は、久しく見知らぬ人達に蹂躪されてゐた古巢の中を見廻して、驚いて、口を歪めた——私の若い心は、聲をあげて泣くだけの勇氣もなかつた。

見知らぬ人が、蒼い顏をして近寄つた。

「もつと寢て居なさい」
　私の若い心は、
「一體此處の主人は私ぢやないか」
と云ひたさうに、蒼い顏を見た。
「幾ら威張つても駄目だ」
と蒼い顏は、人の氣もなげに見えた隣の部屋を振顧つて、
「なア、おい」
と鼻笑ひした。
　其の部屋の窓帷の陰には、ヱナスス、ルツキング、グラスの花が、大理石の花臺に匂つてゐた……女の妖艶な、優しい感情がその蕚から流れてゐた――と、私の若い心は恍惚した。
「なア、おい」
と今一度、蒼い顏が其方を向く。
　其の部屋から、腹を裂くほどの呻吟聲か漏れ初めた。
　私の若い心は、蒼い顏の濁つた瞳に見すくめられて、ヱナスの鏡草の媚に蔽はれた花辦を、周章てゝ心の隅に押藏した。
「うむ、う、うむん」
といま一切り呻吟聲が響いた。
　私の若い心は不意に起上つて、
「誰だ〱」
と叫んだ。
「誰でもない、汝だ」
と蒼い顏は然う太息した。
　呻吟聲が、私の若い心の手足へヒタ〱と捲きついた、黑髮、リボン、手紙――色の亂れた血――
　私の若い心は、秘密の幻覺に抵抗して、懸命に藻掻いた、藻掻きながら、オルカメニヤの花を思つた……
（貴方さへ幸福であれば可い）
　途端に、初めて人間の空氣を吸つた赤子の聲が、隣室から迸つて、私の若い心の唯中を貫いた。
　蒼い顏は、衰へた兩手を眼に當てゝ、肩を波立たせた。
　私の若い心は、色の亂れた血――その經過した時間の瞬間の復活が、この赤子の聲であると思つた。
　私の若い心は、堅く唇を咬んで、再び永い眠へと陷ちてゆく――

啞

水島尺草

私は此頃になつて、急に詐りのない時子の心を知つて見度くなつた。

彼女と私とは許嫁であるが、二人の間には何か接近し難い或物があつて、それが爲に互に誑しをしてゐ乍ら、それに距てられてゐるやうに思はれてならない。

今日も時子と逢つて、私は一層沁々と感じた。

時子の若々しい眼で、凝と物を凝視乍ら、冴え〴〵した言葉で話をする時は、確かに私に對して、何の掩ふところはないと思はれるが、それでゐて何か物足りないのである。

「何うかなすつたの、今日は默つてばかりゐらつしやるのね。」

時子は怪訝な眼をして、私の樣子を見てゐたが、よく若い女に有り勝ちな、直ぐに不安らしい顏色が見えた。

私は何故か時子の顏を見ても、何時ものやうに冴える事が出來なかつた。自分にも何うしてだか、その心持ちはハッキリとは分らない。たゞわけもなく物が言ひ度くはなかつたのである。

「僕にや何うして、貴女の眞實の心持ちが分らない。何うしてだらう。」

とかういふと、彼女は始めて安心したやうに笑つて

「眞實の心持ちつて、何ういふ心持ち？」

と子供のやうに頸をかしげて眼を瞬る。

「眞實の心持ちさ、よく〳〵考へて御覧。」

時子は愈々理解しかねたやうな風で、

「だつて分らないわ、たゞ眞實の心持ちつて、私何時も眞面目でゐますよ。」

と彼女は、心細さうな頼りない顏付をした。

私は時子のさういつた風な態度が、何とも言へず愛らしいと思ふのが常だが、その時だけは妙に媚びるやうに見えて厭な氣がした。

「僕に對して、貴女の眞實の心持ちさ、それが聞き度いんだ。」

かういふと、時子は默つて俯向いた。そして顏を紅めた。

「僕は眞面目なんだよ、だからそのつもりで言つて貰ひ度い。」

と私はかう言ひ足した。
時子は矢張り俯向いて默つてゐる。
「考へるまではないぢやないか。」
と何時までも默つてゐるのが、もどかしくつて催促をした。
「だつて、そんな事。」
と彼女は、言ひ惜さうに口を噤んで了つた。
「僕はそれを聞いて置き度いんだ。別に貴女を困らせやうとする氣でも何んでもない。」
「今更そんな事をお聞きになつて、何うなさるの、貴方にやよく分つて居らつしやるのに、何か私をお疑ひなさるやうな事でもあつて？」
と怨みがましく、涙ぐんだやうな眼をして、私の顏色を見乍ら、妙におど／＼した聲でいつた。
「だつて僕の思つてゐるのが、果して貴女の眞實の心持ちか何うか分らないぢやないか。だから何んだか不安心で仕様がない。」
私は不圖、自分の言ふ事が無理ぢやないかと思つた。自分の心持ちをさながらに他人に通じさせやうとする事は、望んでも得難いんだ。さう思つても、それて諦めて了へない私は、何うかして時子の私に對する眞實なこゝろが聞き度いのである。
「思つた事を、そのまゝに言ひ現す事は出來ませんもの。」
と時子は、憐みを乞ふやうな、沈んだ聲をした。
「それで貴女は滿足するかね、諦めて了ふのかね。」
「だつて何うしても言ふ事が出來まんければ……。」
時子の眼には恐怖の色が現れてゐた。
「これぢや人間は餘り悲しいぢやないか。思つた事を、そのまゝに言へないとすれば啞も同樣だ、貴女も僕も啞なんだ。」
私はかう痛切に思ふと、堪らない悲哀の湧くのを覺えた。
世はこの意味の啞の人が多い。自分の心から愛する人の前に、何の詐りの情があらう。熱烈な燃えるやうな愛を、そのまゝに言ひ知らせる事の出來ない筈はないと思ひ乍ら、私自身が時子にその愛情の極度を、言葉でもつて通じる事が出來得ないのである。假令私の心持ちを彼女は充分に知つてゐると思つても、これが果して私の心持ちであるか何うか分らない。すると不安が生じ疑惑が起つて來る。
「私の貴女に對する心持ちが分るかね。」

「えゝ、よく分つて居ます。」
と時子は、妙に嬉しさうな顔をして、冴えた調子でハッキリと言つた。
「貴女は偉い。ぢや今僕が貴女を何う思つてるか知れるかね。」
「そりや無理よ。ぢや私が何う思つてるか貴方當てゝ御覧なさい。」
と冗談とも思つたのだらう。時子は笑つていつた。
「僕にや分らないさ。貴女は僕の心持ちが分ると言ふから聞いたのだ。貴女は想像してそれを信じてゐるんだらう。」
「だつてお互にさうして信じてゐるより外にや仕方がありませんもの。」
「仕方がないて、僕にや何うしても滿足が出來ない。想像してゐるから、些細な事にも互に心を疑ふやうな事が起るのだ。」
「だつて、考へたつて限りがないぢやありませんか。」
時子はさういつて諦めてゐる。煩悶のない極めて幸福な女だ。
「限りがなくともいゝ、何うしても僕は考へずにや居られない。」

私は何時か一人で居るやうな心持ちになつて、凝と考へに耽り始めた。
一心同體などといつてゐる世間の睦い夫婦の間柄でさへ、全くこの互の心を知る事は出來ない。人間は何うしても孤獨である。私はやがてこの時子と夫婦になるのだが、やはり互の心持ちは滿足に知り合ふ事は出來ないのだ。
一家團欒した溫かい家庭にも、親子は各々相反した心持ちを抱いて、何時も孤獨の淋しさを味はつてゐねばならぬ。
私は言ひ知らぬ淺間しい果敢なさを感じて、絶望した人のやうに柱に凭れかゝつた。
時子は默つてうつとりとし乍ら、未來を心に描いて、この果敢ない幻影を樂しむやうな眼を、野分けに亂れた庭の花壇に向けてゐた。

露國近代の一女作家

土岐哀果

チエホフの特色の第一として擧ぐべきは、露國の

『インテレクチユアルス』の根本の弊を、他の諸作家よりも、能く了解してゐたことだといはれてゐます。この『インテレクチユアルス』といふのは、つまり、露國の生活の裏面を能く「會得して」ゐて、而も、敢て之に反抗しようとする、若い、極めて少數な一團の人々の仲には、入る力が無い、といふ階級にある人々の事てす。て、さういふチエホフの特色と、同じ特色を有した、即ち、この點に於て、露國の文學史上、この大作家と席を同じうしてゐる作家が、近代に、もう一人ゐました。それは、エヌ、デイ、フヲシチンスカヤといふ婦人て、雅號を、ヴイ、クレストフスキイといひました。あのフラントの探偵小説の體て書いた、多作の、「聖彼得堡の巣窟」の著者のフセオロード、クレストフスキイ、それから、その娘で、「女藝術家」といふ作で初見參したのとは、別人てす。て、それ等と區別するために、露國では、このフヲシチンスカヤを「假名ヴイ、クレストフスキイ」と呼び慣はしてゐます。

フヲシチンスカヤは、千八百二十五年に生れて、千八百八十九年に死にました。有名なドストイエフスキイ、チクラソフ、その他、アクサコフとか、ダーリとか、パナーエフとかいふ男の作家と同時代てす。書き始めたのは、二十二か三てした。その小説には隱れた魅力が有つて、いつも一般の賞讃を得、廣く讀まれたものてした。けれども、初めの間は、その作の充分な價値は鑑賞せられず、七十年代の終に至つて、漸く名を成したのてす。有名な文藝批評家のミハイロフスキイ、アルセニエフ、及び小説家のボボルイキンが、この女作家の眞價を認めたのは、その文學的閲歴の終、僅かに千八百七十八年から千八百八十年の頃て、かの英國のヂオーヂ、エリオツトに肩を比べるといはれてゐます。

彼の女はリヤザンの貧しい貴族の家に生れて、一生を地方に送りましたから、その小説も、初めは地方の生活、地方の人物ばかりを書いて、視察が狹いといふ欠點がありました。が、この欠點を別とすれば、フヲシチンスカヤは實に能く地方の生活を知つて、巧みに之を描いてゐます。て、その題材の主とするところは、この時代の少女の、哀れな、希望の無い一生て、愛の無い、暴虐な母に壓へられる戀人の惱み、社會の殘酷、その嘲弄、誹謗、男の虐待、さういふものてした。

六十年代の初め頃になつて、露國の時世が開けると共に、ファシチンスカヤも、異つた、ずつと希望に滿ちた人物を寫してゐます。中でも、千八百七十年――七十一年に書いた「ゼ、グレート、ベア」といふのが秀れてゐます。これが出た時、青年の間には非常に評判で、他の小說よりも深い影響を與へました。カチアといふ女主人公がベルホフスキイに會ふ、この男はツルゲーネフの「消息」で見る柔弱な型ですが、こゝでは「境遇」と「非運」とのために妨げられて、もつと大きな事業を成し遂げることの能きない社會改革者の姿をしてゐます。カチアが愛する、此方も戀に陷る――少なくも、かういふ男の戀に陷るところ――このベルホフスキイは巧みに描かれてゐます。露國文學の中で、かういふ型は實に澤山ありますが、そのうちの最も佳い代表者の一ツだといふことです、この作の中で、一二の人物には、眞實で無い、少なくも、作者が正しく觀てゐないやうなのもありますが、全體としては、皆、巧みに描かれた人物ばかりです。殊にカチアは、ツルゲーネフのナタリア（ルーヂンの女主人公）や、エレナ（その前夜）の女主人公よりも、立ち勝つて、活々しく、充分に描いてあるといはれてゐます。

その遂行を「境遇」に妨げられてゐるといふ自稱の英雄の勇ましい行爲に就いては、もう〳〵聞き倦きたので、カチアは自ら、もつとずつと小さな事業に身を委ねる。則ち彼の女は、村の學校の親切な女主人になつて、この村の暗黑に、より高い理想、より良い未來の希望の光明を齎さうと企てる。この小說の現はれた時は、宛も「民衆從僕」の大運動が露國に始まつた時で、そのために、モルドフチエフの「時代の標」など、並んで、愛讀の書となりました。一種の溫味と、精れた、人情の深い、詩的な調子とが、この作の內部の眞義に加はつてゐます。露國では、これが多くの良い思想を導きました。もし西歐に知られたらば、そこでも亦、若い男女の愛讀の書となつたでせう。

七十年代の終から後が、ファシチンスカヤの第三期ともいふべき時です。この時期の作――「ゼ、アルバム」と題した集で「[illegible]衆と肖像」が最も優れてゐます――には、新しい人物が有ります。六十年代の初めに露國が闘した自由の大運動は終を告げ、千八百六十四年以降、反動が勝を制して、進んだ思想と改革との代表者として此の運動の中に投んでゝゐた千百の人々は、そのより良き時代の信仰と理想とを棄てゝしまひ

ました。種々な口實の下に、彼等は今、自身を――それから勿論彼等を信用してゐる婦人達を――裂いて、新しい時代は來た、新しい要求は生れた、舊い旌旗を捨てゝ、個人の精神を豊富にする――といふ新しい旌旗の下に整列した時、皆はじめて『實際的』になるのである、これを爲すのは、彼等には自己犠牲である、『勇ましい公民たること』の表明である、それは、各人が『主義』のためには進んで理想を犠牲にすることを要する、かう說き伏せやうと試みました。『ウィ、クレストフスキイ』は、この理想を愛してゐた婦人として、誰よりも能く此の詭辯の眞意を解してゐました。彼の女は自らも之を苦しんだに違ひ有りません。―ゼ、アルバム』の中に見るやうな、主義を棄てた人々の『圖案と肖像』、かういふものは他に、どんな文學にも恐らく無からうと思はれます。是等の話を讀むと、是等の主義を棄てた人々を描く時に、痛み悲しんだ可憐な心が見えます。エス、デイ、フヲシチンスカヤの『圖案と肖像』が、露國の文學の中で、『主觀的寫實主義』の最も優れた標本の一なのも、この點なのです。

フヲシチンスカヤには二人の姉妹が有ります。ジマロフ、及び、ウエセニエフといふ雅號で、共に小說を書きました。ジマロフには又、フヲシチンスカヤの傳記を書いたものが一冊あります。

女子高等教育の過去と現在

文學博士　松本亦太郎

△女子高等教育の將來を圖らんとするものは先づ過去の狀勢を詳にせざる可らず而して現在に及び後將來に及ぶは事の順序なるべし今之を過去の歷史に徴するに明治十年前後より廿年前後に亘れる十年間は歐米文物の輸入時代にして政治も宗教も文藝も教育も偏へに範を彼に則り隨つて女子の教育に於ても（此期間に於ては）從來の女大學式教育と進路を異にせる女學校の勃興を見るに至れり則ち近代的特色を發揮せる自由

教育は是れに外ならざるものにして時代精神の然らしむる處とはいへ當時に於て斯る現象の存在せしは寧ろ破天荒の事たりし也

△其學校に凡そ二種あり一はミッションスクール則ち米國のカレーヂを模範とし初等教育を卒へたる女子に高等教育を授くるを目的とせるものにして京都同志社の如きは其標本也一は精神修養を旨とし宗教（主として基督教）に關係せる當代の日本人が共同して設立せしもの東京の明治女學校鳥居阪女學校の如きは之に屬す

△此種の學校の特色に凡そ三個あり則ち形體の設備、研究の武器の完備、及び尊ぶ所の精神の存在これなり詳言すれば如上の學校は孰れも其設立の位地好適にして（ミッションスクールに於て殊に然り）校舍寄宿舍の設備の完備せるは固より英語敎授の便宜多きよりして西洋の科學文藝に對する直接の趣味を喚起し偖は其宗教的精神講話よりして個人生活の發達は固より社會人として否宇宙の一員としての覺悟をさへ得べく此種の學校が一時隆々として其名天下に聞え地方富豪の女子の來り投ずるもの亦尠からざりしも理の當然たりし也

△されど明治廿年前後よりして前期の反動は起れり歐化主義半面の運動たる排外的國粹主義は天下に瀰漫し新島襄氏を目して一國家を破壞する逆賊なり」と云ふ某氏の如きを生じ時の文相森有禮氏さへ外國に對抗する必要上教育の方針を變へざる可らずとなし流石に芽ぐめる女子高等教育も斯くて禁壓的政策の加味によりて次第に其跡を絕ち廿七八年頃に至りては職業的なる二三を他にしては此種の學校は殆んど絕無となり其偶々存せしは學科程度を低下して文部省令に準據せる高等女學校程度のものとなせり

△されど近來に至りて高等女學校卒業生の巨多と時勢の進歩とは職業的ならざる高等教育を希求するもの益々多きに至れり蓋し文運の進歩は須臾も休まず日清戰爭と日露戰爭とは局面轉換の樞軸をなし社會競爭の激烈と歐米文物交通の頻繁はいやが上に重積し其結果は現代女子の精神に絕えてなかりし倫理的詩歌的宗教的なる一種の羨望感情を誘致するに至れり即ち現代の女性は現代の男性と同じく彼等が受けたる普通教育によりて斯る感情の襲ふ處となり加ふるに各個人周圍の狀況によりて種々新らしき要求を提起するに至りしなり假へば丹波柏原に於ける一女性の如きは此種

の感情の往來と其煩悶の解決とを村上專精氏に求め氏は其解答を公開狀として讀賣紙上に發表せしも未だ此の一女性の衷心の滿足を買ふに足らざりしを復た以て其復雜なる羨望感情の消息を讀み得べし

△更に思ふに斯る感情の去來は從來の舊式なる女子には絕えてなかりし事なるを以て母たり姑たる人が此種の感情に襲はるゝ現代の娘と妻とに對して柄鑿相容れざるは又數の然らしむる所にして家庭風波の起因を討ぬれば眞に止むをえざるものありて存するなり時代の差異抑亦如何ともするの道なきか



△曰くあり斯の如き新代の哲學的女性に於て之を救濟するの道は主として自由教育に待たざる可からず職業教育の克く醫する所にあらざるなり彼の東京に於て設立されたる日本女子大學校の如きは恐らく其の具體的發表にあらざるべきか幾多凡衆の誹譏の中に固定基本金七十萬圓を算し而も中樞の位地には現代尤も進步せる政治家實業家學者富豪を有し生徒の總數亦千以上に上る如きは殆んど一私立學校が十年以內に成せる事業としては奇跡中の奇跡ならずや

△而も政府の禁壓的訓令は依然として女子高等教育の

上に存し其他に於ても非高等教育論者の數亦侮る可からざるものあり即ち彼等は主張すらく

(一)女子に高等教育を授くれば從順溫和の美德を失ふ

(二)高等教育の結果として思想上經濟上の自由生ずれば女子の考は個人的となり從來の家庭は破壞せらる

(三)敢て西洋に倣ひて殊更に高等教育を唱ふるの要なし

と此他猶女子の頭腦は教育に適せずと云ひ女子に教育を授くるの年限長ければ生殖作用を妨ぐと云ふの論者あるも此等は以下の三項に比すれば深く云ふに足らず而して此等非高等教育論者の多くは重に官僚派の有力者及び大學教授中に存するものにして要するに日本舊來の習慣を破壞してまで高等教育を望むの要なしとの消極的退嬰的見解に外ならず

△然らば高等教育論者の主張は如何、曰く

(一)權利均等の思想

(二)社會の發達上其必要あり

(三)現に高等教育を希望するものある以上國家として是れをなすは急務なり

此他家庭改良、社會改良國家改良の上より之れを唱へ更には人道の上より唱ふる者も亦無きにしもあらず要するに諸方面に亘り現代一流の活眼ある達識明慧の士によりて唱へらるゝものにして侯西園寺、伯大隈、男澁澤を始めとし、三井、森村の兩富豪、島田、浮田等の論客は孰れも其の中の錚々たるものなり

△更に予の見る所を推して詳言すれば非高等教育論者の標準は過去なり習慣なり退嬰なり消極なり高等教育論者の主張は將來なり進歩なり改善なり積極なり而して時代の進歩に女子を順應せしめ以て世界的たらしむるは其標準の眼目なりバルドビン曰く「習慣我と順應我とは社會の二要素なり」と非高等教育論者を前者に譬ふ可くんば高等教育論者は其後者たるは敢て吾人の呶々を要せざる處也

△されど兎に角現在に於て事實として上述の兩論存する以上予も亦高等教育論者に絕對の價値と權威とを附する能はず而も茲に注意すべきは法律政治學問等にして時代の歷史世界の大勢に順應する以上女子の高等教育が是れに順應せずとは些か理に戻らずや今之を海外教育の現状に徵するに米國は尤も自由にして女子のカレーヂあり又ポスト、グラヂユエート、コースには女

子の在學者多く獨逸に於ても諸大學に專修生多きのみならず近頃に於ては其正科たるを許すに至れり瑞西は固より然るものにして、最後に保守退嬰を事とせる英國に徵するも亦高等敎育を重んぜんとす我國女子高等敎育の未來果して奈何

右は松本文學博士が女子高等敎育問題に就いて語られたる處にして「讀賣新聞」紙上に發表されしものなるが大いに諸讀の參考ともなるべき評論なれば茲に之を轉載することゝせり（記者）

支那婦人の眞相

東洋婦人會主　淸藤秋子

會の事業として家庭敎師を支那に派遣しましたのは、一昨年の一月からで、まだ日が淺いものですから、これと云ふお話する程のこともありませんが。唯だ表面の報告や又あちらの禮狀などに依りますと、この會の主義だけは解つてゐるやうに思ひます。

支那婦人はまことに應接が巧で、人をそらさぬもてなしぶりは、感心なものでありますが、何分時間の觀念とか、衞生思想などが發達して居りませんから、訪問しても、されましても、實に閉口することが多いです、併し其間に面白味もあります、私は支那に行きまして或夫人から食事に招かれたとがありましたが、大抵晩餐で、四時五時の案內であるから、時間を計つて出かけ、正時間に先方に着し、まづ案內されて內に入り、奥の間の入口に參ると、案內者が大聲あげて、來客のありし旨を通ずる、すると奥から妻君やら、娘やら召使の者などがぞろ〳〵迎ひに參る、奥にはいつて主客席が定まると、第一に紅茶を酌んで出す、さうして西瓜の種子の熬つたのや、其外支那の菓子を卓上一面に並べて、むやみに手摑で卓上にちかに置てくれる、少々埃があつても一向無頓着のものであります、寒さの時であると、小さな手爐や足爐を持つて來ます、

支那はまことに節儉の國でありますから、冬でも日本のやうに櫻炭のカン〳〵して居る火鉢もなければ、暖爐もありません、西瓜の種を嚙み碎きながら話して居るうちに、漸々客が集つて來ますので、食事の致し方は日本とは異うて、一つの卓上のものを、皆で一緒に食べるのでありますから、人數の揃はない內は始めません、愈々揃ふと食卓につくのですが、今度は席の

譲りあひが一通りではない、少くとも十分や二十分の時間を費す、元來支那人は冷えたものを食べませんから、御馳走はだん／＼後から／＼暖かいものを持つて參ります、自分の用ひた箸や匙で御馳走を取つてくれるのには、閉口です、そうして全く終るまでには二三時間はかゝります。

　支那婦人は存外活潑で、人の中に出ても少しも恐怖る〻風もなく、人に對し情を包まずに、なつかしげに振舞ふ様、殊に外國人に對して、ずん／＼自國語を以てお世辭をふりまくところ、又二つなり三つなり覺えた丈の外國語を使用して、其國の人をもてなす處などは、西洋婦人とよく似て居る、一例をあげて見ますと、まだ日本語がほんの三ッ四ッしか知らない少女が、日本の人が訪ねると、にこやかに、おかけなさい、今日は好い天氣で御座います、どうぞまたおいでなさい、など〻話しかける、素より非常な片言ばかりではありますが、其の勇氣と大膽とには呆れたといふことであります、日本人なら十分解つたことでも、いざとなると進んで容易に口にしないのが常ですが、支那の少女は自ら進んで試やうと心掛てゐるので、從つて進歩も早く、一度覺えたことは決して忘れるやうなことはありません、それで理解力に富んで居るのですから、教へるものは誠に意外に困難を感じないさうであります、

　御存知の通り支那婦人は纏足をしておりますから、一歩も外出せず、一室に籠つて居るのに、それですら話上手であつてみれば、これで自由に外出が出來世間の見聞を廣くして交際社會に立つたなら、教育はなくとも、非常なる交際家となることであらうと思はれます、惜しいことには今迄長い間女子の教育は全く、捨て〻あつたのでありますから、磨かない玉のやうで高尚な光が更にない、ですから、少女などで少し新らしい教育でも受けたものは、生意氣になりまして、大膽にも路傍に立つて革命演説などするものがあるさうであります、それ故支那婦人は一般に慘酷で道義心などは少しもなく、恩を受けても直ぐに忘れて了ふ、またやさしくすればつけ上り、少し叱責すると反抗する、一度意に充たぬことがあればもう其の人の云ふことは用ゐぬといふやうな風で、なか／＼骨が折れます。

　私の教育してゐます女學生の中にも、現にそんなのが往々あります、先達も二三名退校を命じた位でありました。

要するに支那婦人は善く導いて行けば、末頼しい婦人て、將來日本婦人の相談對手にもなりますが、若し一歩誤れば革命でもやりかねない恐しい婦人だと思ひます、たゞ一つ解らないのは、教育を受けた婦人が其の恩人に對する態度であります、心から服して眞實難有いと思つてゐるのか、また教育のお蔭で表面だけを裝ふてゐるのか、研究はしてをりますがまだよく解りません。彼等の腦中には家の觀念などは少しもなく、只贅澤に氣樂に我まゝに日を送ると云ふことを以て滿されて居るのであります、そうして時々數多の伴をつれて出かけ、寫眞を採つたり食事をしたり。芝居ても見ることを此上ない樂みにして居ります、聞く處によると、支那婦人は幼時から好んで小説を讀むさうでありますが、それが爲め身を誤る人も往々あるさうて、まことに氣の毒なもので、到底一朝一夕のことには參るまいが、男子よりも望みのあるやうに思はれるから、今後方針を誤らずに導いたなら、立派になることてあらうと思はれます。

涙

在東京保養院　門脇眞枝述

燈暗數行虞氏涙、夜深四面楚歌聲、（橘相公）

われは寂びしくひた泣きぬ
　おのがなやみのやりかてに、
涙はうまくなかれつゝ
　安けくなしぬわかむねを、
（ゲーテ氏トロスト、イン、トルエーネンの一句）

涙よ涙は古來文學方面の人に注意され、或は詩歌に或は文詞に其の偉力を讃へられぬ、即ち彼等の著作の過半は殆ど涙に關係ある記載なりといはむ計りに多し、然れどもいかなれば吾々成育せる人類の、或る感動によりて涙を流がすものなるか、この根本の理由に就きては、吾が醫學者方面に於ても之が研究を遂げし者未だ極めて鮮し、おのれ先いつ頃この理に就きて生理學的心理學上より聊か取り調べ其の結果を精神病科會にて講演せしことありき。こゝには本誌記者の君の依囑にまかせ涙に關聯せる一と節を通俗に述べむとするなり。唯だ夫通俗なりもとより科學的系統的に述ぶるには非らず。讀者これを諒せられよ、

人の其の母胎を出づれば直ちに聲高く叫ぶは毎なり然れど露涙出る事なし嬰兒に均しき最下等人類も、一般動物も涙は眼を潤すに止り吾々の如く涕泣する事なし。其の泣くが如く見ゆるは「叫」なり。即ち彼等には吾々の如き悲哀感情なくして痛み不機嫌等極めて單一なる感情のみ現はるゝが故に其の痛みに對し自然の反應として、唯だ一の「叫び」をなすのみなり。其の根本の目的は助けを呼ぶものと推測さる。然るに其が特殊の精神機關即腦髓皮質の次第に發育せむには各種の感情も發育し之れが表情として、或は泣き叫び或は叫ばずとも自然に涙の溢るゝ樣なるなり、之れ感動は毎に身體狀態殊に呼吸器、心臟機能、脈狀等に影響を及ぼすものなるが故に苦痛悲しみ等の如き陰性感動は心臟機能を衰弱せしめ眼内に鬱血を來たし。涙腺に反射刺戟を與へてゝに涙の溢るゝ者なればなり。精神發育不完全なる者の流涕は毎に唯だ自己の苦しみ悲みにのみ反應し即ち、自己的我利的の涙なれど精神の發育完備すれば、複雜なる感情例之へ同情、慈愛等の觀念情調出來るが故に他人の苦痛悲哀に對して涙溢ぼるゝ樣なる。即ち對他的又利他的の涙となる故に涙にも亦自然の發育階級あり。其が利他的にして最も大なる對他的の涙となりて、てゝにはじめて極致に達せる者といふべし例之釋尊の對一切衆生の涙、基督の愛の涙、之れなり。こゝに亦模倣性の涙といふ者あり。こは俳優坏の悲しき所作事をなし顏面を種々攣め眼を閉ち眼をしばたゝき與に涙を溢ぼし觀客の同情をひくが如き、或は何等緣もなく何等の利害關係もなく何等深き同情もなくして、他人の泣くを見て涕泣する者ある。即ち彼のお義理一通りの會葬者、小兒等に認むがごとき、之れなり。予は之を反響性涕涙と名けむとす。

偖て婦人は生理上また先天性に涙もろき者にして其の涙を應用すること、到底吾々男子の及ぶところに非らず。然り涙は婦人の生命にして婦人の存在上樞要なる武器なり。これなき者は婦人にして婦人に非らず。これなき者は婦人として男子に對立存在すること能はず。古來婦人にして貞操、慈愛を以て美名を竹帛に垂れ、或は同じく婦人にして妖女毒婦の汚名を流しゝ者のあとかたをたづぬるに、要するに涙の應用如何にありと推測さる。即ち泣く人のこゝろによりて美ともなり、善ともなり、不全美ともなり、惡ともなるは、實に涙なり。然り婦人の一滴の涙唯だ夫一滴の涙にしてよく懦夫をして起たしめ、男子に偉大なる慰安を與へ

或は奢侈の涙散行にして男子をして著みしき罪惡を犯さしめし例、古往今來枚擧に遑あらず。之につき不圖想ひ出てぬ、予が亡兄重秋職を陸軍經理部に奉ぜし者日清（廿七八年）の役に凱戰せし際語りけるやう「硝煙彈雨の艱難疲勞も出征の首途の時涙の一滴も、みせたまはざりし母上の、けふ久振りの對面に「よく奉公して凱旋せしよ」とハラ／＼と垂れたまひし御涙によりて一切忘れたれ慰められぬ云々」と世間かゝる例は多からむ。

多くの婦人の中には悔やしとて直ちに涕泣し、悲しとて直ちに叫泣し、憤りて直ちに泣き、怒りて直ちに泣き、戀しとて直ちに泣き、嬉しとて直ちに泣く者あるは、未だ野性の痕跡の含まれ、自己的の涙たるを免れず。いはゞ未開人の涙と相隔ること一歩のみ。この關係は人間本性の赤裸々に呈はるゝ、或る精神病、脳病患者に就きて最も明かに認めらる。例之鬱躁病、ヒステリー患者の如き之れなり。則ち彼等は露計りの原因により、或は少しも認むべき外部の動因なくして、著しく涙を流がし甚しき重症に至りては、苦悶の結果泣き叫べど涙出てず「せめて今一度人間並みに泣いて見たい」といふ者あり。偖ては雨降れりとて泣き花散りぬと泣き猫の戯れ犬の吠聲にも涙を流がす者あり。精神病と迄行かずとも彼の煩悶病とか似而非自然主義中毒者とかいへる者も亦たよく泣き、よく流涕する者の一なり。人世の不可解を叫び自殺せし者を眞似て泣き「神よわれを憫み戀人の愛をわが身一つに授け給へアーメン抔と泣き、病的なる色情（戀愛といはず）に泣く抔、偖ても／＼涙の多き浮世なるかな。彼等の涙の蜆川に流れたらむには誰か汲まむとするならむ。かく唯だ泣き唯だ涙を流がすなど、七情五感に直ちに反應する樣にては涙は未だ幼稚なり。野性なり。須らく一層修養發達せる涙ならざるべからず。

古の上流婦人殊に武家に生れし婦人は心に泣きてむねに涙をつゝむ、方なりき。今の婦人而も教育ある婦人にても中には唯だ眼と口とに泣きて涙の大安賣りをなすものの多きかとおもはる。然るに例之今日は親しき朋友知己の不幸に對し誠しやかに泣き涙に袖を絞らむ計りなりし、婦人の焉ぞ知らむ次ぎの日は歌舞伎座觀劇の御愉快筋ならむとは。今しがた恩師長上の柩を送り其の當時これみよがしに慟哭し倶に穴にも入らなむ許りの擧動をなしゝ人の、其の歸途さには親しき友の許にて面白う、おかしく、癡話物語り音曲の合奏をな

せるなど、こは極端なる實例なれど之に類せる例は多からむ。古の教育ある婦人はホロリと溢ほす一滴の涙にて其の切なる感情を表はすを以て美となしき而も唯夫一滴の涙の中にはえもいはれぬ無限の情緒を含めり。今の多くの婦人のは、夕立式なり。表情體操式なり。一歩誤まらむには遊女の空涙と均しくなる者あり。模倣性涕涙の應用の巧みなる俳優も蹴押されぬべし。予は嘗て某女學校を參觀せし事あり。當時教師の教ふる處を親しく見しに、教師曰く「女子は天眞爛漫なるべし、自己の本性を僞はるは不可なり。舊道德の所謂克己とは己を僞はることなり。諸有煩悶は之れが爲めに生づ、須らく泣きたくば大に泣くべし、嬉くば盛に笑ふべし。之れ本能なればなり云々」と時に一女學生起立し問ひけるやう「泣たくなれば泣け嬉くなれば笑へとの給ふにや、然らば妾の如き癇强き性質に生れしものは、憤怒の感情起らむにはおもひのまゝに荒れ廻はる方道理にかなふ、にや」と教師しばし語なかりき。予はこの光景を見て坐ろ慨歎に堪へざりき。曰く自己の子女を人に托するも亦危い哉と、今の女の夕立式はかゝる原因にもよるならむか、否らぬかとまれ學校教化家庭の賜物、世間などの影響や多からむ。偖ては婦人には如何なる涙を要すべきか。婦人にあらまほしきは、慈悲、同情の涙なり。之れありて婦人の一生一切の事態は解決出來べく之れありて婦人の美點は益發揚すべく。女性の存在こゝに確かとなり。女性の生命こゝに光あらむ。而してこの涙を最もよく發達せしものは如何にといふに、精神衛生（宗教的、道德的、醫科的衛生）之れなり。若夫憤怒の涙嫉妬の涙虛榮の涙恨悔の涙、空涙等に至りては婦人に最も忌むべき毒液なり。嗚呼慈悲の涙なる哉同情の涙なる哉。尙言まほしき事多かれど今はかくなむ。

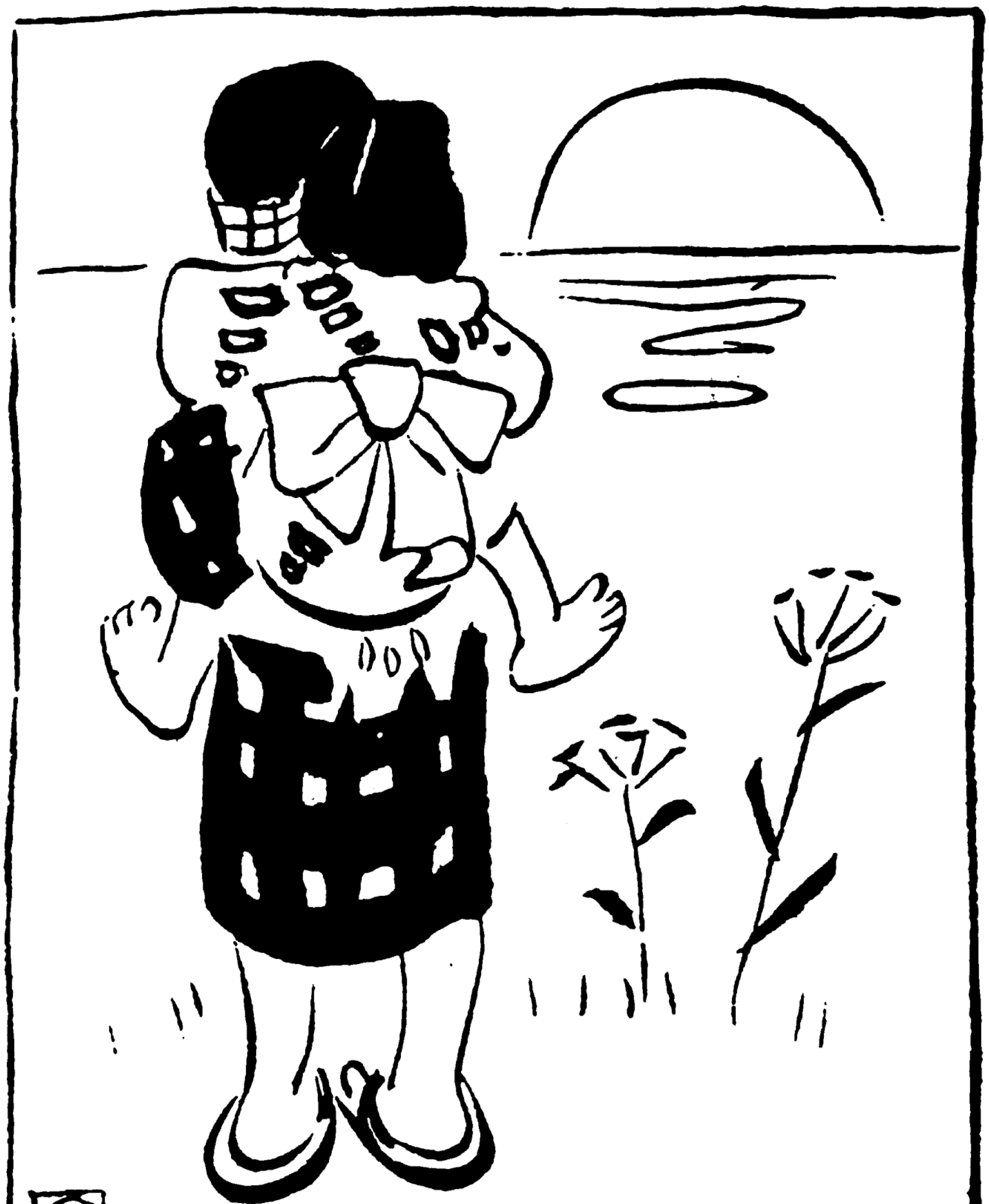
寶石の話

東洋寶石會社支配人　淺井克己

我國は日露戰爭に依りて、兎に角世界一等國の列に入りましたが、尙ほ有らゆる方面に於て、歐洲に及ばない點が多いです、其内この寶石界の如きも、誠に幼稚なこととて、一例を言へば、歐米より日本に輸入せられる寶石は、歐米では之を田舍行と稱して居ります、而かも其寶石は甚だ不透明なもの多く、また贋物を混

じて居る虞れもあります、要するに日本人は寶石に就て、歐洲の寶石商より、愚にせられてゐるので、遺憾の外はありません。この時我社は幸にも、福島縣河沼郡寶坂村字寶川に於て、寶石坑を發見しました、併し日本て寶石の發見せられたことはないてはありません、曾て近畿岐阜などの深山より、寶石に類するものを多少發見されましたが、之を海外に輸送し歐米專門家の鑑定を請ふと、多くは一笑に附せられた有樣てした。我社發見の當時も念の爲め各種の原石を輸送しましたが、こんな珍石が東洋に發見せられたのは、稀有だと賞歎を博し、尙ほ坑層深き處を探れば、恐らく金剛石、紅寶石の存在し居ること、を疑はないとまて通信を受けました、發見したる寶石は大變光澤を有し、また甚だ透明であります、故に輸入品に間々ある樣に、之を贋造することは出來ません、中にもサファイアの如き、試みに太陽の光線を透して見ると、七色に變化して、實に造化の巧妙と云ふ外言辭はありません。

我が國も早や純金時代は去りました、現今は寶石時代てす、これは一の想像てはありません、輸入額の上て示して居ります、日露戰爭前には輸



入税が四十二万圓位であつたのが、戦後一躍して今年などは、四百萬圓になつて居ります、而しダイヤモンドに税の科してあるのを見ません、これは多く中流以上の人が、使用するものであるから、百五六十萬圓は下らぬと思ふのであります、かく寶石の日増に多く用ひらるのは、已に純金時代が去つて、寶石時代に入つたのです。

交際場裡に立つて活動せんとする人は装飾品に付ての趣味もなければなりません、社交の趣味と云ふものは、對人的にして又自己本位のものです、若し純金の指輪を箝めて居る人があれば、かりに四匁とすると、一匁五圓なら直ちに、二十圓と云ふ額が推知することが出來ます、これでは装飾品と云ふ眞價がない、装飾品と云ふものゝ趣味は對人として自己本位、即ち人が一目して其眞價に苦むものが、装飾品の趣味である、外國では中流以上の人は大抵九金十金に寶石を箝入して使用して居ります、我國に於ても今では、十八金より以下の金に寶石を入れたものゝ注文が日々多くなつて來ました、これ装飾品に對する趣味が一般に知れて來た結果であらうと思ひます、また寶石の流行に伴ひ、一の急務とする處は鑑識です、我社では特に、創業以來これらの普及に腐心して居るのです。又一般學者の參考に寄する爲め寶石の原石を一袋一圓で賣つて居る、勿論之は餘程の損でありますが、一般に寶石の鑑識を普及する爲であります、寶石と云ふものは金銀の様に、石に摺つて藥をつければ其性を知ると云ふ様に容易なものではありません、なぜなればダイヤ、オパール、サファ等の寶石は高價である故、この高價の寶石を玩味して研究すると云ふことは上流社會はともかく、中流以下では出來ぬことでありますから、寶石の知識を養成したいと思つて多くの損も省ずして、賣つて居ります。

寶石は原石内より得らるもこれを、琢磨して、装飾に應用するまでには、中々加工しなければなりません、琢磨の法は、我國に之を知つて居る者はありません、強き摩擦なくして、光澤を發せしめんことは、頗る困難なことです、會社は種々苦心の結果之れに要する器械を工夫し、專賣特許を得る様になり、採掘された原石の中より得た、オパール、は直に加工され、陳列場にもある様に、指輪、ブローチ、根掛、簪、首飾り、腕輪、釦、時計提、莨入、巻莨入、印材、羽織紐、風鎮、珠數、文具に至るまで、寶石を箝入します。

怪談鏡花式

▲泉鏡花氏に就いて、未だ世間に知られて居ない、珍無類の逸話がある。それは未だ尾崎紅葉先生が在世の頃で、泉鏡花氏は家庭の事か何かで、故郷の金澤に歸つて居たが、再び上京するに就いて、當時新聞社の用かなんかで、京都へ行つて居た、紅葉先生に會はればならぬ事があつて、鏡花氏は上京の途中、京都へ寄ることになつた。處が、旅行なんど餘りした事のない鏡花氏のことであるから、七條の停車場へ着いた時は、幸ひにも紅葉先生と同伴で行つて居た、巖谷小波叔父さんが迎ひに來て呉れたお陰で、何うか斯うか無事に車に乘せられて、先生の宅まで行つたのは好かつたが、其晩是非巖谷小波氏を一人で訪問しなければならぬ用が出來たので、例の氣の小さい鏡花氏、仕方がないから恐いのを我慢して、丁度途中で。先生に敎へられた通に、辻車に乘つたのは好かつたが、その車が合乘車だつた。これが鏡花氏の失策の原因で、當時紅葉氏は、何でも下京の本願寺邊に居たが、訪問すべき巖谷氏は、鴨川を隔てた寂しい、今の高等學校の近傍であつたが。此の長い途を合乘の人力車に、悄然と乘つてがら〳〵と挽き出したまでは無事だつたが、丁度あの人通の少い、本願寺の噴水の樹立を拔けて、廣い大通に指懸つた時、何思つたか不意に車夫が車を止めた。斯うなつたら大變、元から小膽な鏡花氏、震慄すまいことか、幸ひ眞暗だつたから解からなかつかものの、眞蒼になつてぶる〳〵震ひだして。口を利くことも出來ない。何うなる事かと唯ぼんやりとして居たが、すると本願寺の大門の側から、鏡花氏一流の怪談めいた女が一人、餘り口數も利かずに、ひらりと鏡花氏が乘つて居る側に飛乘つた。鏡花氏はます〳〵何だか氣味が惡るく、もしや昔話で聞いて居た、人取りの女ではあるまいかと驚いたが、唯だ夢中で、車の隅に小くなつてぶる〳〵震えて居たが、ふと氣が付いてみると、或細い小路に車が止まつて居て、例の妖怪の女は消えるがやうに、すうと黑闇の中に姿を隱して了つた。而して乘つた人力車は、又依然と執り出した。愈々持つて不思議でならない。唯もう夢に夢見る心地に、やつと一時間半餘りも掛つて、命から〳〵小波氏の家の前まで來て、行きなり飛び込んだが、口が利けない。小波氏も眞蒼になつた鏡花氏の顏を見て、『何うしたのか。おい泉君。』と聲を懸けたので、『此處は一体何處ですか。實際巖谷君の宅ですか。』と驚いて居るばかり。やつと、斯う斯うと、途中の出來事を詳しく話したと云ふことである。

鏡花氏の作中によく出て來る、幽靈の樣に現れる、妖怪の女性と云ふのは、多くは此の時の記憶を着想したもので、由來この出來事が、鏡花氏の作物では、幾何の重要な部分をなして居るかが思像される。この話は一面鏡花氏の種明と云つた、天機洩らすべからざるの逸話である。

○

▲序に、も一つ鏡花式の怪談實話を書いてみよう。それは未だ鏡花氏が牛込矢來町に、舍弟の泉斜汀氏と共に居た頃であつたが、或夜更けて、友達の宅を訪問して歸る途中、昔から幽靈時と定つて居る丑滿刻、今こそ市區改正したりしてなか〳〵賑かであるが、その頃の夜などは、所謂、萬籟死して音もなく、水も寢入る丑滿時、風もないのに井戸端の柳が、さわり〳〵と搖れると云つても好いか惡いか、その邊までは解らないが、兎も角も、今とは違つて、彼の交番の球燈なんかが、暗夜の樹立の中に物凄う人魂かと氣味惡う思はせるやうて、其處を通り懸つた鏡花氏、忽ち眼前にきら〳〵と閃くものが飛出した。それが闇の内を小い電光のやうに、消えたり光つたりすると週は鏡花氏、いざ怪物ござんなれと、ひらり一歩身を外して屹つと心を落付けて見詰めて、隙もがなと伺ふた。それでも最初は獸の眼の玉が光るのか、何か怪物の眼玉が光るに相違ないと、護身用のステツキを大上段に振上げて待構へて居たが、別に自分に近寄る氣勢もない、て鏡花氏も振上げたステツキに張合がなく、偖て何だらうと、例の度の強い近眼鏡の玉を好くふいて見るとこはそも如何に、怪物の眼玉と思つたのは、何條以つて驚かざるをえない、夜遲く自轉車を稽古して居たその自轉車のスポークが軒燈の火影に、きら〳〵と閃くのであつた、とは今更ながら何處までも鏡花式怪談である。

and make you lives bright, cheerful and useful by following the way of self-denial and sacrifice.

Happinies be yours from day to day!

Farewell.

A: I am perfectly surprised to hear of your going to Europe. Do you go by Siberia?

B: It has been rather suddenly decided. I shall go by ports and land at Genoa.

A: How long will it take?

B: About forty days, but being a good sailor, I do not mind the long voyage.

A: You will see many different places, I suppose.

B: Yes, I shall see Shanghai, Hongkong, Singapore, Colombo, Suez, Egypt, and the Mediterranean.

A: It must be delightful. How long do you expect to be away?

B: About a year. By next Christmas I shall see you again. What shall I bring for you?

A: It is hard to suggest. Bring yourself back to us well and strong.

B: And you too must be plumper and stronger by that time, and do not work toohard and kill yourself.

A: Will you write me from time to time?

B: I am a bad correspondent, but I shall drop you a line from time to time.

意を味はひて，献身犠牲の道を通りて，平和，歡喜，有益の一生を送られん事を祈りて止まず。

願はくば，幸福日々諸姉のものたらん事を。

御　別

甲：貴女が歐洲に御出などとは實に驚きました．西比利亞からですか。

乙：急に決りましたのです．港々により，ゼノアで上陸いたす積です。

甲：幾日かゝりますか。

乙：大概四十日間ですが，船には強い方ですから永い航海も構ひません。

甲：嘸かし，諸所を御覽になりましよう。

乙：ハイ，上海，香港，新嘉坡，古倫母，蘇士，埃及，地中海等を見ます。

甲：面白い事でしよう．暫く御滯在の御豫定ですか。

乙：一ヶ年位です．次のクリスマスには又御目に懸りましよう。何を御土產に持つてきましよう？

甲：注文は六敷う御座います，マー御丈夫で御元氣よく御歸朝して下さい。

乙：貴女も もつと 御肥りになり，丈夫になられ，死ぬ程御働きなしてはいけませんよ。

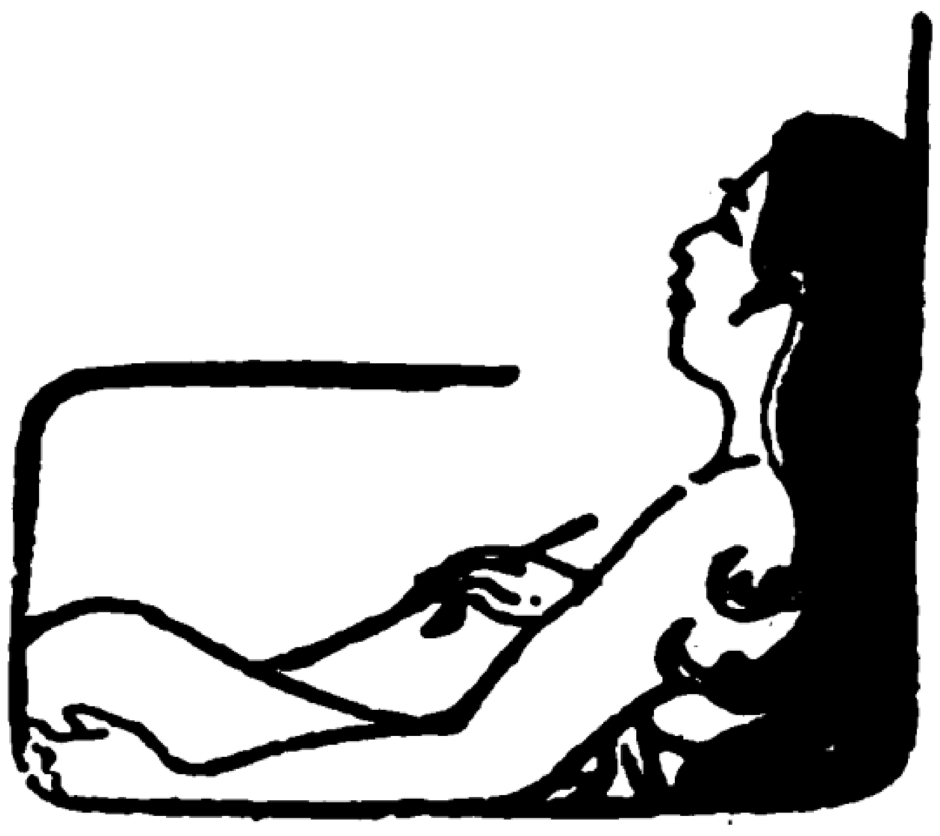
甲：時々御手紙を下さい。

乙：私は手紙無精ですが，時々一筆位書きます。

英　　文

(第五年第十二回)

女子英學塾講師 河井道子



Christmas.

Once more Christmas is before us, and with it comes the end of the year, When we look back, we find most of the plans we made at the beginning of the year have been frustrated, and so many unexpected things, whether joy or sorrow, have crowded our days. But let us cease weeping for the things of the past we can not help. for our wild regrets and yearnings can never restore our lost opportunities and failures. We must remember, however, that it is better to fail because of aiming high than to succeed because our aim was low; that if our desires were denied because of giving others joy and success, we should be thankful for it. Is it not a cheerful thought that Christmas always brings peace, joy, and goodwill to men when we feel tired and beaten in the battle of life at the end of the year? The faces of my readers are unknown to me, but whoever you are, I hope that you will find the true meaning of Christmas,

クリスマス

クリスマスは再び廻りて我等に來り，而して年末是に伴ない．回顧すれば，今年の始に於ての計畫は又其過半を無効に歸せり，而して，喜樂にもせよ，或は悲憂にもせよ，不慮の瑣事連綿として我等の平日を包圍せり。然れども徒に泣くを止めよ，吾人の及ばざりし過去の諸事を怨じて。そは如何に狂せし斗の後悔，苦惱も既に失せし機嫌と，失敗補ふ能はざればなり。然りと雖も，若し吾人の着目高きが故に失敗したらんには着目下きが爲に成功したらんに勝る事幾何ぞや，又他人に喜悦と勝利とを與へんとて，己が希望を破棄したらんには却て之を感謝とすべし。クリスマスは我等一ヶ年人生の戰上にて失敗して疲勞せし時に來りて，平和と喜と恩とを人間に與ふとは，如何にも嬉しき意義ならずや．我讀者の顔を我は知らず，されども，誰にてもあれ，諸姉は此クリスマスの眞

紀念號の編輯

紀念號！紀念號！

雜誌は毎に新しきものなり。紀念號は更に新しき歳の始に現はるゝものなれば、躰裁の一新と、内容の光彩とは、歳の新たなるが如く、新たに淸らなる感じを讀者に與ふべし見るべく餘りに美しく、讀むべく餘りに多きに驚きたまふなかれ。

紀念號！曰く滿五周年！吾等は此歷史ある紀念號を編輯するに當り、多大の興味と深遠の期待とを有する者なり。

選者の交替

各欄の選者は新年を以て多少の移動を生ずることゝなれり、短篇小說の選評は新たに

水野葉舟氏

に托することゝなれり、氏は篤實の態度を以て諸孃の作品を驗せんとす次に詩壇は本誌編輯主任の

河井醉茗氏

自ら責任を以て之を選評し、散文詩新詩句を合せて『詩』の一欄に收め捲土の勢を以て革新の旗を飜さんとす、次に日記は

横瀨夜雨氏

選評の任に當り、氏が一流の批評眼を以て大いに散文界の空氣を動かさんとすべし、其他の諸欄は殆ど移動なし、投稿家諸君之を諒とせよ。

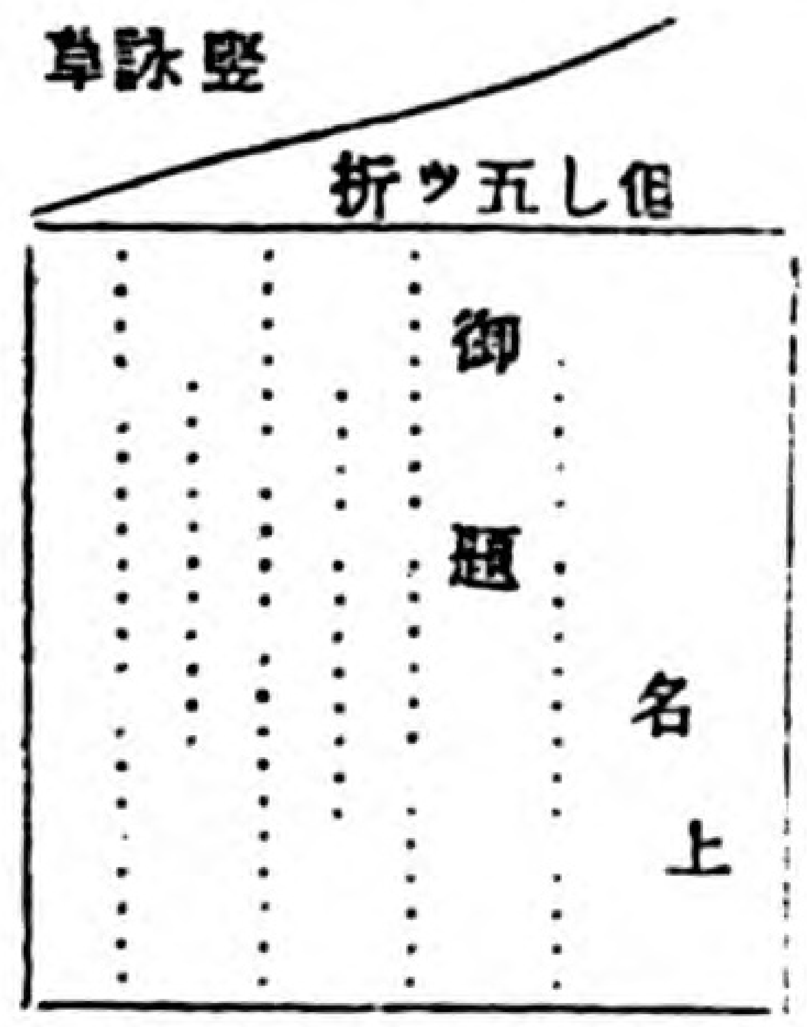
歌御會始御題

「新年雪」と仰出さる

明治四十三年歌御會始御題は「新年雪」と仰出されたり　詠進書式並に期限等如左

料紙は檀紙、奉書、杉原紙又は美濃紙を用ふ詠進は一月十日迄に宮内省御歌所へ差出すべし

但し一人一首に限る



裏面書式
某（府縣）下某郡某（市郡）某（町村）住
「華士」族
又は平民
苗字名
官位勲等功爵を有する者は苗字の上に記載すべし

因に明治三十一年の勅題も「新年雪」と仰出されしが當時英照皇太后御喪中の爲め御會始めを御見合せあり單に詠進に止めたる次第にて今回重ねて當御題を仰出されしなりと承はる

短篇小說

小栗風葉選



○規定　題材凡て自由なり一人一篇を限り半紙又は罫紙に振假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以内とす賞は甲種に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

○カステラ（天賞）

東京　玉露

女學世界の何かに書いて有つたカステラ製法とか云ふのを見て伶子がたすき掛になつてブリキ鑵に入れた原料のふくれ上るのを今や遲しと待つて居た時であつた玄關に「御免」と云ふ聲がして誰か案内を乞ふ樣子だ、一家中留守の機を計つてこんな慰みをして居た時の事だ如何でも伶子が立たなければならぬ、仕方なしにいそ〳〵と出て見ると、此夏父と東北の旅行中、平で知己になつた大原渡といふ青年であつた、「まあよく」こう云つて座敷に上げたけれど伶子は當惑した、たつた一人で居る處に來られて困るばつかり、第一あのカステラ、とふと思つて急に一寸失禮と大原を置いてきぼりにして臺所に來て見た、と今一足の事でカステラは匂ひを放つて焦げて居る、伶子は泣き度い樣な氣になつて座敷の方をうらめしくにらんだ。

其中に程なく母が歸り、下女も歸つたので大原の接待の方もカステラの仕末の方も難なく濟んだが其時の事は今に忘れられぬ、何とも云へない口惜しかつたのだ。伶子は其後大原の事を思ふ度にきつとカステラを聯想する。

いまも其時の事を思つた、それは伶子が十五の秋、まだ其父も健在の時であつた、大原はもと伶子の父が奉職して居た中學校の卒業生で尤伶子の父の居た時代とは少し遲かつたが、大原も金田厚の名はかねて敬慕して居たのでふと旅宿で名のりあつたが緣で度々伶子の家を訪づれる樣になつた、大原は牛込に下宿して早稻田の文科に通つて居た、伶子は麻布の女學校の三年生で樂しく學課にいそしんで居た頃だ、

伶子は今夢の樣な追憶に醉つた。
來れば必然一時間以上時に二時間半位は父と談話して行く人だつた、しまひには父も倦きてしまつて私を呼んで代りに話をさせて陰に入つて了はれたつけ、などゝ思つた。
其時分の話の有樣を思ひ浮べると、しきりと文學や哲學の話をやゝもすると持ち出したものだ、尤左樣でなければ何も話の材料が無かつたからだらうとも思ふ、全く無骨な人だつた、廿四といへば生意氣に風采の事許り氣にかける年頃なのに、今思へば何一つハイカラ振つた物はなかつた、いつも郷里から仕立てゝよこしたゴツ〳〵の衣服をきてごくバンカラなこれも郷里からのシャツを着て、たゞ足袋だけはいつも紺の匂ふ樣なのだつた。
丁度其翌年の夏、大原は首尾よく卒業したので郷里に歸つて了つた、郷里は東北の可なりな町であつた。
伶子はこれを格別記憶すべき事とも考へなかつた、相變らず勉強して居た、父のところへ長々世話になつたといふ意味の禮狀が屆いた、が伶子はたゞ左樣いふ事を父から聞いた許りで有つた、其年も秋になつて世はだん〳〵と寂れてゆく頃ふと伶子の父は病にかゝつて幾日もなく此世を去つた、此時から渡そだちの伶子は世のあはれをしみ〴〵と感じだした。
此時大原から來た手紙は眞情の流露したもので有た、我段慕ひ致する金田先生といふ書き出しで冒頭から、終まで誠心籠つた書き振りであつた、此時伶子の頭には忘れ去つた大原といふ名が再びくり返された。
其後二三度書信の往復があつた、がいつも大原からのは金田伶子殿と宛名の側に御家内皆々樣と書き添へてあつた、伶子はそれに對していつも端書で簡單な返事を出して居た、時には忘れて出さなかつた事も有る。
翌年伶子は先祖祭で青森に行つた歸途母に伴はれて大原の郷里に立ち寄つた、まだ伶子が幼い時分金田は此處に住つて居たので其頃の知己に逢ひ度いと二三日此處に逗留した、其間大原は毎日たづねて來た、そして嬉しさうに種々な話をした、「東京といふ語をきくだけても嬉しいんですのに」と云つて近々に一度出京たいと思ふと云つた、
大原は老親の天にも地にもかけがえのない獨息子で卒業後は直に其膝下に呼び寄せられてもと卒業た中學校の英語の教師になつたのだ　素より本意ではないと大原は云つて居た。

出發つ時は停車場まで送つて來た、そして特に力をこめて「何卒折々都會の面白い出來事を御報告らせ下さい」と云つて「田舍者になつて了ひましたから……ハヽ」と寂しく笑つた、伶子は其笑を引きつけられる樣に感じた。

「たつたあれが一昨年の事だわ、あの時の樣子も、こう眼にありありと浮ぶのに、夢の樣、ほんとに狐でも僞してると思はれるもの」伶子は心にこう思つた。



草とり　赤坂夢みろ人

昨夜大原の宅から一葉の葉書が屆いた、それは大原が急病で死んだ報知てあつた、伶子も伶子の母もあまりの突然に吃驚した、そして其夜は二人でいろ〳〵と死んだ人の生前の事をあれこれと語りあつた

「お嫁さんが出來てからあんまり手紙が來ませんてしたね」伶子が云つた、

「眞實に左樣だつたね、お前はまた以前より度々種々云つて遣つたのにね」

大原は伶子が彼地に行つた後間もなく妻を迎へた、そして今年の正月には子供が生れた、がどつちも知らせてはよこさなかつた、そして伶子は他から聞き知つた、

母は「渡さんも鄕里ぢやあ面白くなかつたらうにねえ、行つた時の樣子ても想像がつくがね」と云つて妻も不滿足ながら貰つたんぢやなからうかと云つた、伶子はあまり深く云はなかつたが、

「何にしても、まだ死なしたくは有りませんてしたわ珍らしい良い人てしたのねえ」と云つた、そして老いた兩親の姿(彼地に行つた時一度訪問して知つて居る)それを扶養する大原の生活、まだ逢つた事のない其妻、今年生れた子、とさま〴〵に思ひ廻らした、伶子はそして昨夜早く寢た。

そして今朝、裁縫をし乍らも心は大原の上に及ぶ、ふと此一月程前、珍らしく委しい手紙をよこして——尤も家庭の狀況、殊に子供の事なんか一言も書き及ぼしてなかつた——

「人間の最幸なる、また華やかなる學生々活を追懷しては、返らぬ昔なつかしみ居候」といふ樣な事を書いた終りに「君ますと思へば戀し京の空云々」と一首書き添へてあつたのを思ひ出した、殆ど二年に近い疎遠を蟲が知らすかものなつかしい手紙をよこして詫びたと思ふと感が深い、

「こうしてお話して居るうちも東京は何千の電車が忙がしく廻轉して居るてせうな」とピリヽと眉を動かした大原の面が浮ぶ「田舍者になりましたから……」寂しい笑ひが現はれる、

ふと大原一人を賴りにして居た老親を思ひ、遺された若い妻幼い子を思ひ、短かつた大原渡の生涯を思ひあはせて伶子は胸おされる思ひがした

「御覽」と云ふ大原の先年の聲が親しく聞える樣な氣がして「夢みたいだ」とも一度强く思つたが「私だつて、カステラに浮身やつした幼なさが戀しい」と

伶子はそれからそれといつか針の手はすこしも進まなかつた。

(評) 打明けて言出づる事も得せず、さりとて妻子の定まれる後まて

ら俤懐かしさの忘られぬと云ふほどの、男の態を仄めかしたる書振、老手と云ふべし、それに對する女の感情――淡々しい中にも其人の何と無く暴出てらるゝ心持ち、巧みに出てゐる、會話を追想にしたのも巧妙である

○二人（地賞）

神奈川　矢野君子

「お葉さんがお嫁に行くと言ふぢやあ有りませぬか―とお勝は不圖思ひ出したやうに、話の一寸切れた處で斯樣言つた。

「え〻其樣ですよ―答えたのはお勝より、二つも上かと思はれる二十二三のお内儀さん作り、くつきりと色は白いが、何處か淋しい所のある商人の細君とも見える女。お咲と言ふのである。

彼岸の中日、お勝は亡き母人の墓參りを濟しての歸るさ、秋の柔かい日にそむいて歩るくお咲を見て、まあと言葉をかけたのである。而してそれなり二人は、ぶら〳〵歩き乍ら話を始めた。……

お勝は一寸行く先を見た。靜かなしもたやの多い町てある。

「でも、あの人は？……」

とお勝は癖の一寸眼と眼の間に、皺を寄せて斯樣きいた。

「あの人つて？……。あなた未だ知らない？……尤も知る譯もないわねえ……。お葉さんはあの人の所へ嫁くのよ。お葉さんはもう三月位なんですつてね……」

と淋しい顔に笑みを見せて、お咲は思ひ出したやうに、兩袖て胸のあたりをおさへた。

お勝は默つて頷いたまゝ、其樣を見た。腹中では、まあお葉さんは艶い人だ。何時の間に其麽身になつたのだらう？…。それで親も詮方がないと思つて一所にするのだらうと思つた。そして急に淋しい氣を覺えた。

「私少しも知らなかつたわ。やつぱり離れてしまうと解らないものですね。此間一寸他から嫁くつてやうな話をきいたのが珍らしい位なのよ。―でもあの人の所へ嫁くやうになりましたかねえ―

お勝は稍々あつて、蔑視の言葉で言つた。

お咲は胸をおさへてゐるまゝ、

「親が好く承知したと思つてよ。――何でも此二十八日とかに嫁くのですつて…」

と言つたが、お勝は只さうと許り答へて何とも言は

なかつた。

お葉は此二人と近所であつて、一所に裁縫の稽古に行つてゐた。而して未だ肩上げの深い時分から、浮いた方に向つて、直ぐ隣家の武田と言ふ會社へ出る息子と馴染めた。お勝とお咲の話であの人と言つたのは、武田の事である。今では三人とも離れ〳〵になつてゐる。お咲は春頃、或る稼人に嫁ぎ、お勝は早く母に別れ、父と兄の三人で暮してゐたが、此夏の初め兄の務めの都合から、遠くの町へ移つたのである。

二人は久し振りにと色々話をした末、とある家へ這入つて飯を喰つた。て、歸つたのはもう暗くなつて、家々に灯がともされてゐた頃だ。

お勝はお咲に別れて、何とはなし淋しく思つた。

お勝はお咲に逢つて以來、父や兄のゐない時には、一人物思ひして、知らず〳〵吐息をつく事があるやうになつた。

お勝には、未だ三人近所であつた時分迄、許嫁の人があつた。おとなしい人だつたが、不圖惡い友達に交つて、遊ぶやら、花合やらを始めて、とう〳〵苦しい虜へ捕はれてしまつたのである。――お勝の家の移つたと言ふのも、之れが一つの原因であるとは、其當時近所で言つた事である。

父も兄も彼麼奴は見限れと言ひ、許嫁の人の親も、どうか絶念めてくれろ、申譯がないと言つた。お勝は元からあまり其麼事に頓着しなかつた性なので、大した悲しみもなかつた。――其れがお咲に逢つてからと言ふもの、妙に思ひ出されるやうになつた。

二週間許り過ぎると、めつたに尋ねた事のないお咲が突然來た。お勝は驚いたが、嬉しい思ひで招じ入れた。――お咲は自宅の人の用で一寸近くまで來たからと言つた。

二人の間に先日の事から又お葉の話が出た。時に、お咲は、

「お勝さん、お葉さんは隨分ですね。もう三月にもなつてゐると言つたのは、全く嘘ですつてね。早く一所になる爲めに彼麼事を言つたのですつてさ……」

と聞かせた。今更作らお勝は驚いて、何とも言はなかつた。

秋の風は、時々冷たく訪れる。座敷の二人は二時間許しも話をして、お咲はお勝が止めるのを無理に歸へ

つた。——妙に都の遐を氣にするやうてあつた。
後てお勝はがつかりしたやうに、
「あゝお葉さんはえらわ……」
と斯様一人言して考へ込んだ。
——知らず〳〵お勝は指を折つて數へ出した。
而して、
「あゝもう十六日……」
と言つた。それは許嫁だつた人の出獄する日である。
庭の紫苑の、風にゆれるのが秋の日に障子へ映つて見える。

（評）簡潔の筆を以て印象を強く現したのが巧妙である、時の當人なるお葉の人物及びお咲お勝の性格、三人三様に能く書分けられてある、事件を総て暗に描いて、内に何等か在る如く考へせしめる



（地賞）　火曜　水戸　北川うめ子

○小西さん長谷川さん（人賞）

靜岡　植松誠子

『妾、どうしても分解なくつてよ』と長谷川さんが云ふと『妾だつて同様だわインタラグイションマーク（？）ね―』と對手の小西さんが云ふ、『（？）えゝ眞實よ……ては矢つ張りMの強迫が烈しかつたのでしようか』『でもねえ、余り早すぎるじやなくつて？未だ歸省つてから五日ばかりしか經たない事よ、』『そうね

え」と長谷川さんが歎息を吐いて、「こゝてこんな事を云ふたところて推測に過ぎないんてすから――萬事柳下さんの歸つた上の事よ」と、風通しのよい座敷――どこもかしこも開け放した八疊間の、桐の小机に青い羅紗の掛つた机のある長谷川さんの部屋て來客の小西さんと長谷川さんとが額に汗を搔き乍ら話してゐる。

「隨分暑い事ねえ」と小西さんが汗をぬぐふ、「耐らないわ、九十二度てすつてよ」と長谷川さんが答へる、

「ちよいと、小西さん袴を取つたらよかあなくつて？誰も居やしなくつてよ、」と云ふ、小西さんは尙浮かぬ顏をして、「四方さんはどんな顏をなさつたてしようねえ」と云ふ、「實に悲慘の極よ」と長谷川さんが云ふ、

「眞實に」と云つて小西さんが聲をうるました。

「妾はあの晩ね、先週の土曜の……新橋て四方さんを送つた時の顏、私は目につくは、一體そのお母さんて方はどんな方なんてしよう？」と小西さんが、

「どんなつて、慘酷な人の事は判つてるは、けれど、あの快活のねえ四方さんが投身なさるなんて……」「無理に結婚でも强いられたのじやあないてしようか」

「でも彼の方は、婚約者があるやうな樣子だつたわ」と、二人の話はいつまても此の限りない臆測て堅まつてゐた、小西さんが急に、「失戀じやなくつて？」と稍々小聲だ。「さうかもしれなくつてよ、」と答へた長谷川さんが、大きな聲を出して、「お芳！今のものをもう一遍見てきてくれなくつて」と云つた、小西さん默つて汗をいふてゐる、

「小西さん――……四方さんが死くなつてしまふと競爭手がないのねえ」と長谷川さんが稍笑む、

「何んだかもう妾し」と小西さんが悲しい聲を出す、

「不運な方ねえ」と長谷川さんが云ふ、「可哀そうだわ」と小西さんが泣く。

「この手紙を書く刹那、……どんなだつたてしよう」

「さうねえ、夢中なんだつたんてしよう」

長谷川さんは机の上の寫眞を取る、「あゝ」と少さく歎息して小西さんが膝の上の手紙に目を落した。

四方さんと云ふのは小西さんと長谷川さんの友人てあつた、最も親しい――のみならず小西さんとは學校て首席を爭ふ唯一の競爭者てある、互に「負けるもんかい！」と嫉妬の眼を剝いた事はないてはなかつたが、死――四方さんの死報が傳ると小西さんが落膽した。此の小西さんと長谷川さんが四方さんを新橋停車塲て送つたのは五日前てあつた、

小西さんは義俠者だけに四方さんの性格も境遇もほゞ知つてゐた、

四方さんの繼母はどんな慘逆を擅にしたのであろう？壓迫に耐へかねなかつたらなぜ東京へ出て來ぬのであらう、妾にまで手紙を寄せて逝く位の餘裕があるならばなぜ――と小西さんは頭の中てそれからそれと友の死に對して不平――殘り惜い糸を手繰つた、

『甚だしい耻辱の爲につて……どんな――具躰的なんでしようか』と小西さんが沈默つてゐた長谷川さんに話かけた、『耻辱？具躰的つて？？』と思ひのやり場に窮したやうてあつたが、『さあ』と如何にも思ひ當つたやうだ。『ねえ、彼の方の事てすもの、自己の前後へ沒却するやうな事はないわ』と之れは小西さん、『てしやうか』と長谷川さんは首を傾げて、『矢張り、インスピレーシヨン？よ』と答へた、『では柳下さんの歸りを待つのだはねえ』と吐息して、『待遠い!!』と自棄のやうに云ふた。

『なんとなく不安てねえ』と長谷川さんが、わざとらしゆう眉根を寄せた。

『耻辱？妾は分らないよふ』小西さんはもどかしげにあせつた『いくらあせつたつて仕樣がないけれど』と又氣を替へる、

冷やかな川波を破つて遠い樂園へ遊ぶつて……『こんな悲しい文をねえ、氣の毒て〳〵……』と小西さんはなに事も思はぬらしい、最前から長谷川さんが頻りに進らるゝ氷菓子も口に入らない。

『想像に過ぎないのてすから』長谷川さんは大きな調子高い聲て云つた、

『でも、逝くなつた事は慥なんてしよう』と小西さんが、『えゝ、そりやあ……』長谷川さんが自分の言葉の余りに冷かだつたのに氣がついて、急に勢付け『あんな友愛の熱い方はなくつてね、』と長谷川さんだ『まるて夢のやうだわ』と小西さんが云ふ。

『柳下さんはどんな報告を齎すてしよう？』長谷川さんが云ふたなり、懶げそうに目を閉ぢて沈つと頭を抑へた、『待ち遠しいわ――』と小西が身を搖ぶつた。

二人は開け放した夏座敷て、遠く靜岡へ急行した柳下さんの歸るのを待つてゐる。

（評）一寸變つたスタイルだ、短篇の體としては面白い、不安、憶測、怪訝、然う云つた心も心ならぬ感情が錯雜して目に見るやうだ、唯對話の一節〳〵に其人名を書き添へたのが煩さい、多數者の會話なら紛らはしいと云ふ恐もあるが、矢張唯二人の對話てあつて見れば、一々名前が斷らなくとも、自他自から判然たるやう工夫あつて然かるべし

【秀逸】

○宵祭

函館　谷内ふさ子

ドン〳〵、ドンドゴドンドゴ……

雜木林を搖がせて、出雲神宮の宵祭の太鼓が、今一頻り高く響いた時、お敏は重さうな瞳をあげて、つと釣行燈の下を潛つた。

果物屋、飴屋、駄菓子屋、餅屋と、廻と並んだ露店の間を縫ふて、坂の兩側に立てられた紅い下げ行燈が綺麗に、草深い石段の下まで續いてる。

時折、露店の中から、なまめかしい客呼ぶ聲と、はしやいだ女の笑ひ聲とが混交になつて、妙に人の行く足を引き止める。

上る人、降る人。若い人、老いたる人。其れが皆笑つたり呼き合つたり、喜に充ちた顏でお敏の前を過ぎる。お敏は何處となく不安の面相で坂を昇つた。

太鼓がまた高くひゞいた。

嚴肅な空氣に石段を昇りきると、右の薄暗い中に、御堂の杜を隔てゝ、大きな老松の蔭になつて素人芝居がある。其前は人をもつて埋まつて居た。淡い神燈の光りを浴びながら、うよ〳〵と頭だけが動いて居る。

お敏は其人混みの方をぢつと瞶したが、軈てチヨツと舌打をして、ぱーつと燃え上つてる篝火の方へ徐々と歩みをうつした。

其處には細い青竹が四本、周圍を四角に竹から竹へ繩を張つて其の中に、弱々しい四十ばかりの爺さんが小さい束ねた枯柴に腰を据ゑて、燃え上る焔を呆然と視て居た。

お敏は其の傍の竹垣に凭れながら、パチ〳〵と火の跳るのを眺めて居た。と此の時、

「敏さん！」と微かに呼ぶ聲がした。

お敏は愕いたやうに半ば軀を起した。其して熟と、聲する闇に瞳を据ゑると楓の影が動いて、お敏の前に立つたのは、紺絣に黒の兵兒帶を締めて、鳥打帽を冠つた鳥渡目立つ青年。

お敏は石像の如うに突立つと、爺さんは火を搔く手を止めて眼をみはつた。男は

「お待たせしました。お一人でせう？」

と知り切つたことを訊いて微笑んだ。

お敏は

「えゝ」と答へたが聲は低いながら微に震えて、つと足許に眼を落すと、燃え殘りの火に映つた眸は異樣にさびしく輝いてゐた。

「お手紙は屆いたてせうね」

「はい今朝早く……種々有り難いことばかり。お禮の

申如うも有りません」と、づんとして妙に拗ねる。

男は何か言はふとした時、「いよう、味なことをやつて居やがらあ」と、言葉ぎたない絆纏を着た土方風の男が、二人の顔を覗き込む如うにして通り過ぎた。

男は苦い顔をして其影を見送つて居たが、やがて、「敏さん」と向き直つて、「彼の手紙は事實なんですよ、嘘と思つて貰つては迷惑します。兎に角彼方へ參りませう。人通りがあつちやアお話も出來ませんから」といつて、歩み出した。お敏は默つて頷いた。开して頻に亂れてる後れ毛をうるさそうに嚙み咬へながら男の後に隨つた。杜間から下りて來た風が颯と篝火を煽ると、時ならぬ火の粉がばらばらと散つた。爺さんは慌てゝ开れを蒐き集めて居た。

二人は立並んだまゝ何時までも無言つて歩いて居たが、うら淋しい人影の無いお宮の後ろへ來るとお敏は遽に立止つて「潮樓、貴方先刻あのお手紙の事は事實だと云ひましたね」と、突然念を押す如うに云つて、男の顔を睨んだ。

「えゝ眞個です。开れも早急に差迫つた今の場合て、手紙は出しは出したが手紙ばかりでは不可と思つて、开れて貴孃に來て頂



（人賞）　廿三夜　水戸玉川すま子

いたのです」

男は冷かであつた。

お敏は其れを聞くと、ピリヽと眉を動かして下唇を嚙んだ。其れでも默つて居た。

「ね、敏さん、私は今の場合何も云ひませんが、只々是までのことは、貴孃も永い夢と思うてどうぞ斷念てください」ときつぱり言ひ放つて、ふいと空を仰いだ。

其れは恰度十六夜の晩。磨き上げた如うに眞白な月は、うすら寒い杜の影から昇り初めて、斑らにからんだ杉の梢に懸つた。藍を溶いて流した如うな秋の空は青く澄み切つて、南の方に白い雲の一片靜かに浮いて居た。

男は月に對つた。其顏は青白く光つて凄い。

お敏は俯向いて居た顏をあげて、

「潮様！其れでは最う、清子さんの方は悉皆決つたのですね」と、怨めし相に恁う云つた。何時の間にか涼しい瞼は曇つて居る。

「まあ然ういふ如うな譯です。けれども敏さん、私は今度の件に就ては始めから少しも關涉はしません、話を取纏めたのもお母様、其他一切取運んだもお母様の計ひで、私はいくらやきもき思つたつて、迚も今となつてからは爲様がありません。加之、親の云ふ事てすからね」と、男は優しい、辨解らしく云つて、お敏の顏を覗ふとしたが、其の恐ろしい眼を視ると慌てゝ面を反らした。

「了解りました。其れでは今まで……今まで私を騙して居りましたのね。其れ程私が厭なら始めッから……えゝ、今晩限り訣れます。乾度訣れます。そして折角清子さんをね」、語尾が強く震へて、お敏は蹌踉と倒れかゝつたが、辛くも垣根に軀を支へると、其儘、帛布で顏を蔽うて、忍び泣きに泣いた。

今まで鳴り響いてた太皷の音が礑と止むと、四邊は靜かに、徒に垣根の木の葉が戰いだ。

男は冷やかな眼をもつて、暫とお敏を視たが、軈て

「敏さん、晩くもなつたし此れで失敬します」、とぐるり向いて、早ッさと明るい方へ歩み出した。

「潮様！、私にも意地がありますよ。乾度この怨みは……えゝ口惜しい!!!!」

お敏は彈かれた如うに垣根を離れた。其して泪の瞳にキッと彼方を睨んで立つた、袖を嚙み破つて……。

其時、男の後影が人雜みの中に消えた。

その夜、祭も仕舞つて境内が靜まりかへつた頃、お敏は杜の眞闇な杉林の中に茫然と立つて居た。

（評）始めて小說に筆を初められたとあれば無理も無いが、本篇はいはゞ長篇物の一節を見るやうだ、描寫は相應に調つてゐるし、文章も圓熟なものである、殊に精緻なる叙景が巧妙

○結婚後

大分　佐藤みどり

「おてるつて名はあまりよすぎるんで、其人に罰があたりますとか聞きましたが、ほんとでございましょうかあの娘も不運つゞきで」

義伯母さんはおてるさんのことを話だすと何時も恁う云つて居た。

可愛い可愛と云つて育てゝくれた兩親が、今はの床にもおてるさんの事を云ひながら一年も經ぬうちに次々に逝かれたのは、夢のやうでも十五年の昔、兩親の棺桶にすがつて泣いた翌日から、お友達の誰彼と嬉々と笑つた其頃であつた。

それからおてるさんは年老つた御隱居の祖母さんの手一つで今日まで育てられたので。

そして物心の着いたおてるさんはそれは／＼陰氣な娘であつた。それで居て非常短氣で「まあ彼の娘もあゝあつては困るが」とほと／＼祖母さんのもてあます事もあつた程である。

恁うしておてるさんは同じ年頃の遊仲間にもあまり交らなかつた。

去年の寒い冬も通り越して暖かな春が來た。蝶よ花よと騷いで居る時、おてるさんはたゞ一人、暗い御隱居の二階につくねんと頬杖をついて考へ込んで居た。

おてるさんは何時の間にか孕んで居たのである。

それから二ケ月許り跡の事、おてるさんはたう／＼嫁いだ。

「まあ／＼」と驚いた祖母さんも、之で彼の娘の世話も片付たと吻と一息ついたのである。

おてるさんは大人數の家にたゞ一人入り込んだので誰の云ふ事にも其初心は怖々した。人に逢ふても直に俯向いてしまふ。

祖母さん達は久しく續けばいゝがと暗に心配して居たが、それが不思議に紛紜も出來ず却つて家は平和に行くのであつた。て村の人達もおてるさんはいゝ所へ緣付いたと思つて居た。

其後おてるさんは何時の間にか可愛い子供の親となつて居た。

月の美しい晩であつた。散歩がてら私は其家の前を

通つた。九時近くの夜更で澄み渡つた空は何となくひやく\した。

廣い庭の片隅に一坪許りの濡緣があつてそこにも月は照り込んで居た。

おてるさんは其上に向ふむいて腰かけて居た。見るともなしに側近くなると、子供を抱いて、すや\と眠つた、其無邪氣な顏を一心に見詰て居る。掃除草の影に虫が鳴いてあたりは靜であつた。

恰好家の中からは包むやうな老人らしい人の笑聲が聞えた。

顏を上げたおてるさんはふと月を仰いだ、其目からきらりと玉のやうな涙が頰を傳つた。

私も何となく涙ぐんだ。そしておてるさんの心の中をいろ\に想像した。

二三十分間もあかず其子の寢姿を見て居たが、やがて子供を抱いて立つと暗い瀨戶の間から家の中へ入つた。

其翌る日も仍倘おてるさんは常の如くてあつた。

私はおてるさんがあんな大人數の家に居て默つて行くには泣いて忍んで行くのだと思つた。

これも或夕方てあつた。振亂した髮を其まゝに、おてるさんは子供を抱てふらりと家に歸つた。

祖母さん達は心配して如何したのだと問ふたがたゞ歸つたゞけて何事も談らなかつた。

日が暮れてから默つてまたふらりと自分の家へ歸つたが、何となく心配てあつたので祖母さんは其跡をつけて行つたのだと。

だけど別に變つた事もなかつたが、おてるさんは家の這入り口まで行つて暫く外の方を向いて立つて居たとの事。

私は內氣なおてるさんが子守もなく、自分が子供を負ふて、急がしい夕方等遠い共同井戶から水を汲んで居る時を見ると何となく泣きたくなる。其後姿には暗いくらい影がつきまとふて居るやうて。

おてるさんは其暗い影から追はれて、そしてたうたう何處かへ追ひ込まれるのてあるまいかと思ふ。

（評）一種の平面描寫とも云ふべきか、描寫（觀方にあらず）が全然客觀的なる爲めにや、女主人公の性格も境遇も朦朧に過ぎたるの憾みはあるが、其の默したる薄命の人にそゞろ心を引かるゝ

○葉卷入れ

湖花

三疊の緣で此の家の主人は桐の箱から塗物の葉卷入を取り出して白紙をもみ／＼拭いてゐた。

雨が黄ばんだ庭の櫻の大木に降り灑いて寂しい音をたてゝゐる、鳳仙花が五本眞赤に、初秋の庭を賑やかに見せてゐた

障子が明いて娘のお藤が出て來た、部屋の中は暗かつた、色の蒼い瘦ぎすの女だ、大義そうに父の側に膝をついて下にある盞を取りあげてぢッと見てゐた堆朱に蓬萊山の金蒔繪が美はしく施されてあるお藤の素人眼でも余程いゝ塗だと思はれる

　廣海からもらつたのは此品ですか、さう、こんな物があつたつて用ふ時がなくちや……………」



秋の道　水月　玉川すま子

沈んだ聲だ、絨氈の敷かれた西洋室――羽二重かなんぞのテーブル掛――珈琲茶碗等と共に置かれてある堆朱の葉卷入れ――とこんな思を胸に描いてたお藤は襖のちよい／＼破れた疊の古くなつた家の客間を思ひ出してちよいと眉をよせた、と父が

あゝ用ふやうにならんでどうするかのう、お藤！』日頃になく軟らかに聽いた、が直にあの心の中ていつた

お年でもう何が出來るものかと

お藤は默つてそこいらを見てゐた、縁に散ばつてゐる紙の下に封筒が一ある、廣海からだ、立派な狀袋だなと思ひながら

内を讀んで見た

鑛山創業十週年紀念として粗末ながら此の品をお送りする

と云つたやうな意味が書れてある

『廣海は隨分都合がいゝんでせう』

お藤は封筒を下に置きながら問ふた

『いゝのなんのつて、鑛山の方だけて一ヶ月純益が幾らとか云つたつけ』

身をそらしながら眼鏡越にお藤を見ていつた

お藤は山が家のだつた時のことを思ひ出した、其頃は家も隨分盛んだつた、今もよつく覺えてゐる、お正月なんか一昨年人の手に渡したあの家の大廣間から座敷にかけてづらり膳が出されて百に餘る鑛山の者どもをふるまつてゐた、よくお孃樣〳〵つて八つの私も皆から敬はれたものだ、それが今どうだらう、此年を華やかな想一つありやしないで……學校も中途でよして毎日くすぼつてばかり、好な文學の書だつて新らしいのは讀むことも出來ない、それに此の頃のやうに體がすぐれなくちやもう厭になつちもう、こんなでも生存の意義があるのだらうかと極端なことを思ふ『あゝほんとに鑛山が家のだつたらどんなにか都合がいゝだらうに』

お藤は思はず殘念さうにいつた

父の失敗が今更齒痒くてならぬ、何だかこう父のやり方を批難して見たいやうな氣がした、がひどく骨だつた父の肩のあたりを見てはこんなこと思つたのが罪のやうな氣がしてならなかつた。

『そりやいゝけんど致方がないぢやないか何も運だから』

父は拭き終つたのをコソ〳〵つゝみながらこういつた

運なんかあるものか人は自分のしたいことをしといてそしてそれが都合がいけないと其れに運といふ名を勝手にくつつけるのだとお藤は思ひながら箱をかゝへて室に入つて行く父の後姿を見送つた、雨が激しく降り出した、庭の草木が搖れては斷へず滴してゐる、お藤はいろんなことを考へてた、鳳仙花がホロ〳〵と散つてるのが何となく寂しくてならぬ、勝手の方で母のお作が弟を叱る甲高な聲が耳に入る。お藤はホツト吐息を洩した

生ぢつか文學なんかに趣味をもつた身は世間の處女に比べて物事が深く胸に刻まれる、そしては煩える、向ひのお常さんなんか其日暮しの中にゐて何の苦痛も

ありさうにない毎日きやつ〳〵ふざけてゐる、私も一層あゝやつて行こうかしら、とこんなことを思つてゐた、と

「お藤！お藤！何處にゐるのかい、もう夕飯の仕度にかゝらなきやいけないよ」

母が頻りに呼んでゐる

「はーい」と云つたきり、お藤はまた例の太息を一つ吐いた、急に立とうともせない、雨は矢張激しく降つてゐる、縁にぴたり座つてたので足が冷えて來た、何だかお藤は惡寒を催してブル〳〵つと身顫した。

（評）老いたる父の蹉跌に同情しながらも、折に振れては父の其の失敗を歯痒く思ひ、それに連れて自己の昨日に變る不如意を怨む、斯うした運命の下に年頃の身を味氣無く送る若き女の苛々した感情が、一通り出てゐる、一すい〳〵誇張の痕迹あるを病ひとす

○糊屋の小母さん

近江　太田静江

糊屋の小母さん。なんて面白い人だらう、私は、小母さんを忘れる事は、てきぬのてある。

糊屋の小母さんは、毎日日和さへよければ糊を炊いて賣りに出るのてある。

「奥さんお早ふムいます、どうぞ亦鳥渡お頼み申ます」

若い〳〵十五六の子供の樣な聲、きいろい〳〵、すきとほる樣なよく立つこゑてある、

未だ六時過ぎだのに早やてかけるので、母樣が中から「よろしうムいます行つてお出なさいまし」と、お答へなさると、二三間向ふて、

「有難うムいます」

と、いつてゐるのが常だ。

此のりやの小母さんとは、今年とつて六十四、健やかな事つたら、生れて未だ一度も、お藥りなんか服んだ事が無いとか、常から此人の、第一の自慢てある、

今は私の家のとなりに六疊と三疊との二間ある家を借りて一番末の子のお福と云ふ十四の娘と二人が暮してゐる、話に、よると、此小母さんには、最う子供が四人あるさうてある、上三人が男て、四人目、五人目が女ださうてある。

一番の兄は京都の三條邊で古物商を、中手は、五條のあるところて、ランプ屋、三番目は大坂て十合とかの奉公人て、四人目の娘は、市役所の腰辨君十五圓の月給取りとかの介夫人だそうな。

或人が

「其樣な結構な息子さん達が被居るのだから何もそんなにおきばりなさら無くつても好いぢやありません

か。」

と云ふと小母さんは、

「へえ、もうあなた、お陰様で忰等からは毎月養料だと云つて相當に送つて呉れますし、年をとつてるから、身躰を大切にしてくれ、おいしいものも充分食べて病氣等に罹らぬ樣にして呉れと、それは／＼親切に云つてよこして呉れますけれど其ぢや余り妙がに、詮きて仕舞いますからね、生れて未だ一度もお薬りなんか頂いた事のない私ですから、とても、ぢつとして居られませんそれで此樣な事を初めましたのですよ今おや、お陰様で、八舛位な糊は二時間てすね。」

「そりや、まア結構ですわね、お金のたまる一方ですね。ほんとうに、お羨しいですよ、然しこんなに澤山の、のりを、するのに、お大ていぢやありませんね」と云ふと、小母さんは、さも得意さうに、

「なーに譯はありませんよ福があなた皆すつて呉れますから、私はもう炊いたら、好い位だすよ、彼の子も割合に能く働きますので私はそれは／＼樂ですよ、」

「さうですか、あなたはお幸福てすよ、好いお子達を持つて。」

と云うと、小母さんは、わざと、

「いゝえ、もう、ありや、しませんよ、

と云つてゐる、肩に唾でもぬりて聞かねばならぬ。

然し近所では　あのうちは、むすこ達から送つて來るのと、自分が、あの樣に働くから一寸之が（一寸指で圓を作つて）あるからね、氣樂な物さね、然し感心に能く働く人だ、お金が在る人程、よくが出て來るんだよーといつて居る。

ーそうだね、皆さんのお云ひなさる通りだわ、それだから私等の樣な〇なしが出來るのも普通だわね。」

と中へ這入つて、まぜ返すのが、松である。

* * * * * *

「奧さん、只今、どうも有難うムいました」

いえ、どういたしまして、大そう、お早ムいましたね」

例の黄ろい顔の小母さんが割合能く肥つた體に細い紺がすりを裾短かに着て脚袢をつけ素足に草履を履き手拭を姉樣かぶりにかぶつて雨の手桶に入れた、八舛の糊を賣つて歸つて來たのだ、未だ八時すぎだのに、ふと、見ると、如何にも糊の要りさうな、うらゝかに晴れた空である……

私はあゝ小母さんは幸福だなーと思つた、時々こん

な事を思ふ「もう、あんな、きゆうくつな、學校見た様なとてなんか止して糊屋の小母さん見たいに成りたいなあ」と。

……

となりでは、小母さんが、

「お福や、さッさと、おすりよ未だ之ばかつしなのかへこんな事ぢや日がくれたつて、すれや仕ないよ。」

蜒きような聲で娘を叱つて居る、能く働く娘だつて大へんな御自慢だつたでは無いか、あれぢや、何だか判りや仕ない、矢張り眉毛に唾的だ。

「お母様だつて、ちつたあ、手傳つて呉れたつて好いぢやないの、私だつて人間ですからね、そう／＼は、すれませんよ」かど自分ばかり働いてるか何ぞの」…跡は何だか、口の中で、ぶつ／＼云つて口答をして居る。

「なんだつて？口答なんかして不可ないぢやないか、こんな事ぢや姉さんの様に好い所へお嫁にも、いけや仕ないよ、あゝまあアけふのお仕事も濟んで仕まつたと云ふもんだ、さあ、これから佛様にでもお參りを仕やうや、なむみだぶつ／＼。」

何だか近所へ聞えよがしに云つてゐる……

折柄、鈴が、ちーん、ちーん、糊屋の小母さんは、佛様を拜んでゐるらしい。



落語　　東京　中西つた子

（評）筆は未だ幼稚だが材料が可い関尾の小姑さんが明かに現はれてゐる。

○私の家庭

長崎市　茂野

私は思ふ私は幸福者と第一御姑樣が好い御人で有る私が此家に嫁てから既う三ヶ月に成る雖然も未だ一度も御姑樣の不機嫌な御顏を見た事も無ければ夫から叱られた事も無い私の內は片田舍で資產と云つても無いが家の內はいつも春風のやう和氣陽々として居る私が嫁た夜のこと姑樣はしみ／＼と斯う仰被つた緣有つて私の家の人と成つたおまへ夫は元より既う年取た私何分御世話を賴む是からは末永い事であれば互に小言云ふ事もあるであらう又不平な事もあらう雖然も何事も胸に持たずに打ちとけ下さい私も子と云ふ者は夫より外に無く便に思ふのは御前達夫婦て有るから何卒仲能くして生家に居る積りて居て下さいと何とまあ御優しい仰被りやう私は此時眞實に好きな御姑樣て有ると深く／＼心に染み込んだて私は何事を仕るにも御姑樣々と一々相談するするとそれは／＼御親切に御優しく細々と御敎へ下さいますそして餘所の嫁から羨しがられる迄御可愛がりになる私は嬉しさのあまり時には甘えることも有るすると姑樣は微笑ながら未だお前も小供だねーと仰被る其時は私抱き付いて見たく思ふ夫が九つ歲の時から女の手一ツで御育て下さつた母樣て有るからとそれは／＼女も及ばぬ迄能く仕へる或る日今日は日曜てあるからと三人連れ立ちて墓參に行つた私ははじめてなので是が亡父樣の御墓て有ると敎へられてなつかしいやうな悲しいやうな氣がして何とは知らず淚が出る御二人も御同樣らし三人て美いに掃き淸めて香花を手向て姑樣は生た人に物言ふやうあなた御安心下さいませ淸一も何うかかうか一人前の男子と成つて優しい嫁も貰ひましたそして夫婦して孝行を仕て呉れますから今は何一つ不自由な事も御座いません慾には此夫婦を一目でも御目に懸けたう御座いますと半分は淚聲夫も顏を背け私も止度なく淚が流れる折柄何處からか秋の羽弱はい蝶が心有るやうに石塔に止つた御姑樣は私として事が餘りの嬉しさについ愚痴まで云つてさあ歸りませうと三人は家にと急いだ私は道すがらあゝ御姑樣の御心は何樣て有らう夫の爲には少なからぬ御苦勞遊ばし大恩の有る御姑樣私達二人は心を合ぜて出來るだけの孝行を仕樣と思つた。

（評）筆も幼稚、事柄も平凡であるが、なまじひな婦人開放問題や、自由戀愛主義を書いたのより、讀んで心持が好い

附記　「嫁く人」「我お母」の二篇は原稿の文字潦艸して讀み難し、今一度同稿を投ぜられん事を特に望む　選者

新體詩

横瀬夜雨選



○規定　題意も材料も律格も凡て自由なり要するに眞情を歌へば可なり三十行を超ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけること字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

告別の辭

夜雨

いく度か選者の任を辭せんとして幾たびか留められけん。繼續せんとする者は汝なり、君よ君を辱しめたる彼の人々を恕して、ひとり新しきライフに入れと評者は曰ふ。感謝。

されどわれは、父には子の數にかゞなへられず、人にはちりあくたの如く輕く觀らるゝ廢人なり、アレキサンドル　ポープと同じき疾病に加ふるに、四とせに近く足なへて、知る、途すでに極まれるを、

十月廿二日、彼の友告げて曰く、この子こゝに嫁いて、鳥海山頭雪すでに白しと。ああ冬北よりす、沈み行く心よ、わが隱れ家はつひにこぼたれぬ。今は去らざるべからず。こゝに諸君に告別す。願はくばほしいまゝに筆を擱きて、怒らしめ泣かしめ惱らしめし大いなる罪を許せ。後任者はわが如く偏狹放縱ならず、詩壇これより花ひらかん。

○吾は泣きつゝ（天賞）

はゝき木

吾を瞻まもるにても
われを抱くにてもなかりき
はて遠きいつの日より
いづれの日まで
天地よ。

今立つは斷崖の上
灰白のひろき礦と
うちつゞく雜木林の晩夏の錆びたる
上を
夕ぐれの風はわたる
耳かすめ鳴きかわし落ちゆく鳥の群

逸れて
低うとびくる一羽の鳥よ
（いつまでこの胸に強いいたみを
のこす――つもりか）
吾は恐れずに口走らむ。
「苦き母――げに自然界は苦き母、
よ」と、
けれどきいてくれようか
おゝおゝこの足元に
動いてゐる花草よ蟲どもよ
溫かい血の小鳥よ、
この秘密を嚴守て
そして忘れずにきいてくれようか！
……雪にも風にも寒さにも

恐念れなく永久に忘れずに……。

この大きい
さても靜かなる呼吸
(お母樣!!と泪を熱く流して甘へた
いがゆるしてはくれませぬか、
大きくなつた女の子を)
大きくなつた女の子、あゝ……あゝ

鳥よ、鳥よ
汝のやうに自由にとべる軀は
どんなに嬉しいか
とりとめもない悲哀をたえず抱いて
足重い子は
寂しいもの、

甘へるべき生母の手を
離れ去らねばならぬ齡
遠く晴いゆくて……
うつ脉は高い
せかせかと息はせはしい。

お母樣、お母樣
(あなたは何と大きい
ながい呼吸をして居ります……)
いつだつて、いつだつて
追ひつけない。

夕ぐれの街には
セピヤの色綃をおし擴げ
今——今——
林の方から磧の方へ
夜暗の糸撚るための
あの——すさまじい車輪の音響
撚るよ——より出すよ
袖のかげからも
水の面からも
髮の毛の中からも
木の葉の裡からも——。

こゝろしませう
ともするとこの胸の中からも、
?

まだゆくんぢやない、
はぐれてはいけない
大きくなつたけれど
まだ——まだ、ゆくんぢやない……
……。

青春に別るゝ人の苦痛を見よ。奔らんとして奔るあたはず、慰めを天地に求めてかなしきうたをうたふ。暗涙なきを得んや。園原や伏家に生ふる帚木のありとは見えてあはぬ君かも、君が友は花やかなりき浮きたりき、にせものを賣りてまことの價を求め、傷つきし玉をつゝむに錦の袋をもてす。許されずば父を棄てん、母をも棄てん、家を、名を、ふるさとをと契れる人ありき、匕首のんどに當てんとしてまづ雁の下に最後の書を認めて、おこしし人もありき、今は各々人妻となりぬと聞く、女子を信ずるものはいたむべきかな。

『大きくなつた女の子』げにげに君は母にとりて大きなる子となりぬ、おもかげは、ははき木にかくせども、誰か太田きし子を見あやまたんや、四十二年の詩欄は山田邦子のあとを受けて殆君のひとり舞臺なりき、四十三年も亦さるなべし。四十四年、四十五年の末は知らず。

おもへば、幼き者の年たけてやうやく美しからんとするを見れば、せめてものてがらなりとせざるべからず。遠く別るゝにのぞみて涙落つ。

○盲目の子を抱きて（增賞）

伊藤紅露

消香薫ずる花辨の
色は見えじな頰のほとり
艶かの微笑を湛へつゝ
脣なぶりする幼子よ。

朝夕綠髮は撫でやれど
星と輝く雙の瞳は
永久に、永久に光閉して——

袂にふれし紅薔薇
一枝折りて與へけり。

ことし五歳のふところ子

色オレンヂの西の空
兎に似たる白雲は

ホームシツク　赤坂　歩みる人



南を指して流れけり
時に急ぐ夕鳥、
聲のみは明瞭なれども
影は見えじ」
（烏　からす）とくちうたひて、
肩による無心の子
探りて得べきものならねば
穹蒼の高さ――星のまたゝき
月の光も知らで終らん。
いざ幸福の光り限なき君ながら
流れ早き幾歳月に
戀する少女と成らんとき
運命の波浪の滿干に
煩悶えあらじか
將來遠き人のうへ
幸多かれと祈りつゝ
紅の頬に接吻けつ
佇む軒に雨は迫りぬ。

羽後酒田木間それがしの家におしの子あり、喜怒哀樂一として口に出さゞるは言ふにしも及はず、母あれどその心をはかるによしなく、姉あれどその思ひを知るを得ず、誰にならへりともなく「トーキヨーへ」の六字を壁に書きて何をか訴へんとするを見て、わが心いたむと告げし人ありき、あたふべくば共に棲みて薄命の兒を慰めばやと。それも夢がたりとなりにけり。目しひし子は終に夢をば見ずといふ、嗚呼われも盲ひし子ならましかば。

○泣き落つる（入選）

松本市　淺井よしみ

泣き落つる雨の幾條、
曇れる空より、
泣きては落つる。
重たげに腕にいだく、
雨の雫り、
青葉は悲しく泣きては抱く、
雨の幾粒。
心に抱く戀の雫の
そよがば搖らがば
亂れて散らむ、
刹那の悲しみ。
風なかれ、
搖ぎはなかれ、
されど――あゝ、
だるき腕の鋭きしびれ。
心に繋ける古き戀、
雨のしづくは、
青葉を顫ひ、
泣きては落つる。

巧

【秀逸】

○あまゐの君

麻布　江森美子

白木の箱に長々と
生を忘れて入りにける、
君生を嫌ひて捨てたるか、
生君を倦みて捨てたるか、
罪は何れと、問はねども、

悲しいかな靈とへだてし君は早や
生なく心なくたゞ淸く冷かに眠れる
のみ、
美しと仰ぎしみ瞳は無情なくも、
輕く閉たるまゝ呼べど開かず
紅消えし唇は堅く結びしまゝ叫べ
ど答へず
無形に死と堅く握し白き手は、
胸の上にて組しまゝ、
わがてよすれど其のまゝに、
たゞ刻一刻と見守る我れに冷をあた
ふるのみ。
死にてし後はあゝ君よ
こよなく愛し友等へも、
冷と涙と悲との憂き物の外、
あへてあとふる物なきが
あゝ天居の君よ、
すがり泣く我が姿を、
如何に見ますや。

熱烈なり、この詩かならず大いにあらはるる時あらむ。

○ひなの行方

宮城　手戸まさる

弱き夕日背に受けて我は立ちぬ
田の面に遊ぶひな呼んと
かり入れし跡の淋しさ
あしの葉は枯れて風になびく
いざ來よ塒にと呼ぶ柴笛に
走りよるひなの愛らしさ
ふと見れば足らざりき眞白き雄
遊びすごして遲れしかと立返す畔道
白き物はと見れど日は落ちて
空も地も灰色に
冬枯れの木立渡りて吹く風淒し
我は吹きぬひな來よと情こめて
木の葉舞い立つ音にもそれと
見しもあやまりき
生れて七月ひなと呼ぶに惜しき迄
のびし汚なきをすどりは
淋しき調べの山風にさそはれて
餌も有らんかと浮出でしかふくる迄
楽しきまとゐの宿り木は空なりき
吁幸なきをす鳥よ肌寒き夕べ
かよわき足に何處迂るか
よしあし生ふる小川に沿ひてか
寒む風そよぐ枯野をか
山に沿ひてか海に向ひてか
あゝ鳥よ。

雛を柴笛で呼び集めるといふのも見え切つたうそなら、汚れなき雄といふも阿呆らしい、川へ行けばおつぱまるに極つてるし、野には狐もゐればたぬきも居る。

○我が國

東京　やゑ子

堤の路は平らなり。
眞白なる朝の空氣漲りて
河水に會ふ所に閃めきあり。
草若き、花白き、大きなる自然の胸
よ。
總てのものに勝れる形、智をひそみ、
讃へ憧憬れしむる美をいだき、
完美の自然の胸を象どりたる

小さなる若女の胸よ
それ抱きて堤の行きずりに、
あな。行手に目眩めく物…
安らなる心の末までひゞきつらぬく
電車の叫び、
愕然と眼開きぬ。
智よ。智よ。目醒めよ。とふるひ起
せるにあらざるや。
文明に怖れたる吐息顫へり、
若き血の俄に冷えし反動に、
一齊に熱しつゝ、
頭に注ぎ、腕を衝き、
一滴ごとに我力加はり行くか。
ああ、土壌の山も小さきもの。
文明と嶄新をもて飾られたる都の
姿、
活ける社會は我が領分、若人のも
の。
自覺せよとの高叫び哉。
恐怖、――覺醒、――活動――
やよ。若き人々、血は熱す。

ああ、大いなる我世なる哉。

ただ危ぶむ、纖手よく骸肘男子の壓迫に抗し得るや否や。

○淋しき心　麻布　花子

この吐息この涙
君は知らずや、見えさせずや
……冷たき君よ、み心よ
人を欺きて笑へばとて
返り見れば寂しき命よ
……命の蔭は君の姿よ
心ならず違へし時間を――
あなせめ給ひし――淋しき心
君失なひし――淋しき命は、
さ迷ひし枯野の道に傷はしき
黄なる葉に輝く露よ
惱み疲れし……この胸や蒼白き
悲しみの胸に心に――冷たき
君が瞳をおもへど――忘れえぬ

温かゝりしその昔の君の瞳の戀しさ
よ、
冷たき野路、枯れ行く息よ
青き吐息に黄ばむ葉末も
戀失なひし――淋しき子の呻きに似
ふ。
安らかなりし、この胸も
涙を知らぬこの胸も
吐息と共に今ぞ知る
溢る涙も今ぞ知る。
君よ冷たき、この涙、
知るや――

つまらぬ動機から戀人に捨てられたといふその事實はうけがはれぬが、小さな事な日を暮らして責められては、寂しい感じにおそはれるのはまことであらう、

○秋の雲　岐阜　篠田とみ子

月ほのに山を登りぬ

風寒き空あひを、
柳小路はたえ〴〵に
店頭の電燈にすかさるゝ、
美はしき人稀にして、自轉車、荷車、
人はな唄のふしきれ〴〵に、
寒き風を
かなしぶ風情――
何處よりか笛の聞ゆる。
花さく春もすね心濃きに、況んや物悲しき秋の夕を、笛のあはれは身にぞしむ、その音は遙かより來てまたはるかに消えて行く、あはれなり、秋の雲亦一しきり色をかへつ月さへ何處にか失なへしもの、吹く風は芥をまく、暗に乘じて、
硝子戸の世と變りて街は
一きはしほれ行く人の精神の
深行かば――の喇叭などふき起らんには、涙する人、思ひに沈む人、戀なき子等の、そを何とか聞くやらん、誰ぞや奏け吹け、浮城の如そびえたつあの雲の消えぬまに。



手風琴　東京　金井みつ子

月下の笛はをしむらくはふるし、されど調ま〳〵ととのひ來れり、愛惜せよ、

○星

奈良縣　中宮よしみ

淋しき秋の夜は更けて
降りしきる雨はやみけるも
み空は尙も暗澹として
今しも再び降らんけはひよ
夕霧の濃く閉ぢこめし
木深き森のしじまは
我が悶えなやむ欄に迫りて
悲しさ身にしみわたる。
をりしもあれ、ふと
重なり合へる木の葉がくれに
さ霧を隔て朦朧とせる雲のきれめに
懐しや一つ星を見出しぬ

あゝ暗膽たるこの雨空に
障碍物を隔つとも
希望の星を見出し如く
我が暗黒の行く手にも
光明を認め得ば
かばかりの苦しきおもひも
知らざらましを。

「一つ星は出ぬもんぢや、一つ星は出ぬもんぢや、千も萬も出るもんぢや」寂しいかな。

○ハンモック

富山縣　峰の屋

わか楓樫の大樹に
ハンモックなゝめに釣りぬ
木椴は飛白斑に
うちはおる白衣を文し
ゆら／＼と綱のゆらぎに
こゝろはや羽化すとばかり
雑念はかき消すさまに
渾沌の夢のかげ追ふ。
世をなべてことしき掟
萬能の自由をなみす

おほいなる網に囚られつ
悶えてはいかりし子等の
絶叫もしばしやがては
疲れての安眠やせん
かゝる世に覺めて起たんは
あまりにもおぞましきかな。

予はこの人を疑ふ。樫をもみとよめるは疎忽なりきともいはばいふべし、白衣をふみすとは何ぞや、文は紋なりあやなり、かざりなり、無邪かくの如くにしてハンモックの上に悠々眠をむさぼらんとす、危いかな。

○美人草

神田　伊原千代子

わだつみのふかき底へに
あゝ天日
かなしみ澱む、日日あらば。
美人草のあせたる唇に
つめたく醒めし
肌に泣かむかも
たゞ大安のけふの日に見る、

あゝ君！
君よ、わが手を把り給へ、
わが熱の華。

熱い花はよし、晝なびるといふをおけや

○死

本郷　望月れい子

人走りし町は靜かに、
家々の戸は閉されぬ、
屋根低き家の軒に、
群抜けし乞食一人、
病氣に臥す枕邊に、
死の手通りし闇の中、
あゝ混沌の昔より、
さしも變らぬ死てふ影、
生と云ふ車に乘りて、
呻吟の汽笛たてつゝ、
死の谷にたどり行くは……、
さめよ人、……乞食のみかは。

○こひしき家

探花

ふたゝびゆくまじ彼の家に
あゝ戀しき家なれど
花咲くにつけ散るにつけ
逢ひ見まほしく
花やいかにと問ひゆけば
花も笑みたり人も皆
よくこそきつれやよと
笑みたわむれて遊べども

衰れゆかばひと木の
花はなやみてうなだれむ
我がために

○夕暮れ　越後　佐藤浪子

黒ずみかけし細町を、
靜かに歩む、
僅かに殘る夕陽に反きて、
いたましき黄昏胸、
振り仰ぎ見んちから盡きしを、
しめりたる土の香をこそいとへども。
ふと栗の香をかぎぬ、頭ありき、
一息二息何となし胸に泌み入る、
栗の花拾ひて離れし頃の、
懐しや、座ろ、
見上ぐれば、少さやかなる栗の枝の
黒髪撫揃えて、
房々と長き花垂れて居ぬ、
佇めば、筑紫野の音きこゆ、
しめやかなり、只、
暗の色迫る。

○雨後　西多摩　三ケ島芳

雨やみて月はいでたり。
水色の空に洗はれ、
黒きものみな流されて、
白雲は、うろこに似たり。

雨だりの音遠のきて、
振子の音細かく刻む、
雨の音絶えし夜なれど、
虫のこゑ更に起りぬ。

常はなき庭の鏡に
月の影地に映りて
あゝわが心二つに分れ
五つ星空に見いでぬ。

木犀の花薫りきて、
わらゝぎの葉づゆ三つ四つ、
美しき光動けば、
星はみ空に一つなりき。

○月の夜　丹波　鹽見きよ子

靜かに淀みたる空氣、
秋の夜、ひとり、
追憶の蟲の音を辿り行く思ひ、

たゞ明るき月と我と、
互にさみしき心の面を、
しみ〳〵と眺め入りぬ。

山は黒し、谷は眠れり。
塔へ離き眞晝の強き日の眼より、
逃れ來しそのやすらかさ。

やさしき月とこの我と。

○生　静岡縣　嶺香子

一寸と丈なき草も、紫の花をひらきて、
いろ〳〵の千草のなかに、あわれげにも
ほこりかにさく。
其の花のなを下かげに小指もてつゝくまもあらぬ
いとせまき、土くれの上に
われも。われも。われも。……と
二葉の草、ごちや〳〵としげりて生へぬ
かれもまた生あるものよ
ちいさけれど

○紅きかげ　臺北　稗貫美津子

野末遠くたそがれて、時雨そぼ降る秋の日に、
白き胸に——ふと影しぬ紅きかげ
近寄らんとしては迷ひ、とらへんとしては戦く、
「なまじひ見て悲しまんより」と
そと顔そむくれど、兩眼閉せど、
まざ〳〵浮む影を如何にせん、
「あゝ紅き影よ紅きかげ、わが身も猶、
かひ無きおもひにあくがれて、
近寄り得ず捕へ得ぬ、果敢なきかげを
追へるを知らずや」

○百合　栃木縣　細井小夜子

慾を深み、我が子にと、
紅の微は拂はれて
香へる乳房、いと白う
抱き寄せける我が子、蝶。

いまみし二十、優百合の
無量の歡樂溢れ出て
結びし朱唇花咲きて
ゑまひたる顔紅け染めぬ。
我が子ながらに別れては、
逢ふ時ありや、いや無きか、

名残りは残る姫胸に、
崩るゝ如く首垂るゝ

○靈塔　東濃　上原狭霧女

佐保姫の双の袂、綻びて
色濃く山や花の野と
長閑に匂ふうす霞
彌生の天にひろごりて
なべてを包む——日なか頃。
春なれど白日なほ寂し寡に
ひときは目立靈塔の
前に逍遙ふ姉妹は
最美しき顏の
つぼみ破らぬ「撫子」。

○夏の朝泉にて　小芰香

淡き空、白き月。
狭霧に込むるさゝやきは、
われ立つ泉の流れにて。
玉散りてころ〳〵と、
せとあふるゝ泉川、
澄み〳〵てすき透る水底に、
木の間の月はほの白し、
夢とか寫る、さやかにて。

○蠟涙　赤坂　福島きよ

疲れて暗き蠟の火は
グラスの窓に照りうつり
滴りて垂る蠟涙は
我が涙とも變りぬれ
汚れし空氣は胸せまく
狂ほしの我が頭
堪へがたくツト立ちて
力まかせグラス戸押せば
しめやかに雨ぞふる
刹那吹き入る强風に
哀れ蠟涙も今絶えて
罪と恐れし罪惡の
三面の色未强やかに
我が胸の戸をいましめし
軒うつ雨のひそやかに
心をぞさす。

○薄暮　愛知　服部德穗

日は沈む……
立ち續く
櫟の木立は
哀曲す……落日の歌よ。

人ひとり……、
いこふ——漂泊人は
哀曲の調のふるう、
櫟の木立のその下に、
眠ふ……あゝ塵の現世を
雲はしる——、
あゝ夕暮の哀の色し
たゞたゞはしる
南の國——砂むす空へ。

あゝかくて——。
寂く語ろ
櫟の木立、
あゝ寂しらの夕暮よ。

○暮の窓より　信濃　東條周子

うすやみに、ましろく光る湖の
堤の上を急ぐなる、
赤き火の、……小提灯——
走りてぞゆく……主はたれ……
何處人ぞ——赤き火は……
赤き灯は、
早も消えけり、……まくらく立
てる、杜陰に
魔のありて、くろき血を吐くか
と思ふ、猫の啼きくる、彼方の
丘見れば——芒穗は——
しろき涙して靡き居ぬ。
荒磯の岩に砕くる、波の如く——
あゝ秋風は我が胸の血を冷す。

○悲　神戸　田中落葉子

妻戸の隙を覗へば
明かき灯影に男あり
物を瞶めり右の手の
刃物折々やすめつゝ
思ひあるらし——
うつけてあはれ七年を
人をも見ずて日毎く
佛を木にしきざむてふ
あゝこの男

美文



〇柵（天賞）

府下　鈴木春子

えぐらるゝ様な胸の疼痛をじいつと堪へて、さよが直してくれた空氣草履を、そうつとはいた。ぐら／＼と目まひがする。邊りの物象がぐるうと廻る。止る。又ぐるうとする拍子に、ガラ／＼と烈しい音が胸に響く。呼吸が苦しくなる、あたりが暗くなる。——「如何あそばして……。」ぼーつと消えて、誰の聲だか分らぬ。白い光がちら／＼と閃めく。ちらつと赤い太い物が過ぎつて、とつくりと重く肩を抑へた。が唯さう思うただけて、又暗い色が擴がつてくる。やがてぐらり、ぐらり動搖し初める。チラ／＼雪のやうなものが明滅してゐる。其が段々大きくなる。はつと、さよの白い前掛が見えて、ガラス障子が見えた。ガラスを透して、青々とした草原が眼一ぱいに開展せられた。

又暗い色がむく／＼寄せてくる。——

ふと、私はさよの肩につかまつて、草原のぐるりを圍んだ木柵の傍に佇立してゐるのに氣が付いた。しくしく胸が痛む、針て刺されるやうに。けれども先程烈しくはない。

秋だ、……噫、もう早秋になつてしまつたのだ。……氣のせいか、草の色も大分黄ばんで來た樣だ。からからに枯れた醜い亡骸を、寒い寒い風に、弄ばるゝのも遠い事てはあるまい。……噫、私も。……黒い死の影が、始終後につきまとふてゐるのじやあるまいか、思はず、ぶる／＼顫へた。ふと後を振向かうとしたが、何だか恐ろしいやうな氣がしてよして了うた。ふと、油切つたつやつやしいさよの横顔が見えた。「ほんとにさよは羨しいね。」「へえ。」とさよは此方を向いて、淋しい笑顔を見せた。

鈍色の屛風が、ぐるりと私を取卷いてゐる。薄暗い室……かげらふの樣な線香の烟の間に、邊りの靜寂を守

〇規定　抒情、叙事、叙景事凡て他體になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は罫紙に認むること匿名を要する者は本名を附記せよ二十四字詰三十行限甲種の賞を送呈す

つて居る深綠のしきびの小枝、……瞼を赤く泣きはらしなさつた母樣、……うなだれて、唯吐息なさる父樣、……不思議さうに覗く幼妹、……

不圖、さよの持つた藥ビンの包が眼に入る　同時に、「一なあに決して其んな御心配は、ハヽ……。」と快活な醫師の笑聲が耳にひゞく。けれど、何だかわざと氣安めいつて居られるやうな氣がしてならぬ。

屛風が見える、はつきりと直目の前に見える。白髮交りの切下げ髮が、亂れて疊にかゝつてゐる。祖母樣のやうだ、お前が生れる時に亡くなられたと、母樣に伺つた、……私じやないと胸なで下して、そうつとお顏の手拭取らうとした。がもし私だつたらと思ふと、しきりに指がわなゝく。

ふと手拭が取れた。祖母樣かと、なつかしさにかけよらうとしたら意外、艶々しい若い顏だ。而も晴やかな微笑を目元にたゝへてしきりに口をもごもごさせてゐる。

さよだつた。

さよは、くるりと彼方に向いて、赤い大きないて〳〵返しを袂の內に埋めて、がさ〳〵掻まわしてから此方を向いて。眞面目な聲で、

（孃樣、しつかり遊ばせさあさよの肩へ）

私は何だか欺かれた樣な不快の念を禁じ得なかつたがさあらぬ體を粧うて、肩へよつた。

又しく〳〵と胸が痛み出す。

欄にからんだつる草の實ばみかけた葉に、種の內まで透通りさうな青白い實がひしと鈴なりについて、二人の袂が、やわ〳〵と觸れてゐる。

夢幻境のありさまがなか〳〵能く書けてゐる（評）

○渦まき（短文）

横濱　ひまはり草

華かな夜の町を、ぞろ〳〵と往き交う人の波に押されながら、人の行く方へ無意識に步いてゆく。何思つてゐたのか今迄のことは覺えてない、熱する頭惱には、火のやうな思ひが渦卷いてゐた、覇哉の手を乘りこして走らふとする、潮のやうな思想を激しく壓迫された結果、反抗は更に强くなつた。いま此の壓迫と反抗が衝突かつて破裂したら、私の想ひは放縱となるであらふ而し自由な放縱な境に走るべく、私の意志は餘りに薄弱いのかも知れぬ。

「女の學問が何の役に立つ、生意氣になる計りぢやないか」、憎い口惜しい呪を父の口から聞かされた、母は云ふ。「女は裁縫が第一だよ、嫁に行つて裁縫ができなければ間違ひはないもの」「ぢやお母さん女は嫁にいつてさへ居りや女の耻辱てす、女の子は親の言葉に從つてさへ居れは間違ひはないもの」「ぢやお母さん女は嫁にいつてさへ居裁縫や洗濯さへしてゐればいゝのですか」、「子供を生んで裁縫するのが務めなら嫁になんか決して行きはしない」と疊に突伏して云ひ放つた。口惜しさ悲しさに押

へされぬ涙を流した晝間のこと、思ひ浮べて高ぶる胸に手をあてた。

家庭を離れては年上の若い人達と交つて高い希望や理想を胸に吹きこまれて憧憬多き少女となつた私は、世を詩のやうに美しくなつかしく解してゐた。されど齎へる人の愛に捨てられ、また容れられぬ思抱いて、今は唯敗殘に泣く身である。美しい理想から覺まされて否應なし苦しい現實に入らねばならない。餘りに若く弱きわが齢ではないか。

走るがまゝに止まるも知らぬ若い想ひを人は舊い道德と義理の絆にしつかり捕へて一歩も出すまいと腐心する。しかも私には、父に背き母と離れてひとり自由に赴く程の勇氣も持たない、噫斯くて私も矢張り家庭の小天地に所謂女なる、運命の囚はれ子となつて無意味な平凡な生を送らなければならないかああと思はず呟いて眞暗な空を仰いだ。星もない、地はただ灯に輝いて賑かな樂の音、人の姿、それらの華かなものの中にまぢつて、寂しい胸をかゝえて私は唯行く……。



[illegible]の米　　京都　田口こう子

反抗の聲を擧げるのにこれほど大膽に率直に言つてのけたのは少いやうでした(評)

○目と耳（人賞）

芝區　やえ子

姿

湯槽につかつた自分を中心として、總ての物體を、弛い力を込めた視線で看た。

最後に鏡の前のやせた人のと衝突した。その人は直ぐ俯向ひた。前から思うした態度で居たので。それで氣がつかずに居た。眞黑な毛を圓たぼ大きい束髮に結つて樣の生際が亂れてる。

眞白なかいなを搖り動かして足の指を洗つてる其肩やその横顏や。

さつき視線の會つたそれつきり顏を上げず、默つて徐かに御湯を汲んだ。お湯を汲んでも桶の中の湯斗り見詰めてる。瞳が光つてた。睫の長いせいかとも思つた。頰の蒼いせいかとも思つた。涙を堪えてるせいかとも思つた。

その人はお湯につかつて上り湯を、そつとかけて上つて仕舞つた。

何となく物足りない。あの人の眼光がもつと鋭く私をよまして異れたらよかつたと思つた。

聲

明日の晚はお月見だと云ふ。私は何とも云はず家を出た。夜の町に行つて果物と、草色のリボンを買つた。廣い路から曲つた新道に來て、此の身體が自分のもののやうな氣がする。

黑い塀の內から、秋の水とも例へられるやうな聲がひゞいた。その音律のよさ。

「お母樣、眠れて」

「○○○○○○○」

「然う。何か考へてらして」

「○○○○○」

「私ね思ふ時、何時迄も〳〵眠らないで色んな事考へるのが大好き」

「○○○○○○○○○○○○○○」

それて、行き過ぎた。終りは知らない。

あの聲。あの聲。と思ひ乍ら歸て魂忘れて歸つたと笑はれた。

今、寢て居てもさう思ふ。

あの聲、あの言葉がなつかしくて堪らない。あの人は自分の何であらうか。

餘程冥想的な事を持つてゐる方と見へます、能く發展すれば新しい詩を生むでせう（評）

【秀逸】

○たそがれの思ひ

日本橋區　細谷きやう子

靄もやにつゝまれた天王寺の森をはるかにながめて夢の様な淋しい過去を追想して思はずはら／＼と熱い泪を机上に散した。

あゝ今の私の胸は‥‥亂れてみだれてあゝみだれてどこまでゆくのだろふ‥‥？西日をよけた白い窓掛がゆら／＼として、さつと吹き込んだ肌寒いかぜに一輪ざしのコスモスがふら／＼として洗髪の束髪がばら／＼とみだれるので、私は無雜作にかきあげながら、ぢつと色のあせてゆく夕影の雲を見つめた。

そして處女てふほこりは儚ない物だと幾度か、胸にくりかへされた。

あゝ私は遠くきらめいて居る小さい光りをたよつてゆくのだ、其光りは希望にみちた光りの様で、實は悲慘な悲慘ないつはりの光りであるのだ、あゝ其いつわりの光りを私は／＼偽りと知りつゝたどつてゆかなければならぬ運命の子なのだ――とみだれる心を强いて靜めた。急にがや／＼と姦しい女の聲に私はふいと見るとなく窓下へ目をうつした、と八九人の若い工女のむれが何を語り合ふのかたあいもなく笑ひほげて其やかましいこと、彼の人等も青春の人どうしてあの様に氣樂だらう、悲しみもないのだらうか、煩悶もないのだらうか‥‥と私は泪の目で其一むれを見送つた。

主義に沒頭したところに一種人をひきつける力があつて、青春の作たろを失はぬ(評)

〇小品二篇

放浪

萩花

秋風やゝ白い宵であつた。雨もつ空は晴色に、只一つどんよりと鈍い光を放つ星がたえず私の歩んで行く右手について來る様にも見えた。單衣の衿をかき合せ乍ら仲町を下りて來て寺町に曲らうとした時、大工町の所に人が黒く集つて何か姦しい。何だらうといつもの癖が出て、つと踵を蹠へして衆人の中に入つた。向ひ側の店からもれる幽かな電氣の光で半面は靑く細かつたよくも解らないが白地のしよぼ／＼した寒そうな浴衣。若者――。「噫世は夢か幻か、囚獄に孤り思ひねの‥‥」大きいが、震を帶びた、何處となく哀愁を含んだ肉聲――。手には幾枚かの紙片を持つて、衆人に進めるけれど。生活に疲れた通行人は一枚も買はなかつた。又哀れな聲をはりあげて歌ひ出した。噫、みじめの放浪。如何なれば、學ぶに盛りの若者が暗い田舍の町に、疲れた人を相手に此樣な、心細いなりはいをして露命を繋がねばならぬのであらう‥‥戀故か――墮落か‥‥。如何な想ひをもつて異鄕の夜を彼は逍遙ひ歩くのだらう‥‥。噫放浪――。思へば彼人も波音高

き島に放浪して居る。彼人もこんな夜こんなみじめな聲を出して巷の人の情を買ひつゝあるのぢやあるまいか……、覺えず私は帯の間に手を入れて白銅を投げた。而して人の後に隱れた。若者は不安げに周圍を見廻す。衆の目は自分に集る。私はつと跨に走りのがれた。じり〳〵と涙が頬に傳つた、もう心細い唄聲は仲町の方をのぼつて行つてる。白い吐息と共に空を仰ぐと彼の一つ星はわづか消えてた。太い雨がポツ〳〵落ちて來る。生活に倦怠した人々は皆店にもぐりこんで戸をしめて了ふ。私も家に歸つて其夜一夜は冷い床の内で波音高き島に放浪せる從兄の上を思ふた嗚此幼い胸に深く〳〵印した彼肉聲は永久消ゆる期のないのぢやあるまいか……。

陰陽師

天も地も灰色に曇つた午さがり。私も灰色の暗い〳〵罪の思ひを胸に秘めて、何喰はぬ顔に衆人と同じ樣に町を歩いた。もし太陽が赫々と輝く明い日だつたら私は此樣に上をむいて清い人の群に交つて歩く事が出來なかつたらう。天も地も町を歩むあらゆる人が、今私の胸の中にある大きい罪の全を知らずに皆、自分を敬ふ樣にして行き違ふ。私は可笑しくなつて一人て笑つた。灰色の長い道を大きな誇りを抱いて、曲ろうとした時、ふと自分の顔を窺いた人がある。喪衣をつけた陰陽師――老母。私はたち〳〵と後に退いた。誇の笑は失せて大きい恐怖の波がよせて來た。罪人、かくれ人貴き神のみさばきに……神秘な肉聲は遂後から聞えた。私の魂は又震へた。行き違ふ凡ての人が皆自分を嘲笑ふ樣に思へて、私は始終うなだれて灰色の町をとぼ〳〵歩んだ。

叫びや眞（評）

○森の陰にて

和泉　金田香雲子

鉛色の夕霧は、野も山も一面に覆ひつくして、華やかな夕雲はだん〳〵消えて行く。

自分は、ぶらりと家を出て、村の近くの森の蔭へ行つて、尺にも餘る草むらへ腰を下ろした、濕つぽい地が氣味惡るく、腰がつめたい。

野良歸りの、野夫の聲、車の音はがちやごちやになつて、濁つた一團の響となつて夕空に弱い反響を殘していつたが、やがてとぎれて了ふ。と森の蔭はもう暗くなつて來て、村はづれの病院の窓からは、靑白い光がまたゝき初めた。

自分は、其の光りを眺めて、何となく悲しい思ひをした。

あの窓のなかには、生の光りが薄らいで、死のやみがおほいかゝつて居る、若い人や老いたる人らが、あの

否ま〳〵青白い光りに、一入顔を青く照らされて、果敢ない思に横たはつて居るのだらう、而も其の人等の胸には、尚「生」を續けたい、と心細く祈つて居るのだらう、と思ふと、哀れな様な、悲しい様な思ひが、胸一ぱいになつて、熱い〳〵涙がほゝをつたうたが冷たい風に、直ぐにさめて了ふ。

森の木の葉が、一つほろりと、自分のひざへ散つて來た。

又一つ、ほろりと散つて來た。

こうして一つほろり、二つほろり、と散りつくして秋は更け、一本枯れ、二本枯れて、冷たい風の吹くまゝに、遂には冬となるのだ、

痛い淋しい冬になるのだ、

病院の窓の中に横たはつて居る人らにも、一葉〳〵の散り逝くと共に、冷たい冬が近づくのだ。

冬が來るのは人間の最大悲惨事である、總ての人間の行きつく先は「永遠に入るの冬 である。

而も其冷たい冬が、木の葉の落散るたびに、彼れ等病床に横たはつて居る人等に近かよつて、冷たい風で生の光りを消さうとして居るのだ、

又木の葉が散る、散る散る落ちる。

病院の窓からはまだ青色の光りがまたゝいて居る

今一歩で實に好い文章になつたものを、少し野生の氣があつていけませんでした、森陰から見る病院の窓の灯は絶好の詩題ではありませんか(評)



おいたをすると　伏見　竹村まき子

○叔父様

四谷　櫻子

郵便の聲に急いでかけ出してみると、月に白萩をかいた繪はがきにペンで「急用ができたから五日一番てゆく一週間滯在の豫定、五年ぶりで拜顔の榮を得さ

してやらう、ひげも大分こくなつた、父樣母樣にさう申しあげておいてくれ、たのむよ、ユア丿アンクルより」と走り書。まあ貞樣が出ていらつしやる嬉しいと思はず大聲あげて奥へとびこむだ、父樣母樣も大さわぎ。五日といへばもう明日、あゝ明日の晩は懷かしい貞叔父樣と久しぶりて膝を交へて御話ができると思ふともう嬉しくつてならない自然とほゝゑみがほうに浮ぶ小さい時から一つ家で育てられて年もたつた十一違ひ姉樣がなくなられてから只一人つ子となつた自分は此若い叔父樣を父母について、兄とも姉とも賴むで親しむで、名前も只貞樣々々よばかり、けんかをして惡口を云はれてもやつぱり好きで〳〵一にも二にも只貞樣てもちきりだつた。横町の世話やきの婆さんつたらあれは嫁許ていらつしやるのですよ、ほんとの御兄妹じやないのです、今にあの男の方が大學を卒業なさると式を御あげなさるのですつて」なんて近處の人に話したとやら。此の大好な貞樣が卒業後急に大阪へいらつしやつた當時は、ほんとに何だか家の中がひつそりともう寂しくつて堪らなかつた、が夫もいつしかなれてはや五年、去年貞樣には立派な叔母樣ができた、そして夫以來私の手紙もまじめな文句で恭しく叔父上樣とかゝねばならない樣になつた。今度は又二三ヶ月の中に父樣になられるのだと云ふ、家中では大笑ひだけれど私は何だか惜しい、できる事ならいつまでも父樣になんか成らせずにおきたい、叔父樣の境遇の變つてゆく其度毎に何んだか自分との親しみは一日一日うすらぐ樣に思はれるので……

「お孃樣何としてゐらつしやいます」と後で不意によぶ夕ばえの空の見える樣な美しいのをみ入りながら今きたはがきをしつかりと手にして止度もなく思ひに耽つて居た自分はふと我にかへつてふりむくと、松やがにこ〳〵笑ひながら立つてゐる「ねえ松、明日叔父樣がいらしつやるつて」と一息に云つて自分もほゝゑまずにはゐられなかつた。

少しもあてきみなく書いてある、初めから終まで調子を變へずに、しとやかに書き綴つたのは甚だゆかしい氣持がします(評)

○ある夜

まち子

ふと目をあくと私は床にゐる、あたりはランプの光を受けて明るいが私の方だけは紙をはつて強い光をさへぎつてある、枕元には暫く會はなかつたなつかしい母樣と姑樣と光谷とが心配そうな顔してゐた。

「氣がつきましたか皆どんなに心配したかしれませんよ本統に！こちらのお姑樣の御心配つたらありませんでしたよ、以後よく氣をつけてくれなきやいけませんよ只の體じやないんだしそれに恭樣はお留守なのだし(母樣)

いやなに大丈夫です、もう御心配には及びませんと、

言ひ〳〵シガーに火をつける、私はその手をみ口をみ、そして鼻をみる、吸こんだ息と共に二ツの穴から行儀よくならんで出たかと思ふと亂れて一ツになつて室一ぱいにちる二人の母様もきやしやなきせるを持つておなじ様にすつてやはり二つの穴からお出しになる、何といふ好い匂いだろう何んだか自分ものんでみたい、私がこんな事思つてる間に姑様は何かいつてゐらしつやる「……どもすみませんでしたね、わざ〳〵御呼び申したりして、私もね、一人だもんですからどうしたらい丶かと存じましてねえ、

「い丶えどう致しまして 本統にこれがとんだ事してくれますものですから皆様にも心配をかけましてね、それては私はこれて御暇にしませう、光谷さんも大丈夫とおしつやるから

あら今夜はもうおそうございますからお泊り下さいまし、それに私も一人てはまた心細うございますから、御宅へは済てもそう申てあげますから、まち様、何かおあがりなさいな、今朝からまだ何も頂かないんでございますよ、

光谷さんはいつか座をはづしてゐた、姑様は氷嚢をとつて立たれる、と後はなつかしい母様と二人きり、母様はだまつて心配そうにみてゐらしやる、私は何か云ひたかつたけど舌がこはばつていへないのでだまつてみつめると、目がつかれて頭の中が痛いので目をつぶる、その中冷たい氷嚢がおかれてミルクが口の中へはいつた、一口はのんだが次はいやなので口をかたくとぢてゐると、仕方がないとおもはれたか下へおかれた様だ、後はたゞ母様お二人のかすかな、お話聲が時々耳に入るばかり。

あてきみの無い沈着な文字、少し冗長にならうとするのがお疵（評）

○おもひで

羽前　浪江

尋常二年の時てした、手毬つきに夢中になつて居たのを、先生に呼ばれて「貴女のお母様と兄様が御病氣てせうそれて貴女も學校から云ふてやるまてお休みして下さい」と不意に云はれて吃驚したけれど、別に悲しいとも思はず、はいとすなほに歸りました、母と兄が腸チブスて病院も無かつた時で自宅に居たので遠ざけられたのでした。それから八十餘日休んだ其間に兄は全快したけれど、母はとう〳〵骨と皮ばかりになつて長びくと死なないといふ言ひ習はしにもそむいて、逝いてしまひました、四十九日も過ぎて冬になつてからやつと學校に出られるやうになりましたが、いそいそと、お向の道子さんにお寄りすると、お先にと被仰る、それが毎日なのですが一向氣にも止めず一人で通ひました、或一日、吹雪の烈しい日てした、例のやうに道子さあーん、と行くと矢張りお先きにといふ、け

れどもその日はどうしても一人は厭だつたので、妾お待ちしてゐますといふと、遲くなるからとか、未だ御飯がすまないとか、色々口實を設けて先にやらうとなさるのでした、妾は子供心にも、あゝ傳染病だから嫌はれたんだな！といふ感じが閃めくと、俄に悲しくなつて、遲くなつてもいゝからこゝでお待ちしてゐますわと、そこの格子へつかまつて泣きだしたのでした、でも終には家の書生に送られて行きましたが、八つの少女の悲哀は、今もはつきり頭に殘つて淋しい感じを起させます。

子供心が能く表はれてゐます（評）

○小品三種

攝津　寺部君子

○

竹に肩を摑て貰て居ると、好い心持てふら／＼するのを凝然と怺えて、目を明けて居やうと思ふても獨て閉て了ふ。竹が何か話て居る、ハア／＼と返辭仕ては居るが何を言てるのか薩張判らぬ。「だつてあの方は近眼の癖に那麼顏も爲さらぬから、那麼失策も有るのと言ふと竹の聲がフッと聞えぬ樣になつた。
ぐらつと一つおじぎ仕て、ハッと氣が付くと竹はクスクス笑て居る、「私が色々お話仕ても、すがたんの事斗り仰有るんですものと又笑つた。私は話を聞きながらすみ子樣の夢を見て居たのだ。

○

此浮輪（ライフブイ）さへ有れば誰でも沈みませんかと、私は問ふた。「へエ／＼怎麼仕て居れば、大丈夫」と敎えて吳れたので、何心無く波と共にスーと二三間向へ出た、機會大波が來て、あつと言ふ間に横に成て頭が浸た。思はずあれ！と聲が出た、すると笑ひながら要樣が來て助けて下すつた。陸上に居た友は、あは／＼言て笑て居る、おかしな恰好だつたとか。要樣の私を横抱に仕たのが可笑いとか言て。「難儀仕て居るのに來ても吳れずに」と言へば「だつて命には別條無いと思ふて

○

もづの聲が何と無く寂い、パッと立つとはら／＼と椋の葉が梢から。廣い川原の眞中に細く水が流れて、優い野菊や撫子や蓼の穗が色取て咲いて居るのが如何にも寂い。流の下て大根を洗て居る、土の着いたのを水に入れて二三度こすると白くなる、剎那私も那麼眞白な肌だつたらと思ふた。何日の間にか、つくばつて花を摘ては流し摘ては流し仕て居た。

三篇とも佳作餘韻あり（評）

○川沿ひ道

常陸　秋山欣子

二人は無言のまゝ川に沿つて歩き出した、秋の宵てある、ごろ〳〵と石ころがちな底が透けて見える河床を、瘠せた秋の水がサラ〳〵と快い響を立てて流れる、對岸に叢生した白楊が、流の半分を隈取つて、時折風が白々と渡る、とすゝり泣くような哀音を奏でる。シッ卜リと素絹を垂れたような夕霧が、歩むにつれてか深うなるのか、つい今の先まで暗碧にみえた富士越のばら〳〵松が薄雪かゝる氣配に仄めいて、純白の看護服の肩へお倚り遊ばしたお孃樣の横顏が淒い程白い「西樣！」突然およびになる、「は、」と仰ぐ面へ例の淋しい微笑を浴せて、「あの、妙な事いひますから笑はずにきいてね、」「え妙な事つて、」「よそうかしら、あいゝわいつてよ西樣、あのもしかね、笑つちや嫌よ、かりに——かりに貴女のお友達にね、人に捨てられて寂しく病んでる人があるとすればですね、貴女何といつて慰めてあげることと？」熱心に云切つてほつとなさる、かりにと斷らなくても！——と心で泣いて、態と冷やかに「え私ならで御座い升ね」勿躰らしく首を振つて「私ならもうもそんな薄情な奴なんてからあかの他人と思捨てゝ、御自分は、それこそいゝとこへ御嫁き遊ばせと、「まあ西樣」と激しく手を動かして「貴



秋の夜　京都　岸田富美枝

方それは眞面目！」「ええ」いふ顔を凝と見入つて「矢張側ではそうみえるかしらん」いひ／＼懐をせぐつて洋封の手紙を出すと、いきなり「一寸よんで御覧なさいな」とつきつける、ズッとみると御親友の野村さんからで、今度の件は實に御同情するの、私にもそれに似た經驗があるが潔く思切つた方が得策だの、やあ貴方もくよ／＼しずにそんな魂の腐つた人間なんかさつぱりと捨るだけの勇氣がなくては亡い御兩親に對しても又望高き江木家の一粒殘りとしても、などゝかいてある、默つてクル／＼まいたのを受取りながら「どう思つて」と訊く「さあ」と眞劍になつて「一も二もない輕浮な方、何て思やりのない！」「いやな西樣貴女だつて先刻、」と優しくにらむ、「御返事は」「これよ」と長い袂から出す水色封筒聲涼しく、「御慰藉の御手紙秋の霜踏む心地に踊しれ／＼、かくて頑なる私の心壁には、永刧に冷土に葬り得る底の戀を味ひ給ひし御許樣の御幸をお羨み申す念の深く刻まれ候のみ、他に何ら得るところなかりしを自嘲笑致し候」と一氣によんで「どう？」といふ、「私も私も」喉が詰つて聲が出ない、大きくうなづき作らつと手を取りあふ、と、見合つた目から珠が走つて熱い／＼手の上へ、秋草の根方へ、「もう踊りませうか、」「暫してお孃樣が仰しやる、「はあ踊りませう」「西樣私はね體はどうにか癒たにしろ、癒難い魂の痛手は誰の手にみとりして貰つたらいゝかと思ふと——」「あら、私じや不可ないのかしら」と思はず大聲、すると思ありげに微笑して「でも貴方だつて近い將來にはいづれねえ、」さも心細さう、堪らなく可愛想になつて「否否、どこまでも私はこゝに居らして頂いてよお孃樣、」「ほんと」「えゝ」「きつとね」「きつと」露つぽい路を押並んて歩き出す、葱橋は目近く見え出した、水際には天の煌星が落ち散つた樣に野菊が群れ咲いてるのをみたばかり覺束なげな白い月影を踏んて、滿足の極の沈默を續けながら、無我の境をどこまでも二人は行つた。

二人とも一辭あり（評）

○古本屋

信濃　優梨子

ぞく／＼する程寒い風の吹いて來る、鐘鑄川の端を行く。薄暗い荒物やの時計を、覗く樣にして見ると九時過ぎて居る。人通りも無くて、母樣と私の下駄の音許り高い。桐畑前の電燈がぼんやり照して、冷たい光りを川の面へ落して居る。監獄の前あたりに小さい提灯の火が見へた。妻科の方から人が來るのらしい。旭町を上ると、信毎社からガタン／＼と印刷機の音が聞えて來る。菓子やの小僧が、火鉢の向ふて居眠りして居た。

暗い縣廳前の「はりえんじゆ」のさは／＼と枯れた葉が摺れ合つては、冷たい風が吹いて來る。

警察の前を右へ折れると、すぐ〇〇屋だ。

半分許り明いた硝子障子から、そつと覗いて見ると誰も居ない。ほつと安心して閾を跨ぎながら「今晩は」と小さい聲で云ふと、雜誌らしい物を見て居たお内儀さんが「被入いまし」と頭を上げた。私の顔を見ると莞爾して「あゝあの先達て被仰いましたツルゲーネフの獵人日記が御ざいますよ、もう彼の人のはすぐ出て終ふものですから、中々丁度に御ざいませんでネ」と優しい瞳を泥と私に向けて云ふ。「あゝそう、一寸拜見」「はい何ぞ」と棚から出して「何ならお貸し致して宜しう御ざいますよ、いくらもほしいと仰有る方が御ざいますから」「じやそうお願ひしませう、それからチエホフのは何がありまして」「左樣で御ざいますネ」と棚の方を向いて「生憎何も御ざいませんで」棚を探がしながら氣の毒そうに云ふ。明るい電氣が、お内儀さんのふつくりした丸髷を照らして居る。髮の恰好のいゝ人だと思つた。

「其一番上の棚にあるのは獨歩集の二でせう、それいたゞきませう」「はい有難う御ざいます、皆樣是は何度讀んでもいゝつて仰有いますネ」と云ひながら出して呉れた。愛想のいゝお内儀さんは歸るまで話して居る。銀貨と銅貨を火鉢の横へ出して○○屋を出た。外はやつぱり冷たい風が吹いて居る。

何處が好いと云ふわけではないが全体に好い（評）

○月明るき夜

下　月沖百合枝

さ青なる大野の末の白き木によりてぞ歌ふ月明き夜を

これは「永日」のなかにあるお歌です。

青白い月は靜やかに照つてゐる。庭の白萩の影にすだく虫の音もしげく、窓の灯を繞つて夜風が身に泌む夜でした。

あゝ秋！秋もいつか更けた。長月なれば——野面には美しい八千草もたわわに咲いてゐるでせう。此靜かな月の夜を野の花はどんな美くしい夢をみてゐるでせうか？——慕しい野よ、懷しい野路よ！

私は譯もなく『月照る野面』が戀しくなつた。

そつと室をてゝ——無意識にいつか裏の木戸を押し明けてふら／＼と歩きだしてしまひました。

野色の月光ははてしもない綠の大野に溢れてゐる。草の香り、花の匂ひ——それらが皆この月光の中に溶かされて言ひ知らぬなつかしい感じをあたへます。

白露に濡れてしつとりとうなだれてゐる可愛い撫子を一輪つみとつて髮にかざしました。

此大野の末に白楊が二三本夢のやうに立つてゐる。幹や葉に降りそゝぐ白い光り——あゝ私はあの木の下に凝とたつて此宵一夜を歌ふて／＼歌ひあかしたらどんなにかよいでせう。

さ青なる大野の末の白き木によりてぞ歌ふ月明き夜を——

あはれおのづと胸に浮びくるこの歌よ、私はあの銀色の御光洩れくる木の下で思ふさま歌ひたい。恍として醉ふた樣な氣持ちて——私はいつか木立をめざして急いだ。

詩のやうな美しい文章（評）

○濡佛

本郷　望月麗子

樓の梁の靑く錆の出た釣鐘は、今、夕の勤を終えて其の餘音が薄すらとした夕霧の中へ微かにふるへて消えて行く時。ぱつたりと音をとめて默つてしまつた、頽れかゝつた壁土の干乾びたのがほろ／＼と落ちて大地に微かに響く。靜かだ寂しい院の夕暮自分は山上の石に腰を下して居た、銀杏の梢を通して濡佛の頭上の半面から胸の邊にかけて、夕陽が照してゐたのも束の間、もう邊は薄暗い、鳥はねぐらを定め終つたと見えて音もなく、時々木枯が葉もない木々をゆすつて行く許り。前の田に音もなく鍬を動かしてゐた百姓等は、皆トボ／＼と歸つて行く。

あちこちに木の葉を散らした樣だ、日が暮れたと云ふ事を知つて仕事をやめ、夜が明けたと自然に知つては又勞働を初める、一生同じ樣な事をして遂に終るんだ。……濡佛は端然と坐して手を重ねて、——幾日重ねた手の上に木の葉が散つてもはらはふともせず、頭から雨に濡れても、拭はうともせず、優しい顏、だが、笑つてもゐない人のする事を冷やかに見下ろして運命を悉く自分の掌に握つてる樣な、冷然とした態度、私は何となく尊かつた。うすぐろい夜の色も容易にこれを包まなかつた。

田を隔てた田家から、ちら／＼と燈がもれて、雜木林が、ボーッと藍氣ねづみの樣な色になつた。私は坂を下りてそして家路をたどつた。やつぱり家が戀しいんだ。懷かしい母樣のお顏まで目前に浮いてくる、足は次第に早くなつた、山の濡佛は木の葉が散つた樣と私を見たてあろう、私が戶を閉めに門に出た時山上の佛は月光をあびて、端然と坐して、相變らず世を笑つてゐるが……　…………

あゝ私も平凡な人の子なんだ。

少しいやみはありますが、引きつける處もある（評）

○妬

大分　原田澪子

良人の手によつて、なくせられたと許り思つて居た京城の文子樣から夫宛の手紙が、整頓した新聞紙の底から出て來た。瞬間カッとして怒と恨と嫉と悲とが一緒にこんがらがつて、抑えても抑えても高鳴る動悸が止まない、披けて見度い、が讀んだ後の苦しさが思はれると一寸躊躇したが思ひ切つて、卷紙を引き出し細く

書いた文字の上に目を落した。胸は早鐘を突く樣て持つ手がかすかに打震う、讀んで行く中に怨みの涙は同情の夫と變つた。私の豫想とはまるで異つた破れた戀の思ひ出を、女の心持ちそのまゝやさしく書いた浮世を慘みた文てある、讀み終つて私はかりそめにも恨んだ淺ましい心を恥ぢた、敵の如く思つたればこそ妬みもしたれ、位置を換えたら什麽に悲しい事てあらう！思ひ出多き故鄕に歸つて昔の夢を偲ぶのが辛いから、此の儘他鄕の土と成り度いと、誠に女らしい心である、私には淋しい時悲しい時み胸に額つけて泣かして下さる人ぬあるけれど、過去の戀に生き現實の狐獨寂寥に泣く人の身を思へば、さこそと同情の涙せきあえぬ。けれども自分の凡てを捧げて居る良人の愛の一部を、現在てはないと云へ、割き去つた人と思へば淡い妬みも生ずる、それ許りではなく、別れし戀は永久に美しく懐かしきものと聞く、結婚は愛の墳墓とやら、戀に笑み戀に泣きした甘かりし日は夢の如く消え、複雜した生の營みの爲め慘とした現實のみを味ふ今は却つて勝つた自分が敗者の樣に、羨やましい感もする、戀を呼かぬ前から良人の風流は百も承知て、當時は只一筋に良人と呼べば事足ると思ふたに、願ひかなひし今日は其の戀の純一ならざりし事の、胸こがるゝ程口惜しうも思はれる。妾は凡ての男子を咀はずに居られぬ。



晩歸　青森　松尾千代子

淡いれたみと云ふものが能く書けてあります（評）

○鰯

播磨　さゝ舟

窓にもたれぢつと暗い空を見つめた、妙に頭のしんがいたむ。ざく／＼と切りこまれる様な感じがするかと思ふと又ぼつと無神經の様になる。

遠くて鰯の網を引く掛け聲が聞える。ヤアー、ウヤーヨーイと何をいつてるのか分らない様に頭にひゞく。いつて見たい様な氣がする、頭の痛むのも忘れてふら／＼と海の方へ出た。

暗い二三丁向ふに火が見える、鰯を上げたのだろう私も歩を運んだ、黒い海は靜かに動揺してゐる、何も見えない、只黒い海ばかりだ。眞砂の上を草履輕く歩をうつすと何か、そと胸にひらめいた。此黒い海！吞まれて死にたい様な氣がした。

いつの間にか來てゐた。男も女も集つて居る、そつと隙からのぞいて見た、漁夫はせつせと網から上げてゐる。あたりは騒々しい、生ぐさい香がぷん／＼鼻をつく。薄暗い瓦斯燈はたくさんの鰯を照らしてゐる、じつと見つめてゐると、後から一しきり寒い風が襲ふて來たので思はず小さくなつた。

簡にして文味生動してゐます（評）

○風の吹く

京都　田舍娘

結ひたての頭髪で外へ出たら、今朝からのひどい風で忽ち毛はほつれて頭や頰に亂れ掛つた。又しても、すアーッと浴せ掛る砂ほこりに、こゞんだゑり元から背中へ、用捨無く、小ぢやりが飛び込む、くびすを打つ。袖もすそも、ちぎれ相に、前へ／＼と吹き飛ばして、是丈の重い體迄も推す。うんと、つゝ張り返つて歩いたが足々も自然と浮足になつて進む。髪もお化粧した顏も滅茶苦茶になつたので腹が立つた。彼方から若いお嫁さんが、つまをおさへて目をしばたゝき乍ら來る。ちよい／＼、眞赤な、けだしが散らつく。美いちやんへお土産に、と思つたが、砂埃でお饅頭屋が見えなかつたから、おせんべいにして大急ぎに行つた。

美ちんは、赤いお猿を背負つたまゝ、裏に立つて、シク／＼泣いて居た。「あら、どうしたの―」と云つたら、一入聲を高くした。種々と、なだめすかした末、やつと「母ちやんがおうちへ入れないつて」とせゝくり乍云つた。私は又かと思ふと、此子が一際、可愛相になつた。てすぐ、おせんべいを持たしたら、目のふちへ、涙の玉をたゝへ乍ら、「ありがとう」と、莞爾した。と、窓の中で「小さい子だもの、ちつとは面倒も見て呉れなくつちやあ―と、よく／＼だつたと見えて、お祖母さんのおづ／＼聲。私ははとして、思はず、顏をしかめた。そして美いちんの顏を見て居ると、だん／＼眼が曇て來てほろ／＼と涙がこぼれた。たまらず、ひしと抱き〆て「いゝわ、此おばちやんがたんと可愛がつて上るから」と、

[illegible]にさけんだ。あゝ亡き姉様を思出す。風はやはり烈しい。……窓の中は、ひつそりして居る。

文章の調度は甚だ宜しい、只作りなれないから調が拔けたり、締りがなかつたりしますけれど、氣を附けて行けば見込があります。(評)

○正行に成つた記

山口　酒向敏子

今日は開校紀念式、おきまりの黒白に靴例によつて例の如し式はまたゝく間終了、サー前ぴろから今日を樂しみ待つて居たあの輕氣球が今から上られると云ふので各級バタ〳〵校庭へとかけつけた警戒線内にはもう校長始各敎員笑つたり話したりして被在る、理科の先生と音樂の先生とは只眞面目しやがんで何かして被在る、空模樣を仰がれる、生徒もついて仰ぐ、今にも雨は落ちそう、早く〳〵と靴をふみならす方もある、……級長さんが私を呼んて入しつた、「實は酒向さん餓にチ各級餘興をせよとの事てすの……酒向さん！おがむから貴女御琴をチ……」「何てすと！びつくり私は動悸が打出した、まつぴらと兎飛ににげ樣としたらどつこい、副長さんにひつゝかまへられた、――「ジヤア許して上るから正行になつて下さいとの狂言、――「えつ正行？……」「ホヽ、自殺せんとする處を演るのよと例の四五人が平氣て私をはなさない「「わかつてよ活人畫？」のがれたならばの一念てわざと平氣てこう云つたら、「おゝ嬉しい！」つてみんなが感謝の意を表される、どうかして隙を見て逃走ともだえたけど何分束縛が嚴しくて服從の外手段はない、とう〳〵ふみ園と云ふ牢屋にひき入れられた、すると「おゝお母さんが居てよこゝに」と背の高い行子樣がまあ綠の黒髮をおさげに私の手をお取りなさる、サアーと云つたぎり私は口がきけない、皆さんは得意滿面呵々と笑つて被在る、ジヤア私も本氣よ！と袴を除りかけたらいよ〳〵みんな狸の腹敲宜しくてとう〳〵私までが腹をたゝいて笑つた、すぐ樣髮をバラリおさげに下着の白のみ着て紫袴をつけた、サア一號の常盤の間へと被在る、アラあすこてするのですかと寄宿舍の長い廊下を人に見られじと走る、來て見ればまたびつくり、もうお線香の匂がしんみりと鼻をつく其はづよ立派に御佛壇が出來てるものそして後の方へ一面幕が廻らしてある、中て音樂上手の連中が悲哀の曲をバイオリンに合して歌つてやると仰在る、

餓餘興としてはなか〳〵ふるつて居る、私共のクラスが一等だなどゝいひつゝおこうろの灰をかいて居た、と拍手の音が耳をつんざく、違いない美しい輕氣球は此の重たい氣を壓して紀念祝賀の意を表すべくいや高くのぼつた……………

ドヤ〳〵またも式場にかけつける靴音、サア私共の肝はつぶれる、ヤレ戸を入れヤレ障子をすかせといひもあへず幕の中ては前景氣に例の音をキユウ〳〵さる、

アラこゝは何んてしようヿ、早く見たいわなどととり
〳〵な聲がする、よし〳〵まだ十分や二十分の餘裕は
あるからと云つてゆう〳〵佛前に座し双肌抑ぬいで水
色々スの襦袢の胴、袖いかにも正行：と出からほてつ
ていよ〳〵私は頷をほてらした、今式場ては三分間演
說があるらしい、またパチ〳〵手がなる、そろ〳〵形
意をと今更ゆく子樣を見あげた、黑のうちかけが、賞め
いかにも床しい、わけもなく嬉しくて堪らない、いけた
られませうといひ合ひ乍ら二人改めてお線香をいけた
―と折もあろうに式場のドイアが開くてはないか―
アッ！と云ふやいきなり私は短刀を逆手に片膝を横へ
出した、夢か　　死か
眞先○○先生がア、よく出來ました、あの正行の可愛
事、こゝへ札が落ちますかヿあの足の出し具合は實に
味いてすヿ―此お言葉を耳にした私、只嬉しさかこ
みあげて何だか心の底が笑つたやうに覺えた、アラそ
んなに押しては座がおちてよ、と呼ぶ聲もすれば一寸
どなたてしやう、必つと假餘興おやない……などとと
もかく耳へは此上もない御馳走をして下さる、嬉しさ
うに退屈も何も感じたらこそ十分間廿分間の態度もく
づさなかつたので大手柄山びよ〳〵名高くなつたには
ほと〳〵閉口だつた
皆さんが賞讃うよ〳〵よつぽどよかつたよと續さ〳〵
仰在るので嬉しく耻かしく何だか私はこう體か浮かさ
れたやうで仕方がなかつた。

實景、實情(評)

○アルバムの一部　京都市　井上澄子

高知市、豊田芳子樣より「土佐桂濱」の景色だ。如何にも海水浴に適當なやうな所。小波がうつてゐる森々とした海の中を、右の方から黑い岩が覗いてゐる。岩の上には、枝も幹も多年の海風に誘められて、屈曲偃蹇した松が六本生へてゐて、小さい鳥居もある。ずーと前から左の方が、所謂桂濱であらう、白砂を敷べた濱を、たえず温い海水が浸してゐるやうだ。三人の少女は、裾を高う端折つてその渚を歩いてゐる、上の白い部には、例のすら〳〵とした字で、「雲を包むだあの山越へて飛んで行きたや君の許。」とあるばかり。

能登、花幽靜子樣より。所謂裏日本にありさうな海の夕暮である。紅の雲が靜かな海を照らして、茶に、黄にしてゐる上を、一日の仕事を終へ澤山の獲物を積んで、可愛妻子を我にせようと、帆に風孕ませて、左に見える一漁村さして急ぐ漁船の數々、漁村の夕賑やかさが偲ばれる。……スミレイングで、つゝましやかに書いてある「君へ君、二十年過ぎし湖の子が、夕べ湖畔にさまよひて、涼しき風に乗り乍ら、はげしき戀に惱めるを。思へ君、星はみ空にかがやけど、沈默(？)は深き野に伏して、弱き心に語り得て　秘めたる戀に泣くわれを。思へ君　大谷川の岩床に、戀に痩せする身をさゝへ、死神の淵を臨みつゝ、心胸裂けんの吾おもひ」……と。

故郷、此は亡き妹より。綾部橋畔筏濱の景。長い綾部橋は向うに白う見え、左には、見馴れた松並木がある、夏の日は妹と來て、釣床を釣して、よく遊んだ所だ。その前の河原の、板が澤山立ててある中に　職人風の男が二人見える。或は私等なよく揶揄つた　松つさん等かも知れぬ。悠々と流れてゐる河には　筏に乗つた人が棹をさしてゐる。たゞこれだけても昔のことが偲ばれるに。しどろもどろゝなり、しかも墨のつかぬ所さへある最後の通信！！奥の六疊て、手を顫はして、そして悶えて書いたのだらう「姉さん、私は先きへ行きます。さよなら。」とある大きい字の

二行!!數學の試驗があるといふ日の朝、この繪はがきを受け取つたその時、私はどんなに驚いたか？

○松茸狩

辻村かと子

辨當は稲荷鮓司、夜の内に造らへて置ました、人にいい場所を取られてはならぬと、負けぬ氣に九時頃出掛ました。野田さん、河野さんと、妹と私の四人、他人様が見ましたら隨分滑稽に見えたで御座いませうよ。さて、出掛たものの、未だ何處と言ふ的もありませんでしたから、山田へ行きませうか、江間へ行きませうか、何處にいたしませうと、暫し迷ひました末、韮山のお林へ行く事にいたしました。此のお林と申しまする所は、幕末の偉人韮山大官江川英龍公の御持山で御座いまして、三抱四抱もある松が幾町となく峯より峯に亘って居ります、世間には餘り知られて居りませんが、風景も好く不動の瀧なぞもありまして、夏になりますと、瀧に打たれに來る人も澤山あります、萩や菌の期節には何時も附近の小學校の運動會は茲に催されます。



小春日和　陸奥　井上よし子

誰れか先に昇つたと見へて下駄の跡、すべつた足跡がありました、私共は不動尊の前を右に折れて、山深く這入りました、蜘蛛の巣に顔を突込むやら、茨に手をかかれるやら、大さわぎいたしました、妹は自分の行く處には少しもないと言ふてぶりぶり怒りました、未だ少し早いと見へて澤山もありませんでしたが、夫れても晝頃迄てに三升許り取りました、人籠の鳥が放された様に、妹と野田さんはきやつきやつと飛び廻つて、人の邪魔許りして居ります、得物の大半は河野さんと私して取りましたのです、お腹もへこへこに減りましたので、元と來た道を引返して、不動尊の御堂で晝食いたしました、晝食後南の峰に行きましたが、最早や人が取つた後と見へて、少しもありませんでした、二三ヶ所歩きまして漸く五升許り取りまして、五時頃歸宅いたしました、妹はさも自分一人で取た様に得意然として斯様な風に澤山出ていたのよと手の平に植て見せる、下女のお梅は大きな松茸をひねくつては、きやつきやつと笑ふて居る、笑ふ下女をしかるお母樣も笑つて居る、夕食のお馳走は松茸

○ゆめ

安藤ひだ子

或る美しい花野でした、廣い廣い其野の果ては、ぼんやりと霞んで、何所が果てだか解らない程の廣い野、其所に咲いてゐる花は、皆んな淋しい花ばかりでした、燃ゆるやうな、緋色などの花はなくて、白いのや、黄なのや、詫びしい色の花ばかりが、つゞく限り咲いてゐました。其美しい、寂しい花野の中に、私しは只一人、無心に花を眺めてゐました。

花の上には名も知らぬ、彩色の麗はしい蝶が、羽衣をゆるやかに、ひるがへして舞つてゐます、矢張り秋なんでしよう、好く澄んだ空が大變高くつて、暖かい日影がさしてゐました、日影のささない葉陰から、露がこぼれて、麻裏、はいた素足にかかつて、冷やくて思はず身顫ひしました。あたりが眞白なのに氣がついて見ますと、野菊が、目のとどく限り、白う咲いてゐます、あまり美しいので、二三輪つんで、髪にかざしてゐますと、何所かで「ひいちやん」つて優しい聲何んだか聞いた事の有る聲なので、振り歸りました。白い〳〵花の咲いてゐる其中に、背の高い、痩形の、品のよい丸髷に結つて色の白い、優しいお顔、如何して、ぢつとしておられませう、十年の間、片時も忘れ得なかつた亡母ですもの。

「まあ、お母樣。」といつた限り、さぞ花が恨んだでしよう、野菊の中を目茶苦茶に、驅つて走せ寄りました。

何かものを申さうと思ひましたけれど、嬉しくつて言葉が出ません、只々暖かいお胸にすがつて泣きました、お母樣も多くおつしやいませんしばらくして、たつた一と言「大きく成つたね」と、おつしやつて、「私れもう歸るから。」とおつしやいます、「何故です。」お伺ひ申さうと思つてゐる間に、いつ舞ひ下つたか、紫の雲に乘つて、ずん〳〵上つてゐらつしやいます「お母樣、お母樣。」力の限り呼んで見ましたけれど、最う此所にはいらつしやいませんでした。

悲しくつて、悲しくつて、思ふさま泣いて、ふと氣がついて見ますと、廣い美しい、花野では有りよせんでした、矢張り、昨夜横に成つた儘で、此所は臥床でした、日頃思つてゐた事を夢に見たのでせう。

有明の燈火が、ゆらいて、又ゆらいて今にも消えそうです。たまらなく成つて、雨戸を繰りました、夜は大方明けて、星は皆んな消えてゐますのに、只一つ、光の強い明星が、中空に輝いてゐます、何んだか懷かしく成りましたので暫く其星をみつめてゐました。

○惡夢

鳥取　安木春子

もう十二時だ、何故今夜ねむれぬのだろ—雨戸を一枚くつて窓によつた今宵しも仲秋の月、白絹に手切つてなげつけたやうな雲の間を通りぬけて月は今松林の上にかゝつてゐる。久松山の源太夫山もおぼろにかすんで白い建築の並んだ兵營のあたりは夢のやうに淡く見える庭の叢の中で鈴虫が淋しい聲てないてゐる、私の魂は幾千里の外にとんだか、夢うつゝ只もう無意識にぼんやり月を見入つてゐる時。

「……は死んだ」不意に何ものかに呼び起こされたやうて我に歸つた。らんぷは何時の間にか消えて窓からさし込んだ月光が末ひろがりに向ふ。襖にうつつてゐる、時計が一時打つた、私は何とも云へぬ恐怖の念にうたれてぞつとしたが思ひ返して床に入つた、今度は心地よくすぐれいられた、ふと目をあげると佛壇の前にちよこなむと座つてゐるのは大叔に

裏畑に行つた姉のつるえだ「あら、つうちやん何時歸つたの」
姉さん——姉さん火をつけて下さい便所に行くから、
呼ばれてさめると弟がおこしてゐるのであつた、それにしても氣になる今の夢、先刻のあの。……は死んだ」と云ふ呼び聲……神經はいよ〳〵たかぶつて悲しい事ばかり聯想される、私はぢつと目をとぢてつるえの上にことなかれと靜に祈つた、此世に生を受けて七年、死の手に渡すには餘りに早やすぎる、得べくば、わが十年の生をちゞめても彼に五年の生をあたへたいと只一人の姉なる私は思つてゐるのに。
雨戸のすきから曉の光がほんのりとさして來た、
門の戸をさびしうたゝく音がする。高鳴りはじめるわが心臟もやぶれよとばかり、「電報ッ——電報ッ——あ、あ、あ、わが足は一歩も動かなくなつた。

○終りのお禮　　山城　木の花

昨日、尋三四全體から、見舞の手紙を差出した、先生の病床へ、(どうぞ早うよくなつて歸つて下さい)と、優しい手紙…。
(お姿が見えませんので、悲しうございます——。)あゝ先生はよう見て下さらなかつた、子供の手紙、夢ではないかと思はれる「死——」死の手は先生の御胸に觸りましたのでせうか、昨夜九時府立療病院でなくなられました。
今日は子供の男氣も、ない樣に見えます悲しうございます……、と大きな子供の皆ひ草私は立てもゐてもゐられません、お吊ひの唱歌を數ゆるのですもの、樂の聲でございます、この樣な歌を唱つてもらひなさる、先生の御心はどうでございませう、子供の心私の心より、尙々悲しうございませう、世を去られたのですもの………。
お吊ひは、三時と聞いて居ります、それ迄にこの歌、(たのむ汲びの庭に立つ……しをれふしつゝ撫子は……)數へたらいゝとはいへ、唱ふ心、數へる心は、悲しみの涙の、聲でございます、樂器の上を走る指さへまちまちでございました。
先生のみ墓に皆集りましたお吊ひの人々祭主の祭詞はほがらかに、涕を散らしての聲お墓にこう聞えました、やがて人はこうなる運命でございます、こうなる運命をもつてゐますが、(神式なれば祭詞など、)吊ふ詞を讀まれたら、儚ないものだと、思ふ心はひとり湧いてきました。
先生の一期は短いものでございました、四十二の厄年でございましたもの、け共償積すればいさをは大きうございます、烟霞の癖も地にしなびました、け共いくたの數へ子は悅び、快活の性を受けました。
休暇前は、お健なお顏を、見せて下さいましたのに、一時の病氣、(先生の持病)のために歸つて下さらないのだといくたの數へ子は泣いて居ります、あゝ朝顏の花は、めつきり秋風に弱りました、先生はその露とおなり遊ばされたのでせう……、と思ひは色々と浮びました。
いつしか唱ふ唱歌——。
(露の雫の影もきえ、にはのみ露の……、ひかりのうせし世ぞくらき……)
と、初めて吾にかへつて、唱ふ樣につれて、涙がちりました先生の一聲高く、禮とお言ひになつたので、一同頭を下げて聲もございません。おゝ先生はこの禮をいかにお受けなされて……。

○新しい光　　北海道　星　精子

何の邪氣もない、何事も考へて居らぬ處に、彼の君の姿が見えたと思ふ間もなく私の手はかたく握られて、君の口は私の顏にひたと附いた頰に……口に……
女と云ふか弱い名のもとにある私は如何して好いやら分らぬ、只驚き恐れるのみであつた、ああ私は罪をおかした。操を破られた誰に立てる操であつたかは知らぬけれど、白百合の樣な透き通る樣に純潔なる事をかたく自重して居たのに、異性なる人とキッシングをした、(此罪消えてゆけよ)ああけれど罪は罪を生む、罪を惡んで居りながら不思議にも、君の言葉君の俤は、執念深くも頭に刻み込まれて、片時も忘れる事が出來ない、あゝ此胸の苦しい事よ。目を戸外に移せば、空は青く高く、清く澄み渡つて野、山の面は紅葉が滴、人は汗ばんだ着物を脫ぎすてゝ、新しい反物の香心地好さゝふに乾き切つた地をゆつたりと步いてる、此秋も深くなつてやがては雪に埋まる北海は、ひとり地許りか、住む人も來

ん登まで心樂しく休むのだ、思へば私も去年は……其前も……此半年は寂しいながら實に樂しく休んだものだ、親しみを深においで、ああ私の靈は實つた、今こそ暑い、苦しい、はげしい、活動に遣はした此心身を、秋が來たと云ふのに、冬が來ると云ふのに、未だ斯うして苦しませなければならぬのか。誘惑だ、勇進してぬけ出づべきである。もとの純潔無垢なる處女に返れば、寂しい秋も、おくる月日はなか〳〵に富み多い、樂しい光明を持つて居るのだもの。什麼しても あの時代が戀しい、現今の此苦しみは、青春時代の印象として殘しておいて、靜かに世に處して行かう。ああ天地が開けた、氣が晴れた、今し西に落ちた太陽も明日からは新しい光りに、照らして吳れやう、夕やけの空の東の山にうつゝた赤い紫の美しい事。

○自炊の朝

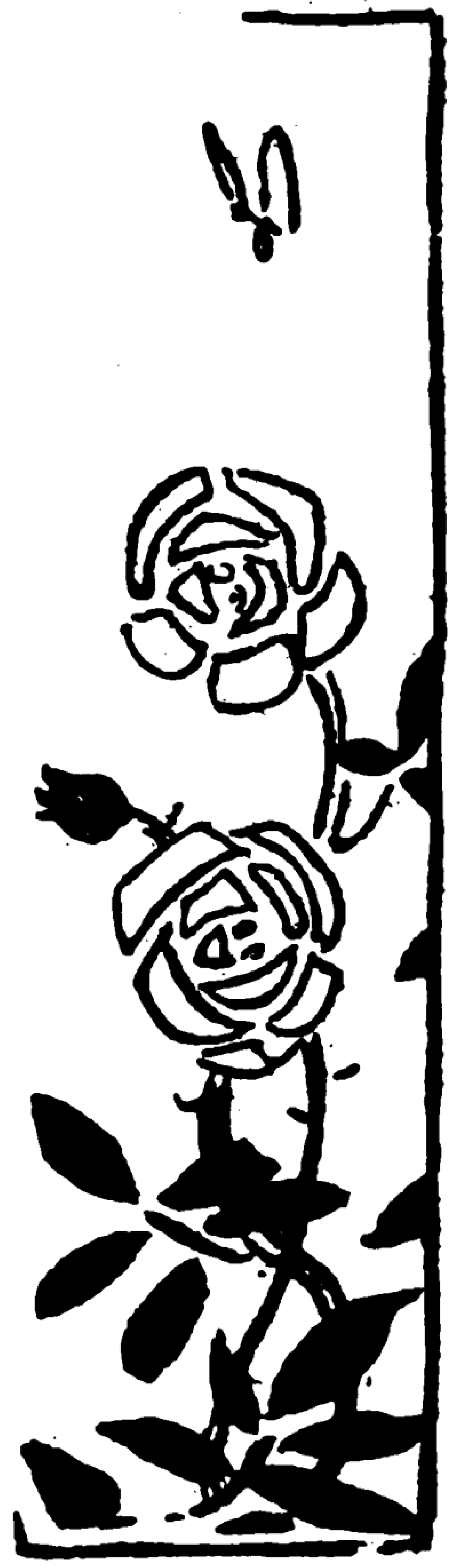
麻布　靜代

ふと目が覚めた。一寸マッチを擦つて時計を見ると、丁度五時十分前急いで起る。隣りの山口さんはよく寢て居るので、目を覺まさぬ樣に靜かに臺所へ行く、戸を明けて見ると一面に霧がかゝつて、向ふの方に瓦斯がぼんやりついてゐる、時々鑵の蓋や水を汲む音がするばかり靜かだ事。お米を釜に入れ水加減をいゝ位にすゑかまどの中の灰をすつかり出して持薪を重れ、上へこつぱを二三把入れてたき付けると、紅い樣な紫の樣な燄がぼつ〳〵と、出たり引込んだりして漸く燃え出した。お味噌を擂るのに未だ馴れないので擂鉢が、あちこちから〳〵廻つてすり難い手に豆が出來た。何だか滑さうだけれど其儘にして、實に入れる物をと戸棚を見たが何にも無いから、八百屋へ行かうと思つて裏の木戸をあけて外へ出た。東の空はやゝ白け渡つて所々ばら色の雲が浮んでゐる。土橋を渡り畦道を蹈つて行くと秋風が田の面から、すーと吹き渡つてひやひやする、鎌の跡新らしく匂ふ田の中に、案山子が一人つくねんと立つてゐて一種淋びしい感じがした。村はづれの巡査駐在所の角から四軒目が八百屋誰れも起きて居ない樣子、戸が閉つて居るので二三度たゝくと漸く起きたと見えて、おかみさんが雨戸をはづして吳れた。大きな欠伸をしながら亂れ毛を上げて「何を上げますか」あのお蕪があつておあいにく樣でしたれ未だ市場の方へ參りませんですから何ならわかめでは如何で」何でもいゝわ夫頂戴又欠伸を一つ下駄をがら〳〵引きずつて奧へ行つたが、やがて小さいのを三つ四つ持つてくる。急いで包んで家へ歸つて見ると丁度御飯が吹いて居る最中、山口さんはもうお掃除を濟まして御膳立、火を七輪へ移しておつけをかけ、其間に髮を結んで身仕度をする。火鉢に火を入れて鐵瓶を乘せ、御飯をお櫃へうつしてゐる頃おつけも煮えるしお湯も沸いたので御飯を頂く、山口さんが「貴姉樣まだ馴れないのに私よりお上手ね」と讃めて下さつたので自分ながら上出來だと思ふと眞實に嬉しい、跡を片付けてほつと息をつくと七時半すぎ。聖書を讀んでお祈りをする日課が終ると、山口さんは縣立高等女學校へ私は裁縫へ、留守はお隣りのお婆樣に賴んで行く。かうやつて私達二人が相談して、自炊をし初めてから今日で一週間目、毎日交代に炊事番をするのである。

○行く道

愛知　華影

いつもの樣に本町を一町程行くと棺屋がある、此うしていつも死ぬ人があるのか知ら、毎日〳〵葬式用の物ばかり、老眼鏡をかけて一生懸命にやつて居る其老人の側に眞實に青い顏今に彼の世へ今足かけさふな三十位な男の人、無言でコク〳〵仕事して居る、其間に仕立屋がある、御婦人衣服、縫物所と書いてある店の障子があけてあるので能く見える、赤日の衣服、縞模樣の美くしい、或る時などは振いつきたい程よい色の寄一重など仕ゆ〳〵と忙がしそふに、前とは違つて華やかで目出度い物を、一閒は戀しい物を、よくも揃つた物、此家の前を通る時は今日は何だらふと ものずきにも眺めて行く、藥屋がある、小僧入用と書いてある紙が 月繪を貼つてある、李屋に十三四人の人が甘酒を買つて居る、小さい吳太物屋があるが此の店の小僧は盡日中でも遠慮なく船をこいで居る、本屋の前を通ろ、新刊物の廣告が出て居る、お神さんが「如うか御贔屓下さい」「えゝまた明日に」と、忙がしくつてあわてゝ居ても此家へは入り込むと二時間は知らぬまにたつぬく、さく賣る店先に十三四になる男の子が近所の小供の遊んで居るのを羨やましそうに見て居る、ふと顏を見ると赤色と青色が顏に面白くつい居る可笑しくつて、吹き出しさくなつたのをじつと噛みしめて行くと乞食に行き當つたきまりが惡いやらも可笑しいのでとう〳〵吹き出して仕舞つた、パラソルで顏をかくして先生の家へ。



○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日日の出來ごと又は心得となるべき事若き奥樣の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること乙望の賞を進呈す

○朔北日記（天賞）

根室まち子

役處まで十五分あれば好いといはれるので、きつちり十五分前までお引止め申しておいて、さてお送り出してしまふと、遲參になりはしまいかと氣が氣じやない、ぬいを吉田さんまで使にやつておいて、机の前にすはる、と又しても例の事が氣にかゝる、先月もなし今月もはや十八日といふにまだ……もしや——けど從來とて二月位ないのは度々あつたのだから必ずさうときめるわけには行かぬけど、大好物のお菓子や天ぷらが嫌になつて嫌であつたおそばや麥の御飯が喰べてみたいのはもしやそうだつたら——私は……私は……おゝ

いまその事母樣に御談してみやうかしら、こんな事考へてるうちはや十時がうつ、茶の下の火を見にたつ、とぬいやが木津夫人の御來訪を知らせてくる、けさふとんもなほさぬうち、遠慮のない方とて茶の間へお通り遊ばす、例によりて一人よがりの事ばかり面白がつてお話遊ばす、お晝には丁度珍らしくまぐろがきたので刺をとつて御飯さしあげる、一時すぎお歸り、それよりまつ樣つや樣、松美の姉樣へ手紙かく、

四時半旦那樣お歸り、何となくお顏色がお惡い、おたづね申すと二三日中に出張せねばならぬと、廿日ばかりまあ私はどうしようそんなに長く、そりや木津夫人もおつしやつた通り經濟の方には餘裕ができていゝだろうけど、（十八日記）

昨夜はろくにねむられなかつた旦那樣も幾度も〳〵寢返りしていらした、

御送り出し申すと直ぐ、ぬいかけの羽折手にして四時前仕あげてすぐ臺處へと立つ、けふは何もない鮭はつかり、

鮭の煮付、フイツテーボール、酢吸物、筋子のみそ

漬、昨日はかきもらした故こゝへしるしておく、カツレツ、ハムサラダ大鮮オリブ燒、玉子豆腐、
（十九日記）

評。少しもつくろはずして外の事内の事を記るす、洗練も足り、然かも偏ばれる點において第一等。

○病閑日記

增賞　越後　ふく子

「早くよくなつて下さい」と繰り返して言つた乳母のおろおろ聲がまだ、耳に殘つて居る、乳母は私の入院したとき、刈入れの最も忙がしい日を取るものも投げ捨てゝ來て與れたのだとやら、生みの子とちつとも變らず可愛くございますと私の話が出ると乳母はかういつたもんだ、其毎に慕はしく懐かしくいつまでも死なずに居てくれたらば等と折々思はれる、乳母は今朝暗いに歸つた、朝露のまだ上らないのに、きつと足や裾が、冷たいであらうに、老の身の、遠い處をほんとに氣の毒だつた。

弱い乍らも、ほか／＼と秋の光が入つて、室一ぱいに照つて無數のごみが立ち舞ふ、頭の痛い程寢づかれた躰を床の中に起きた、あゝやせた――やせた左の手に右の手くびが廻る程に細つた、あゝほんとにやせたジアリンの廣告のやうな等と笑はれた此躰が、這麼に急の間に變るものかしら、暖かい日光に、顔から胸から膝の邊までほか／＼する――ふと思ひついて細い青い兩の手をかざして見た、と、あつ紅い／＼血が透いて見える淸い紅い血潮が、あゝ私にも、はなやかな人達のやう、矢張年若い女だもの、這麼淸らかな血潮の通つて居るのに「貴女は少つともお若い處が無いわほゝゝ」あなたの血は冷結して居るのね、なんて、冷笑した友に見せつけてやりたい、同じ一身だもの胸にも指の血潮と同じく人一倍紅の美しい血の漲つて居るものを。

看護婦が水藥に丸藥を持て來た「お早う」のあいさつして用事を言つたきり、さつさと出て行つた、たとひ新參の看護婦だとはいへ彼麼によそ／＼しくしなくつともよさゝうなものを、何だか厭に、情けなくなつた。

ちつとも早くなをるやうにと嫌いな丸藥をうすいォブラートに包み、ぐつと目を閉じて呑んだ、それから又横になつて强ゐて眠りに入つた、目さめたのはいつ頃か入相の鐘が遠くかすかに聞えた、あゝ加茂川の袂に一人淋しさうに裁縫して居る母の顔がまざ／＼と見

える、もとの太つた丈夫な婦になつて一人しかない母様を安心させて上げたい。

評。病床の徒然やものうさ寫し得て妙。兩の掌をかざして考へたり、看護婦のよそ〳〵しさに情なくなつたり、病氣した者でないと此消息は分らぬ、亦、妙、

○悲しき日記（入賞）

京都　○○子

道子はとう〳〵死んで仕舞ひました、こんな可愛い子をどうして死なせるものかと及ぶかぎり手を盡し心をつくしましたが矢張り駄目でした、あどけない笑つたような顔、道ちやんと呼べばいつものやうににつこりするかの様にも、思へますがもう永遠の眠りに入つてるのですもの‥‥さうとは知り乍らそつと呼んで見ます、もはや詮方ない事とみんな慰め合ひはげまし合つて、道子を棺に納め返らぬ路に就るべく旅の仕度をしてやりました、紅い友禪の上から眞白の小さいづるを着せ、頸から前に袋をかけさせ、お乳を握つたばつかりの刻んだやうな手の右に杖左に珠數を持たせ、生れてやつと九ヶ月まだ踏もしない足に脚半わらじをはかせました、かうして一人旅に出るのです、あゝこの可憐な姿を見たならどんな人でも泣かずには居られますまい、はかせたわらじは少さな指のくつ付いたまゝの足にきつちりと合つて居ます、これて何所を歩んでゆくのでせう可哀想に、私は幾度でも覆つた白布をのぞいで見ては又しても泣きます、



お化の先生　東京　津川ふみ子

ほんとに悲しいてすもの、それにましてや只一人の愛兒を失つた、兄様や姉様の悲しさはどんなてせう、こんなに悲しい私てさへ想像も及ばぬ位てせう、兄様は涙さへ見せずに種々と葬ひの準備にかゝつては居られますが、……姉様は堪へ切れないのでせう、冷たくなつてる兒を抱かゝへて氣も狂つたように泣いて居ます、いつも険しい三角の眼て姉様を横からにらんてなさる御姑君も此時ばかりは忘れてゞせうか共に泣きくづれて居られます。

佛前にはお花が手向けられ、煙りが細く上つて居ます、やがてお坊様がきてお經を誦し始めました、あんな大きな聲で静かに眠つて居るものを可哀想に早く止してくれゝばいゝにと思ひました、

けふはもう何を見ても聞いてもたゞ悲しいばつかりて泣くまいと堪へる程涙が出てなりませぬ、あゝ一昨日までは元氣な兒て居ましたに、病魔におそわれて三日の間、苦しみ通してそのまゝ逝つて仕舞ました、たつた三日の間に……せめてもすこし病らつたらもつと看護もしてやりたかつたになど姉様残り惜しそうに云つてます、

明朝は野邊の送りをする筈てす、あんな可愛い姿を煙にするのはおしいやうてすがいつまて置く事も出きない、おばさまは臭さくなるよ、と云つてます……

道子は美しいてした、道子の生れた時は嬉しいてした始めて叔母様になつて、責任が重くなつたような恥かしいように思ひました、おばちやんと呼んてくれる時分はどんなにかあいゝだらう、と待つて〳〵居ましたにこんな事にならうなど夢にも想ひませんてしたに……大きくなつたらどんなに美しいてしたらう……死んてしまつたと思ふと尚ほ賞めたくなつてきます、

四隣はしんとしてゐます、まだ眠れませぬ姉様も今夜は屹度泣き明すことてせう……

評。反覆その哀痛を訴へたるところによく女性の柔さしみが見えました。又曰く此文たゞの追悼文たるとしては兎も角日記の躰を失して物足らず、又餘り多くを語らんとするくどき傾きも一考して改むべきものてしやう。

【秀逸】

○秋日和

備中　山田靜野

十月十二日、久ぶりてお花の稽古に行つたら河田さんが非常によろこんて、よく被在つた〳〵と幾度も仰在つて、抱く様にして先生のお居間につれて下さつた、桔梗が巧く活つたてほめて頂戴仕たが、妾はよくてきたのより皆様の晴れ〳〵したお顔に、接したのがうれしかつた、お友達とはいつ會つてもうれしいものだ、奥様がおむづくしの手製菓子て茶を戴いて十一時ごろ

おいとました、わざと縣道をさけて、野道を急ぎもせでぶら〳〵歸ると、未だ黄金の波打つとも言へないが、稻穗の波打つ田圃ではお百姓が、縣農會からきびしい沙汰の在つた枯穗をぬいてゐた、

歸るとまあ嬉しかつた、屋敷のまわりから門の外まで綺麗に掃除ができて、庭迄箒目正しうはいて在つた、平助の働きとは言はずして知れてゐる、そして、昨日自分で張り更へた玄關の美濃張り障子に、菊日和の秋の日がさし込んで宅の平和を語つてゐるらしく思はれて、何とも言へん嬉しさを感じた、

評。純なる筆つき、見るからに心地よい日記。

○郵便

堺市　靜　零女

十月十一日、一日中降つたり止んだりした嫌な雨の日だ、七時半頃であつた、今日はお父さんのお歸りが、遲かつたので、丁度今皆が夕飯を終つた所であつた、電氣を中の間から、こつちへ運んだので店の間は薄暗い、電氣の遠ざくに從つて隅の方から濃い濃い暗が、だん〳〵室內に溶けて行く樣に思はれる、

「郵便！」と門口の方で聲がした。「ハイ」と末の妹と弟とがわれ一と店の間の郵便受の所へ走つていつた、薄暗い室の中に君ちやんの白地の兵兒帶がうつすりと目に付く。「姉さん何もあらしませんがなア」とバタバタと足音忙しく走つてきた。弟はまだ何かごと〳〵いはしてゐる。私は電氣を中の間へ釣つた。薄暗い室が急に明くなつた。弟も「ないて」と萎れた樣な顏をして私の傍へかへつてくる。そんな事があるものかと、思つてゐつて見たが矢張り何もない。門口の方かしらん？確に爰で聲がしたのだがと思つてゐる刹那。

「お清門の方で聲がしたじやないか」と母樣の聲、私は提燈に火をつけて門口の所を見にいつたが何もなかつた。もしやと思つて小さな玄關の庭だが二度までも見なほしたが矢張りない。ガラッと戶をあけて外を見た。提燈の光りが暗い通りにパッと廣がつた。淋しい町、雨は止んでゐるが灰色の雲は低くたれて星影一も見えず、重々しく町や通りを包んでゐる。提燈の火が通りの水溜りにチラ〳〵と寫つた。人通りのない淋しい町あゝ町はづれだと今更の樣に思つた。

「誰か近所の小兒の戲らに違いない」との父の言葉に私もそれきり私の部屋に這入て雑誌を讀んでゐたが、「姉さん！さつきの郵便あつて」と君ちやんが狀袋をもつて這入つてきた。何所に？、と私は思はず急に、問ひ返した「あの奧の方の格子の間に」と君ちやん

のいふのも待たず私は狀袋の裏と表とを眺めた、何ともいへぬ嬉しさが胸にせまつて來た吁々靜枝さんからなのだ。

評。見どころもよく描寫の筆もよい、かゝる事時にある事ですから覺えのあるものは背づくでしやう。

○小猫の嫁入

大分　原田添子

廿日許り前から御約束の出來て居たブチが、今日いよ〱お嫁入をするので、私は朝から緋縮緬で首輪をこさえてかけかえてやつた。何も知らずにぢやれついたり親子して馳せ廻つたり、お乳が欲しいと云つてむつがるのを親が焦らしたりなんぞする樣を見ると、可愛想になつて來て逃げ廻るのを無理に抱いて、ブチやお前は今日から須中さんの所にお嫁に行くんだよ、と嚙んで含める樣に幾度も云つて聞かするのに、平氣で前髮のリボンにふざけて居る。夕飯の時兄樣方から笑はれるのもかまわず、牛乳を呑ましたり、お魚の骨をとつてやつたりして、それとなくお別れをして置いた。虫でも知らしたのか夜になつたらニヤンニヤン云つて私の後を追つて仕方がない、可憐らしくつて堪らないので抱き上げて頰ずりして居たら、須中さんの從卒が、お茶一包に一厘錢を入れて水引かけたのを持つて迎ひに來た。もう連れて歸らうと云ふのに、ブチは乳に吸ひ付いて離れないので、皆もまあ〱と云つて延ばして居た、從卒が外套の中に入れようとすると、今迄奥に勉強して居らした兄樣方までが出て來て、ブチよブチよつて抱いて下さる、皆一回づゝ名を呼んでお別れすると、オリイブ地に梧桐の葉を白く染めぬいた風呂敷に包んで、その上を外套で被つて從卒は幾度も禮を繰り返し、繰り返しして出て行つた。後に親猫はニヤ〱云つて家中往き來し乍らブチをたづねて居る。（日記の一節）

評。情緒纏綿とは此の事でしやう、こんなつまらん事をこれ程面白く讀ませるのも少いでしやう光榮あるブチ公なる哉。

○雨の日

牛込　平塚白百合

十月十日。雨がしと〱と降つて、部屋の中が陰氣てしかたがない。障子をあけて見ると、朝貌の拔かれた、土鉢が三つ四つ重なつたりして敷石の處にころがつてゐる。水芙蓉ももうだめになつた――コスモス計りやつと二輪ばかりなよ〱した枝に薄紅の花をつけて、雨にしつぼりぬれてゐる。お隣家との垣際に眞赤な口を開いた柘榴がおいしそうな露を雨にまかせてゐるやうに見える。チーと雨足の

白く屋根瓦の處へ見えるのを見てゐると、塀外に下駄の音がして小さい下駄が塀下の五寸ばかりあいて竹を横に打つた處から見える。お隣家の清ちゃんのやうだ。塀の上に竹の先を割つて短かい棒切れをその切口にはさんだ棹がツーとのびて來た。

私は面白くなつて見入つてしまつた。熟て口のパックりあいてゐる下の方の大きな實に棹がついた。忽ち棹のわれ目に實のついた細枝をはさむと、グル〱と三つ四つねぢり初めた、まだ實は落ちない。グイと此度は引ばつた。とどうしたはづみか實が根元からポッツりはなれて、庭の水たまりに泥水をはねかへして落ちてしまつ



日曜日　　東京　　分陽百合子

た。清ちやんは吐息をついたやうだ。木の枝や葉からは露がホロ／＼こぼれて清ちやんの襟首にもきつとは入つたろう。梓は枝についたまんま空にぶらさがつた。どうした事と見てゐると、此度は清ちやん落ちたのを取るつもりだろう節穴がないので塀の下から覗いた。と正面に私がゐたのでよつぽど驚いたのだろう。とつて上ませうと聲かけたけれどドン／＼にげていつてしまつた。梓はまだ枝にブランコしてゐる雨はまだ止まない。

評。精細なる寫生文、お手に入たものです。

○月見

鳥取　安木春子

二十九日曇、今日は八月十五日お月見の御馳走は一人で受け合つた、座敷の掃除をして花を活ける桔梗はもうすんで小さいおくれ咲が二つしかなかつたが薄は丁度ころ萬、野菊と女郎花と龍膽とを私一流のつかみざしにしておく晝飯を了ふと流し下にたつた、栗をゆでたり甘藷をふかしたりお團子をこねたり中々忙しい頬にすみがついてると云つて笑はれるのにそれを洗ふ間もないくらゐ學校から歸つた妹に手傳はして東座敷の縁に机をおいてお馳走をならべ．．これはお月様の分．．．宅のもののもそれに並んで膳立をしてほつとするともう六時一寸髪だけ直して食卓についた。

曇つてゐて月は見えぬが月より團子の連中が多いので頓着なし話も中々はづんで皆が床についたのは十一時、うつ／＼してゐるとりん／＼と目覺しがなりました、起き上つて見ると、わざと一枚のこした雨戸のすきから月は靜に光をなげ込んで室は晝のやうに明るい、妹を起して一所に外に出る、深海のやうな色した空にはところ／＼古綿を千切つたやうな雲が浮いてゐて月は今中天にかゝつてゐる、私等は晝間用意しといた芋の葉を被つて井戸端に立つた、妹は無言で貴女からと云ふやうな表情をする、私はおそる／＼そうつとのぞいて見るはつとしてとび退つた、地下六尺の水の上に眞赤に熟した柿の木を背負ふて何とも云へぬ變なものがうつつてゐたからだ、今度は妹がのぞく、と突然ころげるやうに笑ひ出した「何？」とのぞき込むと芋の葉被つた頭が二つ映つてゐる「まあ馬鹿らしい」私はあいた口がふさがらなかつた、兄様に云ふとまた泣かされる積だから、だまつてゐる事にして二人は床に入るとすぐ寢入つた（私の地方では十五夜の丑滿時芋の葉を被つて井戸をのぞくと未來の運命がうつると云ひつたへます）

評。面白い事實です、描寫に今一層力を入れると鬼氣人を襲ふ樣なものが出來たでしやう。

○誕生日

本郷　千とせ

朝から勝手へ這入つたぎりて、やつと二時頃晝餐の用意もあら方整つたから、後は母様にお願ひしてお風呂には入つて居たら、濱子さんが被入つて、觀れば露の零れ相な黄菊を根の儘下さつた、同くは一首添へ給へ、とたつてお強請り申したので（仙人の千歳をこめて植ゑしてふ菊の一本君にさゝげむ）速席で整ひませんが、と小野流の文字さら〳〵と短冊を染めて示めされた、いつも乍の麗しい水莖の跡を飽かず眺めたが、眺めれば眺める程羨敷て〳〵涙の零れる程羨敷……濱子さんと澄さんとは元一つ小學校に入らした仲だからわざ〳〵今日お二人をお招きしたのだが、餘り久々なので始の内はお互に遠慮計りして被入るから、中へ這入つた私が隨分骨が折れた、が勝部の運ばれる時分には、私などはそつち除けに、別れた誰彼の消息を聞きつ聽かれつて愈々お話が盛に成つて來た、處へ母様が、女子文壇社からお使ひで、と賞品を渡された、何だか急に胸がどき〳〵して頬がかつと成つて……微かに震へる指先に紅白の水引を解けば、色美しき萬喜お召が……譯知らぬお客様は不思議相に見て被入つたが、母様からお話なさつたので「マア偉い事ねーお目出度う」「お目出度う」と云はれて私は嬉しいやら羞かしいやらで消えて了ひ度いやうな、是から一寸傍へ寄るからお暇する、と濱子さんが仰有るので、澄さんとお送り申乍ら新坂迄行くと、紅と黄と混ぜて流した如な夕映の空に、名有る畫工が一筆刷いたかと思はれる薄墨の芙蓉峰が裾長く明瞭りと浮び出て……をちこちの山々も宛然夢のやうに、あつ富士山、と云つたぎり、三人等しく口を噤て恍惚りと彳て居た、暫くして濱子さんが「いゝ文章の料を得ましたね」と私の肩をポンと叩いて行つてお了ひなさつた、サア暗く成らない内にと澄さんが頻りに促すので止なく心殘して家へ歸つた、吁、あの富士山が夕映と共に次第に朧ろに成つて、軈て闇の帳に包まれる迄、眺め度かつた。

評。格別な點なきも、末段畫のやうな富士は本文點睛、一種の神韻あり、誕生日の樂しい心持が流れ出て居ます。

○晝と夜

横濱市　小田切錦子

十月八日

お湯沸して、羽織、裏表、洗濯、した、お天氣はいゝが、風が強いので、度々竿が落ちて、仕方がない、久振りて、お湯屋へ行つた、夜、兄様と一所に、伊勢崎へ買物に、出た、丁度歸り道黄金橋で、四年前別れたと云ふ、藤巻様に、お逢したので、遂に私まで吉野へ

お供した。
十月九日
今日は、關村さんの、孃樣の誕生日なので、兄樣の出なさると直ぐ、御手傳に上つた、お客樣の澤山な處へ、女中が風邪で寢て居るものだから、四人てくる〳〵まひ。
夜不如歸が電氣館にかゝつたと云ふので、床に入つてる兄を無理に起して、大急ぎで出かけた。
十月十日
昨晩、餘り夜深ししたので、眼が醒れて氣持が惡い、暫らくと思つて横になつたが、いつの間にか寢こんでしまつた、文枝さんが、學校歸りに寄つた、明日、高雄山へ旅行だ相だ、夜、兄樣と讀書してると、國から小包が着た、未解く手も遲緩く開くと、まあ此栗のおいし相だ事。

評。日記らしき日記、とり〳〵の味その中にあり。

○出水日記

東京市　照子

十二日(日)雨、おひる頃から氣味の惡い雨が降り出す、夕方になつてからは一しほはげしくなつて又そろそろ水が出はじまつた、おや〳〵又いやだ事と思ふたがどうする事も出來ない、見るまにふえてくる、玄關の土間の所へ少ししみ込んできたので、大急ぎて揚板の下駄出したらもう日和下駄がもぐる位になつてしまつた、俄に炭箱出したり薪上げたりする、でも毎度の事て慣れて第一に薪上げたり、揚板の下の物出すやうになつたけれ共、此所へ越してきて初めて水の出た時は何だか氣味惡い樣な恐い樣な氣がして、床まで水がきたらなど、夜もおち〳〵眠られなかつたが、いゝ鹽梅にゆかまで屆いた事もなし、せい〳〵一尺五寸位出てぢき引いてしまふがこんな時には子供達が水のどん〳〵增して行くのを面白がつて、窓の所へいつては紙や何か流してゐるのを一しよになつて見てゐて、あとて、揚板あけて炭箱や何かに水が着いてびつくりした事も二度や三度ではなかつた、などとこんな事思つてゐる内にも水は用捨なくふえてゆく、ほんとにいやな土地だ、かくて出放題出て引く頃には、みんな土を飛石や美しいコスモスの葉や何かに殘してゆくのだ、でも床上にまで水が達するやうな家の事を考へればあきらめもつくけれ共外はまだサー〳〵と湖のやうに何處も一張りきつた水の上を打つ雨の音のみ陰氣にきこえる。
寢る時見たら臺所の入口の閾を一寸程越して、湯殿へもはいつた、近頃にない水出だ、また學校の生徒がずブずブと水をこいで通ふのや、引いたあとの掃除が思ひやられる、水に逐はれてきたのだらう、玄關の下駄箱の後ろあたりでこほろぎがホロホロといかにも悲しさうになき出した、やがてきたるべき秋の淋しさなど思ひ出すと一層淋しくなつて思はずねまきのえりかき合せた。

評。行き屆かないところもあるが又才能たるを失はない、末段のこほろぎのところなど覺えず妙と叫ばしめる。

和歌

與謝野晶子選



○規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく清新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は沒書とす丙種の賞を送呈す

○（天賞）　山城　木の花

いと惜しき落髪一つ拾ひきてくるしきことをつげたまふ君

○（地賞）　信濃　安坂富美子

ゆるやかにわが夢とひぬ曉の鐘は來む世のまぼろしのごと

○（人賞）　大阪　山田とめ子

わかれたる後の心と古寺の冷えたる壁といづれまさるや

【秀逸】

○　伯耆　佐々木とさ子

玉の椅子そのめでたさ知ね共君と我ねる閨にしかめや

○　牛込　塚原けん子

捨てられし其歎きより衰へし我を鏡に見るが悲しき

○　伊賀　岡花子

天地の戀の子みなは君と我前に額ふせかしこめるかも

○　東京　木幡きみ子

我髪は千筋もあれど誰が爲に結ばんとすや哀れ儚なき

○　岡山　巴子

夕方の天の驕兒か根なし雲櫻の上にひろごりにけり

○　飛騨　眞砂子

生るべき價だになき心もて君をしも戀ふ船津の少女

○　京都　小薤

ふと眺め我に似たりと戰きぬ踏みくだかれし霜柱ども

○　伊賀　山村龍子

君に似る人なきぞ好し若あらば或は我は御手とるべき

○　信濃　林紫子

赤々と柿のみのりし頃なりきわが幼子の墓つくりしは

○　信濃　秀枝子

何者か鋭き刄もてわが駒の蹄けづりぬ驅けりえぬまで

○　天草　金子きぬ子

天子ます宮も見來し君なれば樣々の事しりてゐませり

○いつよりか斯る事をば成遂る大膽者となりぬらむなど　大阪　梅本龍子

○病あがり拔けし我髮母君に示して問いぬ多くなきやと　香川　長尾峯子

○市に見し乞食が腫の腫ものに手觸ゝあらず君に仕ふる　四谷　味方こう子

○常久に君とすむべき花園を夜ひるとなく尋ねてあゆむ　福井　やまざと

○黑き實を瘦せし男の蒼白き手して食する夢夜ごと見る　信濃　中武ひて子

○着て寢か秘めて置むかその君のうつり香匂ふ薄ら衣を　阿波　西野いさを

○男の子たち逃むとすればわが髮を捕え放たず悲し黑髮　信濃　野中たか子

○船人の龍はくだけぬ帆はやれぬ戀の海路の浪あらうして　備前　島越昌子

○君と云ふ行く手の光りみてしよりわれ風あらき海に船やる　福岡　武部辰久子

○霧の野や鳴く虫の音にさそはれてふめばこぼるゝ星の影かな　岡山縣　近藤かく子

○聞えけり哭きけりされど歌といふ光り想ひて今日も過しつ　伊賀　嬢子

山口縣　向敏子

○思ふことすら〳〵書きてさら〳〵と君にやる日をつくりてしかな　伊勢　岩崎ふく子

○秋に似る寂寥きたり我むれに迫るをおぼゆ別れて七日　近江　入千代

○たゞ一人机にありて亡き母をつく〴〵思ふ秋雨の宵　陸前　小若柳子

○花草をひそかに手折る心地して君まつ坂に昇りけるかな　函館　磯本島羽子

○谷の朝波聞はるかに舟見えて歸つそ人の歌にあるかな　水戸　圖子

○めさむれば夜の一時なり我が背子はいづこの人を抱きてねぬらむ　備前　むらさめ

○初霜のまだらにおける無花果のかげあはれなり山寺の冬　福岡　荒川芳翠

○月ふけて夜風身にしむ野を行けば虫の音ほそし秋のくれがた　熊本　秋月澄子

○そのかみの歌を抱きて偲べども血潮さわがす老いやしぬらむ　下谷　横谷孝子

○山少女歌唄ひつゝ夕焼の山にならびて茅を刈るかな　伊勢　山川つい子

○琵琶法師投げたる撥のけはひしてちるよ銀杏の大木の落葉　奈良縣　中富よしみ

○かばかりの儚き想ひわすれ得ぬおろかさ故に人のあなどる　美濃　ときわ子

○香爐は蓮の花を手折りしに似てこの君の帝を奪ひぬ　近江　小倉壽榮

○えび色の雲の彼方におはすめり夕空うれし暗き色よし　美濃　篠田きん子

○とらはれし甘き歌をのがるべく今はそれのみ憂ひてありぬ　福井縣　片山千里

○二十にもなれば女はおうなよと憚りもなく男は云ひぬ

○亡き父のもがりの鐘の音ききてよろこぶ稚子を見るがかなしき　越後　若林良登子

○潮ひさぐ旗ゆらめかし濱風はさすらひいでし我もすそ吹く　熱海　下澤とし子

○山の端に傾むく月を見巡りてほゝ笑む君をにくしと思ひし　麻布　花子

○秋風の吹きしく野道にたたずみて暮れ行く空を君とながめし　松代　中村ちか子

○何事も語らぬ君の御胸に吾この思ひうつるやいかに　磐城　佐々木君子

○操り袖を御頬にあてゝ日頃泣くやさしき君を思ひ出る日　磐城　正木ふみ子

○うちよする女波男波は美くしき沖見る君の足洗ひ行く　栃木　しのぶ子

○君見ればうれひかなしみはたうらみ忘れし如くあとかたもなし　高岡　みゆき

○いかばかり戀しと君は讀むらん異國に居てわがある空を　沼津　渡邊とよゑ

○桃割れと銀杏返しと島田髷粋の祇園の花の中行く　大阪市　鹿島綾子

○初秋の悲しき風に桐一葉散りしに似たる昨日の戀よ　大阪　平尾とき子

○枯野よし冷き石に身をおきて血冷えしわれをなげくにふさふ　やゑ子

○わが長きくろかみ切りて大海にすてなば淵はわづかに消えむ　北海道　屈　精子

○わがうたふ歌はかなしくなりにけりはしなく君と別れし日より　丹波　涙なき子

○あすきなば霧に睡すらむ紅薔の梭にも似たる君の心よ　濱松　平岩白薔

○　根室　富美子

○空渡る雁の一群影消えて小窓に吹きぬ初秋の風　美濃　正枝子

○谷川の清き流れにかげやどす白百合に似る君とおもひし　加賀　藤崎菊子

○我心さびしきまゝに秋草の花をつみてはつみてはすてぬ　滋賀　秋月花江

○わが心いつかゆめみぬ古郷の落栗拾ふ二人の少女　金澤　悠々子

○はらからの笛には惜しき月今宵都に琵琶をだく汝戀し　花井靜子

○秋風や戀しき君の歌讀みて夜ぞら眺めば月の微笑む　靜岡縣　浙子

○春の夜のおぼろ月夜の橋とも君を見しかなおぼろの中に　遠江　富永雪子

○病む窓をあくれば庭に散る一葉夕日に赤く染まりて落ちぬ　信州　芳子

○朝々に水清かりきはらからの髪あらひたるうらのさゝ川　備中　山田靜野

○霜枯や野の色あせし白薔の根元にありぬ虫のなきがら　牛込　なでしこ

○やるせなきむれの胸のくるしさを我思ふ君は知るや知らずや　奈良　たづ子

○失せし子の甦りして母と呼ぶ聲に覺むれば村雨にして　秋田　大山愛子

○海戀し野末の雲のうごきにも男波女波を思ふ吾れかな　越後　婦久子

○風吹けば加茂の小川におちもせん月より清き風のかずかず　麻布　江森美子

○夕顔の花に雨降る夕暮に古き思ひを辿り見しかな　櫻之舍濱江

○秋風は情もかれし空洞木のやうなるわれに强く吹くかな

宮城　手戸まさる

○實子とよびふと仰ぎみるひとみにも似たる男の子をほしと思ひき　西多摩　三ヶ島よし

○紅葉散る庭に黄菊もうつろひぬあかつき白む月のさむけき　臺北　神實美津子

○今知りぬ君が情のあだにして君が涙の僞りなるを　東春尾　星野なか子

○桃いろの薔薇咲く國の朝霞にほと吐息しぬ髪黑き人　磐城　岡田たけ子

○君かどに君や立てるとほゝゑめば匂ひこぼるゝ月見草咲く　茨城　渡邊秀子

○いづこともわかず花の香流れ來し刹那に古りし戀おもひてぬ　長野　古畑よしみ

○しら菊の大き花束造りけり病みます君をなぐさめむとて　徳島縣　野澤紫水

○病みてより戀する胸の血も枯れぬ今こりまたん死のたのしさを　新潟　佐藤岩子

○風吹きて淋しき秋の山里も君ませばこそ春と覺ゆれ　日暮里　細谷鏡子

○今日も又我胸の野を吹きあれて涙散らすや悲しみの風　常陸　木村なか子

○父ゐまさず母ましまさぬ冬の夜に落つる枯葉の響きをきく　信濃　降波多正子

○葉籠めて有りとも見へぬ紫の色美くしきとりかぶとかな　長野　古林千代枝

○ともすれば逢にし君のしのばれて戀しくなりぬ秋の夕暮　信濃　紫野米子

○古里や野にも枯ずしほらしく一本咲ける白菊の花　安房　神作いそ子

○君を見てみだれぬきよき胸の血は彼のあやつりのはれまはること　安房　富本重信

○かなしみはひしとせまりぬひとり寢の戸の外に鳴くこほろぎの聲　愛知縣　飯田久子

○夕もやに戀しき君が影消えて笛の音遠し初秋の空　麴町　牧野銀杏庵

○云ひしらぬ此のあたゝかきたのしみよこのなつかしき君が心よ　豊津　赤田すみ子

○そのかみの君に逢はむと途にも歸りて見ればかげもあらなく　麻布　石井露美齋

○冬の日は入江の蘆にうらがれて小磯の松を寒う照しぬ　沼津　中村あい子

○たまさかに戀しき人に逢ひぬるにはにかみがちに別れけるかな　東京　東郷映子

○誰はりも戀てふものもあらざりしわれの十四のうら若き日よ　熊本　金子茲子

○天國はちかしとよべる聲の降りぬ春の朝の大空のさま　和泉　金田香雲子

○君を見て胸はさわぎぬ東路の火ふく淺間のやまなりの如　松山市　曉子

○おん眉をうちても見たき心地すれ醉ひてわがこと責め給ふ君　攝津　寺部君子

○白銀の眞玉なりせば手に受けてきみにさゝげん萩の上露　近江　高田元子

○秋草におく白露と身をかへてやどらまほしき野べの八千種　武藏　大澤とし子

○日に三度湧き泉にくしけずる乙女にまじる撫子の花　香川　長尾ふじ子

○音かはすまてはれがはずたゞ君に我てふものを知らさまほしき　長崎　持丸たけ子

○耳たてゝきく曉や秋の譜を奏づる如し紅葉の森は　和歌山　木澤てる子

○君れたし笑みて語りし春の宵の二人を偲びなぐさめながら

○　大分縣　[illegible]部[illegible]子

悲しまず歎かず求めず暮す身は心にかゝる浮雲もなし

○　時雨

風もなき森の木立はさゞめきぬあゝ淋しやとひとりごとする

○　愛知　服部[illegible]子

何時か紅の玉我が胸に入るとしおぼえ昏睡に入る

○　京都　井上すみ子

君故に我れ歎きすといふ君の心の底をいかが知るべき

○　甲斐　細野やす子

いと惜き百の言葉の中にあるやさしき一つに[illegible]泣すも

○　讃岐　衣輪すゑ子

晩秋やなにゝ泣くらむ木立皆涙の如き雫こぼしぬ

○　下總　相川みよ

何となく袖の露けき秋の夜にあはれを添へてこほろぎの啼く

○　伊豆　深雪

いみじくも恐ろしかりき大神の怒れる如きつよき風の日

○　紀伊　田中富美子

十六夜の月の光りはかはられど見るわが影はいとゞやつれぬ

○　兵庫縣　米田比奈

わが知らぬぬくみ覺ゆれ夢かいな白き腕のわれをめぐれる

○　牛込　平塚白百合

椎の實はしきりにおちぬ此夕落葉かく子にみだれなく雁

○　土佐　竹島[illegible]子

故さとの人にかたらふゆめさめてあはれ身にしむ秋の夜の風

○　茨城　倉田政子

月照れり水のたまりし下駄の跡いり亂れたる小さき庭に

○　上總　菅野[illegible]子

靜かなる雨夜を一人文机に向いて想ふなつかしの人

○　三重　藤田とみ子

なつかしき古さと見ゆれ山かげの杉の入日に白鷺へゝく

○　大阪　靜[illegible]女

三日月のあるかなきかの光さへ宿るか庭のよもぎふのつゆ

○　京都市　長岡[illegible]子

蓮池を閉ずろ見て涙しぬあまりに君の髪のいみじさ

○　明石　落葉子

病む友を思ひて淋し秋のくれ庭の小萩に風そよぐなり

○　福井　米子

何となく人なつかしき夕空にあまりやさしき三日月の影

○　京都　季子

小暗き夜殿に立つ七神の十字架思ひ我罪に泣く

○　神戸　岸本新子

思ふ人死にたるのちの我魂よたがはず往れ天上の園

○　大阪市　雁來紅

我胸に培ふ花も香もなきにゑむ人のぞく心地もするや

○　播磨　さゝ舟

こほろぎの啼けゝ草生の細き路歩みかれつゝ月をめでけり

○　大阪市　山内溪子

君が名と吾が名と並べ書かれある十年昔の白かべに寄る

○　長野　淺田いと子

秋のはい弱々しげに馬の背を離れて暗きかべにとまりぬ

○　長野　淺田千代子

鐘の音も弱くゞりくる村里の秋の夕はさびしかりける

○　長岡市　田所操子

桑の葉に置く白露のほろ〳〵とこぼれて涼し野邊の朝風

○　宮城　齋藤ことじ

何となく歩みのおそき心地して胸高なりぬ君が家見つつ

○　徳島縣　野菊

拾ひたる部屋の箱の上に歌の紅葉そめし子やたれ

○　磐城　藤崎花枝子

水清き池のほとりに家居してふみよまんなど姉と語りぬ

○　伊豫　本多白萩

其時はたゞ心なく見し人のわかれてあつくむれもゆる意　信濃　片岡文子

○秋草はいと心地よき露あびてみ空に雁のとぶ夕かな　大阪市　京林千鳥

○たらちねの其の奥津城に身をよせて古を慕ふ秋の夕暮　美作　兵藤眞子

○おそろしき夢におそはれ夜の一時しみじみなきぬひとりねの身を　水戸　鶴ヶ谷秋川

○愛らしき野菊の花に文そへてまゐらせばやな都の友に　樺太　とき　わ

○青年よ闘將ははてぬ若き日のうた歌ふ子におん首たまへ　相州　菅原たつ子

○かりそめのざれ言なれど少女子はなみだ流して君怨じつる　神戸市　大塚みどり

○ほそ／＼と降秋雨の戸によれば何にとはなしに人の戀しき　信濃　丸山峯子

○御心はかくなおりそと祈るかな變りゆく空ながめやるとき　仙臺　みつ子

○たそがれに我が故郷の空見れば悲しむ如く黒雲の浮く　秋田　一葉女

○亡き母の跡にすがりて泣きたりしその狀態見たり病める夜の夢　秋田　加藤うん子

○我が戀になやむに似たり秋の日の空を走せ行く灰色の雲　秋田縣　白百合子

○かさこそと木の葉を誘ふ秋の風など吾が胸にかく響くらむ　秋田縣　濱岡みや子

○男てふ名のみなるらん君が名は弱き小女をあざむく男　秋田　本間てい子

○夕燒や黃金の雲は故郷の空前色づく日を戀ほしむ　德島縣　上野浦華子

○果しきなき曠野の塙のひとつなる星の光に慣るるわれ　金澤　つぼみ

○愛のそ矢當てられにけむ此胸は明け暮れ君を戀ひ焦ふなり　相模　小夜子

○月影を背にして濱の松風に合奏せし明笛の音を忘れめや　近江　太田靜江

○わが想ひあまりにながくは文しえず君よ許せよ來ませとよぶを　神戸　山本美代子

○草も木も夜の衣に包まれて露に宿れる星うつくしき　青島　綠陸女

○孤子のそろろと吹ける青き笛哀れなりけりわびしき夕　京都　大森秀子

○さらさらと音して落る柿の葉の色にも秋は知られけるかな　水戸　重子

○我を呼ぶ人あるらしく柴の戸を折々たゝく木枯の風　信州　山本操

○花園にいろ／＼咲ける菊どものかをり集めて朝風ぞ吹く　尾張　竹内ユウ子

○犬ながらかしこし使ひするなどと伯父のいさめし夜を思ふかな　東京　前澤百合子

○誰ぞやまた足音ひくく忍びきて心の鍵を寄いゆくらむ　北海道　清野千枝子

○暮れて行く海の渚にたゝずみて南の方に雷を聞く　筑前　中西まさ

○仄白ふ山茶花香る薄月夜柴の戸あけて待つ子を思へ　千葉　峰島晃華

○白菊と黃菊と赤の錢菊とたばねてやりぬ病む妹に　備中　篠原しげ子

○別るるも君をうらまじうつし世に我てふ少女忘れねば足る　讃岐　小野定子

○時雨の夜音なく落つる我淚をみつめてひとり物をこそ思へ　下總　月沖さゆり子

和歌

○　紀伊　三國寀子

戀といふなまめかしきを厭ひしは野の香に溺れし我ならざりし

○　牛込　星野愛子

草叢に少女とそだち平凡に人妻となるわれ安きかな

○　長崎　折口梅子

水鏡うつす島田のくずひきの白きが涼し青葉のひまに

○　秋田　野宮みるほ

月も日も矢を射る如く過ぎ去りて淋しき秋となりにける哉

○　秋田　白萩女

はら〳〵と樹木の落葉に秋見えて悄くも悲しき蟋蟀の啼く

○　本郷　望月麗子

泣く爲に世に生れしか消よす散る日數へて悲しむ我は

○　千葉縣　澄子

いづかたも同じ秋とは思へどもとふ人もなし秋の山家は

○　たつた女

亡き父と共に語らふ夢さめて窓音づるる木枯の聲

○　横濱　本郷靜子

曇りさえ見えぬ空をば眺めつゝふるさと思ふ秋の夕暮れ

○　四谷　味方てい子

淡はき山濃き青き丘月前に秋は横臥すわれの小さき

○　山口　翠月

夏の日に緑り茂れる池の邊を涼しと君の云ひませしかな

○　佐世保　山下靜枝

漁獲船荒波よする沖つ邊の風に孕ます眞帆片帆かな

○　本郷　渡邊三枝

秋の風おのれ一人のふかれ居るつらさ覺えて柱に倚りぬ

○　鳥取市　粂澤啟子

ざは〳〵と小波よする柳陰草やはらかに小牛ねむれる

○　長野　山口破寛子

戀に死ぬ少女のあるに二十二の尼君を見ぬ鳥羽の尼寺

○　上總　初子

秋の夜の月に花蹈さまよへば露に亂るる糸萩の花

○　熊本　立花登美子

君思みわが身果なみ灯の前に更しぬ秋の雨の夜の家

○　安房　菊田花子

あなさびし往き來るさの人影のうすらに見ゆる黄昏の町

○　福島市　若芋女

賤が家のまがきに笑める黄菊さへ氣高き姿失はざるを

○　本郷　田村波津子

七草に雨やはらかき朝の窓赤き色紙に歌かきてみん

○　矢名

なとめてふ誇はあれど何かせむ若き望の破れし今を

○　小樽　堀尾清子

妹の小瓶に活けし菊の花歌かく前にはらはらおちぬ

○　兵庫　松岡四季

城あとの石垣崩れ草生ひて秋のさびしき古里なりや

○　土佐　桃の花

目とづれば女性の中に戀人み打興じゐぬ吾れえ眠らず

○　長岡市　土田りた子

桐の葉は無心に遊ぶ少女らの上に一ひらまひて落ちきぬ

○　岡山縣　江田雅子

ふく風と蟲の鳴く音と相合ひてさびしき秋となりにけるかな

○　相州　浮嵐逢子

おぞましや忘れじと云ふ誓ひたゞ守りたりしを誇りとなす子

○　大阪　順子

初秋や亂れし髮もとかぬ間に直おろしぬ花召しませと

○　黑澤とよ子

さら〳〵とあらひし髮を肩にかけ水に端居す八月にして

○　上總　森婦美

敷島の道に迷ひて祈る時神とも思ふ師の君を得ぬ

○　神戸市　平田隆子

春雨によき顔をうたせそがひして神のやしろにぬかつける君

高知　吉本百合子

○

鳴けばきく聞けば悲しき虫の音に逝きてかへらぬ兄をしのびぬ　羽後　三浦ふみ

○

朝ぎりの戸ぼそにたてば大銀杏雫するなり山裾の家　門司市　松水みさほ

○

春のあめ墓門に落ちぬ色あせしつゝじはわれのさまにも似たる　金澤　藤永靜子

○

忘られし人なれいまに忘れえず秋のなが夜を雨に泣くかな　越後　吉田かほる

○

たゝずめる我黒髪をなぶりつゝ木枯すさぶ初冬の野邊　千葉　鶴岡一枝

○

眞垣なる五加木のうへに羽虫群れ雨降らんとす初秋のひる　大阪　日高青梅

○

うるみし眼靜にとぢて物想ふ君を思ひて一日をありぬ　しろぎく

○

ものいはず放ちやりける松蟲になぞへてわれをすてし君なり　東京　島崎錠子

○

朝夕に君とかはせし言の葉も文のたよりとなりにけるかな　東京　渡邊霽子

○

來訪ふ人みな母の噂してわれをみるかとなつかしきかな　能登　近江かのゑ

○

何となくただ何となく忍ばるる母ある窓に雁叫ぶとき　越前　浮草子

○

うきかかる身にも親しき筆ありぬ胸のいたみをただこれにこそ　京都　安岡ふみ子

○

京の朝手桶もちつつ井戸端に水汲みに行く霜ふみながら　大阪　孤月

○

白波に失せし帆のかげなつかしく袖をかざして海見る日かな　備中　原こみれ

○

上洛の行列はてゝ街道の松の並木に春の風吹く　廣島　岸村文子

月出づる山の彼方に君あるをおもひつゝ汲む山の井の水　大阪　西戸政江

○

春の神來ませしごとくわが胸の野は春めきぬ君を見しより　土佐　梶原しげ子

○

冬の日の柱にもたれ七色に立つ湯氣などに興じゐるかな　美濃　村井かれ子

○

君とすみ早や一年の春すぎぬ今日も御寺の鐘の音きく　千葉　宇井花月

○

見て笑めば彼れ又笑みて頬をそめぬ傘の中なる春のわかうど　廣島　すゝき

○

はら〳〵と花ちる夜なり世にあらぬ戀しき君と夢にかたりぬ　長野　小池天涯

○

坂本をいとたのしげに里の子がうた唄ひつゝ馬曳きてゆく　大阪　秀米

○

今宵わが夢に胡蝶の身をなして訪ひたまへかし懐しききみ　富山縣　峰の家

○

風ぬるうわが頬をふきぬよき人の黒髪のごと花の香のして　東寺尾　たけ子

○

夕暮はまたなくさびしいつとても君戀ひ居らぬ時ぞなけれど　大阪　順子

○

くれなゐの扇も双の袖も手も舞へば美くし百の灯の殿　富山縣　峰の家

○

日はうすく青葉の風は和ぎて小庭靜かになてしこのちる　大阪市　井上芳尾

○

續き目また續き目の幾萬とすれあひてゆく除夜の街かな　金澤　村田秀月

○

我胸の野に咲く花は明春に君來てつまん日をまつものを　千葉　宇井花月

○

鰯の羣に似たる白き鳥うちむれて飛ぶ秋の海かな　備中　原つ子

○

櫻貝ひらふ三人の黒髪のほつれにかゝる紀の海の風



○規定　論文と云へどむづかしきことにあらず讀者が考へしことと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論議を歡迎す二十四字詰三十行以內一人一章に限る乙種の賞を送呈す

○禮容を傷くる儉約（地賞）

伯耆　篤枝

儉約はせねばならぬ事であります。がしかしそれも事に依つては、折角の儉約が其の功を表はさない許りか、反つて人に惡感情を抱かせぬ事がないとも限りませぬ、例へば、進物にする反物を包むに皺になつた半紙一枚で、横から反物が顔を出しかけて居るのもかまわず、幾度も職分を盡し終へてくちや〳〵に折れた一寸さわつても粉の出るやうな水引で、無造作に括つてそれで宜しとする、こんな事はよく見受ける事ですが、これなどは儉約のしかたを誤つて居はせぬでせうか、僅の儉約をした爲少なからず品物の價を下て見せます、斯う言へば形式はかまわぬと仰有る方が或はあるかも知れませぬが、これは外見の美のみに止まらずして大に禮容に關係すると思ひます、受けた方から言へば、折角の進物も餘りに外見が無作法のため、入らぬ物でも貰つたやうな妙に辱かしめられたやうな、あんまりよい氣持はせぬものであります、これに反してさまで高價な紙や水引を使はないとも、禮を失はない樣にしつとりと包めば、其の中に言ひ知らぬ尊敬の意が溢れて先方をして快く受けさせる事が出來ます。

又病氣見舞をやるのに、今日は魚が高いからまあもつと安くなる迄と、知らぬ顏して居て、偖て安くなつてから、少しも存じませんのでと形ばかりの見舞をいふ。これも珍らしからぬ事です、何といふ間違つた形でせう、其のやうに儉約せねばならぬなら、何故見舞の品は持たずとも、病氣と聞いて早速馳せて行かないでせう、然らすれば病人に取りましても、其の質朴でしかも眞心から出た厚意を、如何程か嬉しく思ふでせう。

以上は些細な例に過ぎませんが、私は皆樣と共に此儉約を甘く活用して行きたいものと思つて居ります。

いかにも洵に些細な事ですけれ共貴き實驗から來た教訓がひそんで居ます、感情聯絡を重んじた點を尤も多しとします。(評)

○筆まめ（入賞）

伯耆　佐々木とさ子

人間は一體に感情の動物て、殊に私等婦人はさうなのて御座います、誠に一寸したことて、それが嬉しくもあり、悲しくもあり、腹立たしうもなるものです、てすから私等が人樣と交際をしてゆく際には、何時もその邊をよく考へて居らねばなりません、この節調をよくわきまへてゐるのが取りも直さず交際の秘訣なのです、筆まめに手紙を出すといふのもその一つでしよう、例へますと年始狀のやうなものです、よく人樣はあれは全く虛禮だと仰しやる方がありますけれども私は、必ずしもさうてはないと思ひます、虛禮のやうにも見えますけれども、そこが一寸の感情具合てす、例へ平常は御無沙汰をしてゐても、年始狀一通て、相變らず、交誼をつないてゆけます、筆まめは年始狀のみてはありません、一寸したことでも直ぐ御禮の手紙を出すとか、四季の折々時候の御見舞狀を出すとか、するのは、どの位先方樣の感情が違ひましやうか、斯くすれば共々の交際は幾何遠方にゐるとしても、何時も溫かに、末永く續けてゆくことが出來ます、福澤諭吉先生が『久しく水を入れぬ田は枯れてしまふやうに、久しく筆を入れぬ交際は枯れて仕舞ふ』と言はれたのは私共の、常に心懸けて居らねばならぬ、お言葉だと思ひます、筆まめならば、從つて交際が廣くなつて來、又次第に、細かに、溫かになつて來ます、これが修養にもなり、立身の基となるのは云はずして明かであります。

これも常識に富んだ穩健な議論であります、但「筆まめ」その事を義務一通として見てはならぬとと思ひます。(評)

【秀逸】

○善人とお人好し

濱松　平岩白菊

善人とお人好しとは、一寸同じに聞えますが、決して同様では無いと思ひます、例へば西へ行きませんかと言へばハイと答へ、東へと云へばハイと應じて、一寸も反對の意見を出さない人、是れ等が所謂お人好しと申すのではありますまいか、(もとより例への一部には過ぎませんが)、次に善人と云ふのはどう云ふのかと言へば、自分の善とするところに從つて、或は困難す

る者を蔑み歎ひ、或は公然と罵つたりする人を申すのでしやう、て善人の方は人から敬はれますが、お人好しの方は一寸丈けの交際はしても、蔭では却つて輕んぜられます、若し假りに日本國民が悉くこんなお人好しであつたならば、必らず外國から侮辱されるでしやう、かゝることは私共女子と雖屑しとしないのであります、皆さまどうか徒らにお人好しとしてあるばかりでなく、善人となつて善を實行していたゞきたいものであります。

論じて惡くさとる所はあるが、主意のあるところは通つて居ります、一寸面白いところを云ひました。序に申ふ投稿は半紙を竪にして書いては困ります。(評)



演說　茨城　小堀みち子

○ものさし

金澤市　藤原靜子

休みの鐘が鳴つたので皆樣は思ひ〳〵運動場にお出なすつた、私はまだお衿が着かぬので少し殘つて仕て居りました、教室には村田さんの外誰も居らつしやらない、此時私は思ひました、誰の「ものさし」を見ましてもちやんと御自分の名を書いてあるのをお持ちの方は至つて少ない、皆見ると何年前かに卒業の方ののや、又は他の組の方のお名前が書いてあります、そして裁縫が終ると當番の方が元の通りに集めて、何年の何組といふ箱の中

へお仕まいになる、さてこの次また裁縫の時當番が之を出して名前などしらべないで、ずん〱上から順々に下さるて私思ひました、如何してこの樣に圖々しく人のものを用ふんてせうまさか女學校へ出る樣な家庭て「ものさし」一本もたせないってそんな馬鹿な事はなし、皆入學の時にちやんとお針が何本に、札つけが何本、針箱やものさし、糸まきはさみ、すべてにちやんと札をつけてそろへてお持ちてしたのに、もう三年位になると自分のものは失せて、人が用ゐ、人の物は自分がつかふと云ふ風になるのてす、こんな事は何處の學校にもまゝあらうと思ひます、之はやつぱり横着と云ふ所から來たのだらうと思ひます、こんな事は下級には例の少ない事て上級になる程たくさんあります、人は學問の進むにつれてみな一般の事が進まなくてはならんと思ひます。

いろんな物理や化學や代數、幾何などとそんな事ばかり知つて居て、肝心の品性の習養が出來て居なかつたならば、何の價も有ません、永い間人の世話によつて學校へ通つた甲斐がないと思ひます、だからものは智識て知ると共に之を行ふと云ふ風にいはゆる智德合一といふ事に心がけて居たならばどんな立派な人格に達せられることだらうと思ひました。

裁縫な乏しき人達には好い誡めになります（評）

○安眠について

伯耆　新田文野

人躰を、保持して行く上に於いて、安眠は、大切な要件の一つてす。其安眠を、得んと思へば、先づ精神を平和に圓滑に、養つて行かねばなりません。精神が種々にみだれて居ては到底、安眠は出來るものてはありません。世には、隨分此安眠を得ることの、出來ざる人が澤山あります。殊に、近時の、青年男女の内には、少しの事情の爲に、懊惱とか、煩悶とか、兎角精神の平和を失ひ、安眠を得ざるものがあります、妾の友達のうちにも「妾、夕べね、一夜悶えて、うつうつしてゐたわ」など話して青ざめた、顔して返つて、それを自慢さうにして居るのです、其原因は？、つて、尋ねて見ますと、自己のつまらん、虚榮が達せられん爲めとか、或は、ちよつとした、小説にかぶれてとか、ほんとに、聞くさへ、耳がいたくて冷汗の流れる樣な、心地がします。これは、誠に歎かはしい事であります。一躰、煩悶とか、懊惱とかは、十中の八九は皆、自分がつくるので結極、精神の修養のまだ足らない爲てあらうと思ひます、てありますから、吾等は、精神の修養を心がけると同時に、安眠を得るよう、心掛けねば、なりません。

大變困ております、それにはよく讀くのが一番だと思ひます。(評)

○婦人の修むべき學問

磨　志　緒

婦人が男子と同じ樣に學問すると云ふ事は、獨身主義を主張する爲でもなく、男女同權論を吐く爲でもありますまい、要するに良妻賢母を作る爲、又一ツには女と雖も一の職業を身につけて、何時如何なる不幸に遇ふとも安心して世に立ち得る爲めの學問だらうと考へます。

それ故決して女學校卒業したから立派な婦人になつたと言ふ譯でもなく、高等小學だけ卒へた者に婦人たる資格が無いと言ふ事は出來ますまい、つまり其人の心得一つでどうにも成る事でせう。

高等の敎育を受けて外國の事狀にも明かになり、各國の歷史にも通じて居るとは誠に結構な事ですが、アルプス山の高さを知つて居ても、其敎室其校舍の高さを知る人は幾人ありませう、ナイル河の長さを知つて我家の前を流れる川の長さ水源地を知らぬ人もきつとありませう。

貴孃のお郷の人口は或は面積はと尋ねられて早速御返事が出來るでせうか、西洋料理の數々を學んだ人が日本の野菜をお料理するに困りはしますまいか。やがて一家の主婦となり夫をたすけ、老を養ひ子女を敎育するにあたつて、アルプス山の高さや、ナイル河の長さは知らずとも、直接家庭に必要なる種々の要件を修養時代に充分心に入れて置たならば、決して女學校を卒業せずとも、高等の敎育を受けずとも、立派に一家の主婦たる價値がありませう。

つまり婦人のすべき學問は、日常生活に必要なるものを第一として、其餘暇ある時は己が好む學科の一を充分極める事で、決して、あちらにも、こちらにも手だしをすべきものでない、二兎を追ふ者は一兎を得ずとやら、種々の事に心をむける人は何成功する筈がありませう。

堅實なる見なれども、いさゝか抽象的及び消極的に失するが遺憾に思はれます。(評)

○心の敵

越後　木島磯巾著

たつ鳥も落す勢の方でも、幾萬の敵を前後左右に切り拂ふ武夫でも、得勝てぬは何でしやうか、心の敵！即ち我が胸に時たまおこる邪念です、此の邪念に打ち勝つと云ふ事は、誠に困難な事でムいます、然し打ち勝つた時の心持ちはどうでしやう、私は聊かの事でも是

非に愉快に感じます。たとへば一寸とした時に自分が忌々しまぎれに卯鉉云はうとして、待てよ云はんが云ふにまさると云ふからと、こんな事が思ひ出されて默る事が度々ムいます、さあ其時の心と云ふものは、全身の血が胸に張つて、旅順口陷落の號外を見た時よりも猶驕りの笑を頰に表はします、僅か是れしきの事でさへかうですもの、あらゆる心の敵に勝つたならどんなでしやう、大いに驕つて然るべきです、斯くしてこそ聖人とも尊れます、優れて強き武人さへ得勝てぬ心の惡魔に戰つて、勝利を得つゝ開け行く今日に活動して、淸麗なる第二の國民たらん義務は充分に有して居る事と思ひます

山中の賊は平げ易く心中の賊は平げ難しと古人も云ひました、その妄念に勝つた時の快は書いてある通りですが、さう矢鱈に「大に驕つて然るべき」ては無からうと思ふ、何となれば其れは又敗れるからである。(評)

○愼言

千葉縣　石塚澄子

世の諺に「口は禍の門」、舌三寸の囀づりに五尺の身を果すなどと申ますが、之は、誠に善い戒めで御座います、惡い行は改むるに憚る事勿れとか申まして、改めさへすれば罪はなくなりますが、一度口から出た事はとりかへしがつきません。男子でも婦人でも言葉を愼むのは大切な事で御座いますが、殊に婦人は愼まなければなりません。言葉のさからい方が惡いと、其の爲めに親戚の間柄が絶えましたり、又他人との交際が破れたりすることが世間にはまゝある事で御座います、親戚や他人位ならまだしも大きくなりますと國と國との交際を破る事になります。昔承久の亂だの何々の亂だのと申ます世の亂れは其原因を正して見ますと、大抵は婦人の口から出ましたことが元でございます。そればかりではなく惜しむべき英雄豪傑が、志を屈げ身をあやまるのも大かたは婦人の口に迷はされたので御座いますから、このやうな事を考へましても婦人は猶言葉を愼まなければなりません、それ故私共も愼まれる丈言葉を愼む心得で御座います。

饒舌家に對する一針。(評)

○富に就いて

神戸市　田中喜葉子

人生最大必要品を、富ときめるのは、あまりに、物質に偏した見解ながら、衣を得るにも、食をとるにも、又住を構へるにも、先づ富は必要てせう。社會國家の、原動は富てせう。さすれば富の研究もし、意義を解して、使用法に熟達すると申すことは我等の務めの一てせう。

富は公寶である。決して我寶と思つてはなりませぬ、

財産家と雖も、恐く奢侈をする爲に、授つた金錢は只の一厘もありますまい。學理の研究、新發明、慈善、公益、文明人道を助くる事業に、餘財を、散する爲てせう。貧者と雖も故なくして、他人の餘財をでも受けてはなりませぬ。忠實に、職業に勉强すれば、この公費は自然得られます。この公費の、貸借に當つては「金錢は兄弟も他人」といふ心掛が必要です。情によつて、金錢を貸す位ならば、與へてしまふ方がいゝてせう。情によつて貸すのは絕對的不贊成てあります。

以上は割合に我々に遠いてすが我々は金錢に對して如何な處置を取るべきてせう。



氣まゝの人　失名

この公費を受ける權利のない私どもは、入るを量るよりも、出づるを制する方が、肝要と思ひます。節儉は、青年に於ける、品性修養の一てあります。不善の根本たる私慾を抑へる事は大てあります。

翻つて、現今の日本は、金錢を賤むべき時てはありますまい。よろ〳〵く富の研究をつむで、男子ば大いに取り入れる方法、用途々、量り、女子は保管と、出ずるを調節すべきてせう。

思索發表の態を得たものてあります。（評）

○方言を矯正すると

京都　井上澄子

「言語は君子の樞機なり、」と申すことは、何やら本て見たやうに思ひます

が、これは獨り君子ばかりぢやありません、私等凡人に至るまでの樞機であることは、申すまでもないことであります。

私の父が、曾て北陸地方を旅行した時、ある宿屋に泊りましたら、立派な娘を、あんまさんと呼びますので父は、按摩さんなら足を擦つて下さいなと申しました。と、その家の主人はこれを聞いて、大さう怒つたさうです。聞いて見れば、姉のことをあんまと呼ぶのだと解つたと申してゐました。で私はこれが爲だとは言ひませんが、地方の方言などは是非矯正して、我が國の標準語たる東京語を使はねばならぬと思ひます。そして、色々の方言があるがために、同國人でも、互にその思想を完全に交換することが出來ず、否寧ろ對話者をして、かりにも惡感を抱かしめるやうなことがあるのは、甚だ歎かはしいことだと思ひます。尤も言語に就ては孰れの學校でも、餘程注意をしてゐらつしやるさうですから、學校に居られる間は、怪しいながらも標準語を眞似てゐらつしやるけれども、卒業なさると、生れ代つたやうに方言や訛りを使はれるやうな方があるやうです。が決して遠慮するには及びません。そりやある人によると、お轉婆だとか何だとか言つて笑ふのもありませうが、聞く人が聞いたら感心します。縱し今俄にと申しましても、それは不可能なことでありますから、お互に、方言などを矯正するのは勿論のこと、これから世の中へ出やうとする所謂第二の國民を育てる大役があるのでありますから、それ等には是非標準語を使はすやうにしたならば、如何でせう、そしたら、一人が二人となり、二人が四人となり、終には五千萬の同胞が同じ言葉になつて、北海道の人と九州の人とでも何の曖昧もなく、自分の思想を遺憾なく交換することが出來て、私等個人々々の益のみではなく、國家にもまた、貢獻する所、少なくはありますまい。

此遺憾あるは誰も同樣でありますが、具體的の案がなくば容易に論じられません。（評）

○結婚につきて

山城　松田きぬた

誌友の姉樣方の中で、已に家庭を作られし、お方も多數ありませうが、妾は未婚の誌友方に、お話ししたいのです。

近頃流行の獨身主義論は、識りませんが、結婚は莊嚴神聖の一事で、面白可笑く、呑氣に時日を浪費するが目的でありません、人世の一大義務を負ひ、完全なる發達を遂げ、圓滿なる目的を、遂せんとする、階段なれば、快樂とより寧ろ職分と云ふは、至當でありませんか。

凡そ、男女を問はず、結婚時代になると、いやに虛榮

の奴隷となり、依然の心機一變、身、懦弱に流れ粧飾これ日課として、天職を打捨て省みざる傾向あり、徒らに衣裝を飾り、身分不相應なる、自由結婚など擔ぎ出し、親に强ゐて花々敷結婚して貰い、あとは借金の深淵に陷り、生涯頭の擧がらぬ樣になり、折角凌雲の志も何處へやら――、氣は沈み精神的病者となるは、是れ結婚を最快樂となし、最後の目的となせる、不心得に歸した故て、これ一般今日の弊風て、大に反省を促すのてあります。

抑も、結婚は人世の最後の目的でなく、目的に到着する方法なれば、結婚前よりも結婚後の、精神修養が肝要でありませう。

終りの一節本論の主眼。（評）

○病は仇敵にあらず

函館　もみぢ

病は仇敵ではなく、むしろ人生の一大幸福と申すべきものであります。と申しましたなら、何んとやら、暢氣らしくも聞え、又病者に對して失禮です。然し、私とても、身に覺えのないことは申しあげません。

不治の病者ほど幸福なものは、ないと私しは、常に、思つて居ります。人生に於て、最も貴重なるものはと、言つたならば、誰ても生命と申さるゝてありませう。何故かやうに皆樣は生命を重んぜらるゝのでありませうか？、それは一度生命を失へば、再び得ることが出來ないからて、皆樣は病を敵といたすのも前に述べた理由だらうと、思ひます。然し其不治の病に、苦しんて、居るもの世に、限りなく、あるので、病者は、同病者に對して自然おもひやりの、心が湧いてきて、病者は同病者によつて、慰めらるゝ事が出來ます。又同病者ばかりてはなく、健康なる人より、同情を寄せらる事もありませう。これらの人は、眞に、同情心に、富んだ人てあります。然し世には無病にて幾萬圓の財產を有して居ても、病者貧者に對して、同情心少しもなかつたなら世の人は、其人を、何といひませうか。決して人格の高い人とは、申しますまい。實に卑劣な人といふべきです。ですから、健康や黄金によつて同情心の得らるゝものてはなく病苦しき、病床にて、人生の一大幸福の同情心は鍛へられるのであります。て英國慈善家フロレンス、ナイチンゲール女史の如きは同情心に富みクリミヤ戰爭の當時奮つて戰場に赴き傷病兵を看護しましたなど、されば、傷病者は女史をエンゼルの如く敬ひ世の人は女史を摸範と尊敬するのも、同情心に、富んて居つたからて、あらうと私しは、思ひます。

かくても、皆樣は、病を敵といたしますか。病がもしも、敵としも、私達に人生一大幸福を與へるのですから病に對してむしろ感謝すべきでありませう。

議論散漫、誤解を惹き易い、再考徹底を望みます。（評）

散文詩



○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式は問はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十九行以内にて凡て振假名を要す賞は乙種

○倒れた少女（地賞）

茨城　黒澤とよ子

寂しかつた日も、涙のうちにくれた。うるんだ目をとぢて、枕につくと、ふと目に浮んだのは、にぎやかな都會の、夕ぐれてあつた、皆んな、せはしさうに歩いてゐる。田舍の少女がひとり、あてやかな都の人にまじつて歩いてゐる。少女は、逢ふ人ごとに、何か尋ねてゐるらしいが、言葉が通じないのだらうか、都の人は、少しも取り合はず、足早に、さつさと、行き過ぎてしまふ。少女は、いよ〳〵途方にくれて、もはや涙ぐんでゐた。日は暮れてしまつた。少女はやはり、同じ道を歩いてゐる。電氣の光がするどく、パッと少女の顔にさした。少女はびつくりして、其處に倒れた。ハッと氣がつくと、私は、何ものかを、暗示されたやうな、寂しい、思ひで覺めた。

女らしい想ひが閃めいてゐる（評）

○ランプ（人賞）

牛込　星野愛子

或夜は非常にあかるくて
月暈するやうな、
且つ又酔ふやうな……其華かな光。
而し疲れた雨がしほ〳〵と
悲しいさゝやきをして降り出すと、
ランプの光りは
細く目をとぢかける。
此麽ときはいつも〳〵
泣き度くなつて、
そうして華やかな光りのときを、
つく〴〵と追憶だされる。
私の胸の中には
此の小さなランプが
いつ迄も明滅して點つてゐる。

才の働きで好く見える作だらうが、矢張淺い（評）

【秀逸】

○街のさけび

秀枝子

大空の雲々、
塔の尖端
河岸の白楊、
萬象は嘲笑つて居る。

私は街の路に蹲居んで、何を考へて
居るのだらう。―――
絶間ない
轍の遊鳴り―――、鐵路の響き―――、
汽笛―――、半鐘―――。
こんがらかつた濁りの叫び音は、幾
重にも私を取り巻いて、塵深い大路
の眞中へ連れて行かうとする。
思はずもハッと驚いて、小草の根に
縋つて呼吸づいたとき、野の心と私
の心とはしつくり溶けあつて、靜に
低う野の歌をうたうと、しみ／＼と、
淋しい思ひがした。
ふと見ると、甍を連ねた華の街が夕
日に輝いて、雲もほゝ笑んでゐる、
塔も光つてゐる、白楊も踊つてゐる、
一としきりとよみ聲が今締められた
街に背いて、私は周章て眼を閉ぢた、
耳を掩ふた、心の奧ではもう泣き叫
んで居る。
かよはい身體と心情とを、野の抱擁
にまかせて綠草の上に打ち俯したと
き、街のかなたから高らかの嘲笑み
聲が、一齊に起つて來た。

誇張した感興が能く現はれて居る、併し作者が傳へやうとした深い或るものは分らなかつた（評）

○明るい町

神戸市　田中落葉子

三つ―――四つ―――五つ―――
頭をあげるとぱつと強い電氣瓦斯
燈の光
私は無意識に暗い町を出て
賑やかな／＼町の橋の上に佇むで居
た
暗い淋しい胸を抱いて！――
結ひたての髮―――着飾つた着物―――
帶
私の前を通つて
すう／＼／＼と夢の樣に
暗い町から明るい方へ行く人
明るい町から暗にかくれて行く人
明るい方へ行かうと私は思つたけれ
ど
どうしても行き得ない
晝よりも明るい町を透かして見た
幾度も幾度も―――
何となく恐しい
また透かして見た
歎いたこの町
あゝ今日も明るい

思ひ着いた場所は至極好いのだが思想が薄弱だ（評）

○葬られて

神田基子

暗い、冷たい、じわ／＼してゐる。
手探つても／＼、鐵の戸、石の壁
眞暗だ。寂しい。什うしたんだらう。
世界だらうか、活きた。
奈落の……………底だらうか。

忽然、響きが、頭上で。
さうだ、私は葬むられたのだ。
時代に葬むられたのだ、忌々しい。
残念だ。未だ死にやしない。
逃れたい。〱、什うかして此墓所
を。
鐵の戸、石の壁、
嗟、寸鐵も帶びぬ身が。
茫然と見あげた。
駄目だ〱、一寸の隙もないもの。
古い〱空氣は、やつぱり私を、
力の限りおさへつけてる。

面白い詩だが餘りにこへがなさすぎる　(評)

○寂しき野

伯耆　佐々木　とさ子

私は靜かな秋の野に立つてゐる
叢のなかに幽に鳴く虫の聲は
夢の國からのやうに聞える
秋草の花の色も、空を流れる
雲の姿も寂寞の色と姿だ
そしなべて天地には悲哀と
寂寞の大氣が一ぱいに滿ちてゐる
日の光がパット射す、直射光だ、
透き通るやうな光と、雲に遮られて
屈曲した反射光とが、隱やかな明暗
を作つて、花の色と寂しい照合をす
る、雲は次第〱にフワリフワリと
流れる又一時透き通るやうな日の光
がパット射す四邊の景色に恍惚てゐ
る心の中まで透き通るやうだ、
寂寞の天地の色は明かに明らかに、
私の心の鏡にハッキリと印象する
心のなかに秋の天地があるやうだ、
虫の聲は丁度心のなかにある
新愁が幽な聲をたてゝ
訴たへるやうに聞える。

技巧はなか〱傑り難い　(評)

○蠅

田舍　頻

まばゆい程照り切つた好天氣である。二時下り。先時から、南の窓の上に。一匹の蠅が、何を考へてるのか、じつとして居る。毛の様な足を動かさないで。たつた一匹。私は動く迄と、見て居る。と。すく〱と、楓の葉が鳴つたら、吹き拂はれたのか。夫共。

又。一匹の蠅が飛んで來て。いきなり、其沈默してゐる蠅の脊に、乘つた。あゝ。

私は、其下になつてる蠅が、可愛相でたまらなかつた。

て。そうつと寄つて。トンと、窓を叩いたら、二匹の姿は、一時に消えた。

軒から、幽かな〱、煙の様な物が流て出た。

何だか、ぼんやりして終つた。

○走る心

横濱　ひまはり草

灰色の雲が、重く厚くかさなつて、そらは暗い、曇つて、矢の様な雨がふる朝だ

長い坂を私はせつせと上つてゆく、

坂道のはずれの小溝を、黒く濁く濁つた雨水が、上から押されて、激しい勢力で、流れてきた。

私はたちどまつて見てゐる、

水はその小さい聲を、いつぱいに、あげて叫びながらながれる。

野ぎくの花がしほらしい莖をなびけて激した水をなだめやうと、したけれど、こんなはげしいいきほいで、走るのですもの、止めやうたつてとまりませんよ、走るところまでは、はしらずにやみませんもの、人間の手や、心で關を設けたつて、のりこして流れるのを知りませんか、

と云つたやうに。

私はうれしくなつて、水面をながめた。

○淋しき聲

日暮里　細谷　鏡子

寺院の家根で白鳩がしきりと鳴いて居る、悲哀のこもつだ聲だが強く〱胸に染み入つて、ふと夢の様に悲しい過去を思ひ出した。

ひとりでに涙がでゝくる。

あゝ何て淋しい夢なのだらう、
あれあんなに鳴いて居る、
淋しい〳〵、
私は胸を抱いて、つと机につゝぷした。

○幻覺

大分 原田澪子

顔は人、體は獸。
無慙！美しい顔に、鼻木通して。
あら、什麼しやう、妻だ。
淺ましい、恥かしい、情ない。
「親の因果」と、説明の男が憎い。
「自ら招いだ女の罪」と、
乙女の爲めに、叫び度いが、
人から墮ちた悲しさ、口が利けぬ。
張り廻した幕の間から
朗らかな月夜の海に、
男波女波が、金色に光つて見ゆる。
ああ、自由、處女、戀、束縛、獸。

○冬の黄昏

相州 菩涙たつ子

跛足の疲憊に蹌踉と放浪ひよる痩犬が
貧しい眼の色が眸に一ぱい
肉もあらはな脱毛のあとに かたまつた黑い血痕
が附いて居る
濁江の面……ふる〳〵と顫く影
冬のたそがれ
赤い日の黄な弱い光が
森の木立に躊躇ふ
音もなく香もなく色もない荒野は丁度盲人の落
魄のくらい影に似た淋しい眠りに就かうとして
……
道ばたに落ちて居た白いハンカチーフ

若者の燻つた匂ひが、私の冷い胸の血と接觸る
誰もゐない
灰色ッしゞまに青いみどりが一葉でもあつたら
この赤い血はどんなに喜ぶだらう
ふと夜ゝ鐘の凄いわらひ
赤い星のやるせないおのゝきのうれへに
包まれて冷たい曠野は
えたえぬ幕に蓋はれて行く
邪宗の寺の塔がもせんで居る
病院の壁が赤褐に沈默したまゝ……
冬の黄昏
青年の匂がこひしい
あらゆる恐怖のかたまりが灰白の歌をうたふて
る中で嘲笑みかへして見たいほこつて見たい

○河

深川區 持田紫子

濃黄色く濁つた水が、ジャブ〳〵微かな音を立て
ゝ、岸の石垣へ噛みつく、
トロ〳〵と流れて居る水の上を、石を滿載した船
が、うめきながら辷つて行く。
ヒタ〳〵と艫をたゝく水の聲を聞け。
あの同情ある慰安の音樂を……、
船は苦しさにうめきながらも、水に慰められてノ
タリ〳〵と進んでゆく。

汽笛が鳴つた。
向川岸の工場からだ。苦しさにたへられない、と
云つた様な音色だ。
その音が、濁濁つた灰色の空をぐる〳〵と旋轉し
て段々と消へてゆく。
船は依然、ノタリ〳〵と下流の方へ下つてゆく。
又、汽笛が鳴つた。

○風の日

新田さゝ舟

風が吹く、雨が降る、私は硝子窓の中から
向ふの硝子窓を見てゐる。硝子窓がガタ〳〵ゆ
らいてゐる。
動くたびに白くなつたり眞暗くなつたりする。
そしてガラスの面がかう、動搖してゐる様に思
はれる。又白くなつた、と思ふと又暗くなる
絶間なく動いてゐる。
窓の中の女の人はぢつとしてゐる。
何か見てる様だ。一心に……
窓の動くのも氣つかない様に、平凡てゐる
と雨の中を大きな鳥が飛んでゆく、
何の鳥か知れぬ。何だかぬれてるのを見ると
悲しい。淋しい……
風が吹く、雨が降る、ガタ〳〵とひゞく。

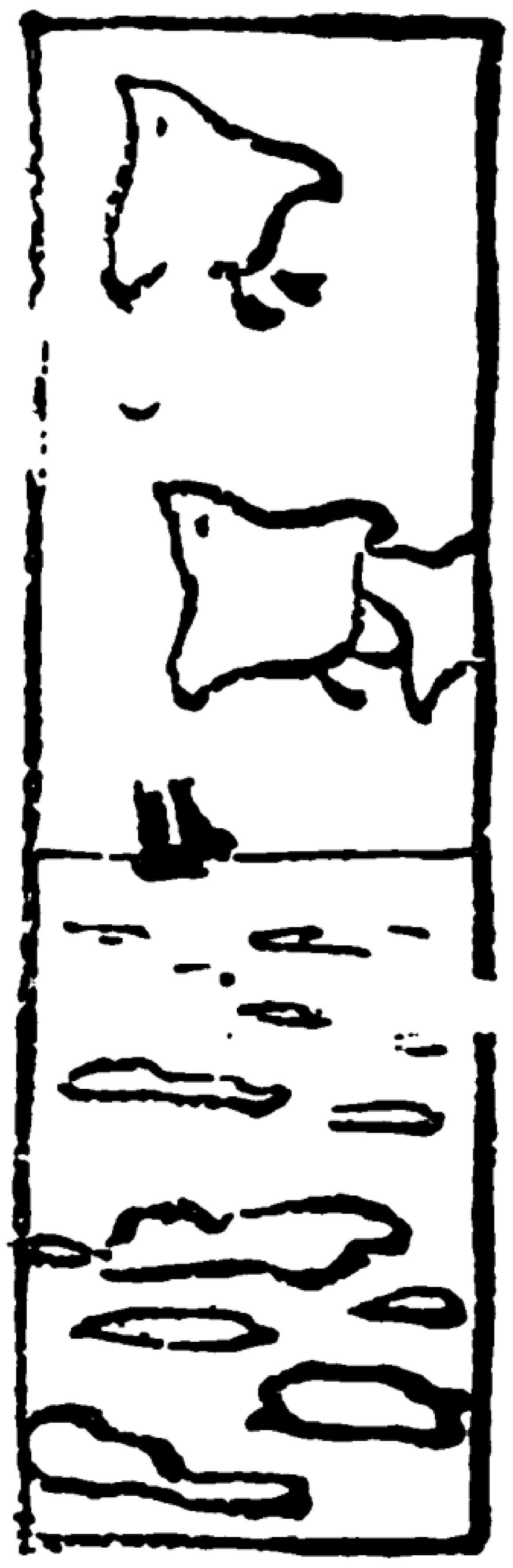
○白壁

千葉春枝子

わたしの胸の白壁に、だれだか字を書いた。
いつの間に、だれが書いたらう。よく見ると男
の手だ。
そして男の名である。
口惜しい奴——汚一つなかつたこの壁に、こん
な惡戯をして——。
消さうかしら？
消してしまへ。
がなんだかこはいやうな心地がする。
惜しいやうでもある。
さうなつたら、消いた人もそんなににくゝ思へ
なくなつた。
これじや此の名は永久に、この白壁に刻まれて
あるだらう。

短文

中村文學士選



〇規定　短くして氣の利いた文章を募る十七字詰七行以內凡く振假名つきハガキ」許さず一人一件限ること賞は丙種を送呈す

〇私の心（天賞）

遠江　高田もと子

今し沈みかゝつてゐる秋の夕日は小草を血の樣に染めた、見るとコバルト色の夕空が悲しさうな空を彩つた哀れな漂浪者が何處と知らず、さ迷うて居るやうに、靜かに、靜かに、動いて行く、あゝ私の心も、あの樣ではあるまいか。

無限のさびしさ。

〇風の夜（地賞）

名古屋　月女

壁の破れから月がさして居る、掛金のはづれた戸が風にバタ／＼として居る、半町程はなれた防風林に一トシキリ風が鳴つてはつとやむ、やむかと思ふと又鳴る、遠くで犬が啼いて居るのが手に取る樣に聞こえる、灯が風の息と共に太く又細く。

妙手。

〇秋が來た（人賞）

秋田　大山愛子

とう／＼秋が來てしまつた、天の川原へ夕涼みの星も、だん／＼影が見えなくなつて、長木橋へ散步に行く人も絶えた、庭の小萩は枯れ、蟋蟀は縁の下で、なさけなさうな聲で泣いて居る。軒近き桐の葉は、一風毎に散つて、秋夫樣の御宅が見えて來た。

結句沒書を免れ一躍賞に入る。

【秀逸】

〇今朝の秋

墨澤とよ子

楓の葉が、一つ二つ紅葉して、朝夕は涼しすぎる位、柿が熟して百舌が梢高く鳴いて、白い風が、おくれ咲の朝顏の花を、つれなく吹いて、栗の實をハラハラとおとす。全く今朝は、秋になつた。

凡の如くにして凡にあらず

〇鼻

阿波　西野いさを

鼻におできが出來た。、、いとこに子が生まれるのだと諺に云ふ。久振會ふ京の綾樣の身は、それと思ふ。私より一つ下の癖に。私のミスを誇に感じたが直ぐ後から寂しい心が湧く。じれて力任せに低い鼻を摘むと、飛上る樣に痛くて涙がこぼれた。

鼻こそいゝ迷惑

〇黃昏

神田　伊原千代子

木曾の櫛賣娘が二人、何か私言きながら小走りに坂を下りて行く。と今

度は坂の方から稲をつけた馬が來る「お母アーおやすみよー」と馬子は聲をかけて行過ぎた、チヤラツンチヤラツンと鈴の音。峠の茶屋は靜かに黄昏て行く。

審題。

○花嫁　金澤 悠々子

「毎度ね」の挨拶も女房振、蕎麥畤の裾の端折が派手なとて若衆が「お染子は美い嫁さんになつた」と言つても栁と受けて「嘲弄ては嫌」と優しく笑ふ。

まアあの姿、死んだお母にそつくり婿の太吉は笠を傾げて莞爾して居る

佳品

○秋逝く日　藤澤 那尾子

寂しい夕陽はもう、沈みました。妾は唯悲しい、何故悲しいのでしよう？胸にとうても深く默して答へません、精神はいつか狂ひました。黑髮もみだれてゐます。——あつ——妾の心にはもう木枯しが、吹き初めました。

扨どうしたらいゝでせう。

○流れる　北海道 小百合

お風呂へ入る時いつも、流れる〳〵つて、泣いて叱られた、お隣の淸ちやんが、十五年目に歸つて見るとまア驚いた二つになる兒の母樣となつて、つんとすまして居る、又其兒が流れる〳〵つて泣くとそれを叱かるのちやないかと思ふとおかしくつて仕樣がない。

これ人世

○夜　秀技子

窓の扉に迫つてゐる闇の寂寞と、一室に沈んだ空氣とに秒の音が冴えて響く、「男とは彼樣ものだらうか」と、運命に逆らひ得ぬ子が胸に湧いた泪は、氷よりも冷たかつた。

嫁いて三月、——故郷の家には父母や兄妹は、今宵何を語つて居るだらう。

かなしつらし

○白き札　熊本 波の花

カンカンカンと集合の鐘が鳴る、と七百の生徒は一齊に僅か一分間で整列する、私等もその側に立つ朝の會皆のかゞやくその眼は正面に立たれた校長にそゝがれて居る。とどこからか白き札がはら〳〵と私の眼の前に落ちた、何だか胸がおどる、が、やはりま白き札である。

神韻。

○小箱　常陸 木村 那賀子

昨日姉樣が『此箱を決して開けてはいけませんよ』と堅く念を押した、ついぞ見た事のない箱其上此麼事迄云ふので、見たくつて〳〵お留守にそつと開けて見たらまあ驚いた、蛇のぬけがら、其の儘蓋はして置いたけれどもう皆んなに話したくつて堪らない。

大方呪ひの箱でせう

○秋　伊勢岩崎ふく子

獨木舟が一つすうつとゆく、川沿の栗の林に百舌鳥が鳴いて柳の葉がはらはらと川の中にこぼれる　とうとう秋になつちまうた。

感慨無量

○友　加賀きく子

友の高子さんは房枝さんの歌や文のお作りになつたのを見て、「別によい事もない、當前のことを云つてある」と云はれますが、私は當前のことが云はれないのだ、と思ひます、其くせ高子さんは何もお作りになりません

至言

○風の夜　コスモス

ショールに頭を埋めてともすれば卷れ返へる裾を抑へながら私は凍てた夜の町を歩いて居た、巷間からのからつ風は勢まして吹き荒んで居る、両側の家々は硝子戸を固く鎖して小僧共は寒相に火鉢を圍んで居る、どつと許り烈しい風が西側に當ると硝子戸がはつと黄色に濁る、何處から來たのか、女中らしいのに摺違つたとたんに暖い御燒の匂がぷんとした

佳作

○お文さん　靜岡清洋子

お文は笑まない歌はない。村一の神樂笛と追分の上手、熊公が死んでもう三年一日として香華の絶えた事が無い。昨日の萩は今日の菊と變つて居る。お文は二十三お嫁に行かない山は紅葉した、紅化粧一つしないお文さんはやつぱり美しい。

はて、この先きどうなるでせう

○植物園に行く折　日本橋　鈴木十々子

指ケ谷町で電車を下りて戸崎町の通りを眞直に行く日本橋の眞中で生れて派手な實業家に育た私は此活氣ない亂れ髪に伏目勝の女を見るやうな町なんだか淋しく感じたあゝ此邊の人は初鰹の味も知らないだらうと言ひ知れぬあはれを感じた!!

大そうな氣焔!

○疑ひ　麻布　花子

疑惑！疑惑の念が去らないのです、いまわしい疑ひの念はどうしても痕を殘して亂てゐます、頭の中でも心でも行たり來たり戰たりして居ますわ、それでも不解らない、幾夜寐ずに考へたかしれませんが夫れても、どうしても不解らないこれがよく云ふ煩悶と云ふ少女の惱でせう、

どうですかしら。

○電車　大阪市　鹿島綾子

吊皮にぶら下ると、乘合の一同は視線を妾に集めて居ます。ハツと思うて顔を赤くしましたが、又思返して見ると、畢竟妾が美しいからだとの自信も出來て、顔の熱りも冷めました頃、そと彼方を見返して遣ると、人々は既う窓から外を見て居ました。

そして少々ガツカリしたのですれ

○くれがた　本郷　千とせ

ずらつと並んだ砲兵工廠の窓へは電氣がかん／＼燈されて、トッチンカンの槌の音が電車の響と入り亂れて耳がとんぼがへりそう、ぬーつと突き出た幾本かの煙突からは黒雲の如な煙がむくむく大空目掛て襲て行くので、ほつそりした五日頃の月は慌しくにび色の雲へ姿を隠した。

實境。

○朝　尾張　鈴江子

田の面には白い煙か這つて、道の兩側に掛けた稻から、蜘蛛の糸が引き合うて、重そうに露が下つて居る。稻の袴や、砂糖黍の嚙み殻が霜で白くなつて居る道を鼬が一匹‥‥背を圓くして走つて行く



社頭　青森　松尾千代子

○菊　美濃　篠田きん子

私が大切に／＼毎朝手入れをして居た、大輪の菊が此の頃になつて大きな蕾を持つて、もう咲くばかりに成つたので、古笠で蔽をしてやつた、それが今朝は誰かに折られてしまつた、私は非常に失望した、と同時に私は妙に恐ろしさを感じた、丁度私らは菊の蕾――それを誰かゞ手折ろう／＼と始終覗つて居るのではないか‥‥

警戒を要す

○けれども　佐渡　綠子

背戸の柿は赤う、無花果は紫、栗は茶色に、お庭の千草は咲き、白菊黄菊匂ふ、秋風は絶えず、木犀のあまい香を、私の書齋に送つてくれる、けれども何やら、悲しくつて／＼

これ秋の默たるところ

○理想　牛込なくしこ

『お前大きくなつたら何のお神さんになるの』『あたいつとめ人の』『つとめ人て何に』『家の兄やの如に砲兵工廠へゆくの』得々とした面持今年九つになる出入の車屋の小娘之もやつぱり理想といふのであらふ。

勿論

○前日　信濃野中武子

この窓――この芭蕉――この石――この草――この野――あの山、あの川、あの森――あの星――!!!

あゝ、もうこれが見納めなんです、明日は嫁ぐ身、再び娘で、この家で、これ、あれを、見る事はあゝもう出來ないんです‥‥‥冷たい涙が頰を傳ひました。

御尤もです

○母　京都井上すみ子

お母様は、毎朝洗面がすむと、東を向いて拜まれる、不思議に思つてその譯を聞くと、京都にゐる澄が息災で勉強するやうにと、涙ぐまれたと兄の手紙を握つて、私は泣き、そして思はず叫びました、お母様!! 待つて頂戴、來年の春は立派になつて歸りますから!!‥と

その心意氣を永く御保ちなさい。

○稻の穂　奈良中富よしみ

今年の春から妹を勵まして共に丹精して作つた効顯れて、稻は非常によく實りましたから私等は其眞々しくうなだれた數穗を、亡き父母のみ墓にそなへました、そうして父母は必ず喜んで下さるに違ひないと思ふと實に半歳の勞苦を忘れた樣な心地致しました。

善い心掛けです。

○小春　備前高島豊野

うらの柿の木で百舌がきり〳〵と鳴いた、‥‥お天氣と障子を開けると文ちやんと靜ちやんがおまゝごと「あたしお母さんよ」「いゝえあたしよ」「だつて」。冬枯のいすゞの枝に羽の弱つた赤とんぼがとまつてる、小猫がぢつと見てるとるかしら

これも秋の日のすさび

○弱者　鈴[illegible]女

「學問も必要です、けど裁縫なんかも少しは致しませんと最早十六にも成つたのですから」とは母樣の云草「否裁縫等何時でも出來る學問こそ今の中にしないと駄目だ」これは父樣の卜意。強者と弱者の間に居る私は漢籍、英語、數學を父樣に、裁縫お琴、茶の湯を母様に習ひます

結構です

○待つ間　杜若

胡桃てふいた九尺の床には文晁の竹雀圖の一幅、古銅の老人の右には水盤に南天、島梅の香爐にたきすてた沈欄の沈香かなり受けた白玉一輪、淋しいけれど妾の好み、相學の傍には寫眞帖さへ置いて人まち顏の桐火鉢に埋けた櫻の白うなりはしないかと、一寸手をかざす友染縮緬の座蒲團

と右と左に位置を直し目に入る塵を二ッひろつてさて又文調をみた。

○看護の夜　神戸　大塚みどり

看護の状態に陥つてから未だ妹は目覚ぬ。立切つた六畳の間は永い間の汗と薬の香が籠つて、不絶異様な壓力が胸を衝く、聞けば聞かれる丈けの寂寞が微かな丈け夜の室は靜まり返つて、竹ランプの光を受けた油氣のない妹の顔が殊に蒼白くて悽しい。

○姉妹の影　靜岡　四島りつ子

ランプを後に前の襖へ影を映すと壓へつけた様な壁襖に丈の高いのと、稚兒輪に結ふた小さい影と並んだ。妹様は小さいねと。云ふと大きくなると姉様位に成るのよ。と可愛い顔してニッコリ笑ふ「さう」と思はず抱きしめると影法師は崩れてしまいました。

○鐘の音　遠江　島花子

尋一より高四までしかも同じ机にあつた菊枝様あのしたはしい菊枝さまは七日前二度とかへらぬあの世の客となられてから私は夜毎々々に打つ鐘の眞の味を知りました。

○霧のあさ　長野　丸山榮枝子

霧が夢の様に野邊を包んでゐる日本アルプスその霧に點在してゐる村落、雑木林などが茫と煙つて旭が淡く霧の中に漂つてゐる。枯れ柳の寒む相に突立てる向の道を大根を積んだ車がゆく。馬車の音が濕つた空氣に鳴り響て馬のいななきが靜強い様な嗄れた聲であつた。

○雨　相模　小夜子

霧雨は、しと／＼降つて居る、私は讀書に倦きて、つと障子を開けた、直ぐ眼の前に、ぬれて悄然立つて居ゝ撥釣瓶は、置き忘られた、流しの空樽と、恨しそうに何か、密語いて居た、其様が、如何にも心有りげて、哀れだつた。

○波　神戸　奘代子

……ザアー——と打ち寄せてくる波が、汀を洗つてゆく度にその波足が際たつて白く見える、私は飽かず眺めてゐた。ザアーと打ち寄せてきては白い漣を立てゝ退いてゆく波——はては自分の身までも引いてゆかれるやうな心地がする。

○天女の樣な　鳥取　足立淅子

私の望みの其ひとつ！月の清く、さへた夜、あのお方の涼しい、ピヤノの音を聞きつゝ、眠る様に一寸と死んで見たい、そして、今度生れる時は、天女の樣な姿で！

○焼跡　千葉縣　峯島星華

焼殘りの柱などが片隅へ積み重ねてある、ぢつと見てゐると、半焼の植木のなかゝら、二三羽の雀が來て何か拾つて行つた。鶏があちこち餌を求めてゐる、雄鶏が積んだ焼木の上でコケコッコー。……落日が半焼の靄隠を輝らしてゐる。

○苦吟　大阪市　山田歌子

さて何も出來ない！筆を取つては見たものゝ。鐵瓶の湯のたぎる音、母様の火鉢をたゝく煙管の響、さては父様が新聞讀む聲などにばかり耳傾けられて……これではと、筆を取り直して見てもやつぱり……終には、ランプの笠に姉妹の顔を書きはじめた。

○秋の夕　とみ子

トン／＼と扉にあたる雨たれが、しやおつと云ふ音と調和して、如何にも物がしーんとする。兄様は默つて横になつて被入るし、姉様は子供を膝せて眠つて被入る。私は窓によりかゝつて編物をして居ると、何んだか淋しいと云ふ念がむら／＼と湧いて來る、あゝ眞實に秋の夕暮だなあと思ふと一しほしんみりとなつて終つて、色々な事を考へます。

○癪にさわるもの　麻布　喜美子

手紙を差上げても返事をよこさぬ人、自分と同年ばいの女が盛粧してこれ見よがしに道行くのに出遇つた時、母様から戴いたお八が妹の方より少なかつた時、これは誰にも内證よとそつと知らせてあげた話を何時の間にやらひよつこり人に喋べられて終つた時、苦心して作り上げた文の沒書になつた時

○都の兄へ　宮城、沼倉ふく子

栗は一昨日から、落ち初めました。お祖母様は、大きい栗を見付る度に之も兄様のな、之も兄様のなと選つてお置きになります。今朝は私一升拾ひましてよ。私の起る時は未だお月様の光りのある頃です、其の時分兄様は如何遊ばしていらつしやいますか？多分ボート、レース、ね、さうでせう。

俳句

内藤鳴雪選



○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽窃になるとか言ふ人もあるが餘計な心配である前の人と異つて他に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使ても差支ない（鳴）一人一句限賞丙種

○（天賞）
名月に大極殿の甍かな　相模　とよ子

○（地賞）
佇めば我を包みて野は暮れぬ　東京　ひらさき

○（人賞）
油買ふ銭落しけり秋の暮　羽後　露風女

泣て来る女に逢ひぬ秋の暮　奈良　藤井竹子
詩苑の落葉の中や鶏の脚　彦根　辻芳子
山更に一鳥鳴かず霧の峰　愛媛　山内翠志
鶴舞うて小春の空の麗きかな　秋田　大澤登久子
草の實や水草に逆ふさゝ流れ　舟橋　川島はつ子
青簾琴の秘曲を盗み聞く　愛知　坂本清江
閑居の跡いさゝかの菊も植えてあり　旭川　高橋とよめ子
水門に翡翠飛びて日は落ちぬ　石川　山田紫水
蓄へし二貫の李に春近し　京都　安岡ふみ子
秋の人拳の梢に登りけり　山口　山本らく子
榛の下に小舟浮べて夕涼み　翠月
思ふこと皆名月に忘れけり　徳島　伊藤浮女

破垣の一叢や萩の花畠　千葉　大木しげ子
蘆折れや梢に羽うつ夜の鷺　徳島　皮原たけ子
明月や湖上の舟に笛の聲　宮城　沼倉ふく子
名月や琴ひく人のうつゝなき　水戸　國子
笠を着てたび僧小さし冬野原　徳島　むらさめ
秋雨や古き日記を物しけり　熊本　秋村留子
名月や蟋蟀鳴て[illegible]が軒　下谷　横谷幸子
馬つなぐ小寺の門や秋の雨　奈良縣　中富よしみ
佇立みて秋の入日を眺めけり　麻布　花子
力なき水の流れや蓮の花　岡山縣　野菊生
白萩の露こぼれけり君が袖　大阪市　吉田勝子
大瀧の下に霧を吐く水の音　岡山縣　近藤がく子
上る旭に潤ふ花の匂ひかな　岡山縣　巴子
行くかりを見おくる萩の折戸かな　沼津　渡邊とよを
秋の蚊のなく音淋しき留守居かな　大阪　平尾とき子
月は峯に一筋白き落し水　兵庫　祥子
物言はぬ案山子に對す女哉　根室　富美子
夕月に寶塔高くとがりけり　加賀　勝崎きく子
夕榮の空に飛びゆく木葉かな　信濃　那尾子
小坊主の炭ついで行く火鉢哉　麻布　本宮百合子
燈捧ぐ白髪の禰宜や朝の月　美濃　ときわ子
菊折て歌の使に與へけり　美濃　篠田欣子

御車の轍の音や冬の月　備中　馬越昌子
秋雨の小止みをかける小鳥かな　熱海　下澤とし子
雁一つ渡る枯野や月寒し　金澤市　悠々子
市に曳く馬繋れたる枯野哉　福島縣　橋本ふさ子
夕暗の川原に立てば小舟の灯　磐城　倉田かつ子
田は町となりて一田や秋の月　茨城縣　山本保子
夕暮を舟漕ぎ出てぬ秋の雨　常陸　渡邊秀子
凩や群れとぶ鳥の腹白し　京城　小林梅子
山かげに湖は氷りて冬の月　京都　雲湖
月を待つ心に君をまち申す　高陽　志奘津
秋風や羽やぶれたる蝶一つ　日暮里　細谷鏡子
[illegible]果に聞く比丘の居默かな　下關市　山本芳子
紋赤き提灯一つ村時雨　田舎娘
歌反古や部屋の中にも野分して　島根　白百合
美しき蝶もありける燈籠かな　松山市　曉子
紅葉狩り[illegible]を負うて[illegible]　兵庫縣　正子
石を吹く加茂の川原の野分かな　讃岐　衣輪すゑ子
雲の峯くづれて空に星一つ　鶴町　牧野銀杏庵
君が手をとらんとすれば野分吹く　沼津　中村あい子
初霜や背戸に來て鳴く古狐　越後　新井田つれ子
日[illegible]の美人痩せたり暮れの秋　佐渡　本間綠子
堂破れて仁王濡れけり秋の雨　伊豆　辻村かと子
鎌倉やいとゝ銀杏に秋の風　土佐　竹島繁子
町の娘か化粧して出てづ夏の月　茨城　倉田政子
天の川竹の雫となりぬらん　越後　藤原竹子
稲負うて名月の川渡りけり　牛込　塚原けん子
夜をありく顔にもみじの散りにけり　長崎　持丸たけ子
歌反古を荻の小山に埋めけり　和歌山　木澤てる子
行く人の後ふりかへる欄かな　茨城縣　橋本美津枝
名月や松の下なる一軒屋　大阪市　京林ちどり
秋の夜を小さき妹のいびきかな　水戸　重子

野分して寺に作りし豆腐かな　長野縣　山本操
牛吼えて牧場の萩のこぼれけり　讃岐　香月女
木の上に猿の物喰ふ月夜哉　小樽　清野千枝子
新殿の御簾かゝげたり今日の月　樺太　明ますい
小春日の小窓にうれし鳥の聲　樺太　ときわ
上臈が裁つ衣切れや梅の紋　相州　善浪たつ子
逝く秋の日を渡し守る女かな　神戸市　大塚みどり
秋風や練兵場のときの聲　若松市　佐藤女子
空遠く一星飛んで秋に入る　秋田縣　秋原トロ子
人形を抱て妹來る夜寒かな　秋田縣　濱岡宮子
名月や湖畔に狂女人を呼ぶ　徳島縣　上野浦錦子
枯蓮や池の水鳥夜を白し　會津　つぼみ
よき水に蜆やせけり秋の朝　近江　太田靜江
名月に歌詠む人顔舟の中　千葉縣　峯島星華
此山へ登れば時雨[illegible]ず　紀伊　三栖鶴江子
さらばこゝて袖ん分たん秋の風　牛込　星野愛子
水鳥の去つて湖上の月黒し　長崎　折口梅子
老松や三ケ月さえて菊寒し　近江　萩の家花子
捨植の菊後れ咲く小春哉　越後　金塚美代子
落葉して山尖りけり冬の月　秋田縣　白百合子
竿高く子の輕業や秋の空　靜岡　植松誠子
冬枯れて牛舘たかき小村かな　埼玉　田島つれ子
髪むすぶ秋のしたやきりぎりす　茨城縣　藤井かみま
蝶々の羽根の重さや秋の雨　筑前　中西まさこ
秋雨の軒に魚焼く煙かな　伊知子
古舟にたまりし水や冬の月　本郷　渡邊喬子
一羽飛ぶ鶏は高し秋の暮　本郷　渡邊三枝
笑む時の茄子歯見えぬ秋の月　高知　吉本百合子
涼しさの瞳またゝく灯哉　羽後　三浦ふみ
春寒や古里に集ふ雀の子　靜岡縣　池田くに子
干物に夕陰の早く散る紅葉　上毛　江澤紫城子

後ろから寒い日のさす紅葉哉　長崎　永井主子
旭の下に霜ふむ鹿の立ち姿　小樽　烟尾清子
月は雲にかくれて暮るゝ野分哉　豊後　みどり
城跡に轉がる石や秋寒し　熊本　立花登美子
鐵欄をめぐらす墓や虫の聲　本郷　田村波津子
魚河岸の一番船や杜鵑　藤澤　常盤幸子
おくつきの苔の露ちる夕嵐　本郷　望月露子
さくらにはおもし出多ゝ小春かな　長野　津金泣月
かれ草にてふや宿れるくれの秋　攝津　千代
燒け跡に鳴くこほろぎや町の月　大阪　高山米子
君待ちて夕顔の花數へ見ぬ　信州　世良田りう子
月はかくれ星は沈いて野分かな　近江　小林とし子
朝風や稲田の中に雉子の鳴く　常州　齋藤いら子
なつかしき書齋の夢や青簾　岡山縣　桐本悦子
短日や大根かぶらのうれ殘り　羽後　菊地おまき
小春日の丘に花摘む少女哉　丹後國　香雲
衣洗ふたらひに散るや冬櫻　紀伊　田中富美子
鶴鳥巣をうたひ連れけり秋の山　相模　とよ子
名月に大纜かゝる港かな　靜岡　秋楓女史
くさ刈れば邊に飛びこむ蛙かな　麹町　牧野まん
着古した浴衣一枚秋の風　新潟　長谷川ます子
行く秋や暮れて鄰の詫住ひ　千葉縣　金井銀子
うすやみの小寂は寒し小提灯　川端周子
南朝を說き〱椎の拾ひ鬼　信濃　安坂富美子
時鳥聲澄の夜明かな　愛知縣　華影
時鳥啼いて居るなり朝の雨　横須賀　齋藤松代子
驛馬つゞく秋の夕や町はづれ　大阪　和田さつき
撫袖を抱えて摘める若菜かな　樺太　繁子
楓樹や牧場の夕をかけ廻る　駿河　大瀧梅子
玉蟲のあと追つて花の吹雪かな　遠江　伊藤定子
花染の匂ひ過ぎにり更衣　本郷　相樂きみ子

白粉の夜肌冷しや夏芝居　京城　小林芳枝
夕闇の窓に近づくほとゝぎす　福島　橋本泣花
山寺の屏風にも見る紅楓かな　麹町　銀杏庵秋窓
三日月や破れ垣しのぶ人　東寺尾那美子
蜻蛉や出水退きたる河原草　羽後　菅女
おばしまに立つ人もなし冬の月　紀伊　田中文子
沼尻に灯影見てなく水鷄かな　秋田　三浦ふみえ
篁の暗きを照らす切子かな　越後　藤原鍋子
そよと吹く簾に見る緋鯉かな　姫路　富岡綾子
谷間の古池曇らて落葉する　下總　三橋汎子
葉櫻に小暗寺の灯かな　岐阜　あやめ
木枯に鶏の尾の崩れけり　東京　りな子
潮の香や菊見て歸る磯の路　沼津　渡邊笑村
枯木立奈良の古塔のそびへけり　大阪　今西はるゑ
初冬や國境見る山の道　岡山　高木清子
冬の夜や灯ともる宮の更けにけり　美濃　鈴木春江子
船破や冬の月見て渡守　千葉　藤沼しげ子
鳥飛んで古沼に落つる夕日哉　東京　牧野牛人
色もなき風に匂へり菊の花　大阪　寺部君子
用捨なく炭をつぎけり寒の夜　京城　よし枝
かろた貼る提灯細き霜夜かな　京城　小林よし枝
淋しさよ二十の秋の盛かさよ　信濃　おちぐり
野の雨は今朝秋たちしばかりにて　東京　小泉せん
山高く鳥飛ぶ末に木枯す　三河　三井はな子
落葉する銀杏に暮るゝ村はづれ　遠江　三宅たつ子
詩作して九日の菊に灯しけり　月女
草に露るゝ旅の衣や今朝の秋　隱岐　みち子
雁の輪くづれて淋し草の月　羽後　紫秋女
公園に菊見る人の雜りかな　東京　ちどり
今日も又曇りて早く日暮いけり　伯耆　竹川光子
することのあまたたまりぬ年の暮　横濱　石橋きく子

餘興



○規定　毎號課題を出して讀者の餘興に供す十六字詰十行迄一人一章に限丙補の賞を送呈すべし新題は欄末にあり見落す勿れ

お化粧（課題）

○夜の化粧法（天賞）

日暮里　きやう子

皆樣も御存じて御座いませうが、お化粧には晝と夜との別が御座いまして晝あそばして美いと思つたお化粧でも夜は案外はえないものです、で御參考の爲に夜のお化粧のお話を致しませう。夜はいづれも電氣とかガスとかの光で見るのですから幾分青味かゝつて淋しく見えます、ですから、ゑりは純白の白粉でなければいけませんが、顏は肉色のをつけますそしていづれも晝よりは少し濃い目に致しまして、口紅はごくうつすりさすのです、夜紅を濃くつけますと舞臺顏見たようて下品に見えるものです。

○化粧室の窓（地賞）

釜北　稗貫光子

そとドアを押すとふーつと得云へぬ香水の香、薄紅ゐのカーテンは燃ゆる樣な緋のリボンに、しぼられてある、東と南と西と三方に窓をひかへた……これは君江樣のお化粧室、向つて前の大鏡臺の引出しの中は、數々の白粉、化粧水などて、右側の大鏡臺の中にはリボン、造花、櫛の類、斯くて春の朝、西窓に匂ふ櫻花の雫、夏の朝、東窓に微笑む白百合の雫、秋の夕、南窓に亂るゝ白萩の雫などを手にうけてお化粧せらるゝ君江樣の、それて彼樣もお美しいのでせう

○衣裳と時候の關係（人賞）

牛込　平塚白百合

黒いお召の時は濃くつけないでも白く見えます。水色とか白に近い色の時は肉白粉を、日本髮の時はこいめに、束髮の時はうすめに、顏全體ては額をうすく、鼻を濃く、また四季で違ひます。春夏はあぶらがうきやすいので濃くつけますと直に鼻の間によります、又秋冬はあぶらがなくなりますからクリームをつけて、お白粉をはきかけますと、非常に美しく見えます。あとは手加減一つて華やかな眉や色のよい頰になります。

【秀逸】

○鉛筆使用　あきはぎ

クラブ洗粉であらつてレートをつけて御園を薄く溶いて襟は少し濃い加減に塗ります、鼻すぢを目にたゝぬ程にも一層濃くして頰紅をさし小ばなを紅で一寸筋をいれてぼかします、それから別の筆で鼻のなかを紅で塗つて直します、出來たら鉛筆で眉毛をなほし もみあげも一寸鉛筆を入れて置けば一すきもちよくなります。

○淡化粧　名古屋　てふ

クラブ洗粉で顔を洗つてクリームを襟と顔へ引いてから極々薄く溶した御園白粉を襟へ付けよくすり込み牡丹刷毛に粉白粉を少しつけて叩きながらならして、白粉の手を洗つて萬遍なくなすり込みます、こうしますと浮いた粉は取れて、うつすりとしたお化粧になります、顔ゝ御園水白粉をつけて矢張り刷毛でならして手でなすります私は遠目に美麗に見えても 傍目のきたないのは嫌いて御座いますゆゑ、お化粧は目立ぬ薄化粧で傍目の美くしいのが好きで御座います、厚化粧と口紅は大嫌いてよそ行きも、ふだんも同じことです。

○私の化粧法　東京　照子

私は毎朝御飯たいて皆の者が揃ふまでほんの十分位の間にするのです、湯殿へ行つて鉢で髄へてある大學の鎌白粉を濃くレートでといて、襟りから顔へとつけましたあとを、刷毛でむらのないやうにして、終りに私は目が少し大きいといはれるので、まぶたの下側へ少し濃く、それも人にわからぬ位につけます、こうすると少し小さく見えるのださうです。お使にでも行く時は御園蒸子を一帶に絹ハンケチで輕くあとをふきます、又夜は電氣の光ゆ何かで普通のでは青白く見えますから心持紅をさして行ます。

○快し　山口　酒向とし子

私の化粧法は至極簡易な薄化粧、先六疊へ一人肌ぬぎて一生懸命美しく成る樣にと祈り乍ら、御料クリームを用ひ、次にみ園の鎌をレートでといて顔から頸へすりこみます。と何となく淸々しくて嬉しいのです、只是丈でも二三十分間はかゝります、思ふまゝのつた時の嬉しさ、實に人様に逃んて御目もじ致し度い位です、若も反對の場合には一日氣がふさぎます、宅では水晶おしろいをも用ひます。

○四季の化粧法　福井　稻の花

私はひどいあれ性ですから、年中御園四季の花は離しません、其外のお化粧は四季夫々違ふのです春は玉子の白味をよくこすりつけて置くだけですこれは素顔のようで、そして美しう見えるものです、夏は御園鎌白粉で厚化粧、秋はそのとき白粉で薄化粧を致します、冬は御園四季の花を多分に使ふだけです、寒いので白粉つけて却つてきたない顔に見えるのが嫌いですから、外出の時より外つけない事に致して居ります。

○御園白粉　京都市　井上澄子

御化粧用としては、御園白粉が第一よろしいやうですから常にこれを使ひますが、これに限つて二重ぬりにしてもちつとも際立ちません。で若いお方は、石灰を塗つたやうにならぬ限りは濃くされた方が好いでせう。 そして、たゞ顔の白いのをばかり好まれる方もありますが、寧ろ稍赤みをつけるつもりで、頰紅を始めにつけておいたならば、何とも言へぬ好い色が出まして、外を歩きますと皆が私の顔ばかり見てくれます……とは友の話。

○幸福な日　羽後　りう子

未だ暗い内に起き下女と共に掃除から朝飯の仕度迄すつかりすませて、つやゝゝ光る板の間に小濱縮緬で鏡をきれいに拭ひ 心に疚しい曇のない日は澄んだ鏡面に自分の瞳を視る事が出來ます。而して束髪に結びお化粧と申しても、ふだんは只四季の花をつけて其上に化粧ばけと。御園の粉を含ませ一たんはたいておいて餘り目だゝぬ樣に淡泊たゝいて燒生臙脂で彩して置く許りです。然して出來上つた時いつもお瞬の奥樣がお起きなさいます。(お化粧は凡て奥ゆきのある樣にしたいと思ひます。よく申しますが顔許り白くても首筋の邊が油で光つてる 杯は殊に女の注意すべき所かと思ひます) お化粧を大變度視み遊す方も有りますが私は心が淸々した日は お化粧もし凡てに整頓がつく樣に思ひます。何か又暗い事でもあれば鏡に向つて己に對するのが 恐しく終日鬱々してます。で私は お化粧がちやんと出來、針箱の前に座つた日は終日幸福な日と思つて居ます。

○お天童　　福井縣　片山千里

だしか私が七つの時です、其方のお寺に御開山基の御遠忌が始まるので、お天童さんを出さう、と定まりました、するとお祖母様が、お天童さんに出るときつと死んでから極楽様へまゐるのだ、といつてお化粧料五圓も出してお天童さんに出してくださつて、お母様が其時の綺麗な姿を小照に寫さうと云はれましたら、そんな事すると壽命が短くなるのだとお許しなさらなかつたそうです。

○猫のお化粧　　信濃　若柳よし子

お白粉や紅の附いた手を洗つて來やうと思つてフイと立つと傍に家の猫が行儀よく坐つてゐましたので、あまりの愛らしさに、其手て鼻先や頬のあたりを美しく塗つてくれますと、猫は平氣て眼を閉ぢて居ました。やがて手を洗つて來て見ますと猫は矢張り平氣て、セツセと顔を洗つてゐました。

○反映　　西多摩　芳子

私の近所にいつも顔の紅いおたきさんといふ娘がありました。ある日村のお祭へ行くとて一しよに行かうと約束しましたから、私の方から誘ひにまゐりますと、おたきさんはまだお仕度最中、湯から上つて今お白粉を眞白に塗りつけたところてした。それを少し拭つて、ほんとに櫻色となつたと思つたら、掌へこんどは紅を溶いて兩の頬へ美事になすつたのです。そしていつものやうなお化粧をしたのですが、あとてこの人の鏡を覗いて見ましたら、既背に自分の顔が映りました。



小春　矢名

○こほろぎ　　廣島縣　ひで子

お座敷の縁を廻つて、裏庭に向ひた二疊の間、此所お私の化粧室です。此頃は、何時も夕月がほんのりめの公孫樹の梢に懸つてゐる時、私は大抵此室にゐます、お化粧してゐますと、限つた樣に、窓の下の萩の根元てこほろぎが、優しい聲て鳴きます。其優しい鳴く音を聞きつゝ化粧して、此室から、靜かな寂しい、裏庭の暮れゆく景色を眺める時程、心地の好い時はありません。

○化粧論　　京都　益子

つくつてまて美しく見せたくもない、なぞと云ふ人もありますが、お化粧は顔ばかりてない心までも優しく女らしく見せるものてせう、勿論それにも度合のあることてすが私共若い女にお化粧は決して惡くないと思ひます又私なぞはたまにお化粧しない日は終日恰度髮を亂した時のように心地が恐いてすお化粧する人は、皆屹度こんなてありませう。

○上手と下手　　四谷　櫻子

ほんのりと粉白粉か水白粉をこくうすく、遠目ては勿論近くよつて白粉かつけたとはみえず、只眞

から色が白い樣に御化粧したのは大好き。こて／＼と紛やの竈賊の樣にぬりたくつて、口紅を廣くつけたのはみるのもいや。夫もぬり立てはまだしも、時たつて鼻の上などがはげて下からまつ黑なきちの色がてゝゐる樣になつては、みるもぞつとしてほんとにほんとに何の爲にお化粧するのかときいてやりたくなります。

○化粧心得　愛知　華影

よく顏から、丸て白粉の瓶に顏を差込んだ樣無趣味にする人があるが、あれを鼻の低い人は顏より心持濃くして、鼻筋の兩側に臙脂を淡く塗り紛白粉で鼻をはきしめつた手拭て頬を輕く拭ひ、頰の太い人は濃く、目の細い人は上瞼を淡く下瞼濃く、顙の出た人は白粉を無い位に、肥えた人は全躰に淡く、頤の長い人は咽喉の方へ段々淡く、口の大きい人は紅を淡く、終つたら紛ばきすると顏が優しく見える。

○初步　大阪府　寺部君子

お化粧等面倒臭いと、何日も形振構はず大道を活步して居ました。何處かの店の大鏡て不圖、同年配の美い方と私の醜い顏が竝て見えました、それからわからぬ程の お化粧を爲る樣に成りました物は慣れませぬから幾許薄くとも斑に成て、附けた顏もせず澄して居るのに、白粉がかたまつて居てよ、等云れて漸く成りました。鏡の前へ座るのが知々大層てすが、扨座てクリームを引て其上へ二三度紛刷き仕て、浮いた紛丈磨し眉と口を齒手拭て拭て、びん齒に水を付けて前髮にスーと鬢形を入れ、前齒を磨した時の清々しさ氣も心も引き立ちます。此を仕無い日は、何んだか締りが無い樣て落ち着きません。

○簡單　磐城　藤崎花枝子

お化粧と言つても妾には別に有ません、平常厚化粧なんかせようものならそれこそ大變てす、村中の笑物にしられますから、それても他行の時は女のたしなみ、安香水にお白粉位は塗りますよ、道具つて何も無いわ鏡二枚に鏡臺位なものよ。

○おしやれ　麻布　喜美子

宮ちやんは、私と同い年の十六てすが、それはそれはおしやれな者てす、圓盆に目鼻とても云ひたい樣なお顏に、白い物をコツテリと、お口べりには人食つた鬼みたいに紅さして、併も念入の引眉毛引はえぎは、……それてもまだならぬか、「君さん、奈何お化粧したら私少し美人に見られるてせうかれ、もつと此鼻を高く、口を小さく、目を大きく、……顏を面長……」にとはあまり勝手な御注文もあればあるもの……。「あの奴まだ年もゆかないくせに、もう色氣が出やがつた」なんて、厭な兄樣、こんな陰口宮ちやんが聞いたら怒るてせうあれても御本人、大層お得意てゐらしやるのてすから……。

○谷間の櫻　たつた女

私はマア谷間の櫻とても云ふてよい鼻のひくい方てす、だから何ても一つ高く見せる工夫を取らねばと思ひまして、每日こんな事を試みてゐます初め一鉢に御園を薄つすらとつけ鼻の上少しこくして其兩側をソツとふき取ります、それからソーツト下へぼかしにして他と同じにします、すると少しは高く見えます、又唇も紅ゐのがいきいきして、美しいてすからお紅を、ごくごく、少し付てよくすり込んて置きます、すると他から見ても、うぶからのいゝ色の樣てチツトも目立ちません

○私の經驗　折口梅子

博識なる姉樣方の前て、斯樣なことを書いて生意氣だといはれるかも知れませんけれども、只妾の經驗じたことだけを一寸紹介致します。唇の薄すぎる人は口紅を濃くすると。頤の短き人は咽喉部の下るに隨ひ白粉を濃くすると。鼻の低き人は鼻筋を濃くすると眼の細き人は上瞼を濃くすると襟足にのみ白粉を濃くするは最も醜きと。以上は妾が常に注意して、お友達にも話して居るところなのです。

○卒業後　青梅　荒井春子

私の方では每日御化粧等して居るものはすくないものですから、私も學校へ通つて居る頃はお化粧もせずなりましたが、卒業致してから、少しづゝお化粧を致す事にしたのです、妾のお化粧と申しましても、一寸した仕方です。朝起きてすぐ髮をまき、後に清水て顏を洗ひ、よく石鹸て油を落し、又二度ホーサン水て洗ひます、そしてよくふきかはいた處へレート化粧水をぬり、又かはいた處へ水おしろい御園をぬつて、先づお化粧がをへたのです。

○湯の香　山口縣　相良みな子

なつかしい湯の香をネルの單衣につゝんて、室に

入れば高い香のツンときつく鼻をつく、こゝ六疊の化粧室、野薔薇をさした床を左に窓近く据ゑられた、鏡臺に向つて、先づクリームをぬり、それから煉白粉、粉白粉、眉はけを片手に紅の筆取れば、いつしかあたり、たそがれて、園志の鐵香葉影に新星のまたゝき淡く〳〵。

○お化粧知らず

靜岡　さ　ち　子

十八の今日まで未だ一度もお化粧と言ふお化粧を仕た事がありません。オギヤアと言つてから未だ、おしろいと言ふ物を私は塗つた事がない。それは小さい時からお醫者樣と仲が好いからです

○見違へる

熊本　秋　月　澄　子

東髮に大きな花簪をさして、それは〳〵眞白て切つて落す樣、襟なんか三つ足に作つて芝居してよ。私もう見そこれて仕舞ひましたわ、それに飾の人達が藝者かしら、それにしては衣裳が少しなんて云つて居るものですから、私もうすつかり見惚れてゐましたら、傍へ來て禮をなすつたのよ。それて漸々思ひ出しましたわ、眞實にお變りなすつたわれ。つて友は語つた。私達のクラスきつての美人てあつた吉岡さん、先日のお祭の時のお富套りの艶姿、さぞと話を聞いて私は思つた。そして近々ある金满家へ、お嫁入りなさるのてそのお得意が思ひやられた。

○進步？

京　都　小　藤

十四五の時分姉がつけるのを見樣見眞似に風呂に往つた時など、滅茶苦茶にといて、半分は手の平につけて仕舞、あまりの塗りが眞白になる、それを大事にわらはないから斑だらけ其れて濃い氣て居たものです。其内にいつか鼻すじを濃くつけると高く見えるの、額に淡くなんて氣をつける樣になつた、矢張り年頃になると自然なものですよと母樣は話して居られる。

○田舍途

美　濃　篠　田　き　ん　子

何日ぞや私が、田舍祭に招かれた歸りてありました。村外れ迄來ると丁度年頃の娘子が二三人向うから來ました。是非田舍の方には有勝のたゞ塗りさへすれば好いと思つて、下化粧もしないて、こつてり塗つて居らしやるのですから、茶店に集つて居た若い男子の方の一人は、突然「石灰小屋から跳び出した」と、大きな聲で呼ばりました。

○一藝

栗　　子

私れ、がゝ年をした方に御化粧して上げる度每に之はぜひ知つていなければならぬ女の一藝だと思ふの、自分より年下の人にヌット顏を出して御化粧してもらふのは一種の耻てすものれ、ずい分世には御化粧の不必要を唱ふる方がありますがそんな人は必ず前の樣な恐に逢つて思ひあたるでしやう。

○おばけの樣子

常　陸　木　村　な　か　子

お化粧と云つてもほんのお白粉をつけるばかりお湯から上がると直ぐに風呂場てカゞミ無しで手拭を堅くしぼつて顏とあまりのつゆを奇麗にふき取り、大學白粉を顏からあまり一杯につけ、鼻筋だけ濃くつけて、座敷に來てからカゞミを見ると時々おばけの樣についてゐる事がございます。

○したりしなかつたり

伊　豆　辻　村　か　と　子

お化粧して居ると父が小言を言ふ、お化粧しなければ母が小言を言ふ、如何したらよいのか分らぬのでお化粧したりしなかつたりする、併し自分はお化粧してしやれて見たいので、父の留守を見ては、ちよいちよいお化粧するのよ。

○黑い顏

田　舍　娘

私は御園化粧品を愛用して居ります。每朝。咽喉を一番、濃い加減にして、あまりとあごを、中位にします。口の回りの、むく毛が多いのですから此處も、やはり、あごと同じ加減にします。夫から毛は へ際は極く薄くして、ひたいや頰は中薄。一体に薄化粧てす。黑い顏色てすから、此位にして置きますと、眞の、きれいな地色に見えて宜しい。

○失敗

愛　知　秋　月

今更思つても恥しい。去年の夏てした。從姉の敏さんが遊びに來て、芝居見に行くと云ひ出して二人お湯へ行きました。私は平生白粉なんか少しもつけたことのないのに、敏さんが餘りやかましく云つたので少し顏へぬつたら、いやに白つぽくまるて粉屋の棚へても飛込だ樣になりました敏さんにきけばいゝのよと濟してる。ても恥しくて仕方がないから糠袋て一生懸命に洗ひましたら終には顏がひり〳〵しいたくなりました。此度鏡を見ましたらまつかなかほてした。私あんな恥しいこと初めててした。

書簡文

○規定　手紙又はハガキの通信の書信文を云ふ候文口語體何れにても隨意なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以内とす一人一章に限る寄紙を用ゆべからず乙種の賞を送呈す

○許狀披露に招かれて（地賞）

信濃　優梨子

春子樣、昨日雪樣の十六ヶ條許狀の御披露會が、大師匠樣のお宅て御ございました。お手前といひ、態度といひ、それはお美しうございましたの。初入の鐘が鳴つて、私達八人が「はんど」の前の竹緣に、ずらりと腰掛けて居りますと、靜かな庭下駄の音がして折戸の向ふに立たれた雪樣のお姿は、ほんとに繪の樣でございました。お髪はふつくりとした文金の高島田、お納戸地にあつさりと野菊の裾模樣のついた袷せに、オレンヂめいた夏羽織に思ひ切つて大きく竹を金通しして出した、華美なおみ帶を矢の字に結んて、松葉重ねのお帛紗もうつりよく、敷石傳ひに「はんど」へと進まれるお姿もう八人の目は只恍惚と雪樣に注がれました。お詰の私が腰高な障子をぴたりと〆切りますと、間の襖がすうつと明いて、雪さんと、も一人お小さい可愛い方が御挨拶に出られました。「今日はようこそお出て下さいまして…不束かなお手前てほんの一服差上げます許りて…」なんて、お正客の鹽井樣の奧樣をお對手にすら〳〵御挨拶なさるでせう、喫驚して終ひましたの。だつてお稽古の時はもう二言目には乾度笑つてお終ひなさる雪樣なんですもの。

お濃茶のお服加減も大そう結構でございました。「ちと延び過ぎました樣でございますが……」なんて一寸頸を傾げて優しく被仰つた時など、まア是が舞踏のお上手な雪樣か知らんと思つた程でございます。先刻一寸お目にかゝりましたら「優梨樣私昨日馬鹿に澄まして居たんてすつてネ、今朝鹽井樣の奧樣に散ざからかはれましたの、何だか私夢中てしたわ」なんて

何時もの快活な調子で仰有いました。
御許状は、京の裏千家家元からでございます。
春子様、何ぞお祝ひ状お上げ遊ばして下さいましな。

華麗な事を華やかな筆で遺憾なく寫されました末段「先刻御目にかゝりましたら云々」ありて平板を避け得て佳、許るしの流を終りに於いて表はしだるも用意周到、巧みな書翰であります　（評）

○宿直の様子を伯母の許に（入賞）

神戸　百合香

『さあどうぞおやすみ下さいませもう十二時で御座いますから』『では失禮致します』と有仰つて十二時寐の方一組十四人宿直室に行かれる、後はひつそりと時々何番へモシ〳〵と云ふ聲の聞こえるのみ市外臺には通信も御座いませんので、窓にもたれてこひしき伯母様の事、兄様の事、さては家の事、我身の事、現在の事未來の事など偲びて、わけのわからぬ涙をながして居ります。と突然やかましき信號に驚き、われに歸つて見れば岡山よりの通信、つゞいて京都大坂より姫路からも續々來る通信にいそがしく、友はと見れば皆打寄りて人の噂に花をさかせ面白さうに笑つていらつしやいます、十時にをやすみになつた方が起きていらしつたので、時計を見れば早や二時、『さあおやすみ下さいお寐むう御座いましたで御座いませう』と愛想よく有仰て下さる、『失禮致します』と申上げて宿直室に行き冷たき蒲團の中にもぐり込み寐ねんとしても寐むられず、目はいよ〳〵さえて四時五時の時計の音を聞きうつ〳〵として六時十分前に起き七時に交代して皆様はいそ〳〵としてお歸りになるので御座いますけれど、伯母様私には家に待つ親もなく、寐ぼけ顔して女學生に逢ふのがつらさに七丁も八丁も廻り道して廣き道をも少さくなりて片へりをとぼ〳〵と歸るので御座います、又お泣かせ致しますが母様は今頃は何處にいらつしやるでしやうかやつぱり兄様や私の事を思ひ出して泣いていらつしやるで御座いましやうか伯母様……

もう筆を留めます

兄様には此の手紙をお目に掛けないで唯だ百合香は無事に勤めて居ると申し上て下さい左様なら

宿直の夜の様子も短かい中に盡き、哀傷の思ひもしんみりと出て居るやうです、見どころのある筆であります。　（評）

【秀　透】

○同級會

羽前　浪江

岡本様、貴女は同級會へ破入らないで却てお幸福でした、妾は今日まで三年の間樂しみに樂しんで、やうや

うの思ひて出て、美しい夢を見て居つたと悟つただけ寂しい感じがしてなりません。

二十人の級友があの作法室に圓居して、どんな話題があつたと思召ますか、それはほんとに妾には意外でした、三年の月日はもう大方の級友を咀つて老いさせて了ひました、あれも話さう、これも語らうと、今まで獨て研究した材料を、妾はそつと其まゝ持つて歸りました、御縁付きなすつた十人の方は總領になんか嫁ぐものでないとやら、新聞よむともう仕事がなくて困るとやら御獨身の方々も、着物がどうの流行がどうのと價のない世間話に興を呼んで笑ひさゞめいてゐらつしやるのを、妾は昔の嫁様たちのお姑の惡口會よりどこがよからうと、うつむいて默して居りました、學生時代の意氣はみんな年といふ魔物にさらわれて、新しい匂なんか誰方にもありません、妾は玉を失つたやうに思ひますよ岡本様、

貴女もおきに被入る御身、妾も來年は他地方に参ります、どんなに境遇が變らうと、位置が違はうと、たゞ一つ向上の心さへあれば新しい空氣を吸つて時勢に後れないで進めませう、いくら女でもね、岡本様、貴女のみは、妾の心友の貴女のみは、その麗はしい進取の白玉をお捨てなさらずに、家政上に社交上に御心のまゝに御活動なさいませよ、妾も誓つて、

追懷の情に堪えずにかくは、……

きかぬ氣なところが手紙の隅々までもみちあふれて、活々した趣が見えます、佳作。（評）

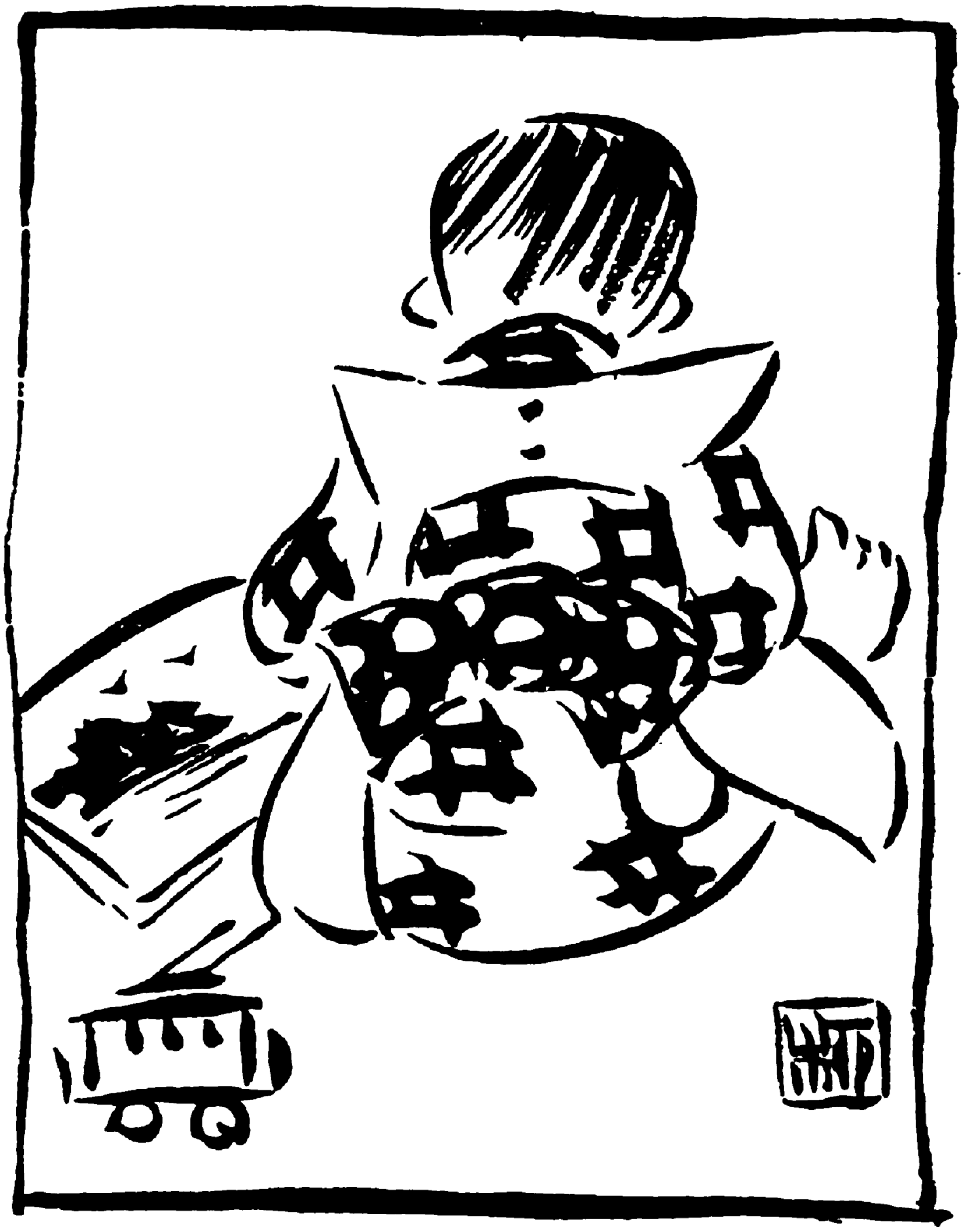
○遠き祖父に弟の病氣全快を知らす

西多摩　三ヶ島　よし子

お祖父様この頃はもうお庭の菊の蕾が大きくなりましたでせう、毎年秋がくるたびにさう思ふばかりて、久しくお目にかからないから、今年こそつて、母様も久吉も樂しんでをります。ほんとに久吉は祖父様のお蔭で全く丈夫になりましたのです。この春藤の花が咲くのに綿入を幾枚も着て、ぢつとして川のほとりなどに立つて居た時には、どうせこの夏は越されまいと、誰も思ひましたが、不思議のやうでした。恰度あのお祖父様が一枚一枚に捺して送つて下すつた千枚地藏を、流しきる頃から、一枚づゝ何か剝ぐやうに快復しまして、先頃も申し上げた通り、引つゞいて通學してをります。今傍に寢てゐる顔をつくづく見ますと獨で笑はずにはをられません位、頬の肉が高くなつて眞黒に日に燒けて、妙な口して豪い息をしてゐます。先月の初に快氣祝の眞似ことをしたのですが、遠方のことゝて、一方ならぬ御心配に預りながら、失禮いたします。そ

のうち、あら今年こそなんて、やつぱりお正月でなければあがれませんので――間違ひました、來年でございます。今から心掛けて置いて、私も久吉もきつとあがります。然しまだ少し間がありますから――實は二三日前久吉や近所の小供を頼んで前の川で採りました海苔を、拙い漉きやうですが、香と色の佳いうちに召しあがつて戴きたいので、つまらぬものに添へて、出來ただけお送り申し上げます。菊の花が咲きましたら又どうかお歌をお聞かせ下さいましさよなら

例の如く行き屆いた、さうして趣味ある書き方感服に堪へません。(評)



無心　足利　柳月子

○再度友の許に

[illegible]　登喜子

山家の事とて、芒の穂に齒をぬいたのを手にした少女も、チラホラ見受けらるゝ様になりました。度々、お手間を取らせまして、お詫びの申上様もございません。一番の大丸髷に、赤の手柄の似合はしい上品な奥様を拜見致したり、むく／＼と肥え太つた可愛らしい子を乗せた、乳母車を見たり致しますと、お笑ひ下さいますな、私も矢張り女でございますね、見送りたい様な氣が致しますもの、まして、澄子様、オヤマア失禮な

嫂樣もあゝお成り遊ばしましたし、あなた樣もお定まりになつて居られますもの……。獨身でなんぞとは私に申された義理でもございませんし、又申さうとも存じません。

殊に外ならぬ御兩親樣始め、兄樣、嫂樣、あなた樣のお眼鏡でお選び下さいましたお方を、勿體ない、不足だなどゝ何て申しませう、それこそ私には過ぎたお方だと嬉しうは存じますが、唯、前にも申しました通り不束な私が妻として、又、母としての義務を、盡す事が出來やうかと存じましてね。

早速、兩親にも申しきけましたら、『お前の樣な者を其程迄と』、大變喜びは致しましたもの〻、『十分の躾も屆かず、何も出來ないお前を、人樣に差上げては濟まぬ』と申しますの。

それに、生徒も日に日に、可愛さが增して參りまして文與もして置きたい、作法も、女子としての心得も、あれもこれもと考へますと、是非私の手で卒業させたい樣な慾が出ましてね……。

與々も、不足だの、獨身でだのと申す樣な事ではございませんから、あなた樣から皆樣によろしく、かしこ。

[illegible]の理[illegible]な手腕がこゝにも現はれました、かう云つた手紙には實に持て來いだと思はれます。（評）

○寂しき夕

熊本　秋月澄子

開け放した西の障子の所から、華やかな夕日が斜にさし込んで、今貴女へ筆とつて居る私を照して居てよ。ねえ、お靜さん、彼の學び舍の白壁が今夕日に榮えて居るでせう、あの榎が長い影を曳いてゐるでせう。私過去が偲ばれてなりませんの、樂しみ滿ちたテニス場裡の、幾度かの勝敗に早や日が傾いて、あの榎の影が長くコートの半迄も來る時分、どんなにか落日を惜んではテニスに耽つたでせう。眞實に無邪氣なあの時分が、私の一番樂しい時代でしたもの、吁今この筆とる窓にさし入る夕日、過去のそれ、そゞろ懷舊の情に堪えませんわ、ねえ、お靜さん貴女も昔戀しかあなくつて……。

あれ黄ばんだ櫻の葉が、夕風にひらりひらり、お〻落葉、秋々、今秋ですのね。寂しいわ。私この頃は何のなす事もなく、寂しくつて仕樣がないから、やつぱり書に斗り親んで居ます。懷かしい貴女をおいては、私に慰藉を與へるのは文藝斗りですもの、ねえお靜さん何時迄も何時迄も、交はつて下さいよ。私のお友達は貴女と文藝斗りですから。そして何も彼も私の上を知つて被居る唯一人の貴女ですもの。

嘸お懷かしい、お靜さん、この頃は何うして被居してやつぱり始終繪筆取つて被居るでせう。あの楓の窓の

四疊半に、繪具の汚點のついた紙を散らかして、やゝ熱したお顏を一心に、畵の面に注いて、繪筆振つて被居やるお姿が見えてよ、見事な出來榮のがたくさんてせう。拜見したい事、否それよりも貴女にお目にかゝり度くつて……。

筆を擱くと、あれ又落葉が黄昏れ初めた夕の庭に、寂しい音を立てゝ、柿の木の上には、はや淡い夕月の入日ばかりのが、吁今宵も又好い月てせう、細い虫の音を聞きながら、美しい月の下に、懷かしい懷かしい貴女の事を偲びませう……　さらば……

「私のお友達は貴女と文筆計り……」の如き女性通有のお愛嬌の宜過ぎるのは厭だが、豊かな想像や優雅の情や又捨て難い點がある、（評）

○在學中の妹へ

はなやすりこ

春ちやんいよ〳〵先生の御宅に御世話になる樣になつたそうてすネ、あんな嚴格な方から躾けて戴けば大變に御爲に良いだらうと私はよろこんで居ますよ、でも何卒過度の御勉强はよして頂戴、大變に躰に毒になりますからネ、もう前學期の成績位て結構てすよ、春ちやんは操行も甲許りだから外に申し上げる事もありませんがネ、今からも少しにぎやかにならねばいけませんよ、内に居る時の樣にいつもあんな眞面目な御顏ばかりなすつたら、ほんとに怒つては居ないかと思はれますよ、とんだ御迷惑でせう、それから内に下女と同樣に御宅の下女を使つてはいけません、申す迄もなく萬事やさしくして御上げなさいまし、又たとひ、坊樣方が戯れかゝつて、御勉强の御さまたげ遊す事があつても、決していやな御顏なさる事はなりません、何處までもやさしく、何處までも深切に、女らしくすべきものてあります、私は春ちやんが一番の成績を取つて下さるよりも、より多くこんなゆかしい美しい情を望みますよ、何卒注意なすつて立派な淑女になつて下さいましな別紙に汽車の繪は憲ちやんが書いたのてすよわざ〳〵脫線しかゝてる處を書いたのてすつて、振つてるネ、末筆ながら御風召さぬ樣、さよなら。

懇切なる情紙上にあふる、美しき戯謔が此中にこもつて居る。（評）

○半年たつたみなさまを

京橋　花子

あやさん！と考へてみると早いものね、卒業したのは此の間だと思つてゐたら、もう半年の餘もたつて、今日は同級のみなさんのお近況お知らせするわ、人の話てお茶にごして私もずるくなつたてせう

Tさん！御存じてせう？クラスて文章家て、女詩人と云ふて有名だつた方、よくみんなて未來の一葉女史なんて云つたてせうあの方、あの特色のあるつぶした廂

は此の頃は上品な高島田よ、腰のしたからはいた袴のかはりに、帯を胸高にしめて、毎日筆とつて歌をものした兩手て、熱心におしごととして、みんなその變化にびつくりしてゐますの。

Kさん、小柄なハイカラだつた方、卒業なさるとすぐにお結婚、先方は醫學士とやら、もうぢきに可愛のがお出來になると云ふ事を風のたよりに、ほのかに伺つてよ、さぞ可愛いお母様におなり遊ばすてせう。

Nさん！天使の様に美しい無邪氣だつた方、よくSさんがNさんの様に美けれぱと羨ましがつたの覺えてゐらつしやるてせう？今府下て、可愛らしい子供を對手に教師をして、たのしく暮してゐらつしやるそうよ。あの方に教はる子は幸ひね、私もも一度小さくなつて教はつてみたい位、何しろ苦勞のない幸福な方ね、然しSさんが（あのまゝ田舍て教師してゐちや惜しいわ）と云つてゐます事よ。

あとの方は卒業前にみんなて想像したのに、大方當つてゐますよ。

さう云ふ私は、例によつて例の如く、カツ色の袴をはいて通いみちを毎日通學してゐます、どなたに會つても（マアふとつた事ね）とおつしやるから、變つたのは肥つた位てせう、いつも呑氣てまだ肩上げもしてゐますの、相變らず勉强は大きらひ………

こちらの様子はまあざつとこんなもの、こん度は、そちらの様子をぜひ聞かせて下さい。話させばなしは聞きませぬ事よ。（十月十一日夜）

おゝこわい事、鞭て叩かれそうな達者な文。（評）

○都のお方に

丹波　涙なき子

皆様此頃どうしてゐられます。私はお様子が聞きたくて仕方がありません。毎日さみしい机にもたれていら〳〵してゐるのです。

秋といふと皆様はどんなことをお考へ遊ばすてせう。私の方はもうすつかり秋になりました。二三日中には稲も刈り入れるばかりになりました。私は、何故てせう。いくら秋になつても、冬になつても、じつと落ちついてゐられません。いつも氣がせか〳〵して、ひまがあると近くの野を歩き廻るんてす。野にはやさしい花も咲いてゐませう。蟲の音も聞えませう、けれども私は、そんなもの少しも氣にとまらないのてす。たゞぼんやりわびしい日が渡つて行く空を眺めて、皆様のことばかり考へてゐるのです。

この心持何と言つたら好いてせう。矢張秋の心持とてもいふのてせうか。

誰にさう云ふのか一寸わかり兼れます。叉日、その心持は秋の心持て無く若い心持なんてしやう。（評）

○何てすつて

つゆ草

マア何を仰しやいますの？白狀なさいつて、オホヽどんな惡いと致しまして？御恨も御祝詞も御返し致しますわ。ちと御門違て御在ますもの。ちやんと知つて居りますよ。そんな事仰しやつた方は！美智樣てせう！ね當りましてせう。入日に彼入つた時必と御目に止つたので御在いますよ。おやあ其時一寸御きゝ下されば何のことも御在ませんのに‥‥ほんとに御人がお



御水林　青楽　稲垣かう子

わるいのねえ。知らん顔して出しぬいたつもりて被入るのてせう。處が御生憎樣いゝえ僞が御任ません。其の證據には私マガレに結つて居りますもの仰しやる通り調度は慥に十疊に揃つて居り升。てもあれは熊本の従姉のてご任升の貴女も御存じてせう。第二に居た絢さんをあの人が此度嫁ることゝ相成りましたの、宅が親元になりまして何かと多忙て私までいろ〳〵御用を仰せつかつて毎日筆持つひまも無い騷ぎ。夫故の御無沙汰て御任升のに「私の知ら無いお名て不意に澄まして御使下さるの」とはあんまりて御在升わ。そんなに人が惡いと思召すの？美智さまちや

あるまいし、よう御在升よ。お二人とも覺えて被入いオホヽ十五日は恰度當日で御在升から同窓會も欠席致さねば成りませんのよ。切角樂しむでたのにつまりませんわ。返事もよこさず出席もしないしと美智様とおさゝやき合ひ遊ばして、一寸いゝ事なの等と御披露遊ばした日には事あれかしと待かまえて被入る皆様てすもの、さう成つちやいよ／＼大變と忙しい／＼中を大急ぎで認めました。亂筆は御免し下さい。十五日には皆様に宜しく。美智様には御目に懸つて御恨み申上升つて仰しやつて頂戴よ。さよなら

何が何ですか、迂遠な選者には分らないが、この書の妙は全體にわたつてひゞきがあるところに存する、聡明なる多數の讀者は定めし多大の興味を以て讀まれることでしやう。(評)

○小間使せる姉の許へ妹より

牛込　平塚白百合

姉さま小包只今つきました。お父様は丁度畑からもどつた計りで、ウヽ何時もほしいとあれがゆく前に云つてゐた熊の膽でもよこしたんか、それとも花に簪かなつてホク／＼しながらあけて見ましたの。あゝ私はほんとにビックリしてしまひましたの、姉さまこれは何てございます。スベ／＼した立派な草履、まだ上屋敷のお孃さまさへはいたの見た事がありません、この縫模様の美しい袋、これもつて遣つみにも田の草取りも出られやいたしませんでしやう。姉さま今何にしてゐらつしやるのでございますか。お父様も年をとつたし行儀見ならひかた／＼せめてお母様のお石碑をつて都にお出になつてからもう三年になります。お石碑もたゝないうち私に此のやうなものを。それは姉さまが私を思つて下さいますのはうれしうございますけれど、これだけ買ふ程ございますなら姉さまなぜもうかへつて下さいません。私は決してよい草履や着物はほしくはございません。手織縞の布子でもあの三年前のやうに姉さまと、お母さまのお墓を守りながらお父さまと四人して田や畑に、姉さまのあの唄をきゝとうございます。私は何より之れがたつた一つのねがひ。都は生馬の眼さへぬくときゝますのに、姉さまどうして日をおくつてゐらつしやいます。まさか／＼お家騒動なんか惹起す中心になんかなつてゐらつしやりはしますまい、もうもう行儀もそんなに入りはいたしません「人ずれのしないうちにかへるとなあ」はお父様の口ぐせ清三さんも待ちぬいてゐらつしやいます。姉様早くあの赤い手がらかけて清兄さんと四人して働いたら、どんなにたのしい事でしやう。私は姉さまがゐらつしやらなくなつてからどうしても元氣が出來ません。姉さまなまじ都かぶれして、土くさい田舎の父さんや清兄さんや花をお忘れ下さいますな。私はもうのん氣に四人してくらすのが何よりだと思つて居ります。お父さまも此の頃はちとリヤウマチで左の手がいけませんもう姉さま一日も早くかへつて下さい。また書のやう

にひなうたをうたひながらなかよくくらしませう。決して無理なたのみはいたしません、お石碑も出來なくともよろしうございます。姉さまこんなにぐちを云つてお禮を忘れてしまひました。どうぞお身體をお大切に早くおかへりの程をまつて居ります。

眞實に應ひて寸分の隙もなく巧みにかけてある。（評）

○一人旅び

磨志緒

『愛さんが一人で旅行が出來たら日本が三角になつて僕は倒て歩るくよ、京都見物どころか大津迄も行けない癖に』兄樣よく日本が三角になりませんせん事ね……今頃は東京の町を倒になつて歩いて居破るのホヽ……私お姿が拜見したいわ……と申せば何だかゑらい樣ですけれど、どうせ初めての京都見物に一人ですもの失敗もありますわね、其失敗談で實際一人旅であつた事を證明させませう。

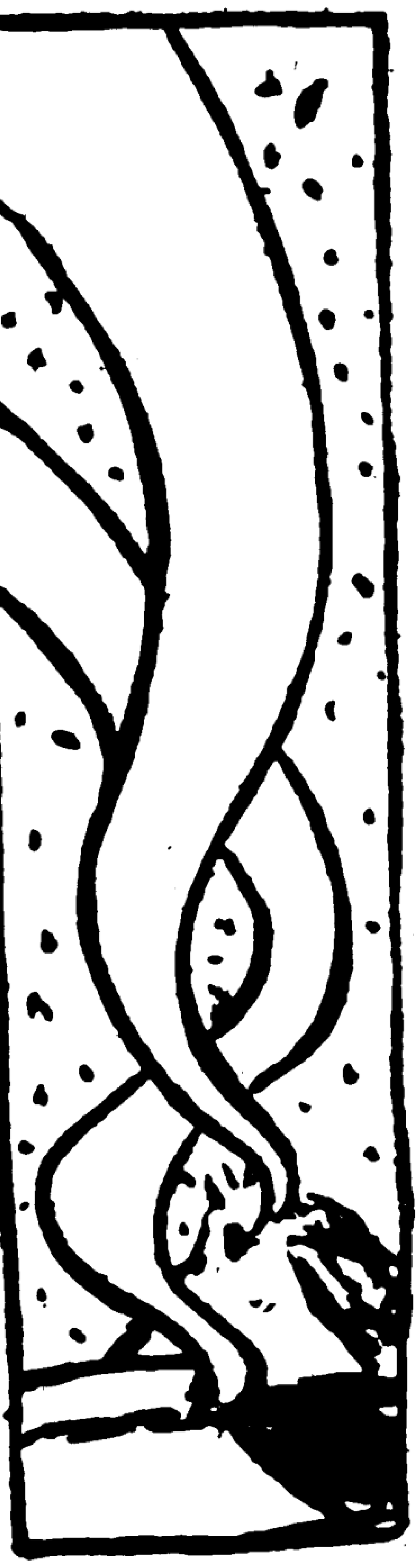
さう京都迄は汽車が運つて與れましたが扨、下車してさあ何處をどう歩くのか、分らないんでせう、ゑヽと俥を命じて城樣の町名を言つたんですよ『貴方切符をお求めに成りましたか？』オヤ俥に乘るにも切符がいるんかと思つて、ゑヽ今買んです、うまくごまかして乘りました、城樣には明日の日曜には共にと約して、一人無茶苦茶に歩いて來ると、立派なお寺が——ほ之は東本願寺か、それとも西か？まヽよ、しかられたら飛で出る——と、こわ〳〵入つて見ますと、まあ之が我宗の本山智恩院あつけにとられてお念佛も忽には出ず其儘外に出て三四町來てから南無阿彌陀佛！何事か考へ〳〵まがりまがつて頭を上げて向ふを見ますと高い所に又お寺らしい建物、之を目的に歩くと兩側の店は皆燒物屋淸水燒か？じあ淸水寺に違ひない、登り〳〵て此寺につきました。

何か大きな事をすると淸水の舞臺から飛だ氣て、とはこの事かと幾度も下を見て、然し思つた程も高くはありませんてした、下る途中フト動物園！こんな事が頭に浮んで、此度は交番所の巡査〳〵に尋ねて〳〵やつとここに來て園内を一通り見ました、外に出た時は足も大分つかれて日も西に落ちて行く、今迄忘れてゐた宿に心付て、さあ之からは何所ぢやありませんわねいたい足を引ずり〳〵俥に乘つて若し不思儀の宿につれ込まれてはと一人てさがす、大分お腹もすいて來ました。

今日はここ迄又次にね……兄樣ちと可哀想になつて來たでせう、でも心配は御無用、ちやんと歸つて居りますものね………

巧緻（評）

新歌謠



○規定　古來の俗謠の形式を取りて專ら優美高雅なる作を歡迎す野卑猥雜なるものは斷る一人一章限りにして半紙又は葉紙に認むること丙種の賞を送呈すべし

○（地賞）　四谷　柳の人

妹可愛や呼吸する度びに抱いた人形の髪がゆれる

（評）青春の吐息、桃の燃

○（人賞）　下總　月沖百合枝

氷雨さら／＼蘆の葉うつて人も通はぬ十二橋（潮來にて）

（評）叶葉を一讀のまゝ

【秀逸】

○　本郷　望月麗子

澤の小蟹が甲羅の上に白い形おく蘆の花

○　周防　しづく

擦き寂しい人相よりもつかぬ撞木に秋の風

○　松山市　曉子

棱ふみかへる其度毎にまどの眞萩がほろ／＼と

○　下關市　山本芳子

夕べ結んだ黄菊の露を受けて紅とく朝化粧

○　信濃　藤澤さと子

藍の傘した花嫁さまがちらと雪降る町をゆく

○　美濃　篠田きん子

秋の寂びれはこゝから湧くか蟲で名高い嵯峨の里

○　周防　洗耳子

早稻の御飯に泥鰌の汁よ與作旦那の酒氣嫌

○　伊勢　山川ついこ

志摩はよいとこ眞珠に鮑娘盛りの海女が採る

○　美作　賤女

わたしや深山の草刈りむすめ花の電車にのつて見たい

○　周防　建部良久子

私しや先頭て親山羊小山羊つれて行きます秋の野へ

○　上總　かず枝

私しや小金井花園育ち花は散つても私しや散らぬ

○　信濃　山西てる子

花の嫁が袂にすがり嫁に行くなと泣いて言ふ

○　備中　高島晶子

○森の御殿の虫御殿さまはほんに床しい學の會　三重縣　瀬木八重子

○京の嫁れすゞめは易し大原女の花召せ聲に　福井縣　片山千里

○葉なつゝんでやりたる娘に可愛らしいは菫花　美濃　ときわ子

○賣れ二人の乙女も貰に納豆々々と賣り行く　德島縣　吉田紫花

○小春日和に小犬が轉ぶそばに野菊が咲いてゐる　信濃　若柳よし子

○信濃五十里紅葉の錦にしき織ふて霰が降る　牛込　平塚白百合

○雁がかくれた尾花の袖へ月がスルリと顔を出す　岐阜　小野定子

○月にうかれて狸が引くか風の無い夜に鳴る鳴子　金澤　芳子

○小女やさしや菊見の歸り白い素足に紅ぞうり　長野　津金泣月

○姉の白菊妹の黄菊杖よ傘よていつくしむ　會津　つぼみ

○會津名代のお盆の踊お月様までおどります　仙臺　美津子

○破れたばせをの葉かげに泣けば又か〳〵と月のみる　宮城　手戸まさる

○みすなまいたる昔の人の事な思ひぞ今朝のゆき　備中　山田靜野

○愛山中豆腐屋の娘刺身骨の味知らぬ　北見　ひて子

○奈良の都に生れた私鹿といふ字もなつかしい　東守尾　芳子

○いさゝ小川に笹舟つくり思ひ浮べて又も泣く

○秋は横織る可愛い妹は紅葉拾うて帯にぬく　牛込　塚原けん子

○踊り花咲く小春の野邊で嫁にゆかれた姉思ふ　大阪市　山内民子

○破ぶれかゝつた傷籃の上に出たよ寒そな冬の月　信濃　中武ひこ子

○お嫁に行く時きや私しの人形乳母といつしよに連れて行く　伊豆　辻村かと子

○錦の扇を逆に立てたようだよ岩手山　岩手　鳳月女

○月に蟲賣る可愛い少女の袂から立つ秋の風　德島縣　上野浦餘子

○赤や黄色で飾つてたお山今は寒むそに霜の衣　德島縣　野澤紫水

○月の彼方を雁かれ一羽啼いて渡るよ悲しげに　京都　露鵑

○小さいいびきを背に負ふて行けば月が送るよどこ迄も　大阪　田舍娘

○あけの明星まばゆい頃はわたしや小川で米を磨く　宮城　沼倉ふく子

○夕日照る〳〵まばゆいばかり錦かざつた山の端　沼津　渡邊とよを

○山は紅み空は碧い廣い田圃は黄金色　秋田縣　園子

○夏の行くのをあれ〳〵蟲がなけく草葉に月やどる　安房　前田はな子

○風の吹く度み空は曇りぬれぬ木の葉の雨が降る　秋田縣　千代子

●●注意　新歌謠の募集は本號限りにて廢止、其代りとして新詩句を募る
別項參看の事

笑話



○規定　面白い話なればよし何でも實際の話でも一口話でも隨意なり賞両種

○飛んだ怪我（地賞）

大阪　平尾とき子

近眼の來客が父と談話中「貴君お額を何時お怪我なすつた」と心配相、父は不思議顏てツルリと撫てると蠅がブンと唸つて逃げる、來客は思はず「あゝもう直りました」とやつたので笑はずに居られなかつた。

○今日は日曜?（人賞）

大阪　野村政子

母「武雄やお起きなさい、もう八時てすよ」　武「僕今日齒が痛いんですもの」　母「アラ、折角お向ふの正次さんが中之島の圖書館へ行かないかつて、お誘ひだのに」武「エッ、今日は日曜? 僕土曜だと許り思つて居た」

と飛び上りました。

○綿　足利Ｋ子

私と母さんと眞綿をひいて居りますと今年四ツになツた美代ちやんが「綿のひツぱりツこしてゐるの母さんのくせに」と申して大笑ひでした。

○呼び鈴　本郷千とせ

お爺さんが大きな聲して人をお呼びなさるから御用の時は是をお鳴しなさい、と呼び鈴をあげたら、「オイ〳〵リン〳〵オイ〳〵リン〳〵」

○兩手を擧げて　函館もみぢ

或日道路の兩側から上官が參りました時に、新兵がどちらへさき禮をしたらいゝか困りました考へた末遂兩手を擧げて敬禮しました。て上官も笑をしのんだとのこと。

○下女菊　周防しづく

昨日學校で植物の掛圖を見て居ると、級て一番お轉婆のしげさんが來て、『一寸これ何て花?』と私に聞いていらつしやる、私は「除虫菊てしやう」とお答へましたら、しげさんは『そう〳〵下女菊々々私小學校で敎わつて最う忘れちまつてホヽ……』なんて。

○今度の先生　伊豆　辻村かと子

子供「今度の先生は餘り字が出來ませんよ」
父「どうして」
子供「むづかしい字がありますとすぐ之れは何んと讀むでせうと生徒に聞きますもの」

○足の冷水摩擦　直江津　木島礦巾哲

ふき掃除後足の裏をふいて居る下女に向ひ
太郎「竹や足だけ屬いのか」
下女「どうしてゞ厶いますか」
太郎「でも每朝足丈冷水摩擦するじやないか」

○美しい着物　福井　片山千里

或る日の事、菊ちやんがころんで來ましたから、さつそくお祭なんかに着せる美しい衣服と着かへさしてやりました、するとそれを見て居りました隣のおすさ樣が、あまだれの少し水のたまつてある中へ、わざところびましたので、びつくりしておすさ樣何なさるのと申しますと、あたしも家へ行つて美しい着物を着せてもらひますの。

○二度目から　樺太　ときわ

本年五ツになる弟が病氣の時お藥を呑みなさいと云ひましたら苦くないかと云ひますから「今度一度がまんしてお呑みなさい二度目からは呑み安くなりますよ」と云ひますと「では坊二度目から呑みますと云つたので大笑ひいたしました

○貓の御飯　鹿兒島　臼井スミ

としちやんに御飯粒を頼んだら人差指に一粒クツツケて姉さんハイと机の上にコロリ口の中に十分程入れて漸やく粘氣を出し封を閉ぢた不思議に鹽々した味がするから尋ねて見たらあのれ姉さん三毛ちやんの御口の處にクツツイテ居たのを私一寸借りて來たのとすました御返事氣味の惡いながら大笑ひ

女子衛生問答



産科婦人科専門
醫學士　北畠孝夫述

○規定　女子の身體に就て衛生生理疾病等各種の質問に應ず薬脅差支なし、毎月一日〆切翌月發表す

第百九十五問　病氣なりや　私は十二三の時より白色の液出血し今尚出血いたします、何か病氣でせうか。中將球を服用せようと思ひますが効能ありますか。（田舍、一少女）

答　出血なりや白帶なりや文意不明なり中將球と申す藥品は何等の成分より成立しおるや知り難きを以て醫治効用も隨て不明なり。

第百九十六問　眼に星が出來た　私は二三日前から左眼に星が出來てだん〳〵視力が減じてゆきますすどうすればよろしいてせうか。（播磨とら子）

答　角膜翳なるべし速に醫治を仰がずんば遂に不治症に陷るべし倘も幸に初期なれば吸收し去る事を得素人觀よりして推理質疑に時を移すよりは速に眼科醫に治療を御受けなされ逡巡不決の間に不治となりますぞ、

第百九十七問　結婚後五年　私は結婚後五年、未だ姙娠致しません、或は夫の局部の發育不全の爲かと思ひます、如何てせうか、私には何の異狀もありません、（大阪、不姙女）

答　局部の發育不全が如何なる程度に在るや明瞭ならざるを以て果して異性完全なる交媾を爲し得可きや否やを了解するに苦む、姙娠の成立は婦人の健全なる生殖器と男子の完全なる生殖機能とに據りて生ず可きは勿論なり、彼我共に良醫の診斷を仰がれよ。

第百九十八問　顏面の脂肪　私は顏面に脂肪多く、ニキビが出て困ります。(b)顏へゆくと必ず落涙します如何なる次第ですか。(c)常に白帶血多く、月經の日限不定なり。子宮疾患なりや。（病弱女）

答　(a)精製石鹼を用ひ顏面を清洗しその後百倍硼酸ワゼリンを塗布せられよ、但し一日一二回に止む、

(b)汚物より發生せる安母尼亞瓦斯硫化水素及びその他の刺戟性瓦斯の爲めに眼球結膜及び眼瞼結膜刺戟せられその結果流涙を來すものなるべし、

(c)婦人科的疾患の存するを認む、治療を受けられよ。

第百九十九問　結婚に差支へなきか　私は二十四歲未婚てす、十三四歲の時より手淫の癖があつて今だに止みません、誠にお恥づかしいお尋ねてすが結婚に差支はありませんか。（田舍娘）

答　情欲の烈熾に驅れて非理的快感を貪り不知不識の間に自己の健康を害するは痛悼に耐へざる次第てある、手淫は諸種の生殖器疾患の原因たり、一時の快を欲して終生の疾を買んとす深く將來を考へ克己心に訴へ斷然癈絕せられよ、今日迄その非を遂げたる結果或は現在に於て何等かの疾患有するあるを疑ふ倘し無くんば結婚に故障なし、詳に自己の身體に就て考査せらるべし。

第二百問　皮膚が荒れる　皮膚が荒れないやうにする方法はありませんか。（開度生）

答　猥に不精製石鹼抔を用ひず、殊に皮膚を摩擦せず、清洗の後はその濕分を乾燥しベルツ水、リスリン、ワゼリンの如きものを塗布しおかれよ。

第二百一問　顏が眞赤　私は顏が眞赤で困ります、（久子）

答　顏色の紅潮は美の粹なり、健康の表徵なり、懸念を要せず。

第二百二問　分娩時に差支なきか　今年一月甚く腰部を打ちし事あり、今も寒き日などは非常に痛みます。妊娠六ヶ月なれど分娩に差支なきか。(りせ子)

答　或は腰部の筋リウマチス或は神經痛或は脊髄關節の異常(?)或は脱骨或は尾骶骨等に異常なきか醫師の診察を仰がれよ、格段に異常なくんば分娩を妨ぐる事なかる可し。

第二百三問　腦中さながら　健忘症にして理解力を欠き、就褥前に讀書又は心配などせし時は、腦中さながら沸え返るやうにて、目醒むれば直り眠れば又起り候如何なる病に候か。(切望女)

答　腦神經衰弱に犯され給へるならん、務めて滋養を攝す殊に營養分に富める食物、飲料を取り、適宜の運動を爲し、冷水浴の習慣を得消化作用を完全にし、朝起就眠の時を嚴重に一定し。心神の勞苦を避け兼ねて醫療を受くれば必ず全治するを確保す。

第二百四問　冬になると　私は冬になると大變ひどいヒヾのやうなものが出きます、何病でせうか。(ナデシ子)

答　皮膚の粗糙となり且つ乾燥したるが爲め起れるいはゆる「ヒヾ」「アカギレ」でありませう五十倍硼酸ワセリンを塗布し皮膚の營養を毀損せざる様に注意せられよ。

第二百五問　尿　或る養生書に交媾後は男女共放尿するをよしとすとありましたが事實ですか。(新婚女)

答　交媾後の放尿は男子に在ては或は淋疾の豫防なるべし婦人には格段の衛生的影響無し。

第二百六問　妊娠六ヶ月位の大さ　本年四月出産七月に一回、十月に二回經行あり、身體異狀なきも、只下腹部膨れ妊娠五六ヶ月位の大さであります、如何なる譯でせうか病氣でせうか。(小川原、愛讀女)

答　それ丈けにては要領を得ません臨て診察の方針及び豫後を申す事不可能であります。

第二百六問　シモヤケ豫防　(a)ちゞれ毛を直す法はありませんか。(b)シモヤケが手足へ出來て困ります豫防法はありませんか。(しもやけ女)

答　(a)特に有効の藥劑なし、(b)五十倍「カンフル」阿列布或は五十倍サリチール酸アルコホルを患部に塗布せられよ。(一日二回塗)

第二百八問　毛が柔かになる　私は近頃頭髮及び眉毛が柔くなり、抜けて困ります、(一少女)

答　或種の皮膚疾患の爲めに毛髮の營養障害を來せるに原因するものならん診察を要す。

第二百九問　腦と鼻　私は毎日頭痛がし耳鳴がし、それに鼻は五六年前から惡いてて、何となく物事に感じ安く、怒じ安く、少しの事にも泣かれます。(埼玉千枝子)

答　鼻咽喉に加答兒性疾患ありて之にヒステリー症を兼ねたる者ならんが醫師の治療を仰ぎ速に治療せられん事を望む。

第二百十問　果して有効　身體の肥滿法として龍眼肉を食すべく、肥滿方養成法として山薯と黒胡麻とを多く食すべしと或書にありましたが果して有効でせうか。(廣島、瘦女)

答　是の如き者の藥物効能有るや否や不明なり、身體健康なれば體質に從ひ肥滿もすべく肥滿方も確實となる可し故に根本的に身體を健全に爲すべき方法を講ぜられよ、その健全法は貴下の知得する所ならん。

第二百十一問　背が痛み手が痛み胸が痛む　私は昨年より背が痛み出し、一月より手足、胸部もいたみだし別に大したことは無けれども只氣分あしく、數名の醫師は皆神經衰弱又は神經痛と申しました、月經はごく少なる月もあり、なき月もあります、何病でありませう。(多病者)

答　診察の上でなくば不明なれども或は他の醫師の診斷その當を得たるものならんか、月經の少量なるは營養不良若くは貧血に原因せるか或は生殖器に異常ある爲めか兎に角詳に診せずんば確實なる事は申し上げられません。

第百十二問　月經と交媾　月經時の交はりは差支へありませんか姙娠致しますか、（鈴木）

答　月經時の交媾は頗る不攝生なる行爲である、隨て姙娠は成立せず、姙娠は月經後より次の月經前に至る迄の全期間内に於て施行せる交接中に成立すべきである。

第百十三問　痩せることを望む　私は肥え過ぎて困ります、痩せる法はありませんか。（肥大子）

答　痩せる藥屢々御尋ねに與かります、特効藥としてはありませんが成る可く充分に勞働し且つ心神を働かし、加へて甲狀腺エキスを長時日間服用せられよ。

第二百十四問、隆出術　隆出術を施すには一回ではいけないのですか。（小家鼠）

答　一回にても適應症に適當せる手術を施せばその目的を達する事を得べし。

第二百十五問　母乳と牛乳とミルク　母乳が出ない時は其の代りに牛乳ミルク、其他何が最もよろしきか、又牛乳等にて育ちし子は成長の後其體質、性質等に何等かの變調はありませんか。（子思ひ女）

答　母乳に次ぐ可きは健康なる乳母の眞乳であります然し乳母を得る事能はざれば牛乳を適當なる方法の下に用ひられよ「コンデンスミルク」は牛乳に比して乳兒を哺育するに頗る劣る所あります、牛乳に據りて哺育したる小兒にして都合能く健全に成長すれば何等の故障なく體性狀に異狀を呈せず。

第二百十六問　近眼でなきか　此頃讀書すると眼がシク／＼痛みます、二十度の眼鏡を用ひますとよく見えます、けれども少し頭痛がいたします、眼鏡なしでも勿論よく見えるのです、近眼になるのではありますまいか（春榮）

答　近眼に非ざる可し確實なる眼科醫の診斷を御受けなさい。

第二百十七問　乳暈が黑い　(a)未婚ですのに既婚者のやうに乳暈が黑くて困ります。(b)全身男子の如く色黑く、且毛があります、手足顔などに甚いです。(c)外陰部が何とも言へぬやうなかゆさを覺えて困ります、洗滌してもどうしてもかゆいんですどうしたんでせう。（色黑女）

答　(a)あなたは人よりも皮膚の色素に富みたる方なる可し、從て乳暈にも色素の沈着著しいのである、之は所謂先天性うまれつきでありますから如何にしても治する事は出來ません、

(b)皮膚に色素の沈着多き人に往々纖毛の異常的發育したるを見る、之も前申す通り先天性なれば絶滅する事難し剃刀を以て芟除するより他に方法なし、

(c)多分「プルリーゴー」と申す疾患らしく考へられます、然し診察の上でなくば確實なる事は申上られませぬ、婦人科醫に就て診察を御受けなさい。

第二百十八問　遺傳に就いて　遺傳といふものは（精神上の）その人が初めからその事は自覺してかゝつて成るべくその發現をさけるやうつとめたならば幾分これを避けることが出來るものでせうか、それとも全然防ぎえぬものでせうか。（きく女）

答　單に精神上の遺傳と申ては頗る漠然として解釋に苦む疾患そのものゝ遺傳もある、體質素因の遺傳もあります前者及び後者共に既に先天的獲受せしものなれば之を除かんとするも避け得らるべきものではありません。然し何れにしても自己の健康の上に多大の注意を拂ひ諸般の攝生法を勵行し健全なるを得ば遺傳そのものに拘はるゝ機會を遠く事を得らるゝであらうと考へます。

讀友倶樂部



○規定　本欄は讀友諸嬢の機關として隨意に使用あれ各自に誠實を守られたし不確實の投稿は沒書とす住所本名は詳記すると字體の明瞭を要す

交際を望む

○御願　前號の誌上で交際を求めました處、勝手な注文にもかゝはらず皆樣から御手紙やお葉書お惠み下さつて有がたう存じます、皆樣の仰せの通り同名の方でなくとも文學好きのお人でさへあれば宜しいのです、麻布四ノ橋淵子樣御住所くわしくお知らせ下さいまし、そして貴女のお姉樣は私をよく御存じのそうですが、私は誰方？かいくら考へても分りません、殊によつたらお姉樣は山脇高等女學校に御通ひ遊ばしてゐらしたのでは御座いませんの？、私より上級でいらしたのでせう。（麻布富士見町九　池田君子）

○交際を望む　萬天下の諸姉樣に御願ひ申します私は女子文壇皆樣の御作を樂しみに朝夕手本としてはなしません、實に月日の立つは早きものにて女子文壇の投書家たりし田中久子樣早三[illegible]三時に亡くなられてより一年の月日を送りました久子樣の御作を拜見てきないのも一ケ年であります私は此御方の御作は忘られませんいたわしい哉……沸の二十里つて云ふ御作が私し[illegible]へのかたみとなつたかと思ふとそゞろ涙が出ます余り懐かしさに別に日記に書取つて置きました諸姉樣も同じ思て有りましよう……さて妾も女子文壇の姉樣方につひて皆樣交際して下さい永く〳〵御情のこもつた御文通が致したいのであります年は拾八歳であります（静岡縣濱名郡北濱村東美園、鈴木いー子）

○高女在學の方　妾は只今高等女學校三年生で御座います雜誌や繪葉書の交換御願ひ申します妾の宅は神戸市ですが今は親戚方へ遊學に來て居りますのどうぞ清い友として御交際を願ひます御皆さんの御自愛なさる寫眞御送附下さいな妾しの見苦しい寫眞にしおりやりボン繪葉書そへて返禮致します。（大阪市東區上本町九丁目一五三阪田清樣方、孤子）

○しばらく　御不沙汰いたしました、どうかまたよろしくお願いたします、皆樣お手紙を頂だい。（京都市陵屋町出水下る、宮原みどり）

○九州高等女學校の方へ　私御校の懷徳館時代に學んでゐた者でございます皆樣とは陰ながらおなつかしう思ふて居りますあの安河内先生は今も御校にお出てすか私御手紙あげましても一度も御返事頂かないものですから何卒お願ひですから御教へ下さいませ（佐賀縣佐賀郡中川副尋常小校學永松朝子）

○眞の姉樣の如く　私は北海の地に住むて居る一少女で御座います實に私の身は不幸續きて御座いまして毎日涙のひる間も御座いません、どうぞ此不幸の身を憐れんて、眞の姉樣の様に御交際下さる方がありましたなら、一時的でなく御交際下さい、又そう云ふ御心の方でなくとも讀友として玉章の交換を願ます（北海道札幌區南四、四九、伊藤ゆき子）

○十七歳の方より　先月交際を望ましたら御親切に二十七名の諸姉さん方はエハガキ玉章を下さいましたが有難く御禮致しましたが男子の方も三人程ありました、御返禮は致せません男子の方は一切御斷はりますが誌上の姉さん方永久に御交際を願ますよ但し十七歳の方より二十年の姉樣方え願ひます幾人たりとも斷ません（秋田縣仙北郡金澤町すみれ會内加藤うん子）

○外國に在す方に　外國におわします讀友の皆々樣より繪葉書や寫眞の御交換を願ます又外國のスタンプ付の切手も妾大好てすから是非讀方か送りて下さいませんか相當の返禮を致します-千葉縣香取郡多古町居射平山勘重郎方かほる）

○熊本にて　私は地方の女學校を卒業して只今當地に就縫して居るのです淋しいから近くの皆樣御遊びにお出て下さい御交際下さい熊本の名所エハがキで御返事します何御交際下さる皆樣に（何人にても）九州文學其他雜誌進呈いたします申込下さい（熊本市京町二丁目二十三石島方にて宮崎なみ子）

○歌の友　誌友の諸姉様方よ私は不束ながら歌が好きな者てすから同好の御方は御交際下さいませ（越後國刈羽郡北條村大字東長島金篠傳左衛門方、美代子）

○音樂　私は高等女學校三年まで修めて止むを得ぬ事情の爲め中途退學しました、私は音樂や繪畫が好きです、斯道に同趣味の方とお交りたう存じます、音樂書類の交換や、繪葉書の交換など（兵庫縣加東郡小野町井上萬司方、北山とも子）

○御禮　意外にたくさんの方から御交際に預りましてなんと御禮の申上やうもございません若も皆様の内て御返事をもらし居るやもわかりませんので本誌で御詫び申上ます今後一時的でなくお願ひ申上ます（長崎市外深堀、樋口しづえ）

○お斷り　或る事情の爲め伊萬里に來てゐます、交際はお斷り申ます（元稲崎に居た君枝）

○多數　餘り多數で一々お返送上かれました、不惡お許しな（和歌山市小松原通五丁目、鈴木ふみ子）

○看護中　妾は實際越後てございますけれども此度姉上様病氣の爲め看護に來て居る者て女學校は三年生てす前春通り學校を退學致して看護に來ましたので唯何の樂しみなく淋びしき田舍に暮して居りますが何卒親密なる御交際を願ます御玉章下さいな屹度御返事は致します（群馬縣山田郡境野村清水屋内、内山久子）

○マッチの標　私は片田舎のものですがマッチの商標及び料理屋の印影を蒐集中で御座いますから送って下さつた方には當地の名所エハガキを以て必ず御禮を致します又交換も致します（羽後國増田町一〇〇東海林はる）

新年號の誌友くらぶ

▲新年の本誌が『満五周年紀念號』として特に好い雑誌になることは御承知てせう。

▲そこで誌友くらぶにも出來るたけ多くの紙數を割いて賑かにしたいと思ひますから盛んに投稿して下さい

▲用務のこと、交際のことは勿論、此際何か新らしい方法を考へて誌友くらぶの欄を善用して下さい

▲各地通信も特に皆さんにお願ひしまして、面白い報導を得たいものてす。（通信は半紙に限る）

▲圖書換讀も本欄の特色てす、讀み終つた書物は未だ讀まない他の書物雑誌類と交換して御覧なさるのは好いことてす、繪畫類の交換も興味があります、

▲新聞の換讀、土地名産の交換、呉服類の切端の交換編物の交換なども勿論有益てせう

▲「誌友くらぶ」の原稿に限りはがきてもよろしい、但し字を明瞭に書いて下さい、鉛筆て書いたのは没書

▲而して一般に通じて心得て頂きたいことは誠實を守ることてす、不心得の者は自ら制裁を受けねばなりません

▲新年號の誌友くらぶ投稿に限り**本月十日締切とす**

○詩と畫　新體詩好きの御方と給畫に趣味持たゐる御方に御願ひ申します御交際を（能登國鹿島郡能登部校、近江倫枝）

○十八歳の方に　何卒又々皆様と御仲間入れに願ひますそして私は當年十八歳(同年)の方との御文通を切望いたします（豊橋市東八百十二今非波津子）

○別辭　廣島縣の手島政子さんは或る事情の爲め皆さんともお別れしなければならぬことになりました、それについて記者の手許まで懇切なる挨拶が來てゐます、皆さんも其お積りてよろしく了承を願ひます（記者）

○左の皆さんからは正しく清く美しき交際を求めたいとの事てす、文言は大抵同一て特に一つ〳〵舉げる必要を認めませんから住所姓名を例の如く並記いたして置きます、何卒誌友の皆さんも其積りて宜しき交際をおつゞけ下さい。

○日本橋區本石町二ノ十二杉本内
米倉松
○長野縣筑摩郡讃春村與川、小林
しげ
○千葉縣成深郡局西村中野、島田
孝子
○筑前八幡町枝光諏訪町四丁目久米内、中原
とみ子
○安房館山町城山の麓、神作磯
○根室私田村三百三番地、平川菊榮子

○滋賀縣犬上郡彥根池須町、坂春江
○秋田縣仙北郡金澤町すみれ會內、萩原とよ子
○靜岡縣濱名郡北濱村高畑、鈴木さかえ子
○北見網走町南通一丁目、宮本鯛子
○東京府下南葛飾郡吾嬬村清塲長瀨宮郎方橋本光子
○靜岡縣富士郡吉原町、內田英江
○茨城縣稻敷郡源清田村古河林、松本久江子
○山城乙訓郡久世村字久世、風間ゑい子
○福井縣吉田郡下志比村呑口、佐々木あきの
○京都室町通五條上ル杉山彌吉內、神崎雲
○千葉縣匝瑳郡共利村八軒町高橋兵助方、高橋野菊
○靜岡縣富士郡吉原町傳馬町、松原意志子
○上總山武郡鳴濱白幡八一〇、藤田すみれ
○高知市浦戶町濵田方、久武いそ月

讀者と記者

○記者樣、私お願ひこざいますの！、あの何卒本誌にも愛讀者大會を開いて下さいませんか、そして文壇投書家の諸姉樣に直接會見する事が出來たらどんな嬉しいでせう、皆樣も大いに御さんせい遊ばして下さいな。（麻布君香）記者曰皆さんの方で申合せて小集でもお開きになつては何うです、人數は少くとも興味のある會を開くのは好いとです記者は勿論贊成です）○記者樣私は今年十七歲になる不束な者で御座います常々文章が好きて、いつでも投書しようと思つて書いて見ますけれど此の通り字が書けないし文章も拙くてとても、はづかしくつて投書致し兼れてましたが、いつまでもこんな風では上手になれないと思つて、今度、思切つて投書致しました、どうぞ記者樣、本誌にのせて、充分批評して下さいましたら私はどんなに嬉しいかわかりません（きん子）（記者曰、御熱望は尤もなことゝだと思ひます、作物さへよろしければ記者は喜んで紙上に出します、紙上に出なくとも記者は必ず拜見してをります、そして進歩の速かならんことを祈つてゐます）○投書には匿名許りて住所姓名は一々しるさなくてもいゝのですか、どうぞお教へ下さいませ（鈴木茂子）（記者曰、投書の原稿には片隅へなりと一々住所姓名を記して下さい、匿名は別に文章の題の下に書いて下さい）○記者樣晶子先生の「常夏」より新らしい歌集がありますかありましたら發行處と定價を教へて下さいませ（遠江さかえ子）（記者曰、あります、歌集『佐保姫』定價一圓、神田東紅梅町二番地新詩社で發賣してゐます）○記者樣拾月號の和歌に「秀逸」の三番目なる「女てふ、いとやごとなき、誇らひに亡びぬ我れは廿年にして」と謂ふのがありましたが此の「やごとなき」は止む事無きてやんごと無きも同意味なのですか、何卒御說明を願ひます、（丹波香羅女（記者曰、左樣同意味です）○沖繩縣の遠山はな子さんに、枕草子春曙抄は博文館の發行で定價一圓五拾錢郵稅十五錢（全七册）源氏物語湖月抄は日本橋區馬喰町二ノ一、興文社發行で全八册定價二圓郵稅四十八錢です、其他のお尋れに就いては一寸一言で答へかれます（記者）○大阪西區愛讀者さんに御注文の件は考てみます、なほ本社から女子懸賞文集の一と二との出版されたとを御存知ですか（記者）○神田のみのべさんに、竹久夢二君は目下麴町區飯田町三ノ五飯田軒に居ます（記者）○岡山の宮城峯子さんに、寸法は二寸の三寸、紙は薄葉か雁皮、締切は毎月十五日です（記者）○名古屋でふさんに。二枚の圖書切符で一部の書物を求めることは出來ます、また里見八犬傳は博文館から出版してゐます、帝國文庫の內にあります、一册六十錢で三册つゞきです（記者）○伊豫、よしゑさんに、お言葉は確に承りました（記者）○とく子さんに、衛生問答は投稿と同封で差支ありません（記者）○お尋れの件で別にお返事申さなくてもよろしいと思つた方に對しては、お返事代りに下にお名前だけを掲げて置きます、伊豫、文子。なでしこ。蒲原早咲。丸山りう。秩父、とく子。北海道、山本くにゑ。糸瓶子。麻布夕ほし。豐州、吉田散花。濱松、菊子、京都、楠田信子。上總、鶴岡富路子。白根町、ちい子。白芙蓉。平井ゑし子豐香。文子。水城雫。蕪子。白峯あつ子。大分縣、渡部つや子。佐賀縣、山根ふじ子。小樽、清野芳枝。むらさめ。本郷、深谷英子。山口縣中塚繁子。讃岐、藤澤雲の色。

各地通信

○信濃より　兼て御承知の如く妾の村は信濃の山中と迄云はれて居ります、冬期は藁細工と楮で製す內山紙を漉くので日を送ります、雪は七八尺も積りまして冬四つきの間、屋根の雪かたづけ五回程、車馬が橇と變ります、更に農業と袖稼ぎ、冬は二間もある割木を挽き、馬、車は戶外に出る事が出來ません、仕用の水は清水て暖

くありますが汲みなきが出來ず、村の部落が散らばつてなつて學校通ひが離儀であります（長野縣下高井郡往郷村假鈴みや子）

樂器、寫眞、編物

○諸姉様の御内にヴアイオリン、洋琴、手風琴などの中古を御持らの方は何卒御讓り下さい又左記の書籍と交換でもよろしいです、女子文壇、日本文學全書、ムラサキ、婦人世界、少女の友、女學世界、など數十册あります故御望みの方は何れとても又何册でも差上ますよ下記へ御一報下さい先着の方へはエハガキを上げます（肥前江迎局區内猷ヶ浦、川野頴子）○只今私の手元に洋琴、ハーモニカ小說など御座います故、御望みの方は何なりとも御交換下さい、ハーモニカは中古、洋琴は新らしいのです、未使用の繪葉書、（風景各種）澤山あり小說と交換を望む（茨城縣新治郡眞鍋町中村富士子）○御懐しき誌上の姉君よ「刺繍」（ハンカチーフ）「活花用の造花」「鉢附」皆御手製のを御願したい夫れから諸姉様方の御生國の名産、面白き小說、御送り下さいました方には我國產の水晶細工類（指環、印材守玉）標本用原石で御返禮いたします（山梨縣東山梨郡中牧村岡政子）○皆さん其後は久く御無沙汰致しました私は今春漸く東京の頌榮女學校を卒業し今は田舍に日を送つてゐます歸省する時親友と撮影した寫眞及び一人で撮したのが數枚御座いますから繪端書や編物御送り下された御方には必ず差上ます（千葉縣長生郡二宮村武名蒲田靜子）○誌上の皆様姿の手許に手風琴の不用がありますが伯爵夫人か女夫波（二冊田口掬汀作）山と水の内の何れかと御交換して下さい（靜岡縣引佐郡麁玉村伊藤ぎん子）○文壇愛讀の諸姉上様何卒御寫眞を送つて頂戴な御送り下さる方には姿の見苦しい寫眞に絹はんから。リボン編物等添へて御禮致します（大和國朝和局内飯田菊治郡方、初菊）○未使用にして完全なる、岡崎描寫伸縮器を何品にてもよろしく御交換下さい御望の方は往復ハガキにて御自分の住所姓名を明白に認て御申こし下さい委細を御知らせ申します（靜岡縣濱松、紺町平岩白菊）○バイオリン御不用の御方はおゆづりくださいませんか御禮には懐風戀風、波やり歌、巨艦來、現代主張の家庭の實益、とを上げます、千山萬水御入用の御方もお知らせください、（岩代國耶麻郡喜多方本仲町、原澤寧）

繪葉書を好む

○東京京都大阪の有名な芝居の繪葉書を御送附下さいました御方には當地の繪葉書か小說類て御返禮致ます、（大連吉野町一ノ二九ノ四、柿本千枝子）○名古屋市内にて外國郵便切手を蒐集して居る御方が有りませんか、有りますならば御願ひ申たき事有之候まゝ御住所姓名御知らせ被下度く都合にて男の方にも宜數しきに付願上ます（名古屋市本重町本町四入南側保本方しか子）○私は名所繪ハがきが大好きです御交換を（大阪市北區天滿橋筋四丁目、北島秀子）○妾は下野那須原の南部に住んで居る一處女ですが繪葉書が好きて〳〵時々母さんや兄さんに小言をいはれる位なのよ滿天下の御情深き諸姉樣何んな繪葉書ても宜しう御座ますから御惠み下さるませ必ず大演習繪葉書て御返しします又御寫眞交換もして頂戴（栃木縣那須郡境村下堺、佐藤稲子）○日本の古切手（現行使用外のもの）紀念切手あります外國切手と御交換願ひます（弘前市田茂木町石戸谷子）○繪はがきの交換をねがひます。（京都市五條通油小路東入、大島染織所内二年生、神田佐子）○どうか繪葉書を交換して頂戴（京都府愛宕郡靈ヶ峯中川猪之介方にて中川久子）○以前一度私しは諸孃と繪葉書の交換を願ひましたが今は中絕の有樣で物足らぬ感じがしてなりません、是非又繪葉書交換を願ひます（山梨縣東八代郡祝村内田政子）○新年の繪ハがキ交換を願ひます、（長野縣北安曇郡廣津村會中峰蝶子）○內筆（但し自作）の交換をして下さいませんか嬉こんで御返葉致します（豐後佐伯町兒玉方村尾黄蝶）○何卒名所繪葉書美人繪葉書を願ひます（能登國皆月郵便局區內、茶木春枝）○なつかしき誌友の皆様ハガキでも額面でもいゝのですが皆様の御手に成たきれいな肉筆の畫を御惠み下さいませ御禮には寫眞にあみ物か又面白い新小說を添へて御送附致します又ハガキを五枚一組にして送り下されば私の氣に入たのに十人丈には前記の外に清正公三百年祭紀念のハンカチーフ（スタンプ付）を添へて御禮申ます（熊本市上林町九番地友非孤友子）○皆様新年には繪葉書の交換をして頂戴れ、妾からも順次御返葉いたします（大阪市北區富島町三一七永田內横山君子）○妾は日本國中の名所へハがキを求めたい〳〵思て居ます皆様の內でどうか未使用の名所ハがキを御持ちになる御方様一枚にても宜しうございますから御送り下さい

な御通信はきつと致します（長野縣西竹摩大桑村野尻伊勢金之助様方あや子）

問合せ

○大阪の米子様　いつかは尋ね申して御通信を申さうと思つて居りましたのが今になりました大阪毎日新聞の小說春潮を澤山送つて下さいましたがた〻大阪にて米子様とばかり委しく御所が分りませず日増しに御なつかしさの募りますので一寸誌上で伺ひました御かまひなくば御所書を下名へ（滋賀縣甲賀郡貴生川村林醫院内廣惠緒）

○手島政子様　廣島賀茂郡仁高町の政子様八月本誌中に藝術御用との事ありましたので、お送りしましたが未だにお返事ありません如何なされました（岩代若松市内にてきぬ子）

○安達きぬ子さん　の御所を御存じの方は知らしていただけませんか。どうぞお願み致します。（三重縣安濃郡世東村中跡部安田とし子）

○かほる様　誌友の皆様に御尋ね致します去る九月に大阪から和歌山の方へ行かれたかほる様の御住所を御存じの御方は何卒左記の所迄御知らせ下さいな御願ひです御禮として紛來繪葉書を數葉御送りいたします（大阪市東區空堀通り壹丁目七十一番地梅鉢せい子）

持つてゐる書物
讀みたい書物

○詩集と小說　私の手許に、白羊宮、鐘樓守、西國餘情、亂れ髮、山鳩、小猫、野菊集、ヘイカラ集、肉彈、風波摩等の詩集、小說、が不用になつて居ますから、皆様の内に舞姫、佳人等艸等の詩集や、食道樂の各編及び何か面白い小說類と御交換被下いませんか、どうか至急に御願ひ致します（伊勢龜山東町山川つい子）

○新派和歌評釋　並びに新派歌集ならば何にてもよろしく御座いますから拜借御きゝ入れの御姉上様は失禮乍ら御端書にて先に御知らせ下さいませ、（山口縣山口町後河原、酒向とし子）

○講義錄を求む　誠に勝手なお願ひでございますが皆様のおうちに大日本國民中學會發行實用女學講義余部御不用の方がおありでしたら何卒私の所持致しまする下記の書籍と御交換下さいませまいか伏してお願ひ致します。女子文壇卅餘冊、自然と人生、ツルゲネーフ短篇集、美文資料、平家物語、寫生文範、言文一致文範、女學世界、文章世界等、（東京府下南葛飾郡寺島村新田一、八三九鈴木春子）

○不如歸其他　私の手許に不如歸　自然と人生、習字特許練習帖、實用女子讀の餘其他小說書籍等不用の書籍がありますから、皆様之内思出の記、肉彈、紙子等不用の書籍があれば御交換を願ます、（東京本郷元町二丁目内田方加藤政）

○信實なる換讀　當地方には文藝の趣味な有して居らるゝ方は皆無と申してもいゝ位情ないもので御座います、從つて圖書館の設備も御座いませず、私如きは讀書に非常なる不便を感じて居ります、多少の書は所持して居りますからお換讀下さる方はありませんが、また、御不用書が、おありでしたらお知らせ下さい次第によつてはお讀受けも致します、お交換も致します……、傍ら遠國の方に、信實な御交際を願ひます（岩代國喜多方西町、五十嵐幸吉方、清子）

○全書類　皆様長らくお別れして居りました、以後によろしく左の不用書繪はがき、編物風景寫眞と交換願ひます。日本文學全書、日本歌學全書、理科十二ヶ月、教訓繪ばなし（十六編まで）五十二册と日本女子立志編鐘樓守、樗姫、風、夏子、花鳥集、露伴叢書歌まなび、詠歌辭典、女子普通文典、また水彩畫と造花の交換神かけて願ひます（信濃下高井郡往鄕村青木みゆき子）

○歌集　誌友の皆様の御手許に、『みだれ髮』『佐保姫』其他歌集や、短歌雜誌なら何でも宜敷から送つて下さいませんか。私の方よりは、安房の海、新體詩の作法、新體詩歌自在、其他小說類で御禮いたします。但し御送り下さるお方は前もつて御通知をして下さい。（上總苅谷局内千町須賀谷、鑑丘一枝子）

○根本修養のある分　皆様の中に女子文壇の若き婦人の根本修養はじめから九月迄お持ちの方は、私の秀才文壇小見教育など多く持つてゐますから、御交換下さいませんか。もし御換へ下さる方ありましたら下名迄お知らせ下さい、郵稅は私方から送ります、（安房國安佐郡中原村字上原、土井光代）

○早稻田の講義　本誌愛讀の皆様御手許に、早稻田大學文學科講義錄、御所持てしたら全

部お譲り下さいませんか、都合によりましては入費以下何號でも差つかえありませぬ、決してお損はかけません程に、至急、お報せを願ひます、もとより男子の方でもよろしく御座います(岩代國喜多方新仲町、五十嵐清)○お情深き姉様の内に、何れなりとも小説めぐみ給ひてよ。 妾の女かん、女學世界、少女世界少年、女子文壇、ウォルズオスの詩、少女界、婦人世界、などにて必ず〳〵相當に御禮申上ます、先着十名の方へは手製の しなりさし上ます(宮城縣刈田郡白石本町、菅野こふ子)○左記の書籍御所持の方があらば私の婦人世界、女子文壇、ムラサキ、日本文學全書、少女の友、硯鏡百話、深山の美人、婦女用文、等數十冊と御交換下さい又御譲り下すつてもよろしう御座います寛風戀風、金色夜叉、實用女學讀録、料理術新書、編み製作新書、編物新書、又ヴァイオリン御持の方は御譲り下さる所に出來ませんか御一報を願ます(肥前北松浦郡鹿町村川野穎子)○紀行文と蘆花、青山白雲、遊侠傳と蘆花「青蘆集」と御交換下さる方にありませぬか(愛知縣渥美郡老津村彦坂のぶえ)○誌友の諸姉様妾の手許に「文章讀録」「金色夜叉」「不必要」「模範村長」「新不如歸」「新乳姉妹」「洋裝」「小引御所」「池底の犯罪」「思山の記」「音樂生」「櫻こよみ」「拾遺劇傳」「婦人世界」「文藝雜誌」其他諸雜誌澤山に不用になつて居りますから皆様より「編物」「ハンカチフ」「リボン」「外國絵葉書」て一日も早く申し越し下さい「青春」「小女の秘密」「おてんば娘日記」「短篇小説」おもちの御方は交換して下さい、外に「女子文壇」二十冊からありますから添へて差上ます(大坂府東成郡中本村字本庄七百九十五番地福井太郎様方東艶子)○皆様の御許に狗間錄、一葉全集、俗曲評釋春の卷、伊勢住吉、源氏物語、土佐日記、徒然草、方丈記、枕草紙其の他國文の書が御座いましたら私のムラサキ、女學世界、(昨年より本年まで)秀才文壇、婦人世界、音樂遊戲、禮儀訓話、編物新書ヴァイオリン教科書等の内御好みの本を御指定の上御送附下さい其の他御禮には下田名勝えはがきリボン等も致しますから是も一寸何れかな御通知願度う御座います(靜岡縣豆州下田町廣岡一一二二土谷すゞ子)○私の手許に金色夜叉、紅葉全集、新寛風戀風、背水、己が罪、思ひ出の記、多情多恨、雛子、夏子、ハイカラ令孃、ハイカラ夫婦、寛詩人、戀と愛、不如歸、澀野、不言不語、少女の戀、夢、澤、行く雲、天うつ波、深山の美人、小猫、血の波、みだれ髮女學生等不用になつて居りますから小包料として八錢送られば、かしてあげます。(攝津川邊郡長尾村口谷阪土かめ子)○誌友の皆様桐一葉、コブシ、肉彈、笑、天うつ浪、御持ちの方は私の古葵集、すみ子、三枚つゞき、小ねこ、催眠術、新學士、婦人界の増刊國秀文學、小雛族前後、吃の小太郎、文藝倶樂部三十八年六月分より三十九年十二月落分刊共て二十四冊御座いますから、どうぞ御交換を願ひます先に、背て下名迄御通知を乞ふ(鳥取市片後片原町十九、北村いち子)○誌友の諸姉様方の中にて女學校めぐりと婦人畫報おもちの御方下されまで御送りちようだいな御禮はリボンかシボりにてかならずいたします(千葉縣八日市場本町深堀てる子)○誌友の皆様よ、私の手許に不如歸、コブシ、肉彈等其他小説類澤山ありますから皆様の御許に伯爵夫人、思出の記などありますれば何卒御換讀を願ひます(茨城縣稲敷郡源清田村古河林松本成智子)○愛讀の諸嬢様妾は雜誌が澤山ありますから切手四錢御送りの方には一部宛進呈致します但少女世界、女學世界、少年、少年世界、少年界、文藝倶樂部、日本少年、少女の友其他數種です全部では六七百冊御座います(常陸稲敷郡鳩崎村佐倉、大槻成美)○妾の手許に女子文壇婦人くらぶ女學世界、婦人世界、趣味、文章世界、少年世界、少女世界、秀才文壇等六十餘冊その他文壇の花、新少文、新作家短篇小説懸賞文集などあります御望みの方は郵税二錢添えて家庭料理手藝の本かリボン香水かんざし櫛などで申込んで下さいませ必ず三冊以上相當なものでお禮致します(大阪曾根崎五丁目八一、松浦方、ふさ子)○皆様方の手許に拳斷の本(上中下卷)共御不用の御方は私の女子文壇何冊なりとも御交換下さる方は御一報下さい又ハーモニカにてもよし(青森縣五所河原町林ちゑ子)○誌友の諸姉上様妾の手許に女子文壇三冊身長増加法、少女世界、新家庭、小説明大極兵衞、婦人病者の心得の栞、營業案内、文藝倶樂部等の不用の品がありますから諸姉上方様の内にヴアイオリン、手風琴、寫眞器械、月琴ハーモニカ等お持ちの方は右の品と御交換下さい(茨城縣久慈郡、西小澤落合船橋方すて子)○妾の手元に瀧子、夏子、寛風戀風色々の小説不用になりますから何なりと御交換下され寫眞御送り下さい小説送ります(大和朝和分局長柄山崎方芳枝)

○私の手許に女學世界三十册餘猶此外に婦人世界、少年世界、少年、女子文壇等の雜誌が取混ぜて三十册餘ありますから皆様の内に御無用の小說類がありましたら何でもかまいませんから御交換下さいませんか切に〳〵御願ひ申上ます但し不如歸、續後不如歸、乳姉妹(上)の外の新小說類なら色々御結構でございます(江州犬上郡彦根中組西佐伊登さよ子)○妾の許に、說書作文辭典、會玉篇全、算術教科書上下、漢和新辭典、袖珍學生用英和辭典、近世鑛物界教科書、中學一年級用國史、中等漢文讀本卷二、和英袖珍新字彙、英語獨案内、日常の會話、我們發音歌の不用書がありますから安價にて讓ろ、お望の方は往復はがきにて御照會下さい(福岡縣朝倉郡小石原村荒川醫院內、荒川芳翠)○私の手元に、肉彈、金色夜叉(全二册後編は此度尾崎さんの高弟小栗風葉君の續編まで)可憐兒(全二册)舞女白菊(但落合氏の歌及詩入)不如歸、新不如歸、後不如歸、續後の不如歸、新金色夜叉、四季の料理法(全四册春夏秋冬)妾の罪悔、想夫憐、乳姉妹、己が罪、新己が罪、淡女紗錄、藤村詩集、此外雜誌には東京パック、東京、サンデー、新小說、女學世界、婦人世界、小女世界、少女の友などがありますが是非御交換を願ます又私は論語情も大すきですから諸姉上様の内で御不用のがありましたなら御交換を願ます猶御寫眞をそへて御送りの方には私の見憎い寫眞をそへて必ず御返詞致します(千葉縣千葉郡津田沼町藤崎、小林幸子)○妾の元に、ヴァイオリン、手風琴、月琴、ピアノ等がありますが不用です。又、洋書書籍では、洋書讀本錄(四十册)をはじめ洋讀書籍三十餘册ありますが、これも、唯今不用ですから、諸姉御持の書籍と、交換を願ひます、(茨城縣稻敷郡柴崎村皮渡新田山本保方はる子)○誌友の皆様よ妾は美文作法、文章組立法等不用ですわ皆様の内に短歌作法か小說戀學生か、腳本金色夜叉等御持の方は御交換下さいませんか(岐阜縣加茂郡黒川局區内惣見吉六様方花井靜子)○新約全書お讓り下さるお方御座いませんか詩集か寫眞でお返し致します。(千葉縣印旛郡中澤村岩田、秋山花翠)○誌友の皆兄姉、私の手元に日本學生寶鑑及び小說後の不如歸。きくの濱松等有りますから。歌集なら何なりとも。よろしいですから御交換下さいませんか又秀才文壇の古ひのがありますから外の雜誌と御換え下さい、御願ひ申します(新潟縣刈羽郡荒濱村柴野美智子)○皆様の中に新美文、こゝろの秘密。短篇小說。新作家、婦人畫報、世々のあと、明治の令孃、丸櫻氣質、通の話、花と鳥、折紙と圖畫、遊人の母、實業界の婦人、人生の眞相、食物說、教育畫報、家庭の理科、小說では思出の記、密航婦、無花果琵琶歌、戀の輪樂齋、露の曲、烈女の戀、白玉姬、白羊宮、村井弦齋著では兩美人、深山の美人の外、水陸著では女の賊切新俳優の外右何れ成共お選み下さい お禮にはウヱリントン將軍、日本英傑傳、明治禮式、致經初學び女殿下、女用文章、日用作箭文。不如歸の歌、金色夜叉の歌唱歌、日用寶鑑、雜誌では文藝倶樂部文章世界ハガキ文學、小女界、小女世界、小年、女學世界三十部婦人世界三十七册畫家便覽、盛林の友畫界月報、盛業新報、等右お望のていたします(近江國奥山局區内トチ二十二番邸 高田方元子、登代子)○皆様のお寫眞や お寫眞掛繪葉書掛、ヒヂツキ上等アルバムや 未使用の繪來ゑはがき七枚以上で申し込んだ方に左の本をお望に依り差上げますわ、不如歸、戀と戀、乳姉妹、月に立つ影、新美文、短篇小說、其他雜誌や小說澤山あります(秋田縣山本郡藤琴村太良礦山梅澤すみれ)○誌友の皆様私は不如歸、薄命、ウヅラカゴ、本誌(一月カラ)等不用になつてゐます姉様の新小說かヴァイオリンと御交換下さいませヴァイオリンをお送り下すつた方には其他高野山名所繪はがきをそへて御送致しますどうぞお願ひですよ(和歌山縣伊都郡九度山村木澤てる子)○誌友の諸姉様の御内にて、六、八、九、十、十一月のハガキ文學御もちの方は妾の女學世界、少女世界と御交換下さいませんか幾册にてもかまいませんです(大阪市北區宝島濱ハノ二二龜田方園近みどり)○皆様の中に「婦人の日常生活法」「繪畫獨習書」「明治少女節用」おもちの方私の「文藝倶樂部」六册づゝと交換して下さいませ(常陸久慈郡太田仲城町一五五小澤とよ子)○誌友諸兄姉の內に御不用之書籍雜誌でも有らば御送り下さい御禮には四十二年度官立諸學校入學試驗問題、學生立身要鑑、淺米雜誌新國民、新文林、中學世界、女學世界其他不用雜誌書籍六十八册有り右の內何れかて乾度致します普通學書籍なら尙更結構(茨城縣稻敷郡柴崎村皮渡新田山本美澤枝)○私の許に女子文壇女學世界其の他古雜誌が山の様にあつてヂヤマて仕方がありませんが皆様のうちでおのぞみの方が御座いましたら三錢郵券一枚を添へお申越

しになれば何時でもお送り致します御都合によつては郵税丈て差し上げても宜しう御座います(埼玉縣秩父郡三田川村近藤とく子)〇誌友の皆樣私の手許に小說澄子。夏子。黑潮。孝女白菊青嵐靈風。又雜誌趣味。新天地其他種々の書籍澤山ありますから皆樣の内て青春。コブシ其他何小說てもよろしくありますから御持ちの方は交換して頂戴な但し男子の方はお斷りいたします(岩代國河沼郡飯谷村齋藤笠岡校江)〇皆樣の内に和歌新辭典を御持參の方は御座いませんか、妾の短文軌範、水彩畫手引、千山萬水、おてんば頃日記など、取換えて下さいませんか、御好みの方があつたならば一寸知らせて下さいな(北海道小樽區若松町五四浒田長吉方、浒野芳枝)〇私の手許に婦人世界臨時增刊結婚の卷樂しき婦人、女子文壇四卷九號より十冊許り冒險世界二卷一號より十冊許り(何れも口繪は悉く切り取つたものてすけれど)不用になつて居りますお望みの方はハンカチ、リボン、繪葉書、編物、其他何んでも宜敷う御座いますからどうぞ御交換なすつて下さいな(但し三部以下)(岩手縣岩手郡旧頭村飯坂秋月子)〇妾の手許に金色夜叉)火の柱、荷風集、青春、花袋集、恋、夫人の自白等不用てすから、他の小說て餘り汚損してないものと御交換を願ひます(大阪北區富島町三一七、永田方横山きみ子)〇皆さんの中て造花術新書、刺繡術新書、己が罪、不如歸なお持ちのお方は妾の手許にある、編物新書、女子美文作法、女子遊學便覽、小說ては、淡湖コブシ、妾と要などがありますから何れなりともお望みの書物と交換をねがいます、男子の方て色々な事を言つて來ましてもそれは御返事はいたしません、此の間なども男子からの書狀がおありましたがそれに返事はあげませんから……なるべくは東京のお方で直接にいたしたいのですが地方のお方でも正直のお方ならばよろしうございます、またリボンやショールなどの交換もねがいます(本郷區新花町三十六番地富田方にて渡邊三枝)〇何卒皆樣し雜誌の交換をなさつて下さいませ。わたしは病のため一人人知れず苦しんで居る者です。唯雜誌がすきて明けてもくれても之を唯一の友と致して居ります。て御交換下さる方は御問合せ下さいませ。(備中國郡屋局大陶小城菊枝)〇誌友の姉樣方、私の許に種々の小說家庭教科書五冊、其れに不思議のあんかが只今一個種不用に成つてます、お望のお方は新編家庭の科學、四季三食料理法又種々の教科書、姉樣の御寫眞を添へて御送り下さい、火のないこたつは戀度四拾二度位にて一寒夜の用發入眠にて足ろ夜學に最も宜しければ、引替小包にても送ります、但し男子の方にも送ります、常陸金江津村内、成渡り山口ちう子)〇誌友の皆々樣私の手許に左の不用の本が有りますから御交換を願ひます新辭辭典、天地有情、夏子、旅子、天風寶帆、學生潮、ゆく春、不如歸、やどり木、忘れがたみ、一葉全集、女夫波上下、其他文藝倶樂部、新小說等つまらぬ古本が澤山ありますから私の望む本と御交換下さいませぬか、二十八宿、青春、月山全集、梅村詩集、歌山米水、己が罪、女學生、山と水、戀衣戀歌、一年有半、虚栄なんか御持ちの方は交換して下さい(駿河靜岡市水落町二ノ二四根岸方川上愛子)

新刊

〇荷風集　　永井荷風著

荷風氏の『歡樂』が發行幾干ならずして發賣禁止になつたのは洵に惜しいとでした、此編は『歡樂』中の『監獄署の裏』『祝盃』を拔いて、代りに『新歸朝者日記』を加へたものであります、新歸朝者日記は今秋文壇に於て重きを爲したものです、まづ此編まつた一本を改めて推奬致します、製本凡べて『歡樂』に同じ。(定價六拾五錢、麴町區飯田町六丁目易風社發行)

〇自然と印象　　第六、第七

第六集の方には露田夕咲氏の游散徒の愁ひ五篇、三木露風氏の花辨と花粉四篇の詩が載つてゐます、花辨と花粉の中の詩には好いのがあります。第七集の方には加藤介春氏の刺繡四篇と今井白楊氏のFに一篇の詩がある、Fには新しい好い試みだと感じました、自由詩社の諸君が多々益々新しい詩作を示すのは昨今の荒涼たる詩壇にありて聊か心を強うするに足る譯です。

寄贈雜誌

▲無名通信▲新小說▲趣味▲秀才文壇▲少年之友▲新潮▲ホトトギス▲婦人の友▲シキシマ▲國民文學▲スバル▲愛國婦人▲家庭▲婦女新聞▲貴婦人▲婦人世界▲婦人畫報▲婦人くらぶ▲[illegible]愛國婦人▲少女の友▲新文林▲文庫▲其他

雜報

明治四十二年を送る

▲明治四十二年と名づけられたる歳に今一ヶ月にして盡きんとす。

▲文壇は二三年以前の運動の餘力に依りて、進行を續け來りしのみ、新しき發展を見ず、されど一般に調子の沈着となりしは可し。

▲森田草平氏は本年に於て其技術を示したる一人として最も注意すべし。

▲二葉亭四迷氏は本年に於て失ひたる文學者中の最も惜むべき人なりき。

▲森林太郎氏の活動は後進の人々に恐を強うせしむ。

▲劇本界に生氣きざす。

▲北原白秋氏の『邪宗門』と三木露風氏の『廢園』は詩壇の二代表者なり。

▲新[illegible]作家に水野仙子の名を記すべし。

▲發賣禁止は文壇の災なり。

▲多くの詩[illegible]叢書の出版を見たり。

▲新聞界、雜誌界は寧ろ沈靜なりき。

▲若き文學好、投書好は其人々を一新せるが如し。

女子大學運動會を觀る

女子大學の運動會には二三年御無沙汰してゐた、十年は講演會もあり、陳列會もあり、何年とは勿論趣が異つてゐるやうだから出かけてみた、秋晴の麗かな日和に乘じて花の如きお嬢樣連と相前後して校門をくゞつたのは正午すぎてあつた、講演會も終りてあつた、陳列會も時間が無いから只素通りして、直ちに運動會を見る。

生徒席の一隅に御免蒙つて腰を掛けた、後ろに常盤木の大い幹があつて、上から木深く枝を垂れてゐるから自然の日陰になつた、折々蜘蛛の絲が下りて來て小さな虫が頸の上や、頸筋へ觸れるので氣になつたけれど、グラウンドは能く見えた。

第一「松風」高女五年生の表情式運動で、初め二組の生徒が現はれ、一組は唱歌をうたつて、一組は運動をする、發聲の伴奏と運動とが能く調和した。

第二「キャプテンボール」高女三四年生の運動で、紅白二組に別れ、各組の副將は一定の地位に立つてゐる、銃聲一發一個のボールは高く空中に投上られる、紅白入亂れてボールを副將の手に投げ與へやうとする、紅は白を妨げ、白は紅を妨げ、混戰數次、其間ベルが鳴る度に戰鬪を中止する、又ボールを投げ直して戰ひ初める、副將の手を經てキャプテンの手にボールが入れば勝らてある。

第三「第七アマゾン」大學部家政教育三年の運動である、アマゾンは本校の特色とする體操らしい、今回のは人數約五十人と見受けた、何れも質素なる服裝、白の襷を後ろでふさやかに結び、二尺ばかりの銀の棒を持つ、一擧一動、甚だ活潑で勇ましい、銀の棒を一齊にふりあげる時は只見る秋の野に露置く薄の靡くが如く、日光にキラ／＼と閃めく。

第四「桃太郎」幼稚園生徒の運動で、やはり紅白二軍に別れて早く旗を取つた方が勝となる運動の方法はさまで興味あるものとも覺えないが、小さい男の子や女の子が一生懸命になつて走り廻るのが何より可愛らしい、凱旋して乳母車に寶物を積んで歸る子供の顏には全く鬼の首を取つて來たやうな得意さが現れてゐる、是こそ眞の表情であつた。

第五「御國の花」伊太利式の美くしい遊戲で、手に手に黄、紫、紅等の細い輪を持つて運動をする、輪がさま／＼の形に組合される。

第六「ローンテニス」は番外に於て舉行された。

第七「スパニッシュ、ダンス」歐米新式のダンスださうだが、かなり時間も長かつた、是は器械を用ゐない、舞踏(足どり)に深く意を用ゐてあるやうに見受けた。

第八「連脚競爭」高女二年生、脚部を結び合つて競爭するので、結び方にいろ／＼方法が異ふ、愛嬌のある競爭の一つだ。

第九「カーメン」大學部一二年、初めは半圓形に並んで、後は六列になる、長さ一ヤール半の長い布を翻して、ピアノに合せて舞踏する。ハイカラの「玉川」の舞を見るやうだ、優美に感じた。

第十「棍棒體操」教育部三年。普通の棍棒體操である、運動にも教育家は教育家らしい本質

要するものだと思つた。

第十一「自轉車打毬」自轉車運動も本校の特技らしく思ふ、選手は六人、ゴム輪は滑らかにグランドの上を躍る、地には赤と白の小毬が澤山に散布されてある、長い柄のついた網で一つ一つすくふては、別に高く張られた網の中に投込む、靜かな裡に機敏を要する、自轉車の乘り振りに多少の危な氣もないではないが、女子として是だけ上手に乘るのは珍しい方であらう。

第十二「みそさゞい」小學生、甚だ可愛らしい遊戯である、一組は唱歌をうたふ隊、一組は運動する、凡て色彩したる輪に花や鈴のついたのを持つて、「垣根をくゞるみそさゞい――」と云ふ唱歌に合せて輕快に運動をするのだ、輪を組合せたり、頭の上をくゞらせたり、なかなか面白い、歌の譜も子供らしい、心持の好い遊戯であつた。

第十三「綱引」

第十四「長竿體操」大學二年、之は四人一組となり長さ八尺の長竿を一本づゝ左右に持ち、數十組の生徒が一致して運動する、四人の擧手投足が一致せねばならぬ、更に全體が調和せねばならぬ。

第十五「秋のみのり」高女一年、多少道具立の入る遊戯で、花の咲いた樹を一方に立てゝ置いて、蝶だの、蜂だの、風だの、雨だのが出て行つて、花を吸ふたり花を散らしたりする、最後に實を結ばせたのが勝となるのだが、道具立の多いわりに面白さが少かつた。

第十六「亞鈴體操」高女五年。

第十七「木環體操」大學二、三年。兩手に小さな木環を持つて出る、此體操は時間も甚だ長い、變化も多い、且むつかしさうだ、二人宛組合つたり、離れたり、さまざまの變化に富む。

第十八「徒手體操」高女一二三年、幾百人出たか知らぬが殆んど運動場の全體を占領した、體操は別に珍らしくもないが人數が多いからきれいであつた、能く身長も揃つた。

第十九「日英博覽會」高女五年、アーチが立てられたり、旗が出たり、かなり手數を要する仕掛てあるが、其わりに此の遊戯も感興に乏しかつた、シベリア行が早かつたのか、印度洋航海が早かつたのか分らなかつた。

第二十「花賣り」高女四年、紅白の布を垂れた花籠を捧げ出て、所謂表情式體操を行ふのである、見た目には美しい、歌詞は省かれたが運動はしこやかに沈着いたものであつた。

第二十一「徒手體操」教育部一二年、最も眞面目な體操であつた、生徒の一人が先生になつて號令をかける、元來生徒自らの工夫になつた體操ださうだ。

第二十二「自轉車マーチ」大きな蝶の形を地上に描き、自轉車選手六名が其形の通り進行しつゝ、赤青の紙片を撒く、もつと盛んに撒けば好いと思つた。

第二十三「バスケットボール」大學選手、最後の運動として甚だ盛んであつた、ボールが投げられる度に紅軍白軍入亂れて、倒れる者がある、尻餅つく者がある、隨分烈しく戰つた、流石に見物席からも烈い聲で、しろー、あかー、の聲が盛んであつた。

運動は之て終つた、軈て軍樂隊の亮々たる樂聲の裡に君が代の唱歌は起つた、見物席は是が終ると共に潮の引くやうに人が去つた。

何處の運動會でも應援は盛んだが此校はそれが殆んどない、もう少し勢ひをつけても好からう。

此日入場者約七千と註せらる、しかも男子は百人ぐらゐなものだらうと思はれた。(一記者)

西洋 婦人新聞

▲手袋 巴里の貴婦人はSants de Saxeといふ手袋を用ゐてゐる。ボタンなしてあるから手を滑り込ませるのである。色はCafé au laitといつて、淡褐色である。少し寛さに餘裕のあるのを好いとしてある。

▲アルミニユム織 Alumininmの絲を織り交ぜた衣裳が出來た。

▲十圓の席料 ミユンヘンのワグネル興行は一晩十圓の席料なので、音樂のわからうやうな貧乏連がこぼしてゐる。但しMaximilianstrasseのDeutsches MuseumにOpernplionが備付けてあつて、八人丈は「ろは」で聞くことが出來る。尤も此八人のお仲間入は隨分むつかしい。

▲フランス語 矢張佛蘭西語が hn 通て幅を利かしてゐる。或貴婦人が Ancehon の市中の服屋へ袋を買ひに行つた。「Untermock をお見せ」といふと下等品ばかり見せる。それから家を見ると

上等品が飾つてある。「あれは」と云つたら、店の女の曰く。「あれはJuponですよ。」

▲女は不淨　Samojedeの女は今でも男の飾りものばかりを買つて食ふ。女の乗つた橇は不淨だと云つて、腸詰の毛を燒いていぶす。

▲恐ろしい女　虚無黨員たる女子 Tatjana Leontiew は不治の精神病で、監獄からMünsingenの瘋癲院へ移された。一九〇六年に内務大臣 Durnowo と見違へて巴里財産家 Müller を拳銃で打ち殺した女である。

▲婆さんの歌會　Hamburgで婆さんばかりの唱歌會を催した。名はCabaret antique といふのである。詰らない洒落だ。

▲公私混同　ロシアの外務省に勤めてゐる侯爵 Golinischtschewntsow は巴里で婦人の衣裳や帽を買つて、公用書類の行李に入れて、ペエテルブルクへ持つて歸らうとした。これはBelosselski 侯爵夫人に頼まれたのであつた。それが税關で發覺して、税金四百ルウブルと科料二千ルウブルを取られた。

▲小遣論　頃日英國の諸雜誌で夫婦の小使錢の議論が大分やかましい。婦人側で、某貴婦人の說では

一年の收入	夫の午餐代一週分	煙草代一週分
六〇〇〇圓	四　圓	二　圓

右が至當である。然るに夫たるもの此收入で大抵一週に十圓を使つてゐる。濫費が甚しいといふのである。又男子側からの說に云ふには

一年の收入	夫の小使一年分	同上一週分
六〇〇〇圓	五〇〇圓	一〇圓

は至當である。決して濫費ではないと云ふのである。又某夫人はこんな投書をしてゐる。自分の家では

一年の收入	妻の小使一月分	夫小使一週分
二六〇〇圓	五　圓	七圓半

これが甚だ不公平だと云ふのである。日本のおかみさん連はまだ夢にこんな勘定をしないやうだ。

▲衣裳代　米國婦人の衣裳代には驚くべき話が多い。紐育市には一年に七千五百萬圓の衣裳代を拂つてゐる貴婦人が六千人以上ある。Mackay 夫人の衣裳には一揃十萬圓の品がある。Louise Morgan の洗濯物（下着類）一式も十萬圓である。

▲亭主の名　度々亭主を持ち更へる女の多い中で、有名なのは Snell—Coffin—Coffin—Walker—Coffin—Laymann—Love 夫人である。此名前はこれ迄に持つた亭主の名を連結したのである。其中に Coffin が度々出るのは、度々結婚して分れたのである。今年四十歲である。頃日 Love 氏と分れたさうだ。多分遠からず第七の苗字が加へられるであらう。或はもう一度Coffin と來はすまいかといふ風說である。

▲物賣女　巴里で物賣娘の高等學校を立てるといふことが Nosloisir に書いてある。

▲美男競爭會　Folkestone 英國で美男競爭會があつた。黑天鵞絨の幕から、競爭者は首だけ出してにつこり笑ふのである。審査は某未亡人で、最高點の男を即座に夫にするかもしれんといふのであつた。そこで最高點はHarris Hodgham といふ商人で、次點は墺國の伯爵某であつた。商人は妻子があるので未亡人の夫になることは出來なかつた。

▲人形の御馳走　Bayern 王 Ludwig は Marionette の像を食卓に就かせた。脚本作者 Olly de Hilsch は自作の脚本中に出た女を人形に作つて列席させて客を馳走した。紐育の Jonathan Ro[illegible] といふ男は妻が死んだあとで、墓の傍に家を作つて、妻の遺物を集めて、妻の像を据えて、そこで暮してゐる。

▲女役者　ミユンヘンの宮廷のオペラ座長 Felix Mottl は妻 Henriette Standhartner に對して離婚の訴へを起した。理由は濫費である。離婚した上で女優 Fassbender を娶るだらうといふ風評は本人に親しい側から否定されてゐる。妻はもとオペラうたひの女役者であつた。

▲海水浴衣　Trouville 海水浴に行つてゐる女が夏の女服の重量を測つてみた。

上衣	Mousseline	五五〇グラム
裳		四〇〇
下着		七八〇
帽		三四〇

計二キロと四分の一である。尤もTalien といふ夫人が上衣、裳、寶石、靴共五六〇グラム服裝をして舞踏に出た事もある。

（「スバル」椋鳥通信より）

學習院の紀念日

學習院女學部にては十一月十三日を以て創立紀

念日となし、紀念式を擧行することゝなりしが、本年より其式を儉ふしたり、當日は　皇后陛下御臨場あらせられ紀念式は令旨朗讀のみにて極めて簡略に終り小學生と幼稚園幼兒の無邪氣なる演習を御覧に供せり中にもとんぼ、舟、鳩ぽつぽの三つはいづれも幼兒遊戯として一際　陛下の御興を惹き奉りたるものゝ如く引續き小學科生の談話、朗讀、唱歌等總て六名の演習を終始御微笑の中に御覧ありたるが七歳の一條朝子より十一歳の徳川綏子に至るまで打揃ひて言葉爽やかに態度も落着きて見えたるにぞよくも記憶えたるものよとて御感斜ならざりしと承はる。第一次の演習終るや　陛下を始め各皇族方來賓皆一先づ退場したるが其間生徒成績品を御覧あり斯くて再び御休息の御暇もなく直に第二次の學習中學生の演習に臨ませらる今度は生徒等一齊に金剛石の御歌もて御臨場を迎へ奉りし後朗讀談話の外理科實驗、漢文講讀及び佛語、英語對話、琴、ピヤノ等を御覧に供したるが中にも相馬鈴子の注意深き椋鳥の話(佛語)松平昭子のピヤノ狩の歌伊知地、神田、岡田、加納、宮原諸嬢の英語對話日本の消化等は出色の出來榮なりとていと御滿足の色に仰ぎ奉れり。

青山女學院　創立紀念日

青山女學院は明治七年の創立で、本年は恰ゝ創立三十五年に當る、其紀念の爲め十三日より十七日まで運動會、紀念祝歌、講演會、紀念會、文學會等が催ふされた。記者は十七日夜青山學院内弘道館に催ふされた文學會に臨んだ、プログラムには二十二目あつて其通り休みなく演ぜられた、多くは在學の生徒に依つて演ぜられるので、ピアノ、オルガンの演奏、唱歌、對話等であるが、特色は英語會話の達者な點にある、開會の辭が英語でやる位だから其一般を察すべく、對話に沙翁のマクベス演じたが兎に角達者なものである、邦文の朗讀は引立たないが、松本あい子の獨歌の時は感興があつた、終りの邦語對話「學園の古今」は女學院の今昔を一場の對話に仕組んだもので、登場者一同大熱心を以て演じただけ最も異彩を放ち、大喝采の中に青山の歌を唱へて興味ある文學會は閉ぢられた。

（一記者）

動物の心と人間の心

先月の心理學通俗講話會に於て、文學士増田惟茂氏の「動物の心」と云ふ講演あり、氏は先づ動物の心は人間の心と同じきか、若し違ふとすれば何處が違ふか、其差違は何處で付けるかの問題を説明する爲浅草の花屋敷から招いた山雀の藝當を演ぜしめたるが大學の講堂で『エー今度は蘆屋道満大内鑑葛の葉子別れの段』と口上を云ふと山雀は巧みに藝當を演ずる、次に氏は研究材料たる獨樂鼠を出して、クルクル回轉する態を見せ、猶説明して曰く『凡そ人間及び動物の行爲又は運動は心理學上の「聯合」から起るもので我々が躓くと直ぐ手を突く、此場合に手を突くのは決して頭を打つと痛いからと云ふ理窟から考へたのではなく無意識の裡に行はれる、是が即ち「聯合」で此聯合を三別して、先天的本能性、叡智的、合理的とする、鶏が晩を告ぐるのも本能性、家鴨が卵を孵化させ得ないのは馬鹿だからでなく矢張本能性又鶏が雛を育てるのは卵を産むと身體に一種の變調を起して熱が出其熱を冷やす爲に。卵を抱くのだが是も同じく本能性だ、外國の心理學者が鶏が穀物納屋の掛金を外して侵入したのを見て鶏が人間と同じ行爲をすると其智慧に驚いた事もあるが是は第三の合理的聯合、即ち斯うすれば斯う云ふ結果を生ずると考へて行つたのでなく偶然鶏が穀物納屋を蹴つて掛金が開いたので其後は只斯うすれば開くと云ふ即ち一度やつて始めて知つた叡智的聯合に依つたものだ獨逸のハレスと云ふ怜悧な馬に就ても一時非常な評判で例へば二と三と乗ければと聞くと足許に書いた札を足で押へて其答をする、此方法で寫眞を見分ける、物を讀むと云ふので大に驚いた學者があつたが伯林大學の教授プンプスト氏が物陰に隱れて計算を問うたら答が出來なかつたので、是は質問者が最初問を出すと馬が漸次札を押へて行く、すると質問者は自分の問と同じ札の上に足が當つた時、ヤア當つたなと思ふから感情が動作に現はれて身體に微動が生ずるのを馬は夫と見て其札を當てるので、即ち眼の感覺が強力であるので決して合理的聯合ではない前の山雀の藝當も此理由て説明さるべく、即ち是は使用者の動作を動物が知つて行るので叡智的聯合から來るのだ、夫から獨樂鼠の廻轉は多分耳の組織が異るのであらうと云ふ説で、耳は單に音を聞くのみの作用に止らず、其組織中の蝸牛殼狀をなした三半規管は身體の位置を感ぜしむるものだが獨樂鼠が

錯亂して暈眩を生じないのは此規律が完全して居ないからだらう、要するに人間と動物の心の差違は人間は合理的聯合、動物は假智的聯合に依るのであつて如何に怜悧な動物でも決して合理的聯合はない」云々

伊豆七島の女

東京の人が口癖の様に女の多い處と云へば伊豆七島を持ち出す一體伊豆七島即ち大島、八丈島、利島、新島、神津島、三宅島、御藏島には女が男より多いのであろうか、府の統計に據ると果して各島とも女は男より多少づゝ多い即ち合計男一萬三千四百に對し女一萬四千二百八十八で女の男より多きこと正に一千百八十四で男の約一割丈け多い勘定だが女護ヶ島たるの資格はない而して生產の模樣を見ると明治四十年中に於て生れしもの男三百九十七女四百二とあれど內死產男十九女二十四だから相殺すると男女とも四に殖えたのは三百七十八で優劣はないが御藏島の男一に對し女八の出產は頗る振つて居る其上此の九人には一人の死產もない。

▲ところ〲高臺の木々も骨立つて、乾いた土の上を紅葉や銀杏の葉が狂ひ廻る、道の土さへ砂埃になつて何處かへ運び去らるゝ樣です、いよ〲冬が來て新し暦も僅けたのが今一枚殘るばかりになりました。▲それで無くてさへ忙しい年の暮近く迫まつて居るのですが、市に爭ふ賣店の物凄ましい勢が、更に人心を慌しくさせる、行人の歩み、電車自働車の疾驅にも充實した氣早さが見えます、かくしてこの極月も暮れて行くのです。▲本誌も愛に第五年の最後の編輯を了りて、更らに新希望を以て第六年の新らしき頁にペンを染めんとしつゝあるのです。瞑想すれば百川潮落とも云ふべき、時の渦旋の中に立つ思ひがします、さらば諸賢と共に此年を送つて又新らしく見えたく存じます。

新刊

○微温　水野葉舟著

水野氏の近作を集めたものです、此集に於ては更に葉舟獨壇の調子を見ることが出來ます、女子の感情を純にすると云ふことは、斯う云ふ作物を多く讀んで得られる賜物であらうと思ひます、一々梗概を紹介するまでもなく皆さんは御承知だらうと思ひますから集中にある作物の題目だけを舉げて置きます、微温、時計、武島町の女、家出、荒れた心、北村の日記、傷痕、地震、怕、砲兵中尉、遊野へ、香油、さわちやんと安井、ある女の手紙、以上、菊版四百頁瀟洒として少しも厭味のない製本です（定價九十五錢飯田町易風社出版）

○乞食倶樂部　白雲子譯

其名の如く乞食の生活を書いたもので、原著は國木田獨歩氏の所藏であつたさうだ、何しろ材料が飛びはなれてゐるから一般の讀書家には愛せられるでせう、記者もこれから一讀しやうと思つてゐます（定價三十五錢同上出版）

○新體女子用文　文榮閣藏版

此種の書物は澤山ありますが、特に本書の特色を說明しますと、先づ本文は鹽井雨江氏の著作で、實際に適切な女子日用の書簡文を網羅し、鼈頭には作文の注意をいろ〱と述べてある、借て本文も鼈頭も凡て小野鵞堂氏の書式に依り中村不折氏の書に成つたもので、精巧な木版に附してある、此書は作文の參考書にもなると共に、寧ろ習字の稽古をするのに最も好いお手本になります、和綴の優美な書物で凡て日本紙刷（定價七十五錢京橋區中橋廣小路前川文榮閣出版）

○だまされぬ策　岡部學三著

いくら法律が嚴重であつても、道德の制裁があつても世の中には人をだまさうとして居るものが澤山ある、だまされる人も澤山あるからだます人も出て來るので人がだまされないやうになつたら、だます人も少くなららうと云ふ其豫防策として、本書は出來たのでせう、一家を持つてゐる人は勿論、未だ世間なれぬ若い人も一度は見て置いてよろしい（定價五十五錢京橋區南小田原町樂山堂書房出版）

○吉田松陰（前編）　碧瑠璃園著

維新革命の偉人吉田松陰の事蹟を、其生立ちから詳しく書いたもので（ありますが）普通の傳記ではなく、極めて趣味多く小說的に記されて居ますから、興趣湧くが如き間に讀むことが出來ます、卷頭には故人の肖像や手蹟が出て居ります、史料の參考にもなるだらうと思ひます、製本瀟洒、（定價八十錢、京橋中橋廣小路梁江堂書店發行）

誌友諸嬢の寫眞を望む

我が「女子文壇」の誌友は日に月に增加してゆきますか、此增加してゆく愛讀者諸嬢のお寫眞を是非頂きたいものです、婦人は何んな方でも寫眞を持つてゐます、持つてゐる方はお友達にも見せるでせう、誌上のお友達にも見せて下さい、本社は只其紹介の勞を取るのです。其外お持合せの盛粧せる婦人、貴族名士の家庭、女學生の動作、各種紀念會の餘興、世に現れざる名所舊蹟、又は風俗の寫眞などをどし〳〵お貸し下さい、寫眞は用濟次第お返しいたします。

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、美文）
天賞金參圓。 地賞金壹圓五拾錢。 人賞金七拾錢。

▲乙種（お伽噺、家庭日記、新論文、書簡文、新體詩、散文詩）
天賞金貳圓。 地賞金八拾錢。 人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、笑話、歌謠、狡への庭、少女文壇圖畫は二寸の三寸の大さにて描き日本紙に限る）
天賞金壹圓。 地賞金五拾錢。 人賞金貳拾錢。

◉各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す、壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉投稿締切日 凡ての投書は毎月十五日堅く締切ます

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽竊したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

○定期發行分　▲▲▲毎月一回（一日定期發行）

一冊（一回分）	定價金拾五錢	郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊（三月分）	同前金四拾三錢五厘	同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊（半年分）	同前金八拾四錢	同九錢	計金九拾三錢
十二冊（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分　▲▲▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一冊（一回分）	定價金貳拾錢	郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）	同前金三拾八錢	同三錢	計金四拾壹錢
四冊（壹年分）	同前金七拾貳錢	同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部▲▲▲――十六回

四冊（三月分）	定價金六拾三錢五厘	郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）	同前金壹圓二拾三錢	同拾貳錢	計金壹圓三拾五錢
十六冊（壹年分）	同前金貳圓三拾八錢	同二拾四錢	計金貳圓六拾二錢

▼申込注意

振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢貯金記料增すこと、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

（服部製本）

廣告料金

特等	上等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁………	半頁………	半頁十二圓
部數多く有效に比し無類の割安		一行四拾錢
〆切毎號十五日		

特約取扱 ○日本電報通信社 ○明治廣告社 ○弘報堂 ○博報堂

明治四十二年十一月廿六日印刷
明治四十二年十二月一日發行

定價金拾五錢

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區四紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十一番地 電話（本局六〇七番） 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

明治四十二年十一月一日發行（毎月一回一日發行）
第五年第十□號

美人となる奥義は只此一點

美しい婦人は、何れの國、何れの世にも、持て囃されます、皆さんが、各自に、美人となる方法に付き、種々苦心せらるゝのは、誠に尤もの次第であります、さて、美服を着け、粉紅を施すのは、美人となる一方法に相違ありませぬが、併し、それ以外に、血色をよくする事が、極めて必要だといふ事實に、御心付きを願いたい、何故かと申すと、美人たる資質が備つて居ても、身軆弱く血色が惡いと、雨に打たれた海棠の如く、引立つて見えぬ、皆さんが、挿花に付いて、最も苦心するのは、「水上」でせうが何の爲めの「水上」か、之を人の血色に引きくらべて考へて見ればよい、血色は美人となる要件である事が分ります、見よ眞正の美人と云はるゝ人に、血色の勝れぬものがありますか、誠には皆さん異存のない筈、然らば、此血色は何處から來るか、健康でさへあれば血色はよくなるから、眞正美人たらんとする婦人は、健康を計らねばならぬ、それには、種々の方法もありませうが、婦人の病氣は、多く血液の循環不調と下の病であるから、婦人藥中將湯を用ひるが、最も確かで且つ迅速です、それで、近頃眞正美人となる最終要件として、中將湯を服用する人が、ポツ／＼出來ましたが、未だ御氣付がない婦人は、今から御試めしなる樣御勸め申します、中將湯を飲めば、血のめぐりを速かにし、瘀血を排除し、子宮血の道諸症を治し、身軆健康となるから、血色のよい素顔の美人となれます、平素壯健な人でも、毎月一週間宛用ひて居れば、月經を調へ、益々血色をよくします、

●子宮血の道白帶等にて顔色蒼白、瘦せ衰へ見苦き人、月經不順にてダブ／＼血ぶとりして見苦き人、其他子宮血の道の爲め何となく元氣なき婦人は持藥として中將湯を用ひなさい、身軆を壯健にし生々した眞正美人となる事が出來ます、中將湯定價は一週六十錢、二週一圓十錢、五週二圓五十錢で、本舗は東京日本橋通四丁目津村順天堂です●中將湯を本舗へ注文の方は病人の容體を詳しく申込あれ加減藥あり、

【東京秀英舍印刷】